令和４年度

東山梨教育研究

６１

東山梨教育協議会

もくじ

◎あいさつ　東山梨教育研究編集実行委員会
会長　嶋崎　修　……　3
◎あいさつ　東山梨教育協議会
会長　中村　雅彦　……　4

◎学校研究
○小学校　……　5
○中学校　……　47

◎教育協議会研究
○令和４年度　東山梨教育協議会研究の概要
研究推進委員長　広瀬　竜太　……　61
○教育研究部会　……　65
○ブロック交流研究部会　……119
○特別委員会
・児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究会　……126

◎学校経営研究
○小学校経営研究会　健康・体力部会　……129
○小学校経営研究会　情報教育・環境教育部会　……131
○小学校経営研究会　連携・接続部会　……133
○中学校経営研究会　……135

◎学校運営研究
○山梨市学校運営　……137
○甲州市学校運営　……139
○全国教頭研究大会　……141
○関東甲信越地区教頭研究大会　……142
◎報告
○内地留学研修報告　……143

◎あとがき　……145

以下　特別委員会報告

「東山梨教育研究第６１号」の発刊によせて

山梨市教育委員会　教育長　嶋﨑　修

東山梨地区の教育研究の集大成である「教育研究第６１号」が多くの先生方のご尽力により，今年度も無事，発刊されることとなりました。改めて感謝と敬意を申し上げます。

令和２年１月に国内で最初の感染事例が報告されたコロナ感染下での生活も，すでに丸三年が経過する中，各学校においては，マスクの着用やソーシャルディスタンスを保つことの方が通常になってしまったようにも感じられ，これまでの当たり前であった日常が子どもたちの記憶や意識から消えてしまうことに一抹の不安を感じています。

子どもたちが声をあげて校庭を走り回り，机を寄せ合って給食を食べ，地域の方が気兼ねなく学校行事に参加できる…そんな「当たり前だった日常」が一日も早く取り戻せることを願うばかりです。

さて，私ごとになりますが，東山の地に居を構えて早くも３０年が経過しました。その一方で，教育行政（県教育委員会）に長く携わっていたこともあり，東山梨地区の教育に直接かかわることが少なかったことに寂しさと申し訳なさを感じていました。

そんな環境や心情にあって，毎年末に，届けられる「東山梨研究」は，自分と東山梨をつなぐ唯一のものであり，貴重な情報収集の場でもありました。

冊子が届けられる３月は，当然のことながら県教委にあっても，人事作業や新規事業の立ち上げ，さらには議会対応も相まって，一年の中でも多忙を極める時期でもありました。このため，終日席を空けることも多く，夕刻に席に戻ると，机上に置かれた書類や配送物の中に，個々に宛名書きされた封筒に収められた「東山梨教育研究」が目に留まることもありました。

封を切り，少し時間をかけて表紙にある児童・生徒の作品を味わい，順にページをめくりながら，「なるほど，○○部会ではこんな研究を進めているのか」「B中学校ではC先生が研究主任として頑張っているんだな」「学経研や学運研では，今日的な教育課題に管理職として努力されているな」という思いの中で，かつて自分がかかわってきた校内研，学運研，学経研等の場面やメンバーを懐かしく思い出していました。

１５年に渡って教育行政に携わる中で，県内外の多くの学校を視察し，各種研究会等にも参加する機会をいただきました。そして，その多くにおいて教育課題と真摯に向き合う教員の姿とそれに呼応する子どもたちの姿を目にしてきました。しかし，こうした先進地区のものと比べても，東山梨地区の教育力の高さは，決して引けを取るものではなく，むしろ他を圧感するような，地域に根付いた教育実践が進められていることを実感しています。その証が，冊子に刻まれた「６１」という数であると思います。

「日の出は東の空から」と言われますが，新たな教育の夜明けも東（山梨）から始まらなければなりません。東の空に顔を出した太陽が次第に輝きを増していくよう「東山梨教育研究」も号数を重ねるとともに，さらに充実したものとなることを祈念し，巻頭の言葉とさせていただきます。

あ　い　さ　つ

東山梨教育協議会会長　　中村　雅彦

東山梨教育協議会の研究の成果を収めた「東山梨教育研究」第６１号がここに発刊の運びとなりました。コロナ禍に見舞われ３年が経過します。これまで経験したことのない困難に対峙しつつも「子どもたちのために」を合言葉に，研究の歩みを止めず，試行錯誤しながら進めてきた東山梨の教育研究。その足跡として，数多くの研究や実践を積み上げ記録してきたものがこの冊子であります。まさに我々の誇りであり，宝物であると言えましょう。

さて，県内の各支部で行われているこの教育協議会は校長会，教頭会，教連の教職員が一堂に会し，授業を中心に理論研究で議論を重ね合わせ，実践を通してお互いに切磋琢磨しあいながら子どもたちの教育のために力を尽くしていく会であります。いわゆる教育三者がお互いの垣根を越えて研究という土俵で教育を語り合う，他県には見られない全国に誇るべき組織的な研究体制です。東山梨教育協議会も，昭和 39 年 4 月 20 日，設立総会が開催され 50 有余年の歴史を誇る協議会です。

教育界の流れとしては，2020 年代を通じて実現すべき学校教育を「令和の日本型学校教育」とし，その姿が「すべての子どもたちの可能性を引き出す，個別最適な学びと協働的な学びの実現」と描かれました。ICT の活用も含めた具体的な変革も進んでいるところです。

このような中で，学校現場の先生方が果たす役割はますます重要で難しいものになってきています。与えられたことをそのまま受け入れるのではなく，自己研鑽を重ね，しっかりとした教師力を身に付けていくことなしには，課題の解決はありえないであろうと考えます。

社会情勢の厳しさから，教協の活動が普段通りにできないもどかしさを感じながらも，こんな時代だからこそ，できること，しなければならないことに積極的にチャレンジし，研究の歩みを止めない体制であってほしいと思います。

幸いなことに，東山梨には多くの先輩方が長年にわたって培ってきた盤石の組織体制と実践があります。今後も保護者・地域・行政・関係機関との連携を深め，研究を継続させていくことにより，困難な教育課題を解決し，輝かしい子どもたちの未来を保障していけるものと期待しています。初期の東山教育研究に何度となく掲載された「光は東より，教育は東山梨から」という言葉の志をもって，今後の教育研究に一人一人が臨んでいただきたいと切に願います。

終わりに，本年度も東山梨教育協議会の様々な研究活動に対し，ご指導・ご支援をいただいた多くの関係者の皆様に心より感謝申し上げ，あいさつといたします。

学　校　研　究

小　学　校

加納岩小　・・・・・・・・　５
日下部小　・・・・・・・・　７
後屋敷小　・・・・・・・・　９
日川小　・・・・・・・・　１１
山梨小　・・・・・・・・　１３
八幡小　・・・・・・・・　１５
岩手小　・・・・・・・・　１７
笛川小　・・・・・・・・　１９
塩山南小　・・・・・・・・　２１
塩山北小　・・・・・・・・　２３
奥野田小　・・・・・・・・　２５
大藤小　・・・・・・・・　２７
神金小　・・・・・・・・　２９
玉宮小　・・・・・・・・　３１
松里小　・・・・・・・・　３３
井尻小　・・・・・・・・　３５
勝沼小　・・・・・・・・　３７
祝　小　・・・・・・・・　３９
東雲小　・・・・・・・・　４１
菱山小　・・・・・・・・　４３
大和小　・・・・・・・・　４５

加納岩小学校

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実にむけた授業づくり
―自分の思いを主体的に表現する児童の育成を目指して―

Ⅰ　研究の内容

1　研究目標

教師が「学びの個別化」と「協働的な学び」を一体的に捉え，ICT を活用しながら意図的に設定・往還させ充実を図ることで，自分の思いを主体的に表現する児童の育成を目指す。

2　研究方法

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けて，研修会を通して ICT 端末活用の研鑽を積む。ICT 端末の活用は，手段であって目的とならないように，十分配慮する。同時に，英語科の理論研究・授業分析を通して「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に捉えた授業について具体像をつかむとともに，教科を問わず実践する。

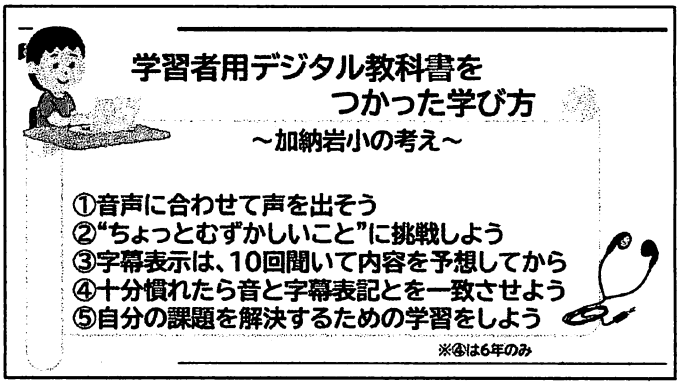
（１）全体会による研究・部会（英語ブロック・ＩＣＴブロック）に分かれての研究をする。
（２）「自分の思いを主体的に表現できる児童」について，本校のとらえを確認する。
（３）事例検討を通して英語科の理論研究を行う。
（４）ICT 活用・英語科について，指導主事を招聘し指導を仰ぐ。
　①山梨県教育庁　義務教育課　指導主事　　古屋　達朗　先生
　②東京家政大学　教授　　太田　洋先生
（５）ICT を活用した一人一実践をする。
（６）全体授業研究会を行うとともに，成果と課題を共有する。
　・第６学年　英語科「What do you want to be?」　小池　美樹　教諭
　・指導助言　文部科学省　視学官　　直山　木綿子　先生
　　山梨県教育庁　義務教育課　指導主事　　早川　優子　先生

Ⅱ　成果と課題

1　英語科に関わって

学習者用デジタル教科書の活用方法を繰り返し検討し，児童の学びを支える貴重な道具となりうることが確認された。家庭でも英語の学習をすることができるようになったため，学校では学び方を教えることも大切にしたい。今年度の活用から，本校なりの学び方５点を明らかにできた。

公開授業に関わる指導案検討や当日の研究会は,指導観と児童の実態を共有する貴重な場となった。教師の指導観が見直されていくと,授業の展開も変わってくるものと思われる。さらに,評価や協働学習の視点は,他教科にも共通していえることが多くある。今年度の研究が,英語科の授業から他教科へ広がっていくことを期待したい。



2　ICT 関連の研究に関わって

「ICT 端末使用の約束」を作成し，来年度に向けて環境を整えた。新たに加納岩小学校の ICT 活用の際のルールを決めることができた。共通確認されたことで，学校として統一された指導が可能となった。また，ICT 活用表を作成・検討をしたため，学年間でも系統的に指導ができるようになった。大まかな基準にもなるため，作成できたことは大きな成果といえる。今後は４月に「ICT 端末使用の約束」をリリースし，さらなる精査をしていきたい。

児童にも文房具のように使うことを求めているからには，研究の柱に関わらず ICT 端末を効果的に活用していくことが課題である。具体的には，なんのために使うのか，ICT を活用して児童にどんな学びを提供するのか，どのように学びを深めていくのか，ということだ。ICT は手段であって目的ではないことは常に心に留めながら，児童の学びを支えるよき道具となるよう，来年度以降考えていくことを期待したい。

3　個別最適な学びと協働学習に関わって

児童の思考の過程に沿って,個別学習・協働学習を繰り返しながら授業づくりをした。話し合い・教え合いから，洗練された考えや深い学びに展開していくためには，児童の考えをつなげる・広げる等の教師側のファシリテータとしての力量が求められる。このことについては今後も研鑽を積んでいく必要がある。また，充実した協働学習を行うにあたり，安定した学級経営・安心して学ぶことができる風土を大切にしたい。

Ⅲ　成果物

1　研究授業の指導案

第６学年　英語科「What do you want to be?」　小池　美樹　教諭　指導案

2　英語科における学習者用デジタル教科書の学び方

3　加納岩小　ICT 端末使用の約束

（研究主任　藤木真里佳）

日下部小学校

「主体的・対話的で深い学び」に向けた学びの創造

～ＩＣＴ機器の活用を通して～（2年次）

Ⅰ　研究内容

1　一人一台端末の活用に向けてのスキルアップ研修会の実施

昨年度より本格的な運用がはじまった一人一台端末を活用していくために，これまでの研究をうけ端末操作のさらなる活用を目指し，スキルアップ研修会を実施し，基本的な操作方法や，活用方法を探っていく。

2　主体的・対話的で深い学びを支えるＩＣＴ機器を使用した授業実践

スキルアップ研修会で高めたスキルを授業で生かしていき，「主体的・対話的で深い学び」に向かう授業づくりを研究していく。

3　既存の様々な校内の取組をよりスマートに行うための端末の活用

「学級力向上プロジェクト」や「八のつく日のふりかえり」等の既存の取組を，エクセルの共同編集やフォームのアンケートを活用することで，入力や集計の時間を削減したり，用紙の削減等を行ったりして，スマートに行える方法を検討していく。

Ⅱ 具体的な研究活動

1　一人一台端末の活用に向けてのスキルアップ研修会の実施

（1）スキルアップ研修会Ⅰ（5月１１日）

・学級力向上プロジェクトにおけるＩＣＴ機器の活用について
Google フォームを使ったアンケート集計・グラフ化の方法

（2）スキルアップ研修会Ⅱ（5月２５日）

・学習支援アプリ　スクールタクトの活用について
課題配布・ワークシート作成について

（3）スキルアップ研修会Ⅲ（6月２９日）

・「ＩＣＴ機器を活用した授業実践について・MEXBIT の活用」
講師：山梨県総合教育センター　副主幹・指導主事　中村　忠廣　先生

（4）スキルアップ研修会Ⅳ（7月６日）

・MEXBIT の操作方法について

（5）スキルアップ研修会Ⅴ（8月２４日）

・リモートによる学級力向上プロジェクトの情報交換（グループごと）
共同編集機能の活用

（6）スキルアップ研修会Ⅵ（2月８日）

・学習支援アプリ　学びボックスの活用について

2　主体的・対話的で深い学びを支えるＩＣＴ機器を使用した授業実践

（1）授業研究会Ⅰ（１１月９日）

生活科「あそび名人になろう」　　２年３組　古屋　優香　教諭
指導助言：山梨県教育庁義務教育課　課長補佐　在原　直樹　先生

（２）授業研究会Ⅱ（１２月７日）
算数科「四角形と三角形の面積」　　５年１組　島田　直美　教諭
指導助言：山梨大学大学院 教育学域　科学教育講座　清水　宏幸　教授
（３）一実践（レポート作成）

３　既存の様々な校内の取り組みをよりスマートに行うための端末の活用
（１）八のつく日の振り返り　フォームによる集計
（２）「学級力向上プロジェクト」　フォームによる集計・グラフ化
（３）各種アンケート（学校評価など）
（４）授業研究会でのアンケート機能の活用

Ⅲ 成果と課題（○成果 ●課題）
１　一人一台端末の活用に向けてのスキルアップ研修会の実施
○スキルアップしていく必要があるので，大変貴重な機会であった。
○研修会を開いて頂き，様々な活用方法があることを学ぶことができ有意義だった。
●実技も取り入れていただくと，更にスキルアップが図れると感じる。

２　主体的・対話的で深い学びを支えるＩＣＴ機器を使用した授業実践
○研究授業は，授業者に負担をかけるが，子どもを間近に見ることができる学びは大きい。ブロックの皆で教材を研究し，指導案を検討する過程でも学ぶことが多かった。
○それぞれの教科の特性を考慮したうえで，主体的・対話的で深い学びの実現に向けて，どのような場面でどのように活用すると効果的か，という視点で授業を研究することができ，大変勉強になった。
○教科書にデジタルコンテンツを活用した面積を求めるための操作は非常に効果的だった。
●学びの過程を残すためには、端末とノートの併用をしていく必要がある。

３　既存の様々な校内の取り組みをよりスマートに行うための端末の活用
○研究授業後に即時アンケートを取り，その結果から研究会を進めたことはとても良かった。たくさんの意見を瞬時に見ることができ，その上で意見交流の時間も有効に使え，討議の時間を保証し，話し合いを深めることができた。
○色々な取り組みの情報を教えていただき，参考になる。一方で，児童の実態に合わせ，ねらいや活用の仕方について，明確にしておく必要がある。
○スマートスクールなどに，昨年度までのテンプレートがあり，有効活用できる。
●様々な取り組みが端末を利用してスムーズに行えていることはとても良いと思う。しかし，低学年は，端末の操作を教える時間の保証が課題である。

Ⅳ 成果物
１　研究授業指導案
２　一実践レポート
３　「八のつく日」の振り返りに関する資料
４　「学級力向上プロジェクト」に関する資料
５　各種アンケート

（研究主任　三澤　瞬）

後屋敷小学校

研究主題

児童が主体的・協働的に学ぶ授業を目指して(2年次)
～ICTを活用した学び合いの工夫～

I　研究の内容

1　研究の目標

各教科において，ICT 機器を効果的に使うことで子どもたちが主体的・協働的に学ぶ授業を創造することができる。

2　研究の内容・方法

(1)今日的教育課題関連の学習

ICT 校内研修会を行い，ICT 端末の操作方法などを確認する。全職員の ICT のスキルアップを行う。

(2)授業研究

指導主事等を要請し，授業研究による検証を行う。

(3)一人一実践の公開授業

一人一実践を公開し，授業改善と授業力の向上を図る。

(4)児童の実態分析と指導法の改善

全学調の結果分析から，本校児童の実態把握をし，授業づくりの視点や指導法の共通理解を図る。

(5)教育課程説明会の環流報告

3　実践内容

(1)今日的課題関連の学習

今年度校内研を「ICT 端末活用部会」と「ICT スキル部会」の2部会制とした。低中高特別支援など所属を考慮しながら全職員がどちらかの部会に所属し研究してきた。

「ICT 端末活用部会」では主に,授業の中でICT端末をどのように使っているか確認し，研究授業のなかでどのように ICT 端末を使うか，話し合い授業を組み立てていった。他の学年の発表シートを使った授業やコメント機能を使用した授業の様子などを部会内で情報交換し合い,2年生の児童が学習活動としてどのように行えるか検討して指導案を作成した。指導案検討も全体で2回行い，全職員で研究授業に臨む体制をつくった。(研究授業の実際については(2)に記載)

また「ICT スキル部会」では新採や期採，ICT を得意としない教職員など様々な教職員がいる中で,誰にでも ICT 機器が使え，子ども達に指導できるように校内で ICT の支援ソフトに関する研修会を 4 回行った。研修会では自分たちの ICT 端末を持ちより，実際に操作しながら操作方法を学び，授業で使う課題をどのように作成するかなど，より実践的な内容で行った。ICT 端末以外にも本校にある 2 台の実物投影機の使用方法や児童に身につけさせたいスキルについて発達段階に応じる対応表や支援ソフト活用例などを作成し,ICT スキルにかかわる資料も作成し,来年度以降活用できるようにてした。

(2)研究授業

第2学年2組　　生活科「町たんけん 2」　　授業者 岩下 亜希子

指導助言 義務教育課　村田 利恵 副主幹・指導主事

研究授業では,一人一人が ICT 端末で作っておいた発表用シートを使い, 3 人グループで発表会を行った。交流の場面で端末を使うことでどのように有効か検証する授業を行った。交流の方法として自分の ICT 端末で発表シートを見せながら他の 2 人に説明する方法で行った。自分が町たんけんに行ったときに撮った写真を貼ったり, 1 枚のシートに 1 つのことを記入したりしたので発表を理解する一助となった。発表を聞き、その場でわからないことを質問する場面も見られたが, 発表することや画面を見ることに一生懸命になってしまうこともあった。

また, 発表後に発表シートにあるコメント機能を使い,交流する活動も行った。感想をコメンとして記入したり, 友だちからのコメントを読んだり, コメントに返信したりした。2 年生は直接入力の方法を用いるため,ICT 端末が文字を読み違えることもあり, 入力に時間がかかることがあった。つぶやきがコメントとして残ることで,子ども達が意欲的に取り組むことができた。

シートを作る際には, 探検に行ったときICT端末で撮影した写真を使用したり, 文字の大きさや色, 書体を変えたりすることができた。1・2年生で学習してきたICT端末の使用方法を理解して活用することができていた。

(3) 一人一実践

一人一実践として, 12 名の教諭全員が授業公開を行った。今年度は, 校内研の研究主題に基づき, 学び合いの場面で端末を使う授業に取り組んだ。可能な限り授業を参観し, 意見交流も行い, 学び合いの場面でどのように ICT 端末を使えるのか, 具体的な方法を共有した。

Ⅱ 成果と課題

1 成果

○ICT 端末の活用について具体的な学習会を行うことができた。教職員の ICT のスキルアップにつながり有効だった。

○指導主事を招いて授業研究会を行った。ICT 端末を活用した交流の方法について研究した。ICT 端末を使い発表会を行ったが, 数台大型モニターを使う方法など他の方法について教えていただき参考になった。

○端末の活用スキルについて発達段階に応じた対応表を作成した。来年度以降 ICT 端末の活用の目安となり, 児童がどこまで操作できるように指導すればよいかわかった。

2 課題

●ICT 端末を用いた授業の実際を一人一実践で交流してきた。一人一実践以外でも活用した方法を今後どのように蓄積し共有していくか考えていく必要がある。

●ICT端末を使った実践について今年度は校内で具体的な研修を行ってきた。来年度は外部講師をお願いし,具体的な授業での活用方法について学習していきたい。

(研究主任　岩下 亜希子)

日川小学校

「自ら学び，豊かに表現し，深い学びに向かう児童の育成」

～ICTを活用した授業づくりを通して～

Ⅰ　主題設定の理由

学習指導要領では，「子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成させること」や，「知識の理解の質をさらに高め，確かな学力を育成させること」が基本的な考え方とされている。また，「情報活用能力」を，言語能力，問題発見・解決能力等と同様に，「学習の基盤となる資質・能力」と位置付けるとともに，学校のICT環境整備とICTを活用した学習活動の充実に配慮することが明記されており，より積極的にICTを活用することが求められている。昨年度より，子供たち一人ひとりに個別最適化され，創造性を育む教育ICT環境の実現に向けて，ICT端末や通信ネットワークの整備も進められてきた。ICTを使用した授業実践を充実させていくという課題解決に向け，今年度は，ICTを活用した授業づくりを通して，自ら学び，豊かに表現し，深い学びに向かう児童の育成に取り組んでいきたいと考え，本研究主題を設定した。

昨年度，一昨年度と「自ら学び，豊かに表現し，深い学びに向かう児童の育成～新聞を活用しての深い学びの実現～」を研究主題として，深い学びに向かう児童の育成を目指し，NIEの実践を中心に研究を行ってきた。２年間の研究成果として，新聞を活用した授業実践を行い，身近に新聞のある環境づくりも進めていく中で，児童の新聞への興味や関心を高めることができた。確かな読解力を定着させるためには，新聞の活用も効果的であると考え，朝学習に新聞を取り入れることは引き続き進めていきたい。また，家庭学習チャレンジカードの取組や学級力向上の取組なども進め，読解力向上に向けた環境づくり・基盤づくりも充実させていく。

Ⅱ　研究の内容

１　ICTを活用した授業づくり・・・各教科においてICTを活用した授業実践を行う。

- 第１学年　音楽科「ドレミとなかよくなろう」　行田　玲子教諭
- 第２学年　国語科「ことばでみちあんない」　鶴田　望　教諭
- 第３学年　国語科「山小屋で三日間すごすなら」　吉澤　成南教諭
- 第４学年　国語科「感動を言葉に」　今澤比呂樹教諭
- 第５学年　国語科「漢字の読み方と使い方」　岩森智香子教諭
- 第６学年　体育科「器械運動（マット運動）」　望月　泰祐教諭

指導：山梨県教育庁保健体育課　清水　宏次　主幹・指導主事
　　峡東教育事務所　小林みずほ　指導主事

- はぐくみ　国語科「やくそく」　三枝　剛　教諭
- かがやき　算数科「ひっ算のしかたを考えよう（たし算）」　高野恵美子教諭

２　読解力向上に向けた環境づくり・基盤づくり

（１）家庭学習の充実

- 家庭学習チャレンジカードの取組を行い，メディアにふれる時間を家庭学習に向けさせる。
- 自主学習ノートの取組を行い，家庭学習の習慣化を図ったり，ノートの展示会を行い，児童の意欲を高めたりする。

（２）朝学習に新聞を取り入れる

- 新聞を読む　・新聞ワークシート　など

（３）学級力向上の取組

- 学級力アンケートを実施しスマイルタイムを活用して学級力を向上させる。

3　今日的教育課題にかかわる取組

・特別支援教育についての学習会
　講師：山梨市立八幡小学校　岡　輝彦　校長

・ICT の活用についての学習会
　講師：ICT 支援員　ジインズ　相澤様・西岡様

・校内での研修会を行い，先生方がもっている，知識や情報の共有をする。

Ⅲ　成果と課題

1　成果

・一人一実践については，録画しておいてブロック研のときに視聴し，意見交換をしたのが良かった。ブロック研の持ち方が良かった。(実践を参観したいが自習にできない本校の実態に合っていた。)

・研究授業や一実践の授業から ICT の活用について学ぶことができ，自分の実践に取り入れることができた。

・計画された ICT の研修も個に応じた内容で取り組めたため，有効的であった。

・教師自身が課題を持って，ICT 活用の研修を行えて良かった。

・新しいツールとしての ICT 活用を意識した授業を構成することができた。また，さらに良い授業になるよう課題点を見つけることができた。

・ICT の活用について，普段自分では使ったことのない機能を知ることができた。

・全体会で ICT を活用して研究会を持ったことは，意見が視覚化して分かりやすかったし，まとめやすかった。また，時間短縮にもなった。

・授業研究は，全体で１本の提案授業であったが，指導案の検討に時間をとることができ，研究会では指導主事からもご指導をいただき，授業者だけでなく，全職員が学ぶ貴重な機会となった。

・今年度の研究副主題「ICT を活用した授業づくりを通して」を意識して取り組み，一人一実践だけでなく，日常の授業において ICT を活用した授業づくりをしていたので，子どもたちの ICT 活用能力が昨年度と比べて格段に高まった。また，教師の技量も高まった。

・昨年まで研究の中心であった NIE の取り組みを，今年度も読解力向上に向けた環境づくりの一環として取り入れることができた。６年生では，気に入った記事を選んで感想を書く活動から，文章を読み取る力や大事なことをピックアップする力がついた。

・家庭学習チャレンジカードの取組については，全校共通のカードを使い，運動会後のように節目で活用することが効果的であった。

・各学年が学級力向上の取組を，各学年の実態に応じて行うことができた。レーダーチャートは，何が出来て何が足りないのかを一目で分かるので取り組みやすい。６年生では，重点目標を自分たちで掲げて取り組み，次につなげることができた。

2　課題

・自分の考えや思いを入力するにあたり，入力の仕方の習得をさせていきたい。低学年は，手書き入力に慣れさせたい。

・今後の ICT の活用について，より効果的な活用に向け，教師自身が日常的，継続的に研修していく必要がある。

・家庭学習チャレンジカードの取組については，親の意識を高められるようなこともできるとよい。また，メディアにふれる時間の目標時間の目安の設定は検討が必要である。また，ニュースの時間はメディアにふれる時間とするのか，学習に関わる時間にするのかをはっきりさせた方がよい。さらに取組期間については，連休等も考慮し，検討が必要である。

（研究主任　鶴田　望）

山梨小学校

確かな学力の定着・向上を目指した指導の工夫

～　ICT を取り入れた対話的な学びの工夫　～

本校の児童は，全体的に明るく素直で，何事も前向きに取り組むことができる雰囲気がある。

本校ではこれまで，基礎学力の確実な定着を図った授業づくり・授業改善を進め，児童の確かな学力の定着・向上を目指し研究を進めてきた。新学習指導要領の実施に伴い，対話的な学びに視点を当て，児童同士の意見の交流を行うことで，考えを広めたりより深い理解につなげたりするような学習を仕組んだ。昨年度は，GIGA スクール構想のもと，１人１台端末等の ICT を取り入れた授業を実施し，コロナ禍における対話的な学びを成立させる工夫について手探りながら取り組んだ。今年度も引き続き，ICT の有効的な活用により対話的な学びをつくりだそうと，授業実践を通して研究をすすめた。

Ⅰ　研究の内容と方法

1）授業づくりの研究

R・P・D・C・A サイクルの確立

①講師を招聘しての学習会

・ICT 活用についての学習会

②課題解決に向けた取り組み

・ICT を取り入れた対話的な学びを工夫した授業研究

・一人一実践授業

2)学級力向上プロジェクトへの取り組み

①学級力の学習会

②学級力アンケートの実施，スマイルアクションの実施

③実践学習会

3）積み上げてきた研究・学習環境づくりの継続

○学習のきまり

・「学習あたりまえ６か条」の継続とバージョンアップ

・対話を支える話し方の指導：話型の掲示，伝え合いの仕方の定着

・「やまなしスタンダード」による授業改善

○家庭学習と連動した授業の工夫

・「家庭学習の手引き」の活用

・「自主学習ノート」の取り組み

4)講師を招聘しての学習会

・６月８日　「教科のICT活用について」一人一台端末の教科等への活用事例

講師　山梨大学附属中学校　　青柳敬大教諭　野沢克美教諭

Ⅱ　研究実践

1　研究授業

（1）第３学年　　国語科「つたえたいことを，理由をあげて話そう」　　授業者　　佐野　彩乃

（2）第５学年　　社会科「これからの食料生産」　　授業者　　中山　貴彰

2　確かな学力一人一実践授業

１年，２年，４年，６年，特別支援（なかよし１　なかよし２　ひまわり）

Ⅲ　成果と課題

1　成果

【３学年国語科授業実践】

・「1年生に向けて発表する」という目的意識をもって，話し合いができていた。
・電子ホワイトボードで付箋を動かしたり，丸で囲んだりして，分かりやすい情報収集の手立てになっていた。
・付箋の入力方法が，タイピングだけでなく，手書き入力や音声入力など，場に応じて使い分けられていた。
・電子ホワイトボードが話し合いを助けるツールになり，自分の意見をもって発表できていた。
・やまなしスタンダードを意識し，めあてがしっかり提示され，子どもたちがよい姿勢で話を聴くことができていた。聞く姿勢や話し方，みんなで話し合う学級の雰囲気が良かった。

【５学年社会科の授業実践】

・長所，短所の反対の立場を考えることができたり，それに加えて生産者・消費者の視点も見比べることができたりして，有効的に電子ホワイトボードが使われていた。
・視点を加え，ICT を用いることで，よりそれぞれの長所と短所を多角的に考え直すことができていた。
・目標を達成するために，単元全体の構成が工夫されていて効果的だった。
・自分の考えを発表することが苦手な児童も，友達の意見を参考に表現することができていた。
・やまなしスタンダードを意識し，対話が必然的に生まれる活動（付箋の整理や分類）が行われていた。
・タイピング能力も高く，電子ホワイトボードの使い方にも慣れていた。

2　課題

【３学年国語科授業実践】

・班で１つのタブレットを使うときは，置く位置を決めておくとスムーズに班活動ができる。
・むやみに付箋を動かす子がいたため，話し合いの役割分担をするとよい。
・思考ツールの「ピラミッド」を生かし，書ける子は理由を複数書けるとよかった。

【５学年社会科授業実践】

・５人の児童でひとつの画面は見づらいので，個人の端末を見ながら話し合いでもよかった。
・内容を精選したが，時間にもう少しゆとりがあるとよかったと思う。
・まとめは穴埋め形式にしたが，もう少し子どもの言葉を拾いながらまとめられるとよかった。

授業研究を通して，昨年度よりも「ICT を使うとすればどう使うか」という視点で，より積極的に ICT を活用して授業づくりをすすめることができた。ICT 活用のよさを日々の授業実践に活かしたい。

（研究主任　　佐野　理恵）

八幡小学校

「生きる力を支える確かな学力の育成」

～ICT 端末を効果的に活用した，主体的・対話的で深い学びに向けた授業づくり～

Ⅰ　研究の内容

1　授業づくり

（1）「やまなしスタンダード」の４つの視点に基づいた授業改善

②話合い，討論，発表などの言語活動を効果的に取り入れている。
③児童生徒は，他の人の話や発表に耳を傾けている。
④児童生徒は，ノートをとっている。
⑤活用・探究など，学んだことを別の場所で使うようにしている。

【特支版】

②障害の状態に応じて自ら考え，判断し，表現する活動を具体的に取り入れている。
③自主的・自発的な学習を促す教材・教具等を用意している。
④達成感や自己肯定感が高められる指導を工夫している。

（2）「主体的・対話的で深い学び」の実現

１人１実践授業を実施（１０月～１２月）

・ＩＣＴを効果的に活用した授業づくりを行う。
・発問・問い返しや板書を工夫する。
・お互いに授業を参観し合い，意見交換をする。

第２学年　国語科　「なかまのことばとかん字」
第３学年　算数科　「分数」
第４学年　音楽科　「日本の音楽でつながろう」
第５学年　算数科　「面積の求め方を考えよう」
第６学年　学級活動　「輸入の多い日本の食事について考えよう」
あおぎり学級（第４学年）　国語科「ありの行列」
なかよし学級（第３学年）　国語科「ローマ字」

（3）授業研究会（１０月）

第１学年　生活科「きせつとあそぼう　―あき―」
授業者　精進　利恵　教諭
指導助言　山梨大学附属小学校　笠原　成晃先生

（4）ＧＩＧＡスクール構想の実現に向けての学習会の実施（３回実施）

ICT 端末の効果的な活用の仕方や学習支援ソフトの使い方などについて学ぶ研修会を実施した。

2　学級・学習習慣づくり

（1）Q-U の分析方法と学級経営の生かし方学習会の実施

Q-U の結果を基に，各学年「Q-U 学級支援シート」を作成し，学級集団のタイプ・個別支援が必要な児童の様子・今後の取り組み方針などを確認した。

（２）家庭学習の充実

・自主学習ノートを活用し，家庭学習の習慣化を図る。

・家庭学習の主旨について理解を深めてもらえるように，家庭向きに手引きを出したり,子どものノートを学年だよりに載せたりして家庭との連携を強化する。

・自主学習ノートを廊下に掲示し，児童の継続意欲の向上を図る。

３ その他

（１）情報交換

家庭学習やICTの効果的な活用方法,教材教具の工夫・活用,学級づくりなど,お互いの実践例を発表し合い，年間のまとめを研究紀要に記載。

（２）全国学力・学習状況調査の結果の分析

（３）研修会の還流報告

校内研の時間に情報交換の場を設け，参加した研修会の還流報告や参考になる実践例，最新の情報などについて発表し，参考とする。

Ⅱ 成果と課題

○八幡小児童の課題を把握し，研究を進めることができた。

○ICT端末を活用した主体的・対話的で深い学びに向けた授業づくりに主眼を置き,研究を進めたことで,ICT機器を授業に取り入れ,自分の考えをまとめ,さらに他者の意見や考えも共有するツールとしての活用を全校で進めることができた。

○研究授業や一人一実践を実施することで，各学級で研究テーマを意識した授業実践をすることができた。ICT を活用した授業実践が多く行われ，児童同士の考えの交流や自分の考えを表現する際に効果的に使用することができ，学びの質を向上させるとともに，職員同士も学び合い，自身の授業改善につなげることができた。

○ICT端末の効果的な活用だけではなく,GIGAスクール構想やSociety5.0などの考え方について，体系的に学ぶことができた。

○自主学習ノートを掲示することで，学習内容や方法を学ぶ機会となり，参考にし合うことができた。特に，上級生のノートを見ることにより，どんなノートづくりをしたらいいか，参考にすることができた。

○学級力向上プロジェクトの基本的な考え方や，具体的な取組などを学び合い，全校で取り組めることができた。

○全国学力・学習状況調査の結果の分析を行い，明らかになった本校の課題に対してどのように取り組むかを職員全体で話し合い，共通認識をもって授業改善に取り組むことができた。

△ICT端末とノートを組み合わせた活用については，もう少し考えていきたい。

△全職員で授業を参観し研究する時間を確保できず,成果の共有という面で課題が残った。

△自主学習については,ノートだけではなく子どもの実態に応じた取り組み（ICT端末等）を考えていく必要がある。

Ⅲ 成果物

1 研究授業・一人一実践の授業実践報告書

2 学級・学習習慣づくりの取り組み」各学級の取り組みと成果・課題

3 「ICTの効果的な活用について」資料

4 「生きる力を支える確かな学力の育成」資料

5 Q-U学級支援シート

（研究主任　　髙野　栄子）

岩手小学校

Ⅰ　研究の内容

1　研究主題

『自ら考えをもち，考えの幅を広げ，深めるための指導の工夫』
～「学び」にＩＣＴの活用を取り入れた授業づくりをとおして～

2　主題設定の理由

学習指導要領においては，情報活用能力を言語能力と同様に「学習の基盤となる資質・能力」と位置付け，育成を図るとともに，学校のＩＣＴ環境整備とＩＣＴを活用した学習活動の充実を明記している。ＩＣＴを含む様々なツールを駆使し，探究のプロセスにおける様々な場面において，ＩＣＴを効果的に活用していく力を育成していく。また，学びを深化するために必要となる情報活用能力や社会とつながる協働的・探究的な学びを通じて，資質や能力を育成していくことも求められている。そして，知識という情報を共有し，考えを交流，議論させ，自らの学びをより深くしていく場面を学校の教育現場において多く設定していくとともに，基本となる知識の習得とその知識を組み合わせて創造的に問題を解決する力の育成も求められている。

以上のことから，学力向上の基礎となる確実な知識・技能の習得を行い，得た知識・技能を活用して，深く多角的・多面的に考え，課題を解決することが課題となる。児童がより論理的に思考し，互いの考えを交流させながら創造的に問題解決していくことができるよう，ＩＣＴ機器をより効果的に取り入れた授業づくりを中心に研究を進めていきたい。

3　研究の目標

ＩＣＴ機器の活用を取り入れた授業づくりを通して「主体的・対話的で深い学び」の実践研究による授業改善を図る。そして，ＩＣＴ機器を取り入れた授業による，児童の学習意欲や自己の考え等の変容をもとに，教育的な有効性について検証していく。

4　研究の内容

（１）基本的な知識・技能の習得をはかる指導の工夫
　ア　知識を確実に習得させる手立ての工夫
　イ　複数の場面に汎化できる学習技能の指導
　ウ　やまなしスタンダードへの取り組み
（２）論理的思考力を伸ばす指導の工夫
　ア　知識・技能を活用する場面を仕組む授業
　イ　ＩＣＴを効果的に活用する場面を仕組む授業
（３）家庭との連携
　ア　家庭学習への取り組み

イ　自主学習の質の向上

5　研究の方法

（1）全体研究会…全体会をもち，共通理解のもと研究を進める。

（2）実践授業…一人一実践で授業提案をし，全体で研究会を行う。

（3）校内研修…効果のあった方法や工夫などを互いに提供する場とし，指導の内容や方法の工夫を学ぶ。

Ⅱ　成果と課題

1　成果

一つの学習ツールとしてのICT端末ではあるが，実際に活用していくと授業にいろいろな広がりをもたせることができるとわかった。ICT端末を使うことで，児童の学習意欲にも変化があり，より楽しくわかる授業へとつなげていける可能性を感じた。「時短，共有，記録」をより実感することができたので，授業改善をしていく上で，様々な場面でのICT端末の活用はとても有効である。

2　課題

どうしても，ICT端末を使うことを目的としてしまっている傾向が否めない。ICT端末を活用することで，「時短・共有・記録」をすることはできても，そこから「創造的な課題解決」そして「主体的・対話的で深い学び」へとつなげていくことに大きな課題がある。また，ICT端末をコミュニケーションツールとして，どのように本校児童の実態に合わせて扱っていくべきか考えていく必要もある。そのためには，ICT活用能力といったスキルの向上，「主体的・対話的で深い学び」へとつなげるためのより有効な活用方法などについて，更に検討していく必要がある。

Ⅲ　成果物

1 授業実践指導案及び記録（※は全体研究授業）

（1）	1学年	算数「ひきざん」	桐山　祐希教諭
（2）	2学年	生活「生き物はかせになろう」	廣瀬　明子教諭
（3）	3学年	社会「地いきの安全を守る」	廣瀬　　剛教諭
（4）	4学年	図工「カードを使って」	廣瀬紗佑里教諭
（5）	5学年	理科「流れる水のはたらき」	望月美奈子教諭
（6）	6学年	国語「『鳥獣戯画』を読む」	山宮　彩子教諭
（7）	おおぞら教室	国語「たのしいな　ことばあそび」	加々美教子教諭
（8）	特別活動	学活「よくかんで食べよう」	上治真央養護教諭

笛　川　小　学　校

「プログラミング的思考の育成」
～ICT 機器の活用や教科等におけるプログラミング体験を通して～

Ⅰ　研究の内容

1　研究の具体的内容と方法

（1）研究の内容

ア　プログラミング教育のねらいであるプログラミング的思考の育成とは，どのようなことかを明らかにする。

イ　教科等におけるプログラミング教育のあり方を検討する。

ウ　検証授業を行い，その結果を分析し，本研究の成果と課題を明らかにし，今後の指導に活かす。（chromebook を活用したものも含む）

（2）研究の方法

ア　低学年ブロック，高学年ブロックに分かれて研究を深める。

イ　講師を招聘しての研修会（プログラミングについて）

ウ　一人一実践の授業公開を行う。（ブロック内で参観し合う。）

エ　実践をもとにブロックごと来年度実践・検証できるよう授業案を見直す。

オ　新たな取り組み一年目とし，「プログラミング的思考」について，しっかりと学んでいく。

カ　指導案（授業）を見合い，研究を進めていく。

2　研究実践

（1）理論研究【６月】

ア　「プログラミング的思考について」の学習会

講師　峡東教育事務所　主幹・指導主事中村　英彦　先生

イ　「プログラミング学習　体験型授業（電気の利用・多角形描写）」

講師　笛川小学校　教頭　日原　英二　先生

（2）授業実践【９月～１月】

ア	第１学年国語科	「じどう車くらべ」	笠井　裕弥　教諭
イ	第２学年音楽科	「おまつりの音楽」	名取　夏海　教諭
ウ	第３学年算数科	「大きなかけ算のしかた」	畠山　仁美　教諭
エ	第４学年社会科	「地域で受け継がれてきたもの」	橘田　栄　教諭
オ	第５学年算数科	「自動車の生産にはげむ人々」	相澤　拓実　教諭
カ	第６学年算数科	「拡大図と縮図」	川手　太朗　教諭

キ	かがやき学級国語科	「プログラミングカーを動かそう」	小林　光三	教諭
ク	ことのね１学級国語科	「海のかくれんぼ」	土橋　洋子	教諭
ク	ことのね２学級自立活動	「話し上手・聞き上手になろう」	阿部かおり	教諭
ケ	こだま学級国語科	「すがたをかえる大豆」	清水　正俊	教諭

Ⅱ　成果と課題

1　成果

（１）研究一年目として，指導主事を招聘し，「プログラミング的思考」捉え方や考え方についての理論研究を深めることができた。

（２）実際に，教師自身がプログラミング体験を行うことで，課題解決に向けての考察をする際，順序立てて考えることに繋がっていくことを実感することができた。

（３）ブロック内で授業を見合うことで研究を深めることができた。

（４）研究，実践授業・検証を行うことで，令和２年度に作成した「プログラミング教育年間指導計画」を見直すことができた。

（５）児童が筆算の手立てをプログラミング的思考で考えて計算することで，順序立てて行うことができ，学びをより確実にすることに繋がった。

（６）chromebookやノートを使いながら，課題解決に向けて，順序立てて考察することができる児童が増えた。

（７）ICTだけでなく，自分自身の考えを発したり，自分の言葉で話をしようとしたりするときにも「プログラミング」の要素が必要になっていることが実感できた。

2　課題

（１）ブロック内だけでなく，全体で研究授業を行い，全員で同授業を参観し，検証を行う機会を設けたかった。

（２）一つの教科，単元だけでなく，多くの学習の中で取り入れていくことが必要であると感じた。

（３）一人一実践の授業公開は，授業や指導と重なってしまい，参観できないことがあった。

（４）年間指導計画は，各学年のものと特別支援学級の検証授業についても実践で終わるのではなく，計画の中に位置づけていけるようにする。

（５）単教科での授業検証でなく，多くの教科で実施できるようにしたい。

Ⅲ　成果物

1　研究授業，一人一実践の授業案

2　プログラミング教育　年間指導計画（見直し版）

3　学習会に招聘した講師からご提供いただいた資料

4　プログラミング体験実施（「スタディーノ」「m-block」）

（研究主任　笠井　裕弥）

塩山南小学校

「見方・考え方を働かせ，思考力・判断力・表現力を発揮する児童の育成」
～思考スキル・ICT を活用し個別最適な学びと協働的な学びの往還を通して～（3年次）

Ⅰ 研究内容

1 研究内容

① 南小思考スキルと各教科の特質に応じた見方・考え方を働かせるための教師の発問・問い返しとの関連について研究をする。

② 協働的な学びを支える学級集団作りの取組を進める。

③ GIGA スクール構想のもと，ICT を効果的に活用し，個別最適な学び・協働的な学びを実現し，思考力・判断力・表現力を発揮する児童の育成を目指す。

2 具体的な研究活動

① 南小思考スキルと各教科の特質に応じた見方・考え方を働かせるための教師の発問・問い返しとの関連について研究をする。

・ 南小思考スキルを働かせ，深い学びを促進するための発問・問い返しを研究し，具体的な授業場面において実践を行い，検証した。

・ 子供自身の個別の学びの保障と，個の学びと協働的な学びの往還を教師が適切に行うことで主体的・対話的で深い学びの実現を目指した。

・ 各教科等で身に付けさせたい資質・能力の向上のために，各教科の特質の見方・考え方を把握し，南小思考スキルのどの項目でどのように活用できるのかを明確するよう研究を進めた。

② 協働的な学びを支える学級集団作りの取組を進める。

・ 協働的な学びの土台である非認知能力の育成のため，WEBQU 調査を実施し，教職員全体で具体的な解決策や対応策などを検討・実施し，親和的な学級集団づくりに取り組んだ。

③ GIGA スクール構想のもと，ICT を効果的に活用し，個別最適な学び・協働的な学びを実現し，思考力・判断力・表現力を発揮する児童の育成を目指す。

・ 基礎・基本の定着から思考力・判断力・表現力の育成のため，AI ドリルの活用に取り組んだ。

・ 協働的な学びを充実させるために ICT のジャムボード等の共有化のソフトをさらに効果的に活用する実践に取り組み，試行してきた。

Ⅱ 成果と課題

【南小思考スキルと各教科の特質に応じた見方・考え方を働かせるための教師の発問・問い返し】

○南小思考スキルの取り組みも３年目となり，児童も意識できるようになってきている。授業中の発言の中に，思考スキルを使った発言も多くなってきた。この技法を働かせるための教師の発問や問い返しを充実させ，深い学びを実現することに迫れた。思考力・判断力・表現力を育成する大切な手段であるので，今後も取り組みを継続していきたい。

○2 年生の国語科の授業研究を通して，国語科の特質に応じた見方・考え方の理解を深めることができた。そこから，南小スキルや発問・問い返しとの関連を追究することができ，研究を深めることができた。

○授業づくり部会を低学年と高学年に分けて行った。低学年ブロックでは主に研究授業の検討を通して，高学年では低学年の研究授業で扱う単元の系統性を意識した授業改善の検討を通して，研究テーマに迫った。共通した課題意識を持つことで，6 年間の教科の系統性を意識した具体的な授業場面における発問や問い返しについて学習し，実践に生かすことができた。

●様々な教科で活用できる汎用的な南小思考スキルを，より多くの教科での実践に取り組み，児童の資質・能力を高めていくようにしていく。

【協働的な学びを支える学級集団作りの取組】

○WEBQU となり，ブロックごとの検討会が，分析する場からよりよい学級集団作りのために対応策を考える場となった。より一歩踏み込んだ話し合いをすることができた。

○ブロックごとに検討を進めることで，より多くの目で客観的に分析することができた。協働的な学びを支えるための学級集団作りについて，チームとして対応策を考え，共通理解のもと，日々の児童の指導にあたることができた。

【ICT を効果的に活用】

○ICT 端末を「効果的に活用する」という視点を意識して取り組んだ。学習ツールの一つとして ICT 端末を活用する場面が広がり，個別最適な学びの実現に迫ることができた。

○校内の推進チーム，甲州市の共有ドライブ，塩山ブロック交流研究会，日々の学年間での情報交換など様々な場面やツールを通して，ICT 端末の活用方法についてお互いの実践を共有化することで，効果的に活用する場面を増やすことができた。

●AI ドリルでは，児童にやらせて終わりになってしまう傾向があるという反省があった。今後，より効果的な活用方法について研究を進めていきたい。

●ICT 端末使うことが目的とならぬように，常に教科の特質に合わせた活用場面・方法について考えていく必要がある。また，どの児童にとっても個別最適な学びが実現していけるような ICT 端末の活用について，研究を継続していきたい。

Ⅲ 成果物

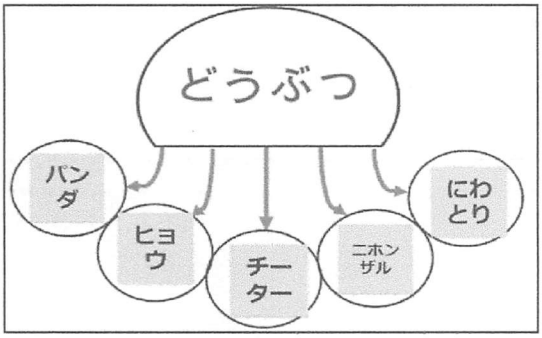
・低学年・中学年・高学年別 考えるための技法「南小思考スキル 17 条」

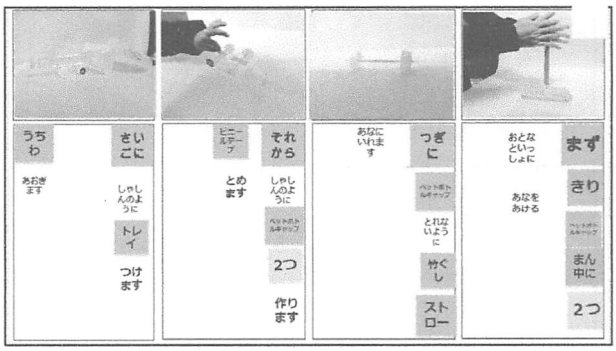
・全国学力状況調査結果の課題の各学年の系統性と具体的取組資料

・ICT 端末の活用実践（※以下に資料を添付）

【左：国語「ホワイトボードソフトの機能を活用し，言葉集めをする」】

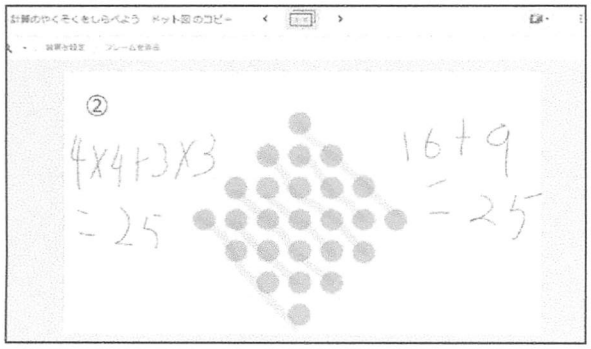
【右：国語「ホワイドボードソフトを活用し，おもちゃの作り方を説明する文章を書くためのメモをつくる」】

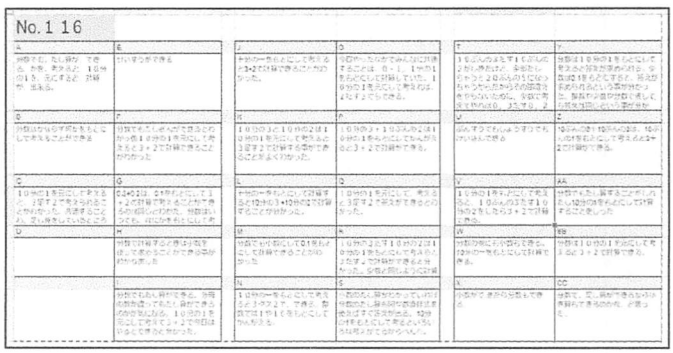




【左：算数「ドットの数を求める方法を，ホワイトボートソフトに添付したドット図を用いて考え，立式する」】

【右：算数「表計算ソフトを活用し，学習感想を入力する」】





（ 研究主任 池田 理恵子 ）

塩山北小学校

「主体的に学び，考える児童の育成」
～ICT端末を活用した学びを深める授業づくり～

Ⅰ　研究内容

1　研究について

昨年度より県から「深い学びの実現に向けたICT活用推進事業」の指定を受け，「主体的に学び，考える児童の育成～ICT端末を活用した学びを深める授業づくり～」をテーマに研究を進めてきた。

部会研究では，昨年に引き続き，算数科部会・道徳科部会の2部会での研究を行った。算数科部会では，問題解決学習の確立をめざし，学習用具や解決方法の選択など，これまでの学習経験を活かしながら「個別最適な学び」「協働的な学び」を位置付ける授業の在り方について研究を進めてきた。道徳科部会では，可視化，共有，共同編集といったICTの強みを活用しながら対話を通して学びを深めていく授業の在り方について研究を行った。

2　研究の具体的内容と方法

（1）講師を招聘しての学習会の実施

「深い学びをめざした授業づくりの着眼点～ICT端末活用を中心に」

講師：山梨大学准教授　三井一希先生

（2）ICT端末を活用した授業研究及び一人一実践

ア　研究授業（10月26日　公開研究発表会）

第6学年　算数科「並べ方と組み合わせ方～順序よく整理して調べよう～」

三枝英太郎教諭

指導助言　山梨県義務教育課　主査・指導主事　岡里真実先生

第4学年　道徳科「命―せいいっぱい生きるー」（D生命の尊さ）　畑佑弥教諭

指導助言　山梨県義務教育課　副主査・指導主事　小嶋庸子先生

イ　一人一実践

第1学年	道徳科「生きているじぶん」（D生命の尊さ）	雨宮由香教諭
第2学年	算数科「かけ算(2)九九をつくろう」	平山沙織教諭
第3学年	算数科「数の表し方やしくみを調べよう」	中根絵里教諭
第4学年	理科（教務）「もののあたたまり方」	古屋ゆか教諭
第5学年	算数科「割合をグラフに表して調べよう」	渡辺良太教諭
第5学年	保健「けがの防止」	田中菜津紀養護教諭
ひまわり学級	国語科「組み立てをとらえて，民話をしょうかいしよう」	倉田和美教諭
たんぽぽ学級	自立活動「カレンダーを作ろう」	清水新果教諭

（3）「甲州市『確かな学力』育成プロジェクト」と連携した取組

ア　WEBQU調査の実施。事例検討会を行い，対応策を活用した学級集団づくり

イ　学校と家庭が連携した家庭学習の取組

「基礎的に学び，考える思考の育成」
～ICT環境を活用した学び方を豊かにする授業づくり～

[illegible]

[illegible]

[illegible]

Ⅱ　成果と課題（○成果　●課題）

(1) 講師を招聘しての学習会の実施

○三井先生より本校の研究の柱である授業改善の視点について,「児童に任せる場面」と「自らの学びを選択・調整する場面」を意図的に仕組み,学習者主体の授業をめざすこと,またより一層,児童が端末操作に慣れ,日常使いを進めていくことなど多くの示唆をいただき,共通理解を図ることができた。

(2) ICT端末を活用した授業研究及び一人一実践

○ICT の活用から,児童が自分の考えを表出したり対話を通して学びを深めたり様子が見られ,主体的に学ぶ姿が見られた。

○様々な活動において積極的に ICT を活用し,日常化が図られた。発達段階に応じながら,児童の ICT の操作上の能力が育成された。

○発達段階に応じながら ICT の効果的な活用場面が精選され,学びを深めるという視点で授業改善が図られた。

○甲州市をはじめ多くの先生方に参加していただき,公開研究発表会を開催した。授業公開と同時に,これまでに様々に取り組んできた ICT 活用の具体を提案することができ,推進校としての役割を果たすことができた。

●「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現するために,ICT の活用はさらに充実させていく必要を感じる。学び方を学ぶ授業づくりや本校の課題である「思考・判断・表現力」の育成に関わる授業の在り方について研究を進めていきたい。

●授業公開については,授業に関わる資料や情報の共有はできたが,2部会同時開催のため,所属していない部会の授業を見ることができずに残念だった。

(3) 「甲州市『確かな学力』育成プロジェクト」と連携した取組

○実際に取り組んだ自主学習ノートを階段踊り場や教室に掲示し,見合うことで意欲につながっている。他学年の取組からも学ぶことができた。各学年の自主学習の内容を見直し,新たに自主学習メニューを作成したことで選択が広がり,意欲付けにもなっている。また,家庭学習スタンバイの定着が図られた。

○結果がすぐに分かり,他学年の状況を共有することができるなど WEBQU の利点を感じることができた。多くの目で結果を分析し,学級づくりの手立てが生まれるので大変参考になった。

●家庭学習について,今後は,児童が家庭学習ノートを使用したり AI ドリルなど ICT を活用したりすることを選ぶこともできるのではないか。

●児童の情報モラル,情報リテラシーの育成については,今後も様々な課題が出てくることが予測される。保護者と連携を図りながら,適切に使用できるよう継続して指導する必要がある。

Ⅲ　成果物

1 研究授業指導案・一人一実践指導案

2 授業の概要及びICT端末事例紹介シート

3 児童の情報活用能力に関する意識アンケート

（研究主任　平山　沙織）

奥野田小学校

「確かな学力」を育む学習指導に関する研究

―算数科における主体的・対話的で深い学びに向けた授業づくり（2年次）―

Ⅰ 研究の内容

1 授業研究

（１）研究授業

第5学年 算数科「単位量あたりの大きさ　比べ方を考えよう（1）」

竹川 憲任教諭

指導助言　甲州市教育委員会　　那須 栄樹 指導主事

（２）一実践授業

第1学年 算数科「3つのかずのけいさん」　向山 紀子教諭

第2学年 算数科「図をつかって考えよう」　奥山 美恵教諭

第3学年 算数科「大きい数のわり算 分数とわり算」　小河真由美教諭

第4学年 算数科「倍の見方」　村松 夏帆教諭

第6学年 算数科「考える力をのばそう　全体を決めて」　岡村 理恵教諭

知的〔すみれ〕学級 第4学年 算数科「大きい数をしらべよう」　筒井ひさ美教諭

自閉症・情緒〔つくし〕学級 第5学年 算数科「比べ方を考えよう（1）」

矢崎さつき教諭

第5学年 理科「花から実へ」　雨宮　正 教諭

（３）算数の基礎学力定着に向けての取組

『算数オリンピック』・・・「数と計算」領域の学年相当の基礎学力定着を目指して

2 学級集団づくり

WEBQU検査（全学年）実施とK13法による分析・アタックシートの作成・活用の充実

3 ICT機器の活用

（１）ICT端末に関わる技術向上のための研修

（２）「ICT端末活用の記録」作成

（３）ICT端末活用時の「やくそく」の検討

Ⅱ 成果と課題

1 成果

・2年目の継続研究として，教育全体の課題，主体的・対話的で深い学びの追求，子ども達の学習に向かう意欲の向上のために，算数科に取り組んだことは良かった。

・主体的・対話的で深い学びの授業づくりに向け，問い返し発問の具体，協働学習の在り方，ICT 活用の基礎技能など，練り上げられた研究授業となった。ICT 端末を使って，どのように問題を解決していきたいか明示し，必要な学習形態を選択することで個別最適な学びと協働的な学びを実践できた。研究会においても，ICT を活用して会の効率化をはかり，充実した話し合いができた。

・一実践は，研究主題を意識し，児童の発達段階や教科の特性に合わせた，様々な取組がなされた。学年相応の ICT 端末を使った授業の工夫，問い返しの発問を意識した授業実践であった。今年度は，研究授業に関わって，各自が単元の系統を意識した一実践ができたことも良かった。

・今年度も，算数の基礎学力定着に向けた取組として，「計算力」に焦点を絞った「算数オリンピック」（学期1回）を実施した。子ども達が楽しく意欲的に取り組めるよう工夫を重ね，算数の学習に自信を持って取り組むための基盤作りとして有効な取組であった。

・ICT の活用については，常に情報交換をしながら，必要に応じて技術を学べる職場環境であった。ICT 活用のための環境整備にも取り組み始めた。

2 課題

・「算数オリンピック」実施の方法を工夫してきているが，まだ意欲や学習の理解度に大きな差が見られる。活動として成功しただけではなく，真に学力を向上させられるところまで迫った取組にしていきたい。そのためにも，合格点に満たない子への支援や今後の取組についても改善を重ね，CRT などでしっかり分析検証をしていきたい。

・ICT 活用に向けては，効果的な活用場所・方法を今後も検討し，準備などに時間を要しないようにしていきたい。また，児童は現在，ICT 活用の健康への影響については，ほとんど心配していない（自覚していない）と思うが，視力低下から起こる疾病など，将来への影響を考え，今できること（休み時間は外で遊ぶ・スクリーンタイムを決める・正しい姿勢など）への取組も，ICT の活用と並行して行って行くことが必要である。

Ⅲ 成果物

1　研究授業・一人一実践授業の指導案，使用した教具，ワークシート
2　「算数オリンピック」に関する資料・問題等
3　ICT 端末活用の記録

（研究主任　矢崎　さつき）

Ⅱ 成果と課題

1 成果

・2年目の継続研究として，教育全体の課題，主体的・対話的で深い学びの理念，子どもの豊かな学習に向けた意欲の向上のために，算数科に取り組んだことは良かった。

・主体的・対話的で深い学びの授業づくりに向け，問い返し発問の具体，協働学習の在り方，ICT 活用の基礎技能などを，踏まえた研究授業となった。ICT 端末を使って，このように問題を解決していきたいが明示し，必要な学習形態を提示することで個別最適な学びと協働的な学びを実践できた。研究会にあっても，ICT を活用して会の効率化をはかり，充実した話し合いができた。

・一学期は，研究主題を意識し，児童の発達段階や教材の特徴に合わせた，様々な取組がなされた。学年相応の ICT 端末を使った授業の工夫，問い返しの発問を意識した授業実践であった。今年度は，研究授業に関わって，各自が学年の系統を意識した一貫性があったことが良かった。

・今年度も，算数の基礎学力向上に向けた取組として，「計算力」に焦点を絞った「算数ドリルタイム」（学期1回）を実施した。子どもは楽しく（意欲的に取り組める）ように工夫を重ね，算数の学習に自信を持って取り組むための基盤作りとして有効な取組であった。

・ICT の活用については，常に情報交換をしながら，必要に応じて技術を学べる職場環境であった。ICT 活用のための環境整備にも取り組み始めた。

2 課題

・「算数ドリルタイム」実施の方法を工夫しているが，まだ意欲や学習の理解度に大きな差が見られる。活動として成功しただけでなく，真に学力を向上させられることまで踏まえた取組にしていきたい。そのためにも，各移点に満たない子への支援や今後の取組についても改善を重ね，CRT などでしっかり分析検証をしていきたい。

・ICT 活用に向けては，効果的な活用場所・方法を今後も検討し，準備などに時間を要しないように工夫していきたい。また，児童は現在，ICT 活用の健康への影響については，はじめの頃（自覚していない）と比べると，視力低下のみられることが報告され，将来への影響を考え，今できることを（休み時間は外で遊ぶ・スクリーンタイムを決める・互いの発表会）への取組を，ICT の活用と並行して行っていくことが必要である。

Ⅲ 成果物

1 研究授業・一人一実践授業の指導案，使用した教具，ワークシート

2 「算数ドリルタイム」に関する資料・問題等

3 ICT 端末活用の記録

（研究主任　矢崎　ゆうき）

大藤小学校

「主体的に表現する児童の育成」

～小集団におけるICTを活用した対話的な学びをつくる授業～

Ⅰ　研究の内容

1．　教員のICT活用指導能力の育成　・・・　指導者自身が有効にICTを活用していくために，指導者のICT活用力を高めていく。

・講師を招聘しての研修

「小集団におけるICTを活用した対話的な学びをつくる授業」の学習方法について

・校内での実践研修

2．　授業づくり　・・　学力の実態把握と少人数や集団における効果的な学習方法と授業実践

・CRT検査，全国学力・学習状況調査を分析して，学習面の成果を把握し，課題を明確にして今後の授業改善に生かす。

・各種調査で明らかになった児童の課題を改善するための効果的な学習方法の実践をする。

・少人数や小集団，個を生かした「対話的な学び」の実現のための授業実践と検証。

（コミュニケーション，ICTの活用も含む）

・甲州市Teacher's Noteの活用

・めあてと目的を明確にした一人一実践

・授業におけるICTの効果的な活用

3．　学級集団づくり　・・・　児童の実態把握と集団づくり

・WEBQUを生かした児童理解と集団づくり。PDCAサイクルを活用。

・WEBQU の結果分析と対応策シートを活用した集団づくりを行う。児童一人一人を丁寧に見とり，個を大切にする。

・対応策には，学年全体だけでなく，要支援群に属する児童や，プロットの位置が教師の見とりと違う児童に焦点を当てた策も考える。

4．　学びを促す環境づくり　・・・　学校生活の基盤づくり

・「大藤スタンダード」「家庭教育・子育てQ&A・家庭学習の手引き」「学習の手引き」を活用した家庭学習の効果的な実践の取組。

・５つの合言葉の具体的な場面での取組を実践。学年に応じた「大藤スタンダード」の徹底。

〈わくわくべんきょう**〉**・・・勉強のスタートは，驚きや疑問，楽しく学ぶ。

〈のびのびとうこう**〉**・・・　何事も夢中でする。徹底してする。

〈みんな**なかよし〉**・・・　いじめや仲間外れを生まない集団でいよう。

〈にこにこあいさつ**〉**・・・　あいさつ，返事をしっかりする。

〈いきいきかつどう**〉**・・・　自ら考えて行動する。自分で決めて，自分で守る。

・家庭学習定着を図る環境整備

①自学ノートを年間を通して実施する。

②家庭学習スタンバイの時間を帰りの会の前にとる。

③家庭学習と授業を有機的に結びつけ，知識探求や学習の復習をする。

④ノートが終わったら，校長先生にも見てもらう。

⑤自学ノートをコピーして，１年教室の廊下に学年ごと掲示する。

⑥月・金の朝学習は，AI ドリルを活用しての学習とし,水曜日は全学年タイピング練習の時間とする。

⑦「大藤スタンダード」に基づき，生活面や学習規律の統一を行う。

５．　研究実践

① 研究授業　第４学年　理科　「物の体積と温度」　授業者　堀口 藍花

指導・助言　山梨県総合教育センター　　宮下　昌久　主査・指導主事

② 一人一実践

第１学年	国語科	授業者　相澤　由佳
第２学年	道徳科	授業者　中村　千春
第３学年	理科	授業者　堀内　美紀
第６学年	家庭科	授業者　三森　明美
第３・４学年	音楽科	授業者　川﨑　剛

Ⅱ　成果と課題

（成果）

・２年目の研究となり，教師の ICT 活用意識が高まり，活用頻度を上げることができた。それにより，児童も活用スキルを上げることができた。

・講師による「小集団における ICT を活用した対話的な学びをつくる授業」についての学習会を通し，授業の中での ICT の効果的な活用の仕方を教えていただいたことは，研究を進めるにあたり大きなヒントとなり，指導者側の意識を高めることができた。また，日常的に教員間で，授業の中での ICT 活用について情報交換を行うことで，どんなメリット・デメリットがあるのか，留意点は何かを確認することができた。

・研究授業や一人一実践を行い，授業を見合うことで，授業の中での ICT の活用方法や，児童の考えを引き出す発問や児童が表現する方法を学び，授業改善へとつながった。

・職員全体で WEBQU の結果分析ができたことが良かった。また,分析結果をもとに行った取組・成果・課題・児童の様子についてまとめたシートを作成し，取組の成果や課題について全体で共通理解を図り，全校体制で取り組むことができた。これにより自分のクラス以外の児童にも，個に応じた指導を行うことができた。

（課題）

・「まず，ICT 機器を使うことありき」ではなく，ICT を使うことで，対話的な学びに繋げ，児童の思考を広げたり，深めたりすることに役立っていたか，児童にとって活用することが有効であったか等，今後も「効果的な使い方」をさらに検証していく必要がある。

Ⅲ　成果物

・WEBQU 対応策シート　・授業実践指導案　・ICT 活用記録シート　・児童の実態記録

・ICT 学習会資料　・全国学力学習状況調査分析結果

（研究主任　　相澤　由佳）

神金小学校

「少人数学級における思考力･判断力・表現力の育成」
～アウトプットを意識した学習を通して～

Ⅰ研究の内容

1　研究目標

学習過程において，アウトプットを意識した授業の工夫と改善を図っていくことで，子供たちの主体性と思考力・判断力・表現力等を育むことを目指す。

2　具体的内容

（1）授業づくり

①児童の実態把握

・Q-Uの分析　　・全国学力テストの分析

②一人一実践と研究授業の実施

・アウトプットを意識した授業の工夫と改善

・ICT環境を活用した実践(日常の授業の中での活用を図る)

・プログラム教育のための学習会

・学校間ネットワークの交流実践の継続

③「ふるさと学習」の取り組み

・地域人材の活用

・地域との連携と情報発信

・「ふるさと学習」の発表会

（2）学習基盤づくり(甲州プロジェクトと関わって)

①Q-U調査の実施（2回）と分析

②互いに認め合い，高めあえる集団づくりを目指した学級活動の取組

③家庭学習や学習規律の確立の取組

④生活環境向上の取組

Ⅱ研究の方法

1　学習会

「一人一台端末を活用した説明する力・表現する力の育成」

峡東教育事務所　小林みずほ指導主事

2　一人一実践

第1学年算数科「かたちあそび」	川﨑　幸江教諭
第2学年生活科「町たんけん2」	大島めぐみ教諭
第3学年算数「数の表し方やしくみを調べよう」	小石澤淳子教諭
第4学年理科「物のあたたまり方」	前島　国学教諭
第6学年国語科「みんなで楽しく過ごすために」	保坂　恵教諭

3　ふるさと学習発表会

第１学年「かみかね小の　まわりの　しぜん」

第２学年「神金そうさくたい　町たんけんで見つけたよ」

第３・４学年「～神金のじまん～　雲峰寺」

第５・６学年「神金とＳＤＧｓ　わたしたちにできること」

Ⅲ　成果と課題

1 成果

・甲州市プロジェクトに沿っていることで，はっきりした方向性をもって研究を進めることができた。

・アウトプットを意識しながら授業作りをすることで教師も児童もスキルアップをすることができた。児童はＩＣＴ端末を使って発表したり，自分の言葉で意見を言ったりすることができるようになった。

・一人一実践でＩＣＴ端末を使うことを前提におこない，教師も児童もスキルアップすることができた。アウトプットのツールの一つとして，ＩＣＴ端末を活用することができた。

・アウトメディアチャレンジを継続して行い，アウトメディアに対する意識が高まった。

・ふるさと学習によって自分の住む地域について知ることができた。児童だけでなく保護者も「よさ」を再確認することができた。また，発表のためＩＣＴ端末を活用し，児童同士で教え合うことで，児童の自信にもつながった。

2 課題

・神金小としてどんなアウトプットを目指すのか目標を明確にし，具体的実践につなげることができればよかった。

・児童がＱＵに慣れているように感じる。また，協働的な学習を行うためにＱＵをどのように思考力・判断力・表現力の育成につなげていくのか難しさを感じた。

・端末を持ち帰り，家庭学習にＡＩドリルを使用している。そのため，特に高学年ではメディア使用時間が増えている傾向にある。また，過不足無く記述することや伝えることについては，経験を重ねることが大切になると感じた。

・相手を意識した表現力を育てるためには，どのような場面でＩＣＴ端末を使用すると効果的であるのか，確認し合うことができればよかった。また，教師自身がＩＣＴ端末の活用能力を高める必要性を感じた。

Ⅲ　成果物

・一人一実践授業案　　・ふるさと学習実践資料

・神小スタンダード　　・アウトメディアチャレンジ

（研究主任　大島　めぐみ）

玉宮小学校

個を高める確かな学力の育成

～ICTを活用した授業づくり～

Ⅰ　研究の内容

1．ICTを効果的に活用した授業づくり

（1）指導主事を招聘しての学習会

「ICTを活用した授業づくり」

講師：山梨県総合教育センター　渡邊　信也　副主幹・指導主事

（2）教員のICTスキルアップ研修

・ドリルパーク活用方法（オンライン研修）

・プログラミング（正多角形のかき方）

・情報交換会（実践の共有）

（3）一人一実践授業及び振り返り

・第1学年　算数科「ひきざん」　授業者　田邉真由美　教諭

・第2学年　生活科「町たんけん」　授業者　青木　恵　教諭

・第4学年　国語科「秋の楽しみ」　授業者　畠山　忠　教諭

・第5学年　国語科「カンジー博士の暗号読解」　授業者　山本　諭　教諭

・第5学年　総合的な学習の時間「玉宮水神池自然公園で米づくりをしよう」　授業者　滝島　正彦　教諭

・第5学年　自立活動「落語の門をたたこう」　授業者　柏原　真澄　教諭

（4）多様な意見にふれられる授業づくり（ICTを活用した他校との交流）

2．学習基盤づくり（甲州市「確かな学力」育成プロジェクトと関わって）

（1）親和的な学級集団づくりに向けた取組

・WEBQUの分析と対策

（2）家庭学習の充実に向けた取組

・「自主学習の進め方」作成

・自主学習ノートの掲示

（3）生活環境向上に向けた取組

・SNSノート，GIGAワークブックを活用した授業

・アウトメディアチャレンジ

３．その他の取り組み

（１）教育課程研修還流報告会

（２）全国学力・学習状況調査の分析と対策

（３）CRT 検査の分析と対策

（４）特別支援教育学習会

「特別な支援を必要とする児童の支援」

講師：山梨県教育庁　特別支援教育・児童生徒支援課

小林　ゆかり　主査・指導主事

Ⅱ　成果と課題

＜成果＞

・一人一実践授業を互いに参観し合ったり，実践を共有し合ったりする中で，一人一台端末の活用場面や活用方法等，授業づくりのヒントを得ることができた。教師自身の ICT 活用指導力が向上し，日常的に一人一台端末を活用した学習が進められるようになった。

・一人一実践授業を全職員で振り返り，成果や改善点を共有することで，ICT 活用の理解が深まり，日々の授業改善につながった。

・一人一台端末を活用した授業づくりに取り組むことで，児童に意欲の高まりが見られた。児童の ICT スキルも格段にアップしている。

・WEBQU の分析と対策を全職員で行い，児童や学年の課題を共有したり，具体策を考えたりする中で，共通理解をもって，声掛けをしたり対応したりすることができた。学力向上には，親和的な学級集団づくりが欠かせない。今後も，全職員で全児童を支援する体制を継続していきたい。

＜課題＞

・ICT を活用した授業が，主体的・対話的で深い学びとなっているのか，学力向上に寄与しているのか，今後，児童の変容を見取る中で，ICT の効果を検証していくことが大切である。

・教師主導の一斉授業ではなく，児童一人ひとりの学習理解度に合わせた授業，児童が主体的に学ぶ授業を，一人一台端末を活用して実現させていきたい。

・学習のルールや話の聞き方・意見発表の仕方等，6 年間を通した児童の成長を意識し，さらに全校で徹底した取り組みが必要である。

・家庭学習において，保護者と連携した取り組みを充実させていくことで，児童が主体的に学習する力を，さらにつけさせていきたい。

Ⅲ　成果物

・ICT を活用した各教科の授業案，教材

（研究主任　青木　恵）

松里小学校

『全ての児童の「主体的・対話的で深い学び」をめざした授業づくり』

～ICT の活用を通して～

I　研究内容と方法

1　具体的な研究内容

（1）授業改善に関わって

○授業改善における ICT の活用に関する学習会と授業実践

・「主体的・対話的で深い学び」を実現する児童を育成するための理論研究
・児童の「主体的・対話的で深い学び」を実現する ICT を活用した授業の実践
・ICT の活用方法に関する学習会

（2）甲州市「確かな学力」育成プロジェクトに関わって

○確かな学力を育成するための取り組みの継続

・Q-U 検査と K-13 法の実施
・朝学習・家庭学習への取り組み
・授業の構造化と授業改善

2　研究の方法

（1）ICT を活用した「主体的・対話的で深い学び」についての研修・指導主事を招いての理論研修

（2）「確かな学力」育成プロジェクトに関わる取り組みの検討・実践

（3）ICT の活用方法に関する学習会

（4）一人一実践

（5）ICT 機器を活用した実践記録の作成

3　具体的な取り組み

（1）学習会

ア　「ICT を生かした深い学び」を実現するための手立てについて

講師　山梨県総合教育センター　　中村　忠廣主幹・指導主事

イ　AI テキストマイニング・思考ツールについて

講師　黒瀬　貴広　教諭

（２）研究授業

第３学年　　黒瀬　貴広教諭　　国語数科「ちいちゃんのかげおくり」

※山梨県総合教育センター　西谷地　力也指導主事を招いての研究会を実施

（３）一人一実践

・第１学年　中村　悦子教諭　　道徳科「はしのうえのおおかみ」
・こすもす　高石　圭子教諭　　国語科「わかりやすくせいりしよう」（１年）
・第２学年　小野　愛子教諭　　国語科「お話のさくしゃになろう」
・第４学年　遠藤　香織教諭　　算数科「分数をくわしく調べよう」
・第５学年　岡村　澄人教諭　　算数科「図形の角を調べよう」
・第５学年　大村　隆　教諭　　外国語「Unit４　What time do you get up?」
・ひまわり　蘰原　美海教諭　　道徳科「ロレンゾの友達」（５年）
・第６学年　川崎江里子教諭　　算数科「データの特ちょうを調べて判断しよう」
・第６学年　古屋　岳治教諭　　理　科「生き物のくらしと環境」（６年）

Ⅱ　成果と課題

１　成果

・昨年度からの継続した研究を進めることで，より発展的な取り組みができた。どの学年でも日常的にICT端末を使用した授業をすることで，ICTスキルも上がり，「主・対・深」をめざした授業づくりを意識して行えるようになってきている。
・指導主事を招いての学習会だけでなく，校内でも学習会を行い，実際に端末を動かしながら研修したことで，短時間ではあったが技能を高めることができた。また，ここで学んだことを多くの先生方が実際の授業の中で実践し，自分なりの効果的な活用方法をつかむことができた。
・今年度からWEBQ-Uとなり，K13法での分析についても，テレビ画面を見ながら情報共有ができ，さまざまな側面から児童の様子を把握し，対応策を考えることができた。学習規律や学習態度，学びに向かう集団づくりがしっかりしていないと，ICT機器を使用する際のルールなどの徹底もできない。ICT 機器の効果的な利用にも，学習集団の質が大きくかかわることが分かった。

２　課題

・一人一実践の授業をお互いに参観し合うことが難しかった。今後は，足を運ぶ参観だけでなく，classroom を活用して授業履歴などを残し，いつでも見られるような形も取っていく必要がある。
・ICT が思考を深めるツールであることが日々の実践の中で分かってきた。今後は，デジタルとアナログの使い分けを意識しながら活用していくことが大事である。また，タイピング技術などの情報活用能力の向上についても研究していきたい。

（研究主任　遠藤香織）

井尻小学校

思考力・判断力・表現力の育成

～ICT を積極的に活用した授業づくりを通して（２年次）～

Ⅰ　研究の内容

１　研究の目標

○ＩＣＴ機器を積極的に活用し，より主体的，協働的な学びとなるように課題設定や学習活動の工夫をすることによって，子ども達の学習意欲を高め，「思考力，判断力，表現力」を育成する。

２　研究の具体的内容

（１）学級づくり・集団づくり

ア　WEBQ-U アンケート実施及び K13 法による分析・「今後の対応策」の検討

イ　各学年の「今後の対応策」の共有化，不満足群の児童の再確認

（２）授業づくり・授業改善

ア　「自分の考えを持たせるための手立て」「自分の考えを表現する場の設定」「自分の考えを深めるための手立て」「表現力を身に付けるために必要な言語活動」を考え，実践を積み重ねる。

イ　ＩＣＴ機器を積極的に活用しながら，「甲州市 Teacher's Note」に沿った授業づくりを行う。

５学年　国語科授業研究「世界にほこる和紙」

授業者　新藤　亘教諭

指導・助言　峡東教育事務所　風間　謙指導主事

ウ　学習会「ICT 機器の利活用による思考力・判断力・表現力等の育成」

講師　峡東教育事務所・小林　みずほ指導主事

エ　一人一実践（授業研究者以外全員）

オ　授業の構造化　　板書用「めあて」「まとめ」プレートの活用

カ　WEBQ-U 分析結果を載せた指導案づくり

キ　授業において子どもが「思考・判断・表現」している具体的な姿についての意識調査の実施（年２回）

（３）保護者との連携

ア　「家庭学習の手引き」を利用した家庭学習ノート（いじりの子ノート）の指導・保護者への周知

イ　各学年の取り組みについての情報交換・系統的な支援の共通理解

Ⅱ　成果と課題

1　成果

（１）K13 法による WEBQ-U 分析の実施で，自分の学級を改めて見直すきっかけになった。また，「今後の対応策」を全職員で共有化したことで，普段気づかない部分をアドバイスしてもらったり，より多くの目で確認をしてもらったりしたことがよかった。

（２）ＩＣＴ機器を活用し，より主体的，協働的に学習することで「思考力・判断力・表現力」を育成するための授業づくりについては，さまざまな教科で，ＩＣＴ機器を積極的に活用し，分からないことは職員間で教え合ったりすることもできた。

（３）甲州市「確かな学力」育成プロジェクトの講演会は，どれも充実した内容のものばかりで，自分自身の教育活動を振り返ることができた。職員で連携を図り，すぐに学びを活用することで効果を実感できた。

（４）「いじりの子ノート」では，「アイアイ週間」を学期に１回設定することで，担任以外の先生に見てもらえるため楽しみにしている児童も多かった。

2　課題

（1）アタックシートを全体で交流・情報交換したことによって，ある程度は共有できたが，十分に生かしきるところまでには至らなかった。

（２）ＩＣＴ機器を用いることで，児童がより主体的に学ぶ姿がどの学年でも見られた。また児童の意識調査からも，学習意欲が高まっていることが分かった。しかし，ＩＣＴ機器の活用状況には担任間に個人差があり，職員全体で共有していく大切さを実感した。

（３）「家庭学習の手引き」・「いじりの子ノート」については，職員間で意思統一を図っていきたい。保護者には家庭学習の意義が伝わっていたと思うが，なかなか成果につながらない児童もおり，個別に支援することの必要性を感じた。児童が，いじりの子ノートをすることの良さを実感し，継続していけるような指導を今後も考えたい。

Ⅲ　成果物

1　Q-U アタックシート（全学年）

2　授業研究授業案・一人一実践授業案及び実践のまとめ

3　授業において子どもが「思考・判断・表現」している具体的な姿についての意識調査

4　井尻小「家庭学習の手引き」（低・中・高）

（研究主任　佐野誠一）

勝沼小学校

自ら考え，進んで表現できる児童の育成

～「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業の工夫と改善～

Ⅰ　研究内容

1　研究内容と方法

（1）研究内容

ア　児童の実態把握と分析，改善策の検討。

イ　甲州市「確かな学力」育成プロジェクトと連携した研究。

ウ　対話活動を仕組む工夫（ICT の活用を含む）についての理論研究や学習会。

エ　「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業研究。

（2）研究方法

ア　全体研究会とブロック研究会（低・中・高）を取り入れた研究体制で研究を進める。

イ　WEBQU・研究テーマに関わる学習アンケートを行い，児童の実態を把握・分析・共有化し，具体的な改善策を検討する。

ウ　甲州市「確かな学力」育成プロジェクト講演会に積極的に参加したり，3部会の取組や『Teacher's Note』から学んだりして，日々の実践に活かす。

エ　講師を招いての学習会開催や公開研究会への参加，動画視聴・書籍などから理論研究を進める。

オ　研究授業の指導案検討を行う。講師を招聘して授業研究会を行う。

カ　一人一実践の指導案を作り，授業公開を行う。参観者の意見を授業改善に活かす。

2　具体的な取り組み

（1）WEBQU・学習アンケートの結果分析・改善策の検討。

ア　WEBQU の結果及び分析から改善策を検討し・共通理解を図る。また長期休業中に改善策を見直し，ミスマッチのものは新たに対策を考え，実践に活かす。

イ　Forms 版学習アンケートの結果から課題点を1つ挙げ，授業改善策を検討する。職員間で共有し，実践に活かす。

（2）「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業の実施。

ア　ＩＣＴを積極的に活用し，主体的・対話的で深い学びの授業を目指す。

イ　協働的な学習を意識し，「問い返し」のある授業を実践する。

3　具体的実践

（1）理論研究

ア　学習会の実施　「児童の『問い』からつくる授業について」

講師：山梨県総合教育センター副主査・指導主事　廣瀬雅美先生

イ　電子黒板・WEBQU・OPE 等 ICT についての校内研修

講師：情報主任　保坂　洋仁

（2）実態調査

ア　WEBQU（第1回　5月，第2回　10月）

イ　Forms 版学習アンケート（第1回　6月，第2回　10月，第3回　1月）

（３）授業実践

ア　研究授業

第３学年　　髙橋里恵教諭　算数科「数の表し方やしくみを調べよう」
　　指導助言：教育事務所　主幹・指導主事　中村英彦先生

イ　授業公開（一人一実践）

第１学年　　前田　　文 教諭　算数科「ひきざん」
第２学年　　志村　多恵教諭
　　算数科「さんかくやしかくの形をしらべよう」
第４学年　　荻原　幸菜教諭　算数科「四角形の特ちょうを調べよう」
第５学年　　中村亜矢子教諭
　　国語科「たがいの立場を明確にして，話し合おう」
第６学年　　保坂　洋仁教諭　社会科「近代国家を目指して」
たんぽぽ　　内田　俊彦教諭
　　第６学年算数科「プログラミングを体験しよう」
教務　　志村　克人教諭　第４学年理科「物のあたたまり方」
外国語専科　木下里江子教諭
　　第４学年外国語「Alphabet で文字遊びをしよう」

Ⅱ　成果と課題

１　成果

（１）本校の児童の実態や今日の教育課題に即した研究主題，サブテーマであり，協働的な学びをつくりあげるために研究を深められ，互いに学び合うことができた。

（２）１年を通して「問い返し」のある授業づくりを教師が意識して行うことができた。その意義が児童にも伝わり，児童がより意欲的・主体的に授業に参加し，自分の考えをもって活発に意見交流する姿が見られるようになった。

（３）教師も児童も ICT を活用した授業に戸惑いがなくなってきている。

２　課題

（１）今後は，ICT を活用して，児童が更に主体的に考える授業や個に応じた指導を展開していく必要がある。「個別最適な学び」のあり方について学習を深め，その中で「自ら考え，進んで表現できる」ということはどういうことなのか研究を進めたい。

（２）研究内容に抽象的な部分があり，しっかりと意識して実践できていなかった部分もあった。また，研究したことを日常に落とし込み，普段の指導，普段の授業の積み重ねを大切にしていくために，教職員一人一人が更に意識を高くもち，日常の実践につなげていくことが必要である。

（３）基礎的・基本的な知識・技能の定着，学習規律の徹底，家庭学習の習慣化など，授業と間接的に関わる部分についても，子どもの力を高めていきたい。

Ⅲ　成果物

１　研究授業及び公開授業の指導案９点
２　Forms 版学習アンケート結果（３回実施）
３　WEBQU の結果（２回実施）

（研究主任　志村多恵）

祝小学校

「学習の基盤となる言語能力を身に付けた児童の育成」
―読む・書く・聞く・話す・話し合う等の言語能力向上に向けた授業づくりを通して―

Ⅰ　研究の内容

1　授業研究

（1）授業研究及び研究会

第２学年　国語「せつめいのしかたに気をつけて読み，それをいかして書こう」

（2）実践授業

第１学年　国語「じどう車ずかんをつくろう」

ひまわり学級　国語「絵や写真を見て話そう」

第３学年　国語「れいの書かれ方に気をつけて読み，それをいかして書こう」

第４学年　算数「およその数の使い方と表し方を調べよう」

第５学年　算数「ならした大きさを考えよう」

第５学年　理科「物のとけ方」

第６学年　算数「比　割合の表し方を調べよう」

2　各種調査結果の分析・課題把握・活用

（1）全国学力学習状況調査・ＣＲＴの結果分析・課題把握・活用

（2）ＷＥＢＱＵ言語活動意識項目についての分析

（3）教育課程説明会の還流報告

3　研修

ＩＣＴ端末活用についての学習会

4　甲州市「確かな学力」育成プロジェクトとの連携

（1）甲州市「確かな学力」育成プロジェクトをうけた授業改善

（2）ＷＥＢＱＵの実施と分析・活用の充実

（3）家庭学習の推進・アウトメディアチャレンジ

Ⅱ　成果と課題

1　授業研究

研究授業，一人一実践では，言語能力向上に向けた授業実践を行った。２年生国語の研究授業では，おもちゃの作り方を１年生に説明書で伝えるという言語活動を設定し，説明の工夫を使って文章を書いたり，書いた文章について気づいたことを伝え合ったりすることで，より考えを深められる授業を行うことができた。峡東教育事務所小林みずほ指導主事に研究授業の指導助言をしていただき，言語能力を向上させるための授業づくりについて指導していただいた。

一人一実践では，問い返し発問，まとめや振り返りの工夫，ペアやグループ等を取

り入れた学習形態の工夫，ICT端末の活用，ワークシートや挿絵の活用など様々な手立ての工夫が見られた。全員が授業を公開し，お互いの授業を見合うことで，それぞれの児童の実態にあった指導の工夫や手立てについて学び合うことができた。

2　各種調査結果の分析・課題把握・活用

各種調査結果では，意見交流をする中で課題把握を行い，授業改善に向けて取り組むべき課題を明らかにすることができた。全職員で確認することで，系統的な指導を意識して取り組むことができた。

ＱＵ言語活動意識項目については，２回のＷＥＢＱＵの結果から学級や個人の傾向を細かく分析し，実態を把握することができた。前期であげた課題を普段から意識して取り組むようにしたことで，後期の結果に活かすことができた。新たな課題も出てくるので，引き続き取り組んでいきたい。

3　研修

ＩＣＴ端末利活用の実践を積み重ねるために，研修を行うことができた。山梨大学三井先生の講演動画視聴や，情報主任からの使い方の指導や情報提供により，理解を深めることができた。ＩＣＴの活用については，日々新しい活用方法が求められているので，今後もさらに研修が必要である。甲州市教育委員会や甲州市内の小学校の情報を得ながら，研究を進めていきたい。

4　甲州市「確かな学力」育成プロジェクトとの連携

盛山先生講演会の「問い返し発問」を普段の授業から意識して取り入れるようにすることで，講演会と連携しながら取り組むことができた。各自が課題意識を持って参加することにより，主体的に学ぶことができた。

ＱＵの活用については，ＷＥＢＱＵになったことで学校全体の結果をすぐに把握することができるようになり，すばやい対応をすることができた。情報交換を行ったり，担任が気になる児童に全職員でアプローチしたり，活用の充実をはかることができた。

家庭学習については，ＩＣＴ端末を家庭に持ち帰り学習することが多くなったので，今後の活用方法を考えていく必要がある。

アウトメディアチャレンジについては，甲州市の児童生徒の課題となっており，甲州市全体で教職員・児童・保護者が共通意識で取り組めた良い機会となった。昨年度から引き続き取り組んだことで，昨年度と比較しながら取り組むことができた。

Ⅲ　成果物

授業実践の指導案，実践記録，ワークシート，資料等

（研究主任　飯室　美華）

東雲小学校

「自ら考え，よりよく生きようとする心豊かな児童の育成」
～互いに伝え合い，考えを認め合う活動を充実させた道徳の授業を通して～

Ⅰ　研究の内容

1　道徳科における「伝え合う・認め合う」を意識した授業づくり

（1）学習会　　（2）研究授業　　（3）一人一実践

2　児童の実態把握　親和的な学級集団づくり

（1）道徳意識調査　　（2）WEBQU の取組

3　学校教育全体における道徳教育の推進

（1）児童会との連携　（2）自然の杜の活用　（3）全校で道徳の授業参観実施

Ⅱ　研究の方法

1　学習会

（1）「互いに伝え合い、認め合う道徳の授業づくりについて」

山梨県教育庁義務教育課　指導主事　小嶋庸子先生

（2）「考え議論する道徳の授業づくりと互いに伝え認め合うための指導の工夫」

北杜市立須玉中学校　教頭　田中一弘先生

2　研究授業

・第２学年　道徳科「友だちとなかよく」　およげないりすさん

令和４年１０月２８日（金）　授業者　内田厚子教諭

指導助言　山梨県教育庁義務教育課　指導主事　小嶋庸子先生

・第５学年　道徳科「相手の気持ちを考えて」　ほのぼのテスト

令和４年１１月２５日（金）　授業者　山内要保教諭

指導助言　山梨県教育庁義務教育課　指導主事　小嶋庸子先生

3　一人一実践

・第１学年　道徳科「相手を思いやって」くりのみ　授業者　菱澤里美教諭

・第３学年　道徳科「わけへだてなく」ドッジボール大会　授業者　小林淳子教諭

・第６学年　道徳科「相手の気持ちを考えて」ほのぼのテスト　授業者　中根　淳教諭

Ⅲ　成果と課題

今年度から３年間の道徳研究推進校の指定を受け，１年目の研究では「互いに伝え合い・認め合う」を意識して研究を進めてきた。東雲小の子供たちの実態を踏まえ，自分の考えを持つこと，その考えを相手に伝えること，お互いの考えを認め合うことで，さらによりよく

生きようとする姿を目指して取り組んできた。「伝え合う」「認め合う」の２つを常に意識して，１年間道徳の授業に取り組むことができた。「伝え合う」「認め合う」姿を目指すための具体的な手立てを講じるために，道徳の授業における研究仮説と柱を２本立てた。視点を明確にしておくことは，授業者にとっても参観者にとっても研究の方向性がぶれることなく，目指す方向が分かりやすく研究を深めることにつながった。

【研究仮説】

道徳の時間において，自分との関わりの中で考え，互いに認め合う活動を充実させた授業を行うこと（A）で，よりよく生きようとする心豊かな児童（B）を育むことができるであろう。

【柱①】自分との関わりの中で考えることを大切にする工夫と手立て　について

・道徳的価値にせまる導入，教材提示の工夫

・多面的多角的な思考が促される発問

【柱②】自己や他者の考えの良さに気づく工夫と手立て　について

・考えを伝える表現方法の工夫（考えの見える化，ICT の活用）

・子供のつぶやきを拾い，つなぐ問い返し

柱①は「自我関与」を大切にした導入や教材提示であったが，「伝える」ために大切な自分事として考え持つということに効果的であった。中心発問をより深めるために，そこに至るまでの過程で補助発問や問い返しをする場面をあらかじめ想定しておくことが非常に大切であると分かった。

柱②は考えを表現する方法については，学年の実態に合わせた役割演技やフェイスマーク等の具体的な手立てが，授業の中で効果的に活用することができた。また，高学年の授業ではＩＣＴ端末の活用も，全員が考えを持てるという点で大変効果的だった。

今年度は２年生，５年生で研究授業を行った。２本の柱に沿った具体的な手立てを各ブロックで研究し，授業の中で効果的に実践することができた。今年度の実践したフェイスマークや役割演技，ICT の活用等の手立ては大きな財産として，来年度の研究授業にもぜひつなげていきたい。また，１１月の５年生の研究授業を拡大校内研とし，市内の先生方に参観していただいて様々なご意見を聞くことができ，さらに研究を深めることができた。

道徳意識調査アンケートを７月と１２月に同じ質問項目で全校児童に行った。ＩＣＴを活用したことで負担も少なく行うことができた。１回目の後に，今後の方向性を校内研で話し合い，共通理解のもと２学期の活動に取り組めた。年２回のアンケートの結果から子供たちの実態や意識を把握し課題を見つけ，そこから道徳の授業でどのように進めていくのか，なにを考えさせたいのかということにつなげていきたい。

道徳の授業以外で道徳教育の充実が図られた。コミュニティスクールとしての取組も道徳教育と関連して，子供たちのよい学びと経験につながった。児童会が中心となってあいさつ運動，無言清掃，ハッピー水族館等の活動を提案し実施し，学校全体の活気が出て盛り上がることができた。１１月には全校で道徳の授業参観を行い，保護者の方へ本校の道徳教育研究の取り組みを知ってもらう貴重な経験となった。

（研究主任　菱澤　里美）

菱山小学校

主体的に学び，表現する児童の育成
～効果的な言語活動を取り入れた授業改善を通して～

効果的な言語活動を取り入れ，児童が目的意識をもって取り組もうとする学習活動を工夫することで，主体的に学ぼうとする意欲を育て，自分の考えや思いを表現する力を養っていきたいと考えた。

Ⅰ　研究の具体的な内容と方法

１　理論研究，学習会

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた効果的な言語活動について」

講師　峡東教育事務所指導主事　　小林みずほ先生

２　児童の実態調査

学習アンケート

言語活動に対する意識についてのアンケートを１学期と２学期の２回実施し，実態と変容を把握することで指導に生かした。

３　国語科の授業実践

（１）研究授業

第５学年　　国語科　　授業者　金井　京子教諭

単元名　　伝記を読み，自分の生き方について考えよう
「やなせたかし－アンパンマンの勇気」

指導・助言　峡東教育事務所　主幹・指導主事　中村英彦先生

（２）一人一実践

第１学年	算数科	「かたちあそび」	教諭	廣瀬きよ美
第２学年	体育科	「表現リズム遊び」	教諭	三森　美礼
第３・４学年	道徳科	「絵はがきと切手」	教諭	三森　美佐
第６学年	算数科	「並べ方と組み合わせ方」	教諭	内田絵里奈
第６学年	総合学習	「SDGsから学ぶ私たちの生活」	助教諭	築城　豪佑
特別支援学級	自立活動	「すごろくで話そう」	教諭	大村ひとみ

（３）学習会

○ＰＣスキルアップ演習「一人一台端末の活用」	助教諭	築城　豪佑
○特別支援教育に関わる研修	校長	松井　渉
	教諭	大村ひとみ

3　甲州市「確かな学力」育成プロジェクトとの連携

（１）学級集団づくり

Ｑ-Ｕ検査を生かした児童理解と学級集団づくりへの取組

（２）あいさつ，学習規律

登下校時の職員室へのあいさつ，児童会を中心とした「あいさつビンゴ」等の取り組み

（３）自主学習・学習スタンバイ

全校児童の自主学習の掲示,児童会を中心とした「自主学習取り組みカード」，「自主学習いいねカード」の取り組み

学習スタンバイの時間の日課表への位置づけ

（４）家庭との連携

「家庭教育/子育てＱ＆Ａ」「家庭学習の手引き」の活用，アウトメディアに関わる取組

Ⅱ　成果と課題

１成果

・研究授業や一人一実践の授業において，理論研究で学んだ「発達の段階に応じた言語能力」や「端末の活用」，「言語環境」等を意識し，それらを生かすかたちで授業実践を行うことができた。児童の実態に合わせ，様々な指導方法の工夫を取り入れた授業が行われたことに加え，授業後の研究会でも活発な意見交換がなされた。

・校内でのＰＣスキルアップ研修では，日々の実践に生かせる内容が全職員に共通理解できたので今後も継続していけるとよい。

・児童の学習アンケートから，１回目に読むことや書くこと，聞くことに否定的な回答をした児童が２回目には減少していたことや，調べたりまとめたりする活動に肯定的な回答をした児童が２回目には大幅に増えたことは大きな成果だといえる。

・言語環境を整えるための校内掲示に取り組んだことで，児童の言葉への関心が高まった。

２課題

・言語活動の取り入れ方や表現する場面設定の工夫は,具体的な手立てや系統立てた継続的な取り組みが必要だと思われる。共通して取り組む内容の確認や，活用のための学び合いの場を設定することなどができると良かった。

Ⅲ　成果物

１　研究授業指導案

２　一人一実践の指導案

３　児童の言語活動に対する意識調査

（研究主任　金井　京子）

大和小学校

「学び合い高め合い意欲的に学ぶ児童の育成」

～対話的な学びの実現に向けた授業づくりを通して～

Ⅰ　研究の内容

1　対話的な学びを取り入れた授業づくり

（1）研究授業及び研究会

第２学年　算数「新しい計算を考えよう」

指導助言　峡東教育事務所　指導主事　小林みずほ先生

（2）実践授業及び振り返り

第１学年　国語「ものの名まえ」

第３学年　算数「わり算を考えよう」（あまりのあるわり算）

第６学年　算数「図形の面積を工夫して求めよう」

ひまわり学級 第３学年 算数「大きい数のかけ算のしかたを考えよう」かけ算の筆算(1)

さくら学級　第２学年 国語「お話のさくしゃになろう」

（3）講師を招聘しての学習会

読解力向上学習会

「読解力向上について」　講師　義務教育課　主査・指導主事　冨髙　勇樹　先生

「『読むこと』の授業づくり～オカをめざして，イエでアウ～」

講師　山梨大学大学院総合研究部教育学域教育学系　准教授　茅野　政徳　先生

授業づくり学習会（菱山小との合同）

「対話・話し合いの指導を成功させる教師の言葉がけ・指導のポイント」

講師　全国ネット・菊池道場　道場長　菊池　省三　先生

2　意欲的に学ぶ学習集団づくり

（1）学習規律の確立

・「大和小学習のきまり」の定着

・学習規律に関するアンケートの実施と分析

（2）WEBQU の分析と対策

・年２回 WEBQU 調査の実施

・WEBQU 分析会議よる対応策の全体確認

3　家庭と連携した学習環境づくり

（1）家庭学習習慣化の取組

・自主学習の取組についてのアンケート実施（児童・保護者・教職員）

・自主学習掲示板による自主学習ノートの紹介

・自主学習強化期間〈チャレンジ週間〉の実施（学期に１回　年間３回）

・自主学習ビンゴの取組〈学習内容の多様化〉

・家庭学習の必要性などについての家庭への啓発とアンケート結果の還流

・学習の質の向上をめざした「大和小モデル」の確立

Ⅱ　成果と課題

1　授業づくりに関わって

研究授業，一人一実践では，対話的な学びをより深めるため，児童の考えを可視化する手立てとしてICT端末を取り入れた授業実践を行った。２年生算数の研究授業では，Jamboardを使ったペア学習を取り入れ，自分の考えを持ち，絵図や文で説明し，伝え合うことで学び合う授業を行った。また，小林みずほ先生に研究授業の指導助言をしていただき，ICT端末で思考過程を可視化することのメリットや，対話を対話的学習にするための手立てについて指導していただいた。一人一実践では，１学期に提案授業を実施し，授業づくりのポイントを全体で確認した後，授業を実施した。授業では，ペアやグループ等を取り入れた学習形態の工夫，発達段階に応じたICT端末の活用，話し合いの手順の提示等，様々な手立ての工夫が見られた。全員が授業を公開し，お互いの授業を見合うことで，ICT教材の活用法やそれぞれの児童の実態にあった指導の工夫や手立てについて学び合うことができた。また，授業後には，参観者の意見や感想を授業観察シートにまとめ，互いに成果や課題を共有した。紙面で確認をすることにより，授業者や参観者以外の職員にも，授業内容や児童の様子を知らせることができた。

2　学習集団づくりに関わって

WEBQU検査を２回行い，結果の分析会議を全職員で行ったことで，全学年の実態を知り，問題点に対して様々な視点から対応策を考えることができた。小規模校のよさを活かし，全職員が共通理解したうえで，指導にあたることができた。少人数の学級が多く，WEBQUとなっても担任によるプロット・アセスメントシートの作成が必要であるため，分析会議の時間の確保が課題である。

「大和小学習のきまり」については，定期的に自己評価をさせることで，児童に改善を意識させることができた。

3　学習環境づくりに関わって

自主学習に関わる取組の継続により，家庭での学習習慣が定着してきている。自主学習チャレンジ週間時に，多くの職員でノートを見たり，ビンゴの取組をしたりすることで，学習内容の幅が広がった。自主学習掲示板設置により，他学年のものを参考にしたり，互いの感想を言い合ったりして，児童の関心や意欲を高めることができた。自主学習スタンバイの記入についても定着している。ノートの書式の学年差や個人差が大きいので，来年度は「大和小モデル」に沿って，全校児童の学習スキルが向上するようにしていきたい。

Ⅲ　成果物

研究授業，実践授業の授業案（ワークシート，ICT教材等も含む）
授業観察シート（一人一実践共有まとめシート）
WEBQUの分析結果，対応策シート
自主学習ビンゴ(R4版)，自主学習「大和小モデル」

（研究主任　山元　和香子）

学　校　研　究

中　学　校

山梨南中学校　・・・・・・・・　４７

山梨北中学校　・・・・・・・・　４９

笛川中学校　・・・・・・・・　５１

塩山中学校　・・・・・・・・　５３

塩山北中学校　・・・・・・・・　５５

松里中学校　・・・・・・・・　５７

勝沼中学校　・・・・・・・・　５９

山　梨　南　中　学　校

「　確かな学力の定着・向上を目指した授業改善の工夫　」
～　学びの質的向上とICTを利活用した授業を通して　～

Ⅰ　研究の内容

1　本年度の研究の重点

これまで「確かな学力の定着と向上」を基本テーマとし，特に学力向上のために「やまなしスタンダード」をベースとした構造的な授業づくりと家庭学習の定着について研究を行い，多くの成果を挙げてきた。

そして今年度は，前年度までの研究を継続し，更なる定着と質的向上を目指すと同時に，GIGAスクール構想に伴うICT活用を積極的に実践することで，学習活動の一層の充実と主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に繋げていく。

2　研究部会

（１）教科別研究会

・「やまなしスタンダード」を取り入れた授業づくり・授業改善
・ICTの利活用，一人一台端末をどのように使っていくか情報交換
・新しい教科書（学習内容含む）の進め方
・３観点に伴う評価のつけ方

（２）学年別研究会

・Q-U検査の分析→個への対応，集団づくり
・学びの質的向上を目指した学級・学年集団づくり
・GUノート（自主学習ノート）の取り組みから，授業改善の工夫につなげる
・キャリアパスポートの実践

（３）本校の授業研究

本年度は，ＧＩＧＡスクール構想に伴い，ＩＣＴ端末をどのように使っていくかを中心に，全教職員が授業の中で，端末を使用できるように研究を進めていく事を考えた。

ア　一人一台端末をどのように授業の中で使っていくか。実践事例や，ソフトウェアの使い方について研修を進める。

イ　実際に端末を使った授業を仕組んでもらい，どのような授業が効果的なの意識して授業を行った。

◇国語他　　３年２組　　令和４年７月６日（水）実施

googleクロームブックを活用してどのようなことができるのか共有する。

授業者　糠信恵理香　教諭

ア　実践紹介

フォームのアンケートを利用して意見文の根拠となるデータを集める，ジャムボードで班ごとのシートに付箋を貼りつけ共有した。等プレゼンテーションソフトやドキュメント，スプレットシートを使った授業の様子を紹介した。

◇道徳　　１年２組　　令和４年１１月９日（水）実施

教材名　「銀色のシャープペンシル」

（出典：「新しい道徳Ｉ」東京書籍）

授業者　宮本　武彦　教諭

イ　端末を授業の中で使用するということで，Googleスプレッドシートの共同編集を用いて，寡黙な生徒や，発言することが苦手な生徒の意見を拾うことができ，より多くの生徒の意見を吸収し，それを発表の中で共有することができると考え，そのためにどのような授業を行っていくのかを考えた。

（４）学習会

・端末で使用できるソフトウェア紹介と事例の学習会　８月２６日（金）

・授業におけるICT端末の利活用に関する学習会　９月２８日（水）実施

Ⅱ　成果と課題

１成果

・職員が端末を活用した授業を行っていくことを考え，端末で使えるソフトウェアの学習や実践事例を紹介してもらう研修を行うことができた。そのこともあり，学園祭の実行委員会や集会等，授業以外の場での端末使用は広がっている。特に集会はＭＥＥＴを利用した中継を毎回行っている。

・授業の中では，総合的な学習の時間の中で，スライドを使用し，調べ学習のまとめを行ったり，スプレットシートを使用し，意見の共有を行ったりした。

・数学科や社会科でデジタル教科書を利用した授業を展開し，大型モニターで図や表を効果的に使用している。

・クラスGUノートを通して，ノートの使い方やまとめ方を共有し，振り返りや反省を書く等の工夫が見られ，個人GUノートの質を向上させることができた。

２課題

・ＩＣＴの活用に関しては，理論的な背景を含めての実践研究が必要になってきたと考えられる。

・クラスも個人もGUノートの質は高まっているが，家庭学習する教科に偏りがあることや取り組むページ数をどう増やしていくのかが課題である。

Ⅲ　成果物

・学習指導案（３年国語・１年道徳）

（研究主任　窪田　勇治）

山　梨　北　中　学　校

Ⅰ　研究主題

自ら学ぶ力をつける学習指導に関する研究

～個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けたICT活用の在り方～

Ⅱ　主題設定の理由

2021年に全面実施された中学校学習指導要領（平成29年告示）において，生徒に身につけさせたい資質・能力が「知識及び技能」「思考力，判断力，表現力等」「学びに向かう力，人間性等」の3つの柱に再整理された。それぞれの資質・能力の育成のためには，さらなる学びの質の向上に向けて「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」を推進していく必要があることが述べられている（文部科学省2018)。

本校では，平成29年度より3年間,「自ら学ぶ力をつける学習指導に関する研究～主体的・対話的で深い学びによる授業改善～」と研究主題を設定し，継続研究に取り組んだ。その中で，①「思考・判断・表現力を高める取組（山北スタイルづくり)」　②「基礎学力定着の取組」　③「教材教具の開発・工夫とICT活用」といった3つの観点から主題に迫るべく研究を進めてきた。

文部科学省から「Society 5.0時代を生きる全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びを実現するためには，学校現場におけるICTの積極的な活用が不可欠」であることが示され,「GIGAスクール構想」において1人1台端末が整備され，積極的な活用が求められている。また本市においても，令和3年度（2021年）にタブレットが1人に1台貸与されている。

本校は，これまでに蓄積された教育実践を通して,「話型の研究」「課題提示の工夫」「まとめと振り返りでの工夫」に取り組み，確実に成果を上げてきた。また，令和元年度から3年度には山梨県道徳教育推進事業の指定を受け「特別の教科　道徳」の研究に取り組み，「発問の工夫」「振り返りシートを活用した評価文」について議論を重ねた。そして，授業の中で生徒一人ひとりの考えが可視化されることにより，他者の考えから多くの気付きを得て，自己の考えを深めることができるようにICTを活用した授業づくりが活発になった。様々な工夫を取り入れ，3年間に及ぶ研究を継続して行う中で，生徒たちが「答えが一つではない道徳的な課題」に向き合い，自己の在り方を問いなおす指導方法を検討することができた。

そこでAI（人工知能）が発展し，生徒一人ひとりを取り巻く環境も価値観も多様化している現状を鑑み，多様な子供たちに個別最適化の学びの環境を整えていく必要性があると考える。このような時代背景とともに，本校においてもICT活用のニーズが高まったことにより，ICTを効果的に取り入れた「主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善」を通して資質・能力の育成を目指していきたいと考え，主題を設定した。

Ⅲ　研究内容

1　自ら学ぶ力をつける取組（思考力，判断力，表現力等を高める取組）

○授業過程の工夫（「山北スタイル」）

【教師】		【生徒】
①課題提示の工夫	・生活等と結びつく課題 ・意欲につながる課題	①課題の把握（的確な）
↓		↓　※見通し
②自力解決支援	・生徒自ら思考・判断・表現するための支援	②自力解決(記述ノート等)
↓		↓　※活用力
③相互解決・展開	・ペア，グループ解決，全体解決	③相互解決(学び合い)
↓		↓　※協働的学習
④評価・まとめ	・評価(生徒・教師) ・まとめ(定着と繋がり)	④まとめ(学習整理) ※振り返り

ア　日々の授業実践への導入

イ　一人一実践

ウ　研究授業

2　基礎学力定着の取組

（1）　学力を向上させるための学習ノートの活用

※３学年とも土台だけは統一する。

・部活のある日に，放課後残さない。

・帰りの会での５分間の準備を行う。

・１日のページ数は，学年やその子の状況によって決める。

（2）　朝読書→読書活動の定着

③　山北サポートタイム

（3）教材教具の開発・工夫と１人１台タブレットの活用

・主体的・対話的で深い学びに向けたICT活用の在り方に関わる事例研究

・各教科の実践事例の共有化（１人１提案）

・「特別の教科　道徳」は今後も道徳推進教師を中心に研究を深めていく

Ⅳ　成果と課題

○今年度はＩＣＴ活用の実践をどの教科でも行い、活用事例など出し合うことができとてもよかった。

○教科の授業や学活・総合等でタブレットを少しでも有効に活用しようとしてきたことによって、少しずつ主題・副主題に近づくことができていると思われる。

▲ICTの活用については、研究授業や日常の授業で実践されていたが、研究として「個別最適な学び」の部分に対してのアプローチは弱かったと思う。

（研究主任　酒井幸政）

山梨市立笛川中学校

研究主題

主体的に学習に取り組む生徒の育成
～対話的な学びを通して、自分の考えを広げ深めるための授業改善～

Ⅰ　研究の内容

1　言語活動の充実
（1）主体的・対話的で深い学びを意識した継続的な授業実践（一人一実践授業）
（2）日常的な取り組み（生活記録ノート指導，学活，各教科指導　等）
（3）効果的に新聞を活用した実践（NIE）
2　深い学びへとつながる工夫
（1）「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善と学習評価
（2）ICT を活用した学習活動の充実
3　望ましい学習集団づくり
（1）保護者や地域・小学校との連携（家庭学習他）
　ア「自主学習ノート」の有効活用
　イ　家庭学習について，保護者にも協力を呼びかける。
　ウ　学習規律を確認して徹底する。
（2）Ｑ－Ｕの分析と結果を活用した取り組み

Ⅱ　成果と課題

1　自主学習ノートの有効活用について

笛川ノート（自主学習＆生活記録ノート）を活用して家庭学習の充実を図るために本校では３つのことに重点的に取り組んできた。

（1）家庭学習スタンバイの時間の徹底
家庭学習スタンバイの時間は，帰りの会前の５分間でその日の授業を振り返り，授業内容を思い出してポイントを書く時間になっている。その日の授業の振り返りを家庭学習につなげることが取り組みのねらいとなっている。生徒の様子を見ていると，学習スタンバイの取り組みに個人差が見て取れる。中には，授業の振り返りの方法がわからない生徒もいる。生徒が“授業の内容と要点”を端的にまとめるための指導が必要であると感じた。また，授業の振り返りと家庭学習につながりがない生徒も散見した。自己の学びを振り返り，必要な家庭学習を行い，深い学びを実現していくサイクルを確立していきたい。そのためには，授業の振り返りに関する指導，効果的な家庭学習方法の共有が必要である。１～３年生縦割りグループでの「笛川ノート交流会」の取り組みを更に充実させ，目標に近づけていきたい。学習スタンバイ５分間で，どのような学びを実現するのか。全職員で共通理解を図っていきたい。

（2）生徒同士の笛川ノート交流会・職員によるノートチェック
１学期と２学期の期末テスト前の５日間に，家庭学習強化週間を設定した。その期間の中で，１学期には各教科の先生による家庭学習の取り組みチェックを，２学期には生徒同士による笛川ノート交流会を実施した。笛川ノートは普段，担任の先生や学年の先生が目を通し，コメントを書いている。各教科の先生方にアドバイスをもらうことで，家庭学習をより効果的に行うことができると考えた。取り組みの課題としては，こうした指導をどのように生徒の継続的な家庭学習につなげていくかであると考

える。また，今回は先生方に授業の空き時間を使い，ノートチェックをしていただいた。限られた時間の中で，効果的な取り組みができるよう，実施方法も検討していく必要がある。

笛川ノート交流会は，縦割り班ごとに教室に集まって行った。７～８人のグループで笛川ノートを見せ合い，意見を出し合った。各グループとも３年生が中心となり，円滑な意見交換ができた。各ノートの取り組みに関して，生徒はコメントを書いたカードを交換し，自分のコメントシートに貼り付けて記録した。最後に自分自身の取り組みを振り返り，これから継続したいことや改善したいところを，シートに記入した。今回の取り組みは，１年生や家庭学習の方法にバリエーションがない生徒に対して，自主学習方法のヒントになるものであった。また，生徒は各自の笛川ノート画像をGIGA端末に保存し，ドライブを使って共有した。これにより，生徒は一人ひとりのノートを細かくじっくりと見ることができた。一人のノートをグループの全員が同時に見てアドバイスできることで議論の活性化につなげることができたと考える。

教職員による家庭学習の指導と，生徒同士による学び合いの場を効果的に設定し，家庭学習の習慣化と内容の充実につなげていきたい。

２　「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善

２学期に，数学科の研究授業を行った。「対話を通して考えを深める」授業づくりを目指して，授業に取り組んだ。研究会では，ねらいの達成に向けた教師の発問・授業構成や，自分の考えを広げ深める「対話的な学び」について，全職員で協議を行った。対話をする上で大切なことについて学ぶことができ，今後の目指したい生徒像につながる貴重な学習の場になった。

（１）題材の工夫

生徒が対話による学び合いをしやすいように，具体的な現象を考察することを通して関数関係を見いだし，表現し合う活動を仕組んだ。具体的には，生徒が視力検査に使用されるランドルト環と視力の関係に興味を持ち，関数関係を見いだす授業を行った。

（２）ICTの活用

授業の導入で大型モニターにスライドを映し出し，ランドルト環を導入して視力検査についての興味を喚起した。視覚情報によって興味を喚起するだけでなく，本時の目標を示したり，学習の方法を示したり，限られた時間で多くのことを効果的に行うことができた。視覚的な教材の活用は他教科にもつながる課題なので，実践を共有して，深めることができたのは有意義であった。

（３）ワークシートの工夫・授業構成の工夫

比例，反比例のグラフや，実物のランドルト環の印刷をワークシートに組み込んだ。生徒同士の対話での学び合いが深まるような材料を考え，導入できた。また，教師の発問をきっかけに，視力の変化に関係があるものを確認，共有して，生徒の学び合いにうまくつなげる授業構成を考えることができた。生徒の対話を深い学びにつなげていくために必要な支援について，研究授業を通して全職員で考えることができた。学び合いの効果が深まるグループづくり，対話を通した学び合いの進め方，教科に苦手を抱える生徒への支援といった検討課題も確認できた。今後の研究で，さらに検討していきたい。

Ⅲ　成果物

数学科研究授業指導案，一人一実践学習指導案，Q-U分析，

笛川ノート交流会コメントシート　　（研究主任　小野　真和）

塩山中学校

「主体的に学ぶ心豊かな生徒の育成」

～「Ｑ－Ｕ」を活用した集団づくりを基盤とした学力向上への取り組み～

Ⅰ　研究の内容

甲州市では国や県の施策を受けて，地域に根差した教育を進めていくための取り組み（平成２３年１０月に「甲州市『確かな学力』育成プロジェクト委員会」が発足）が今年度も継続して行われている。４月の説明会において，今年度も昨年度までの取り組みを継続して，定着を目指していくことが確認された。取り組みを継続して行うことの大切さを改めて感じる１年間だった。

本校の現状を見てみると，市のプロジェクトの基盤となる「集団づくり」という点において，生徒相互のあいさつや支え合い，学び合い，様々な活動を通して，さわやかで充実した学校生活を送っている様子がうかがえる。Ｑ－Ｕ分析において，「満足度群」の割合が全国平均を上回っていることからも，落ち着いた学校であると客観的に見ることもできる。

しかし，不登校生徒の数を見てみると，長期欠席者の人数がここ数年増加傾向にある。生活習慣の乱れが主な原因となっているが，友人関係の問題が原因となっていることも多い。

また学力面においても，標準学力検査において多くの学年と教科で全国平均点を下回るなど，生徒の学力向上に対する取り組みが喫緊の課題となっている。

以上のことを踏まえ，今年度は「集団づくり」というこれまでの方針を受け継ぎつつ，それを基盤とした学力の向上を目指した研究を進めてきた。

＊研究の柱となる具体的内容と方法

1「学力向上」に関する取り組み

「ＳＵＮ（ステップアップノート：自主学習ノート）」「ＳＵＴ（ステップアップテスト：学年ごとの小テスト）」「一人一実践」「ＧＩＧＡスクール」の取り組み

(1) ＳＵＮとＳＵＴの活用を検討する。
- 授業の中で家庭学習とつながる働きかけの方法の研究を行う。
- 「スタンバイの時間」における課題設定の方法の研究を行う。

(2) 市のプロジェクトと連携した板書計画や指導案作りを行い，授業の構造化を目指す。
- 市のプロジェクトで作成された「Teachers　note」を全員で確認して，学力向上に向けた授業実践を行う。

(3)「一人一実践（ステップアップ授業）」を行い，全員が授業を公開することで各教科の授業力を高める。

2　ＷＥＢＱ－Ｕを活用した集団づくりの取り組み

(1) ＷＥＢＱ－Ｕ調査の分析を行い，生徒の実態を把握する。
- 市のプロジェクトにおける「各校の取り組み内容」を参考にして，各校の実践で効果のあったものを共有しながら実践していく。

(2) ＳＳＴ（ソーシャルスキルトレーニング）やＳＧＥ（構成的グループエンカウンター）を用いた人間関係づくりを進める。

Ⅱ　成果と課題

1　ＷＥＢＱ－Ｕを活用した集団づくりについて

今年度は新たにタブレット端末を使用したＷＥＢＱ－Ｕ調査を，５月２７日（前期）と１０月２１日（後期）の年２回実施することができた。年２回のＷＥＢＱ－Ｕ調査は甲州市のプロジェクトによって，甲州市内の全校で実施されている。昨年までのＱ－Ｕは，結果が返送されるまでに３週間ほどの時間がかかっていたが，ＷＥＢＱ－Ｕの活用により，瞬時にクラスや学年の状況を把握し，対応策を考えることができた。また学年ごとに結果を分析する会議を実施して生徒の情報を学級担任だけではなく，学年全体で共有することができたのは大きな成果といえる。さらに各学年の結果を管理職も含めた全校職員で共有することができた。特に養護教諭との連携によって，問題を抱えている生徒への対応方法等を相互に確認しながら取り組むことができた。前期で「要支援群」に入っていた生徒への対応を学年全体で工夫したことにより，後期は「要支援群」ではなくなった生徒もいた。学級担任だけではなく，職員全体で課題に取り組むことが効果的であることが改めてわかった。

課題としては，後期の学校全体のＱ－Ｕの学級満足群の値が下がってしまったところである。これは年度が進むにつれて学校に適応できない生徒や不登校気味になる生徒が増えてきたことや，人とのコミュニケーションがうまくとれず，人間関係で悩みを抱える生徒が増えたことが要因だと考えられる。クラスや行事などでエンカウンターをさらに取り入れ，「居心地の良い集団づくり」を行っていけるようにしたい。

2「SUN（ステップアップノート）」「SUT（ステップアップテスト）」の取り組み

学力向上を目指して，市のプロジェクトと連携して上記の取り組みを通年で実施することができた。来年度は取り組み内容をさらに検討して，生徒の学習内容に合わせた，より柔軟な取り組みを進めていきたい。取り組み内容が学年ごとに異なることがないように，年度当初の校内研究会で共通理解できるようにしていきたい。

課題としては，現在行っている「ステップアップテスト」という学年ごとの小テストの実施方法が学力向上に資するものになっていないという反省が出ていることである。教職員の学校評価でそのような傾向が強い。「個に応じた学力向上」に向けて実施内容と方法を改善する必要性を感じている。

3　研究のまとめと来年度に向けて

甲州市の「確かな学力育成」プロジェクトを校内研究の基盤とし，それを深化・発展させるべく１年間の研究を進めてきた。Ｑ―Ｕの分析により，普段はそのような素振りが見えない生徒も集団の中で悩みを抱えていることも発見できた。学校全体で分析結果を共有して，支援が必要な生徒に対する支援の方策を考え，それぞれの立場で生徒に接することで，確実に集団づくりや学力の向上を進めていきたい。

本校の学校全体での「基礎学力」を分析してみると，「基礎学力」が定着しているとはいえない現状がある。「学力の向上」については本校の喫緊の課題といえるため，来年度もこの点を最重要課題として研究を深めていく必要性を感じている。

今年度は「ＧＩＧＡスクール」の取り組みの中で，タブレット端末の授業での使用のほか，タブレット端末の持ち帰りも始まり，これまで以上に授業や家庭での活用，その充実に向けた研究が今後も必要になってくると考えている。教員がその有用性を理解し，より生徒に魅力ある授業ができるような研究や学力向上につながるような研究を進めていきたいと考えている。

新型コロナウイルスの感染拡大により，家庭から「リモート」の形式で参加する生徒が増えてきた。「リモート授業」における「思考・発表・学習ツール」としてのタブレット活用の研究を来年度は計画に入れるようにしていきたい。

来年度の研究テーマの根本ともいえる「学力の向上」や「授業改善」を進めるためには，教師が自ら学ぼうとする意識が必要になる。教師の資質向上や「授業改善」を進め，「学力の向上」に資することができるように，学校カリキュラムマネジメントの意識を持って校内研究を進めていきたい。

（研究主任　　廣瀬　剛）

塩山北中学校

「生き生きと学びつづける生徒の育成」
～主体的・対話的で深い学びを意識した学習を通して～

Ⅰ研究の内容

1．主題設定の理由

本校は，大菩薩山嶺の扇状地に広がる農村地帯に位置する小規模学校である。本校の特徴として，地域の方々とのつながりが深いことがあげられる。有価物回収や，強歩大会の協力などを通して生徒たちの活動を地域全体で支えてくださっている。

本校の学校教育目標は「かしこい生徒　おもいやりのある生徒　たくましい生徒」である。「かしこい生徒」「たくましい生徒」を育成するための学習活動を進めていきながら，それぞれの子どもたちに沿った学びを考えていく必要がある。また「おもいやりのある生徒」を育てていくには，協働的な学びが必要不可欠であると考える。

本校は，平成３０年度から３年間，県教育委員会から，「主体的・対話的で深い学び推進事業」の推進校の指定を受けた。これまでの研究の成果を生かしつつ，主体的・対話的で深い学びを実現する授業の創造に向けた研究を進めていき，新学習指導要領の円滑な移行と適切な教育課程の編成を図り，確かな学力の向上が実現できるよう研究を行ってきた。

文科省より「令和の日本型学校教育」の姿が示された。これまで研究を進めてきた「主体的・対話的で深い学び」をさらに深化させ，個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させるような研究を行っていく必要がある。以上のような理由で，研究主題を設定した。

2．研究の主な具体的取組内容

（1）基礎学習

①研究についての基礎学習（確認）

○「令和の日本型学校教育」について

②研究のための環境づくりとしての研究

○Q－Uアンケートを活用し，K１３法を取り入れた支援法の研究と実践

○塩北ライフの実践

○スタンバイノートの有効的な活用

（2）授業実践に向けた研究

①「個別最適な学びと，協働的な学びの実現」をめざすための工夫についての研究

②「個別最適な学びと，協働的な学びの実現」をめざすための研究

③カリキュラムマネジメントの充実に向けた取り組みの推進

④甲州市確かな学力育成プロジェクトとの連携

研究の成果と課題

1．成果

今年度は，総合教育センター情報教育部の研究協力校として，共同研究を行いながら，特に「指導と評価の一体化」「授業におけるＩＣＴの活用」「AI ドリルの活用」「カリキュラムマネジメントを意識した年間指導計画」を中心に研究を行った。

「指導と評価の一体化」については，評価をするタイミングや効果的な評価の方法について，事例をあげたり授業公開を行いながら研究を深めることができた。授業研究においては，英語の授業を通して，「主体的・対話的で深い学び」を実現するため評価のタイミング，また，ICT の活用について研究，県拡大校内研を行い，教育センター研究発表会で事例発表をすることができた。

さらに，一人一台端末における効果的なＩＣＴの活用についても考え，宿題や小テストなどをタブレットで行うほか，オンライン授業も日常的に行うことができるようになり，来年度以降につなげる研究ができた。

「カリキュラムマネジメントを意識した年間指導計画」については，情報教育部の先生に講義をしていただき，教育目標や本校に必要とするものは何かを考えながら，指導の中心となるものを考え，本年度の振り返りとそれを来年度につなげていくことを確認することができた。

2．課題

「令和の日本型学校教育」において，ICT は基盤的ツールとして学校教育に不可欠なものとされている。本年度総合教育センター情報研究部の研究協力校として研究を行っていく中で，教師側の ICT スキルの不足や，各教科における ICT の活用についてより深く研究する必要があると感じた。

ICT とアナログの両方を使いながら，様々な生徒へのきめ細やかな支援や，個々の才能を伸ばす高度な学びの機会の提供など，生徒一人一人に寄り添った指導が行えるように来年度以降さらに研究を深めていきたい。

（研究主任　水上　陽介）

「自ら求め，学ぶ生徒の育成」

―対話を通した授業づくり・構造化の追求―

Ⅰ　主題設定の理由

新学習指導要領では，次の６点

①「何ができるようになるか」（育成を目指す資質・能力）
②「何を学ぶか」（教科等を学ぶ意義と，教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成）
③「どのように学ぶか」（各教科等の指導計画の作成と実施，学習・指導の改善・充実）
④「子供一人ひとりの発達をどのように支援するか」（子どもの発達を踏まえた指導）
⑤「何が身に付いたか」（学習評価の充実）
⑥「実施するために何が必要か」（学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策）

を柱にカリキュラム・マネジメントの実現を目指すことが求められると示している。

１時間の授業において，生徒が「何を学ぶか」という見通しを持ち，【めあて】を理解した上で授業に参加し，授業の終わりに「何が身についたか」が明確となるような【自己評価】や【振り返り】をすることが重要であると考える。このことを実現させるためには，生徒の「主体的に学ぶ姿勢」を前提とし，生徒と教師がともに楽しいと思える授業を展開することが基本となる。また，協働を通して互いの考えを交流させることで「分かった」や「できるようになった」が増え，自信へとつながっていく。【甲州市 teachers Note より】

ICT の活用についても，ICT 端末を使うことを目的にせず，指導目標を達成させるためのツールとして効果的な活用の方法を確立しなければならない。積極的に ICT 端末を活用することによって，特別な支援を必要とする生徒など，多様な子供たちを誰一人取り残すことのない個別最適化学習を実現し，それをさらに仲間との協働的な学びへと深化させることが重要である。それが学習に向かう力となり，自ら求め，学ぶ生徒へと成長していくと考えられる。

以上のことを基に，研究主題を設定した。

Ⅱ　研究の具体的な内容と方法

１　甲州市「確かな学力」育成プロジェクトとタイアップした教育研究

（１）家庭学習の充実

自主学習ノートの取り組みを充実させ，全校統一で，授業の振り返りを定着させた。また，個の学習状況に合わせてワークや AI ドリルに取り組ませることができた。

（２）WEB-QU の実施と結果分析

学級・集団づくりの質の向上のため，WEB-QU を実施し，学年ブロックに分かれ，結果分析を行い，全校で各学級の状況を把握し，学級集団の向上を図った。

（３）授業の構造化への追求

「めあて」を生徒に示すことで，生徒に身につけさせたい力を明確にさせた。また，ICT 端末を用いて，学び合う授業の構造化をさらに深めた。

2　本校独自の教育研究

（1）ICT端末の効果的な活用

授業の目的を達成するための学習ツールとしてICT端末の効果的な活用に取り組んだ。また，活用スキルを向上させ，文房具のように活用できることを目指した。個別最適な学びの実現と確かな学力の向上を図るために，Google for EducationやAIドリルの活用法を検証した。

（2）お互いの授業を見合う

ICTを活用した一人一実践を行った。日々の授業実践の中で，ICT端末を活用する授業のときにアナウンスしていただき，時間が合う先生方で授業を見合うような取り組みを行った。

（3）学びの基盤づくり

学びの集会を実施し，学ぶことの面白さや大切さを実感させるとともに，授業規律の継続指導を行い，学びの基盤である「学びに向う力・人間性」の向上等を目指した。

Ⅲ　成果と課題

1　成果

甲州市確かな学力育成プロジェクトで行われている講演会での学習した内容を教育活動にとり入れたり，WEB-QUを学年ブロックで行ったりすることでチーム松中として様々な教育課題に取り組むことができた。特に，家庭学習を充実させるための方策の議論を行い，発達段階や生徒の実態に合わせた指導を行うことができた。

GIGAスクール構想の実現に向けたICT端末の効果的な活用方法の基盤となる，教職員のスキルアップ研修を実施した。生徒が効果的にICT端末を活用するためには，教職員の意思統一とルール及び実戦経験が必要であると考えた。そのため，実際に校内研の場面で共有機能や配布機能等を利用することで，端末の利便性や授業での活用の可能性を示すようにした。また，ICT端末を利用した一人一実践を行うことで，他教科での活用方法を参考にし，担当教科等で活用ができるようになった。さらに，生徒にも「学習に使うための端末」ということを明確にし，最低限のルールを示すことで，適切なICT端末の活用がなされるようになった。

2　課題

小規模校だからこそ，人間関係の固定化が起きてしまっている面がある。そのため，WEB-QUをさらに活用し，学級集団のさらなる向上，すべての生徒にとって居心地の良い学級集団を目指していく。授業においても，ICT端末をツールとして活用することで，個別最適な学び，協働的な学びにつなげていく。そのためにも，ICT活用・情報モラルスキルの向上を学校全体の取り組みとして行っていく。

Ⅳ　成果物

1　一人一実践
2　生徒・教職員用ICT端末利用の冊子
3　松里中ICTプラットフォーム
4　自主学習ノートの取り組み方冊子

（研究主任　雨宮友久）

勝沼中学校

「確かな学力を育む学習指導の在り方」

～個別最適と協働的な学びを実現させるICTの効果的な活用の探究を通して～

Ⅰ　主題設定の理由

勝沼中学校の学校経営における基本方針は，甲州市で進める「確かな学力育成プロジェクト」の３つの視点である「授業づくり，授業改善」「学級づくり，集団づくり」「保護者，地域住民等との連携」の中にすべて含まれている。ゆえに，甲州市のプロジェクトをもとに，確かな学力を育成する集団づくり，授業づくりを推進し，併せて豊かな心を育む取り組みを実践することで，基本方針の実現へと向かっていくと考えられる。確かな学力の基盤となる主体的・対話的で深い学びの実現には，質の高い授業を教師が行うことで学力を育てることと，学ぶ側の生徒の学級力を育てることが不可欠である。しかし，生徒を取り巻く社会も大きく様変わりし，貧困をはじめとするさまざまな困難を抱えている家庭や生徒も多く，特別な支援を必要とする生徒も多く存在する。QU 分析，つなぐシート等を活用し，ともに授業を創る（学ぶ）側の生徒の土壌づくりに生かしていくことが大切である。これは基礎ができていないところに，いくら家を建てようとしても崩れてしまうためである。校歌の歌詞の中にある「学舎は常に愉しく」という言葉は，勝沼中のキーワードであり，生徒が学ぶことが愉しくなるように教師集団がひとつのチームとなって授業づくりと学級づくりに主体的に挑戦し励んでいくことを表している。

さらに，新学習指導要領において示された資質・能力の育成を確実にすすめることが重要である。「深い学びの実現に向けたICT活用推進事業」の指定校２年目として，昨年度の研究を引き継ぎ，深い学びのための「ツール」となるICTを最大限活用しながら，多様な子どもたちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と，子どもたちの多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」の一体的な充実を図っていきたい。日常的な職員間での学び合い，講師を招聘してのICT活用に関する校内研修の実施等の取り組みを行い，教師のICT活用の向上・指導力向上を図っていきたい。

Ⅱ　研究の具体的内容と方法

（１）授業づくり，授業改善に関わって

ア　ICTの効果的な活用方法の探究

イ　ユニバーサルデザインを意識した学習環境づくり（掲示物やチョークの色等）

ウ　単元テストや「朝学習」（定期テスト前１週間），「学舎タイム」の設定

エ　ＣＲＴ検査や全国学力学習状況調査，県学力把握調査の分析及び指導の改善

オ　授業の構造化（めあて（学習課題），まとめ，見通し，振り返り等の提示）

カ　読書活動の充実（朝読書の実施）

キ　甲州市「ティーチャーズノート」の活用

ク　情報活用能力の育成に関する単元の洗い出し

（２）学級づくり，集団づくりに関わって

ア　つなぐシートを活用し，授業規律の確立（時を守り，場を清め，礼をただす）

イ　「hyper－QU」の実施と K-13 法での分析及び活用

ウ　甲州市「ティーチャーズノート」の活用

エ　平和教育の実施（事前の学習会とわだつみ平和文庫の見学）

オ　キャリアパスポート（づくり）の利活用

【研究授業の実施】上記の（１）と（２）をふまえ，研究授業を行った。

2 学年	英語科	単元名 Unit4　Tour in New York　City	広瀬　竜太	教諭
1 学年	理　科	単元名 3 章「力のはたらき」	廣瀬　直樹	教諭
2 学年	道徳科	教材名「本当の私」	林　　秀亮	教諭

（３）家庭学習の習慣化に関わって

ア　教科毎の定期的な家庭学習の課題設定と確認

イ　自主学習の取り組み　AI ドリル（ラインズ，MEXCBT）

ウ　基礎・基本の定着を目指す「学舎タイム」の実施

エ　甲州市「学習の手引き」「家庭教育・子育てＱ＆Ａ」の活用

Ⅲ　成果と課題

「授業づくり・授業改善」「学級づくり・集団づくり」「家庭学習の習慣化」の３つの柱を立て，具体的な取り組みを行った。

授業づくりにおいては， ICT の効果的な活用を推進している。本校では，教師のしかけによる３つの機能による①学習者の学びを刺激する「刺激機能」②学習者の学びをガイドする「方向づけ機能」③学びに必要な情報を可視化する「可視化機能」である。４月より，それぞれの教科や学活，行事などで工夫を凝らした実践が日々行われ，その成果と課題を積み重ねる中で，デジタルとアナログの最適化を模索してきた。年間指導計画を基に，情報活用能力の育成に関連する単元や学習内容を洗い出し，教科横断的に情報活用能力が育成できるよう活用単元計画をつくり，授業で役立てることができた。また，CRT 検査や全国学力学習状況調査，県学力把握調査の分析を行い，学校全体で課題を見つける中で授業改善に取り組んだ。

学級づくりにおいては，授業規律の定着を目指し座席表がついた授業評価シートを活用し，毎時間，授業規律の向上を図ることができた。これを生徒会の自主的な活動として位置づけるなど，活用の仕方に工夫を凝らし取り組みの幅が広がっている。また，「hyper－QU アンケート」を実施し，K-13 法で学年毎に分析を行い，職員全体で共通理解を図りながら改善策を考えることで「チーム」として学級・集団づくりに取り組んだ。

家庭学習の習慣化においては，教師が授業の終わりにその時間の振り返りができる問題を数問出題し，基礎学力の定着を図った。さらに，もっと学習したい生徒用にノートを配布し，自分の計画で学習が進められる「自習学習ノート」の取り組みも行った。

（研究主任　奥山万寿美）

教育協議会研究

○2022年度東山梨教育協議会研究の概要 ・・・・・・・・６１

【教育研究部会研究】

国　　語　小学校・・・・・・・・６５
　　中学校・・・・・・・・６７
外国語　　・・・・・・・・６９
社　　会　　・・・・・・・・７１
算数数学　算　数・・・・・・・・７３
　　数　学・・・・・・・・７５
理　　科　　・・・・・・・・７７
音　　楽　　・・・・・・・・７９
図工・美術　　・・・・・・・・８１
技術科　　・・・・・・・・８３
家庭科　　・・・・・・・・８５
保健体育　小学校・・・・・・・・８７
保健体育　中学校・・・・・・・・８９
保健教育　　・・・・・・・　９１
生活科　　・・・・・・・・・・・９３
自治的諸活動と生活指導・・・・・９５
特別支援教育・・・・・・・・・・・９７
福祉教育　　・・・・・・・・・・・９９
食教育　　・・・・・・・・・・１０１
平和・人権教育国際連帯・・・・１０５３
環境教育　　・・・・・・・・・・１０５
情報化社会と教育・文化活動・・１０７
進路教育　　・・・・・・・・・・１０９
保護者・地域住民との提携・・・１１１
教育条件整備・・・・・・・・・・１１３
カリキュラムづくりと総合学習・１１５
教育評価　　・・・・・・・・・・１１７

２０２２年度　東山梨教育協議会研究の概要

研究推進委員長　広瀬　竜太

Ⅰ　はじめに

東山梨教育協議会は，東山梨地域全体の教育振興を願って，1964 年（昭和 39 年）に校長会・教頭会・教連の三者が，県教委，各地教委の協力により設立された。これまでの活動の中で，私たちは「人間性豊かな子どもの育成とその学習を保障する教育活動の探究」を目標に，今日的な課題の解決に向けてとりくんできた。また，管理職・教諭・専門職員が協働して組織研究を進め，東山梨地域の学校教育の向上，教職員個人の資質の向上，教職員相互の強固なネットワークの構築を図り今に至っている。

一方で，子どもたちや学校教育をとりまく状況をみると，多くの課題が山積している。一昨年度，学校の一斉臨時休校をきっかけに「GIGA スクール構想」が加速され，小中学校においては一人一台端末がほぼすべての学校で整備された。しかし，学校現場では環境整備が不十分なままで「端末を使うこと」が全面に押し出されている現状があった。さらに，教材研究や端末の管理，教職員の研修時間の確保など，同時に解決すべき課題が山積し，たいへん大きな負担となっている。また，文科省の調査によると，2020 年度の児童虐待は 19 年度を上回り，全国で 20 万件を超えて過去最多となった。最も多かったのは，暴言やいわゆる「面前 DV」などで，12 万件を超えている。また，21 年度のいじめ認知件数も小中学校の不登校も過去最多となっている。さらに，子どもの貧困については７人に１人が相対的貧困状況におかれたままである。新型コロナウィルス感染症の影響により，保護者の雇用や所得が不安定になるなど，子どもの貧困状況は厳しさを増している。また，表面化しにくい「ヤングケアラー」の問題についても，その対策が課題となっている。家庭の経済格差が子どもたちの学力格差につながっていることが様々な調査から明らかになり，教育費の負担軽減をさらに図っていくことが求められる。私たちは，家庭環境や住んでいる地域に左右されず，学校に通う子どもたちの学力が平等に保障されるよう，日々研鑽を重ね指導に当たらなければならない。

本協議会では，一昨年度より新しい形の研究体制の構築，発展的再編を行い，課題改善へと歩みをすすめている。しかしながら，新型コロナウイルスの影響で検証できていない部分もある。ウィズコロナ・アフターコロナの教育研究活動をどのようにすすめていくのか，研究を推しすすめていく中で，教育活動は時代と共に変化していくことが必要だが，ただ時代の変遷に流されるのではなく，我々は，教育の不易と流行をしっかりと捉えた教育研究を行っていかなければならないと考える。子どもたちを中心に据え，学校・家庭・地域に根ざした「心豊かなふれあいのある教育」，「誰一人取り残さない」という SDGs の理念を踏まえたインクルーシブな学校づくり，組織研究の体制を東山梨の教職員が一丸となってすすめていきたい。

Ⅱ　研究の推進について

１　研究の目標

「人間性豊かな子どもの育成とその学習を保障する教育活動の探究」

２　研究推進の基本的方針

(1) １９６４年発足より半世紀以上が経過した歴史的重みや意義を重視し，東山梨の抱える今日的な教育課題解決のための研究を推進する。

(2) 教育課程（カリキュラム）の自主創造的な編成にとりくむ。

(3) 各学校の校内研究と教協研究との有機的結び付きとその充実を図る。

(4) 保護者・地域住民との連携を強化する。

(5) 組織研究の意義を理解し充実発展させるために，積極的な参加意識の高揚と組織的参加体

制の確立を図る。
(6)平和・人権・環境教育を積極的に推進し，生命の尊さや平和の大切さの意識高揚を図る。
(7)働き方改革の視点から行った教協改革をすすめ，新たな教協体制の確立を図る。
(8)ウィズコロナ・アフターコロナの視点をとり入れた教協体制の構築・推進にとりくむ。

3　研究の組織づくり

研究の基底は校内研究にあるとの認識に立ち，課題の本質に迫り，解決の方法・内容を考えたり，専門的力量を高めたりする教育研究部会と，同じ地域に勤めるものが課題を共有し，連携をはかりながらその解決策を探るブロック交流研究会，さらに特別委員会を設け教協研究の推進を図った。以下，具体的に掲げる。

（1）教育研究部会

共通テーマ：「人間性豊かな子どもの育成と教科教育課程の自主創造的な編成をめざし，教育の本質を実践的に追究する。」

	部　会　名		部 長	学校名	テーマ
1	国語科教育	小学校	向山紀子	奥野田小	思考力・判断力・表現力を育む国語科の指導 ～「指導と評価の一体化」を目指して～
		中学校	糠信恵理香	山梨南中	主体的・対話的で深い学び実現する国語科の指導 ～言語活動の充実を通して～
2	外国語教育		山本茂樹	山梨南中	主体的に英語学習に取り組む児童･生徒の育成 ～表現につなげる活動の工夫～
3	社会科教育	小学校	橋本尚一	日下部小	市民を育てるための「主体的・対話的で深い学びを」 どのように実現するか
		中学校	宮下智英	勝沼中	市民を育てるための「主体的・対話的で深い学びを」 どのように実現するか
4	算数・ 数学科教育	算 数	山宮彩子	岩手小	つくり，いかす算数授業の創造
		数 学	古屋大樹	笛川中	わかる授業の工夫と授業実践 ～基礎学力の定着と考える力の育成～
5	理科教育	小学校	雨宮玲子	後屋敷小	わかる理科授業の創造 楽しく学び 自然を豊かにとらえる理科授業をどのようにすすめるか
		中学校	雨宮友久	松里中	わかる理科授業の創造 ～考える力の育成と教材教具の工夫～
6	音楽科教育		行田玲子	日川小	確かな学び　広がる音楽 知覚･感受をもとにした音楽的思考力･判断力･表現力等の育成
7	美術・図工科教育		三枝清美	日下部小	一人ひとりの力を引き出す題材と授業をどうつくっていくか ～感動と発見ある授業づくり～
8	技術科教育		酒井幸政	山梨北中	未来社会を展望し生活を創る力を育てる 技術家庭科教育
9	家庭科教育		松明舞子	勝沼中	「つながり」を深め，資質・能力を育む 技術家庭科教育
10	保健体育科教育 （小学校）		三森美礼	菱山小	教材の本質をふまえた体育指導のあり方 ～体つくり運動（遊び）を通して～
11	保健体育科教育 （中学校）		小沢隆広	塩山中	生きる力を育てる保健体育学習を目指して ～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善～
12	保健教育		加藤真菜	神金小	自らの健康づくりに意欲的に 取り組む子どもをどう育てるか

13	生活科教育	岩下亜希子	後屋敷小	子どもが生き生きと学ぶ生活科 ～主体的・対話的で深い学びを引き出すための手立てを通して～
14	自治的諸活動と生活指導	飯沼順子	日下部小	一人ひとりを大切にした学級づくり
15	特別支援教育	相川和彦	祝小	自立をふまえて（どの子も共に生き，共に育つ） ～一人ひとりの実態をふまえた支援と指導のあり方～
16	福祉教育	金井京子	菱山小	学校教育における福祉教育のあり方を探る
17	食教育	福嶋沙織	山梨南中	食生活を考える ～子どもたちのより良い食習慣づくり～
18	平和・人権教育と国際連帯	関口哲也	日下部小	平和・人権教育と国際連帯の広がりをめざして
19	環境教育	梶原美奈子	塩山南小	「自然との共生」をめざした「環境教育」のあり方 ～身近な環境や自然に対して主体的にかかわる子どもの育成～
20	情報化社会と教育・文化活動	五十嵐祐太	加納岩小	情報活用能力を高める研究
21	進路教育	水上陽介	塩山北中	一人ひとりにあった生きる力をつけるための進路指導キャリア教育はどうあるべきか ～小・中学校の実践を通して～
22	保護者・地域住民との提携	志村克人	勝沼小	地域とともにある学校づくりをめざして
23	教育条件整備	七海めぐみ	塩山北小	豊かな教育を子どもたちに
24	カリキュラムづくりと総合学習	前島香織	山梨北中	豊かな学びを創造するゆとりある教育課程の編成と実践
25	教育評価	山下陽子	山梨小	「生きる力」を育む評価のあり方

（2）ブロック交流研究部会

共通テーマ:「地域が抱える教育課題を共有し，解決に向けた交流を行い，同一地域の小中連携や小中の系統的な教育のあり方を追究する。」

ブロック名		ブロック長	ブロックテーマ
山梨支会	山梨南ブロック	藤木真里佳（加納岩小）	○ICTの活用と小中連携
	山梨北ブロック	岩下亜希子（後屋敷小）	○小中の連携を深め，山梨北ブロックの児童・生徒の指導に生かす
	笛川ブロック	笠井裕弥（笛川小）	○小中連携を図るために，小学校児童生徒の相互理解 ○９年間を見通した家庭学習への取り組みについての理解
甲州支会	塩山ブロック	池田理恵子（塩山南小）	○新学習指導要領の完全実施を受け，小中の系統性をつかみ授業に生かす
	塩山北ブロック	大島めぐみ（神金小）	○小中の連携をはかり塩山北中学区の子どもたちを育てていこう
	松里ブロック	雨宮友久（松里中）	○同じ地域に学ぶ子どもたちの教育のために，小・中・地域の交流と連携を深めよう
	勝沼ブロック	小林淳子（東雲小）	○甲州市「確かな学力育成プロジェクト」との連携を図りながら，同じ地域に生活する児童・生徒に対する系統的な教育の在り方を考える

（3）　特別委員会

ア　教育環境研究特別委員会（委員長 岡　輝彦　　委員…校長会・教頭会・教連・事務職）

イ　児童生徒連絡協議会（会長 山梨北中学校生徒会会長 深沢健心　顧問教員 椚　加奈）

4　部会運営

本年度は，教育研究部会 25 部会，ブロック交流研究会７部会の成立をみた。教育研究部会は年間８回（新型コロナの影響で参集しての研究会は１回中止），ブロック交流研究会は年間２回設定し研究活動を行った。年間計画等しっかりとした見通しの上にたっての研究活動を更に推進していくことが重要である。

5　研究日と研究集会

毎週水曜日を研究日とし，地区教協研究日以外は校内研究にあてる。厳に校内行事等を入れずに研究時間を確保するようにしたい。春季・秋季・冬季教育研究会は新型コロナウイルスの影響で一同に集まっての開催はできなかった。

6　研究推進地区

山梨支会を研究推進地区とし，山梨北中学校を会場に各種教研活動を行う計画であったが新型コロナウイルスの影響で一会場に集まっての開催はできなかった。

7　教育講演会

新型コロナウイルスの影響で参加者数を半数とした。後日，動画配信による視聴を行った。

Ⅲ　今後の課題

「子どもたちの学び，私たち教職員の学びを止めない」という視点をもち，この３年間新たな教育・教研活動を模索してきた。新型コロナウィルス感染症対策やGIGAスクール構想による新たな業務が付加される中，教職員の多忙化改善の視点に立った新しい形の研究体制のもとで，様々な教育課題解決に向けて，さらに質の高い研究活動をすすめて行く必要がある。このウィズコロナの時代に積み重ねてきた教育実践をいかし，アフターコロナの時代における持続可能な教研活動を構築していきたい。目の前の子どもたちの姿がスタート。東山梨教育の長い歴史の中で，先輩方が積み上げてくださった私たちの組織研究に誇りをもち，一人ひとりがその意義を自覚する中で，東山教育がさらに充実・発展するよう努めていきたい。

〈東山梨教育協議会役員〉

役職名	氏　　名
会　長	中村雅彦（加納岩小）
副会長	廣瀬敦子（大藤小）　金森　淳（塩山北中）
事務局	広瀬竜太（勝沼中）［研究推進委員長・事務局長］ 日野原和貴（加納岩小・教育会館）［事務局次長］
委　員	中村雅彦（加納岩小）　岡村太郎（日下部小）　三枝一哉（日川小） 岡　正人（井尻小）　清水岳人（松里中）
	廣瀬敦子（大藤小）　日原英二（笛川小）　山縣重人（塩山南小） 竹川俊之（八幡小）　山宮将仁（日川小）
	金森　淳（塩山北中）　前田大輔（塩山中）　広瀬竜太（勝沼中） 保坂洋仁（勝沼小）　日野原和貴（加納岩小・教育会館）
会　計	保坂洋仁（勝沼小）
会計監査	大村健一（東雲小）　武井麻子（井尻小）　若月敬二郎（後屋敷小）

国語科教育（小学校）部会

思考力・判断力・表現力を育む国語科の指導
～「指導と評価の一体化」を目指して～

Ⅰ　研究テーマについて

平成29年に告示された新学習指導要領の中では，児童の視点に立ち，育成すべき資質・能力が３つの観点に再整理された。この考えの下，私たちは日々計画，実践，評価という一連の活動を繰り返しながら，児童のよりよい成長を目指した指導を行っている。

中でも「カリキュラム・マネジメント」の充実においては，「教育課程を編成・実施し，学習評価を行い，学習評価を基に教育課程の改善・充実を図るというPDCAサイクルを確立することが重要」とされ「指導と評価の一体化」の重要性が改めて示された。

指導と評価を全く別のものとして考えず，６年間のカリキュラムの中で，すべての資質・能力を育成するマクロな視点，また日々の授業におけるミクロの視点を考える必要性がある。日々児童の成長を見取り，その成果に応じて次の指導に入る私たち教師にとって，このような観点に立ち，授業実践を見直すことに大きな価値があると考える。

平成３１年中央教育審議会報告「児童生徒の学習評価の在り方」に示された基本的な方向性には，評価によって「児童生徒の学習改善につなげること」と述べられており，評価を児童の学習改善へつなげることは重要なことである。その上で学習指導要領「総則」には，学習評価の充実について新たな項目が置かれ，そこには「児童のよい点や進歩の状況を積極的に評価し，学習したことの意義や価値を実感できるようにすること」「学習の過程や成果を評価し，指導の改善や学習意欲の向上を図り，資質・能力の育成に生かすようにすること」と書かれている。児童自らが学習状況を理解し，できるようになったことや分かったことに達成感や満足感を得て，自身のよさや自己肯定感を高めていくこと，さらには学習したことの意義や価値を感じながら，さらに出来るようになったこと，分かるようになるために自らの手で見通しを持って進めること，その支えとなるのが「評価」である。本研究会では，そのような「評価」によって児童，教師も成長していくきっかけとなるよう指導と評価の一体化を目指し研究を進めていきたい。

Ⅱ　研究の内容について

１　研究方法

・授業研究　…児童の実態に即した（発達段階に応じた）授業研究の取り組みを行い，検証する。→教材・話題の発掘

・実践交流　…国語科の学習で思考力・判断力・表現力を育むための指導をどのように行ったか実践を発表し合い，交流する。

２　授業研究

（１）単元名　３年生の物語コーナーをつくろう

（２）教材名「たから島のぼうけん」（光村図書３年下）

甲州市立松里小学校　第３学年　黒瀬　貴広教諭

（３）単元の目標

①様子や行動，気持ちや性格を表す語句を文章の中で使い，語彙を豊かにすることができる。【知（１）オ】

②書く内容の中心を明確に，内容のまとまりで段落をつくったり，段階相互の関係に注意したりして，文章の構成を考えることができる。【思Ｂ（１）イ】

③書こうとしたことが明確になっているかなど，文章に対する感想や意見を伝え合い，自分の文章の良いところを見つけることができる。【思Ｂ（１）オ】

（４）成果と課題

○部員が教材や「書くこと」に関する資料を持ち寄り，授業案や学習内容検討の教材研究の時間を十分に確保し，充実した研究会を行うことができた。

○感染症の予防対策として今年度も，授業の様子を事前にビデオ録画したものを参観しながら研究会を行った。ビデオで授業の様子を視聴し授業者の話やプリントからも子どもたちの様子を十分見取ることができた。

●本時の授業の前半で，児童から出された意見を５Ｗ１Ｈに則して板書にまとめたことが,後半の児童が自分の構成メモを見直す活動への理解や意欲付けとなった。ペアでの活動ではなかったが，自然に互いの構成メモに対して質問し合うグループも見られ，ペア学習を意図的に仕組んでもよかった。また２時間扱いでもよい内容であった。

Ⅲ　成果と課題

○実践発表・共同授業研究を通して充実した研究ができた。部会全体で指導案を検討し，テーマに迫るための手立てを考えることができた。それぞれの先生方が持っている技術や経験から，自由に考えを交流できる部会の雰囲気が，研究の深まりにつながった。さらに国語科におけるＩＣＴ端末の活用についても検証できた。

○「評価」の視点がテーマに入ったことで，単元または本時の目標を達成するために，どのような活動を仕組んでいけばよいのかを考えることができ，指導と評価の一体化についての研究が深められた。

○黒瀬先生の授業では，知識・技能を子どもたちが習得した上で組み立てメモを考えることができていた。思考力・判断力・表現力の育成には，知識・技能の習得が大前提であることに改めて気付かされた。また子どもたちの「自分が書いたメモを見直したい」という気持ちが「書く」ことに対しての意欲付けとなっていた。

●来年度も指導と評価の関係性について検証し，部会内の理解を深め研究を進めていきたい。

（部長　　向山　紀子）

「主体的・対話的で深い学び」を実現する国語科の指導
～言語活動の充実を通して～

Ⅰ　研究の内容

本部会では生徒の実態を踏まえ、上記のようなテーマで研究に取り組んできている。コミュニケーションツールの変化や人間関係の希薄化、情報があふれている現代社会において、自己の学びを調整しながら主体的に学びに向かうこと、また教材や生徒同士、教員との対話を通して学びを習得していく力が、今まで以上に必要となってくる。言語活動の充実を通して国語力をつけるために本研究テーマを設定した。

Ⅱ　成果物　　指導者　大村　彩佳

1　単元名・目指す言語能力

「さまざまな表現技法を理解して使う～表現を吟味しながら三行詩を書く～」

2　教材名　「さまざまな表現技法」（光村図書１）

3　展開

過程	学習内容と学習活動　○主な発問	◆指導上の留意点 ☆評価規準【評価方法】
導入 (10)	1　前時の確認をする。 2　本時のめあてを設定する。 めあて：友達から意見をもらい、より印象深い詩を作ろう	◆読み手に与えたい印象をもとに、表現技法を選んだことを確認させる。 ◆学習の流れを確認する。
展開 (35)	3　三行詩の交流を行い、表現技法が効果的に使えていたかどうかを振り返る。	◆３～４人ずつのグループを作る。 ◆表現技法から受ける印象を聞き、自分の表現したい印象が伝わったかどうか考えさせる。 ◆意見を言いやすくするため、以下の

		ような評価する観点や話型を提示する。
	観点①表現技法で印象が強まっているか。 話型①「～～～という表現から，……が伝わってきてよいと思います。」 観点②表現技法の用法はふさわしいか。 話型②「○○○（表現技法）を使うなら，～～～という使い方がふさわしいと思います。」 観点③似た効果をもつ他の表現技法を使うと，どんな表現になるか。 話型③「詩の中の～～～という部分に，○○○（他の表現技法）を使うと，……という表現になります。」	
	4　交流で出た意見を参考に、三行詩を推敲する。	☆［知識・技能　（1）オ］ 【観察・ワークシート】 ◆他者の意見を全て生かそうとせずに、自分の表現したい印象に近いものを参考にするよう伝える。 ☆［思考・判断・表現　B（1）エ］ 【ワークシート】 ◆早く書き終えた生徒数名に推敲前と推敲後の三行詩を発表させる。
まとめ（5）	5　本時のまとめをし、次時の活動への見通しをもつ。	◆自分の考えの変容を振り返らせる。

Ⅲ　成果と課題

詩歌の読解や表現活動の基礎となる単元において、表現することの楽しさを味わわせることの重要性について確認できた。生徒が体験したことを題材とすることによって、生徒の主体性につながり、教師が話型を準備しておくことで、指導したいことが明確になり、生徒同士の対話を生む手立てとなることを学び合えた。評価や指導法について、年度で区切るのではなく、継続した研究をしていける仕組みを確立したい。

（部長　糠信　恵理香）

外国語教育部会

主体的に英語学習に取り組む児童生徒の育成
～表現につなげる活動の工夫～

Ⅰ　主題設定の理由

本年度は昨年度の「意欲的に」を「主体的に」へと変更し，「主体的に英語学習に取り組む児童・生徒の育成～表現につなげる活動の工夫～」を研究テーマとして，小中連携という視点も踏まえ，これまでと同様に小学校の教員と中学校の教員とで同じテーマのもと，研究を進めている。

新学習指導要領において，「話すこと(やり取り)」と「話すこと(発表)」の２つの領域に細分化されたことも受け，２年前より「書くこと」だけではなく「話すこと」を加えた「表現につなげる活動の工夫」についての研究を進めてきている。新型コロナウィルスの影響で十分な研究ができていなかったこともあり，研究をさらに深めていくためにも「表現につなげる活動の工夫」についての研究を今年度も行っていきたい。

中学校における新学習指導要領への対応として，取り扱う単語数の増加，新しく中学校段階に取り入れられた指導事項などが大きな変更点であるが，最も大きな変更点と考えられるものが学習評価である。本年度は指導案検討や夏期学習会などを通して３観点による新たな評価方法に関する研究を深めていくことを研究の一つの視点としていきたい。

さらにもう一つ具体的な視点として，特に“教科書題材（学習資料）をどのように扱って児童・生徒の主体的な学びを実現していくか”ということについての研究も含めていきたい。教科書は授業の中心となる学習教材であり，新学習指導要領において新たに導入された教科書の題材からどのように児童・生徒の主体性を引き出す授業をしていくのかという「視点」や「考え方」を学習することはどの教師にとっても重要なことである。小中連携の視点から考えると，１つの教科書題材について，小・中それぞれの教員が同時に見合うことも大切であると考える。しかし，小学校では一昨年度より，中学校では昨年度より使用教科書が変更となったことから，学年別の部会を設け，教科書題材をどのように扱うか，共通教材の作成や指導法のシェアに視点を置くこととした。

英語学習においては，小・中学校の連携を軸に,児童・生徒達が「楽しい」と感じ,「わかる」と思う授業を創造することで，学習者がより主体的に取り組むことができる。そのためには,苦手意識を持ちやすい「書くこと」や「話すこと」といった表現の活動を工夫することが大切であると考え，本研究テーマを設定した。

Ⅱ　研究の内容

・研究主題に迫るための指導案作成と授業実践
・３観点による，より適正な評価の在り方についての研究
・教科書題材を活用した,教材作成や指導法の共有
・小学校外国語科，外国語活動についての学習（授業研究会と実践報告）

１．授業実践研究

８月３１日　笛川中学校　　小野　真和先生　「Tour in New York City」
　　指導助言：　　山梨大学　堀田　誠先生
１月２５日　後屋敷小学校　中村　亮太先生　「What do you want to be?」

２．学年別研究部会

部会員がそれぞれ主として指導している学年ごとの部会に所属し，教科書題材の扱いについて共通教材の作成や指導法の共有を行った。

３．小中連携

夏季学習会では，小中連携の視点から，小中の先生方が意見交流する機会を設けた。小中連携とは具体的にどのようなことをするのが必要なのか，それを踏まえて指導の仕方はどのように工夫したらよいのかといった観点を柱として，小中それぞれの教育課程を確認しながら意見交流を行った。

Ⅲ　成果と課題

１．成果

テーマを昨年度の「意欲的」から「主体的」に変更したことを受け，“児童・生徒が「楽しい」「わかる」と思う授業を創造することが「主体性」を引き出す”という仮説に基づき，各学年部会や統一授業研を行うことができた。児童・生徒が自ずとやってみたいと思える表現活動につなげるために，言語活動の目的・場面・状況を教師が十分に吟味して提示し，目的意識を明確に持たせることが重要であることが確認できた。また，小中のお互いの実践発表や，授業指導案を共につくることで小中連携を深めることができた。中学生が作成した文章を小学生に配布して縦のつながりを深める実践も大変有意義であった。研究授業では中学生が小学校で学習した事を生かそうとしている場面も見られ，学習の繋がりを感じた。

２．課題

「表現につなげる工夫」に関わって，生徒一人一人が表現の幅を広げることができる指示や，思考させるための十分な時間を確保することが課題である。さらに個の表現の幅を，クラス全体の知識やアイデアの力を借りながら広げるためにどう教師がコーディネイトしていくかについての研究も深めたい。また，即興による表現の力を高めるために，帯活動などを利用して即興で使えそうな英語表現に繰り返し触れさせたり，テーマに関わってどのような表現を使えるかを考えさせたりし，それを全体でシェアする活動を取り入れたい。そして，今年度議論が深められなかった，３観点による適正な評価や，デジタル教科書・ＩＣＴ端末の効果的な使用法や実践例などの研究を深めたい。今後も本研究会で学年間や学校間，小中連携をさらに深め，地域全体の英語力の向上に繋げたい。

（部長　山本　茂樹）

市民を育てるための「主体的・対話的で深い学び」をどのように実現するか

Ⅰ　主題設定に関わって

1「市民を育てる」について

・現代の課題に迫るSDGsの視点や，平和，人権，民主主義（選挙権拡大），防災教育等に焦点を当て，現在の社会の有り様を認識し，未来の社会の在り方を判断する子どもたちの育成を目指す。

2「主体的・対話的で深い学び」について

・子どもたちが，自分事として主体的に学ぶことができる学習課題や地域素材について研究を深める。
・社会科授業で主体的・対話的で深い学びをどのように実践するか研究を進める。
・問題解決的な単元構成で，単元を通して深い学びを達成する授業づくりの研究を進める。
・未来の社会の在り方を判断する場面をどのように取り入れるか研究を進める。
・歴史を認識する学習の手立てについて研究を進める。

3「市民」としての資質・能力について

・社会の様々な事象や課題を自分事として受け止めて理解すること。
・社会の課題をどう解決したらよいかを考え，よりよい知恵を出すこと。
・よりよい社会づくりのために積極的に行動すること。

これらの基礎を養うことを目指した「主体的・対話的で深い学び」こそが，社会科としての学びである。そのための手立てと有効性を共有することをもってこれからの社会科教育の発展につなげていきたい。

Ⅱ　部会研究について

1　研究の内容

（1）社会的事象の教材化
（2）教師の効果的な指導や支援（発問や板書，資料の提示，資料の活用等）
（3）社会認識の深まりの見取り（学習の評価）
（4）授業の振り返り（授業の評価）
（5）言語活動の充実（位置付け，内容）

2　研究の方法

（1）授業実践研究（加納岩小　6年　岡村　翼　教諭　1月）
「世界の中の日本」　【小単元②　地球規模の課題解決と国際協力】

Ⅲ　成果と課題

1　成果

（1）単元の目標とその達成した姿を明確にし，学習内容を吟味し組み立てる指導計画の重要性を確認できた。
（2）市民を育てるための主・対・深の実現のため，地域素材を活用したり，学習課題を工夫したりすることで，児童が自分事として学ぶ姿が見られた。
（3）市民を育てるというテーマに焦点を絞った学習会・研究授業が実施できてよかった。

2　課題

（1）研究授業を通し，児童がねらった姿に育っているのかどうか，継続して見取る必要がある。
（2）考えの共有場面等での効果的なＩＣＴの活用（児童の活用能力の差への対応）をどうするか。
（3）時間的に厳しいが，授業以外の実践交流の場があるとよい。

（小学校部長　橋本　尚一　日下部小学校）

市民を育てるための「主体的・対話的で深い学び」をどのように実現するか

Ⅰ　主題設定の理由

昨年度同様，市民を育てる「主体的・対話的で深い学び」を得るために，必要な手段及び方法を研究することとした。研究会の回数も少ない中ではあったが，小中合同の研究授業，指導案検討，臨地研修等を行い，次のような生徒の育成に繋がるものとして進めた。

① 学習課題に対し，主体的な学びに向かうことのできる生徒
② 追及すべき課題を明確にとらえることのできる生徒
③ 他者と協働し対話的な学びから考えを深めることのできる生徒
④ 導き出した結論を，様々な資料や他者の意見を参考にしながら検証することのできる生徒

「主体的な学び」や「対話的な学び」は，生徒たち自身の力を着実に育み，その力が将来に繋がるよう努めていかなければならない。これまでの科学的認識を育てる授業研究を土台に「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善を考え，研究を進めた。

Ⅱ　研究内容

1　授業研究の実施

内田　英太　教諭（塩山中）

中学２年生　歴史的分野　題材：「江戸時代が 260 年も長く続いたのはなぜか」

2　臨地研修

８月：勝沼宿とその周辺（市生涯学習課　飯島課長の解説をともなう見学）

１月：放光寺（放光寺　清雲俊元長老の講義の聴講と見学）

3　各自の授業実践の報告

授業研究に向けて一人一実践を持ち寄り，研究授業に向けての提案と検討を行った。

4　情報交換

Ⅲ　成果と課題

○実際に勝沼宿場町を見学し，そこで見たものを授業研で資料として活用していた場面が，教材研究を生かした授業づくりにつながっていて，テーマに沿った成果となった。

○研究授業づくりや臨地研修などを通じて，授業の土台である教材研究を深めることができた。

○「主体的・対話的で深い学び」の実現にむけて，部会で検討したＩＣＴの活用についての成果をもとに先生方が積極的に活用・実践を進めることができた。

○どうやったら主体的・対話的に学べるかを考えながら指導案検討を行うことができ，そのための教材づくりとして臨地研修にいくことができた。

○ICT の活用・単元計画・評価の仕方など，普段の授業づくりでの課題を出し合い，研究授業だけでなく日常の授業づくりについても意見交換や情報共有をしていきたい。

●社会科の授業では ICT を活用できる場面が豊富にあるが，紙で書くことのメリット等とうまく合わせながらどのように活用していくのか。部会全体で研究してくことで全体のスキルアップにつなげていきたい。

●社会科部会において，なかなか小中連携が進んでいない。小学校の教科担任制に伴い，小中の先生方の交流もこれまで以上に求められている。研究授業や臨地研修など，これまで別々に取り組んできたが，小中の部会員全員での授業づくりも計画したい。

（中学校部長　宮下　智英　勝沼中学校）

算数科教育部会

つくり，いかす算数授業の創造

○子どもたちが主体となり，数学的表現を通してかかわり合う授業づくり
○数学を活用する意識や実践力を育てる「生活・社会とつながる教材」の研究と実践
○数学の実際や子どもの考え方の変容が明示された研究と実践

Ⅰ　研究テーマについて

小学校学習指導要領では,算数的な活動の充実や数学的思考力・表現力と算数を生活の中で活用しようとする態度の育成が示されている。授業を通して，数学的な表現（図・式・言葉・記　号・操作）を用いたり，説明させたりして子どもたちにコミュニケーションをさせていき，そこで出てきた表現を使ってできるだけ子どもの言葉でまとめさせていきたい。また，知識の活用が話題になっている。教科書の教材内での活用や生活内での活用を通して，算数で学習したことが，日常生活でも活用できるということが子どもに実感できる授業の研究をしていきたい。以上のことから，この研究テーマを設定した。新学習指導要領になりコンテンツベース（内容中心）からコンピテンシーベース（資質能力中心）への授業改善の研究をさらにすすめていきたい。そして，授業を通して子どもの変容がわかる研究に近づけていきたい。

Ⅱ　研究の内容

1　授業実践研究

（1）日時・場所：令和４年８月３１日（水）　　塩山南小学校　第６学年
　　授　業　者：古屋卓　教諭
　　題　　材：割合の表し方調べよう
　　～日常生活につながる算数授業～

（2）研究討議より
○本時の学習を前時の学習感想から始めることで，児童の疑問や思いなどから導入をすることができていた。まとめの感想でも次時につながる感想が出されていた。
○児童が言葉で表現したものを他の児童に式で表せたり，図や矢印で考えさせたりするなどしたことで，等しい比の関係についての児童の数学的な思考力，判断力，表現力を養う機会を意図的に設けることができた。児童の考えから特定の児童の考えの発表で終わるのではなく，一人の児童の考えから問うて，学級全員で等しい比の関係について深めることができていた。
○等しい比をつくる場面では，かけ算だけではなく，わり算を使って比を求める児

童がたくさんいた。また小数倍を利用して導いている児童もおり，等しい比の性質について理解することができた児童も多かった。同じ数でかけたり，わったりすること，小数倍でできることなどを児童の考えから導き出していった展開だったので，児童も等しい比の性質について理解することができたと考える。

●数学てきなものの見方や考え方として統合する場面で児童の思考を引き出すことができなかった。既習から「４×Ｘ＝６」などの式を想起させる展開をすれば児童も実感として理解できたと考える。また小数倍でも等しい比ができることをまとめる場面では，今までの共通点や相違点を考えさせることで導き出せたのではないだろうか。

●本時では，等しい比の性質について考えることができ，ねらいを概ね達成することはできたが，比の良さや等しい比をつくり出せることが，生活とどう結びついているかを感じるような場面を設けてもよかった。また等しい比をつくり出せることで，たくさんの量も味を変えずにつくることができることをまとめでもう少し触れたり，他の具体的な場面を考えさせたりすると本陣学習の有用性を実感できると感じた。

Ⅲ　成果と課題

○指導案検討や研究授業，研究協議を行う中で，子どもたちが主体となり，数学的表現を通してかかわり合う授業づくりについて研究することができた。また，日々の実践に環流することができた。

○つくり・いかす算数授業の創造をめざすために，具体的にどのような問題と出会わせるのかが大切だということが検証された。
研究授業では，ふり返りを大切にした授業展開が行われた。それにより，児童の変容を認めることができた。

○授業実践や部会での協議を通して，数学的な表現や生活への活用の認識を広げることができた。

○研究授業はもちろんのこと，環流報告や他の先生の実践を聞き，学べたことがとてもよかった。コロナ禍ではあったが，実践を通しての研究を深めることができた。中学校の実践を見せていただき，研究会を設け討議できたこともよかった。

●ICT については，「どんな分野で（どの単元で）どんな活動がよいか」等，効果的な活用の仕方をさら研究していく必要がある。

●単元を通して力をつけていけるような学習課題の設定の仕方は，今後も研究していくとよいと思う。

●教育協議会の限られた時間の中で研究していくため，継続して部会に所属していくことが大切ではないか。

（部長　山宮彩子）

数学科教育部会

わかる授業の工夫と授業実践

～基礎学力の定着と考える力の育成～

Ⅰ　研究の内容

数学科教育部会では，研究テーマの中の「考える力の育成」に焦点を当て研究を進めてきた。ここ数年は，主に「単元の導入や既習事項の活用に関する授業研究」に重きを置き，各校から指導案等を持ち寄りながら統一授業研に向けて研究を深めてきた。一昨年度から研究を進めてきた「箱ひげ図」の研究も，今年度も継続して研究することができた。①生徒が興味を持って取り組める教材や教具の提示，②考える力や思考の深まりを引き出させるような授業形態や発問設定，③生徒の興味をひく上で効果的な操作活動や，動的なものを捉えるのに有効な ICT の活用を取り入れた授業展開等を踏まえ，様々な角度から研究を深めることができた。コロナ禍ということもあり，なかなか思うように研究を進めることができなかった部分もあるが，生徒一人ひとりが「わかる授業」を通して考える力を身につけることができるよう，部会員全員で積極的に研究活動に取り組むことができた１年だった。

Ⅱ　成果と課題

1　成果

・箱ひげ図の継続研究を今年度も深めることができてよかった。抽出するデータをどうするかなど，３年間でより効果的な授業の進め方まで意見を出し合うことができた。
・冬季統一授業研で小学校部会と合同の研究会を持てたことで指導の視点が広がった。
・授業の中で統計グラフ作成ソフト「SGRAPA」の使用方法が実際に見られて参考になった。
・生徒たちの作業や反応の様子を見ることができて良かった。
・各校一実践の取り組みは，自身の授業に参考にできることがたくさんあった。授業改善のヒントを得られた。
・ICT を用いた実践について情報交換することを通して、無理なく使用できる方法や効率的に用いる方法を知ることができた。
・作業的活動や ICT を活用した授業が多く実践されたことは成果だと感じた。基礎学力や知識を身につけた上で，考える力を養うことが大切だと改めて感じた。
・研究授業や持ち寄った実践をもとに各校で研究を深め，授業に生かすことができた。また，その実践を再度研究会に持ちより，様々な視点で検討することができた。

2　課題

・お忙しい中準備，実践していただいた夏の統一授業研を見ることができなかった。生徒の様子や反応は書面ではわかりづらい。コロナ禍でリモートや動画になってしまうのは仕方のないことだが，できれば直接参観したい。

・数学部会だけでなく，教協全体に言えることだが，開催時期が９月以降１月まで無いため，前半の研究と後半の研究で偏りがある。研究は継続してこその部分があると思う。ブロック交流研などとの兼ね合いも含めて実施日の検討が必要だと感じた。

・３年間の研究を経て，箱ひげ図の研究も区切りになったが，まだ改良すべき点や課題が見つかったので，継続して研究し，改良していけたらと思う。また，ICT の活用の実践事例も良いが，「SGRAPA」のように，生徒が簡単に使えるようなソフトや新しい教具の持ち寄りなどができたらと思う。

Ⅲ　授業実践（成果物）

1　数と式領域より

６月の部会で授業者と単元を検討し，１年生の「文字と式」の単元で研究成果となる授業を行うことを決定し，２回の指導案検討を行った。夏の統一授業研で行う予定だったが，参集することができず，後日授業を実施し動画を撮影した。スライドなどを用いて導入を行い，生徒の興味関心を引くことができ，ITC の活用の仕方の研究にもつながった。

授業者：名取　政也教諭　（笛川中学校）

単元名：１学年　２章　文字と式　「コーンバーの数の法則を見つけ表現しよう」

ねらい：考・文字を用いた式を活用して，具体的な事象を考察し表現することができる。

主・文字を用いた式について学んだことを生活や学習に生かそうとしている。

・文字を用いた式を活用した問題解決の過程を振り返って検討しようとしている。

2　データの活用領域より

一昨年度より継続して研究を進めてきた「箱ひげ図」の授業を，冬の統一授業研で行った。昨年度までの研究の成果を踏まえて指導案検討を行い，ICT を活用しながら抽出するデータをどうするかなど、３年間でより効果的な授業の進め方まで意見を出し合うことができた。

授業者：藤原　堅汰教諭　（松里中学校）

単元名：２学年　７章　データの比較　「地球温暖が進んでいるか考えよう」

ねらい：考・箱ひげ図からデータの分布の傾向を読み取り，批判的に考察し判断することができる。

主・データの分布の傾向をとらえることに関心を持ち，批判的に考察しようとしている。

（部長　古屋　大樹）

理科教育部会　【小学校部会】

「わかる理科授業の創造」

小学校部会テーマ
　～楽しく学び，自然を豊かにとらえる理科授業をどのように進めるか～

Ⅰ　研究の内容

1　研究の深まっていない領域・単元を重点的に研究していく。
2　臨地研修や実験工作演習などを積極的に取り入れる。
3　授業に関わる情報交換を積極的に行う。
4　研究の成果を授業研で検証する。

Ⅱ研究の具体的取り組み

今年度は，加納岩小学校・廣瀬哲也教諭による 第４学年「雨水のゆくえと地面のようす」の研究授業を行った。新型コロナウィルス感染予防の観点から，事前に撮影した動画を視聴したあと，研究協議を行った。授業研究では，雨水のしみ込み方と土の粒の大きさとの関係について，観察，実験などを行い，得られた結果を基に考察する児童の姿がみられた。実験で，砂と土の違いが明確に出たことで，児童から驚きの声が多く上がっていた。また，教科書ではストップウォッチを使用して違いを比較する実験だったが，授業者が「どちらが速い」「どちらが遅い」に絞って検討させたことで，児童はしみ込み方に注目して観察ができていた。

その他，授業研究に関わり株式会社ヤガミの「水のしみ込み方実験セット」を使った教材の検討や，自然観察指導員の植原彰氏を講師に「自然観察からはじまる自然保護」をテーマに学習会を行った。

Ⅲ成果と課題

小学校での理科学習は，児童にとって「課題→予想→実験→結果→考察」という科学的思考の流れを養う大切な時期であり，語彙や知識，理論に制限のある中で，わかる授業を行うためには様々な工夫が必要であるとわかった。

子どもが「なぜ」「不思議だ」「調べてみたい」と探求したくなるような教材・教具をどのように用意するのか，子どもたちの生活経験が多様化する中，日常生活と科学的な概念をどのように結びつけていくか　等，楽しく学び，自然を豊かにとらえる理科授業をどのように進めるか　これからも，研究を深めていく必要がある。

（小学校部長　後屋敷小学校　雨宮玲子）

【中学校部会】

「わかる理科授業の創造」

中学校部会テーマ

～　考える力の育成と教材教具の工夫　～

Ⅰ　研究の内容

1　理科の学びを支える、教材・教具の発表と検証

各校から授業で実践した教材教具を持ち寄り，研究討議を行った。延べ７名８教材。

2　理科自由研究の審査（支部）

各校から自由研究の代表作品を２点持ち寄り，県下児童生徒理科自由研究の代表作品２点を選考した。

3　統一授業研究会の実施と指導案検討

①夏の統一授業研究会

指導者　：　佐藤　政幸　教諭　（甲州市立塩山中学校）

指　導　：　第３学年　生命のつながり　２章　「遺伝の規則性と遺伝子」

「孫の代で現れる形質の規則性を見いだそう」

→ICT 端末の効果的な活用，探求の過程に沿った授業の展開

②冬の統一授業研究会

指導者　：　廣瀬　直樹　教諭　（甲州市立勝沼中学校）

指　導　：　第１学年　身近な物理現象　３章「力のはたらき」

「力の大きさとばねの伸び」

→ICT 端末の効果的な活用，探求の過程に沿った授業の展開

4　授業に関する情報共有と検討

Ⅱ成果と課題

ICT端末の活用が進み，ICT端末を使った教材の発表が多かった。また，そのデータを共有して実際に活用することができ，部会として学び合いながら進めることができた。また，実験の仕方を検討し合うこともでき，実物を使って学ぶことの大切さも感じた。今後，ICT端末の活用が進むこと，部会構成員の年齢等を考えたとき，実物で驚きをもたせ，目で見て触れて考えさせる理科を実践されてきた先輩方の財産が継承されなくなってくることが予想される。理科では，事物現象を体験的に学び，思考することが何よりも大切だということは変わらないため，そのような指導技術を学べる機会を，蓄積していける機会をしっかりと持ち続けていきたい。そして，生徒が主体的に学び，驚きと発見が生まれるような授業を今後も目指し，「理科好き」が増えるような授業実践を考え，各校で取り組んでいきたい。

（中学校部長　松里中学校　雨宮友久）

音楽科教育部会

「確かな学び　広がる音楽」

～知覚・感受をもとにした音楽的思考力，判断力，表現力等の育成～

Ⅰ　主題設定の理由

これまで『「わたしの音楽　みんなで音楽」～音楽を形づくっている要素を感受し自ら広げる音楽の世界～』をテーマに研究を推進してきた。仲間とともに音楽を表現したり味わったりするためには，一人一人がどのような音楽を表したいのかといった，思いや意図が出発点となって，仲間とともに共有し，音楽の世界を広げていけるようにすることが重要であることと捉え，研究を推進してきた。

これにより，本研究では，音楽を知覚したり感受したりする学習を重点的に取り上げ，音楽を形づくっている要素がどのように関わっているのかを学習の中核に位置付けながら，音楽を表現したり味わったりする学習を展開する研究を推進してきた。授業実践においては，感性を高め，思考・判断し表現する「一連のプロセス」を重視してきた。音楽のよさが，どのような要因から生まれてくるのかを探るために，思考し，表現したり鑑賞したりする学習を実現することで，児童生徒の感性が高まり，より深く音楽を表現し味わうことへとつなげるよう，学習を展開してきた。また，児童生徒が取り組みやすさを感じられるようにスモールステップを設定したり，教材や提示資料(音楽の可視化，ICT の活用等)を工夫したりするなどにも取り組み，成果をあげてきた。

これからの研究では，「音楽を知覚したり感受したりしながら音楽に対する感性を働かせる学習」については，これまで同様，重要な学習と捉える。そして，児童生徒が感性を働かせ，他者と協働しながら音楽表現したり味わったりする活動において，「そのよさや価値等を考えるなどして，創造的に表現したり鑑賞したりする力を育成」することができるよう，さらに研究を推進していく。

この「よさや価値等を考える」ためには，音楽のよさ，面白さ，美しさを感じ取りながら想像力を働かせて聴き，どのように表現したいのか，音楽表現に対する思いや意図を明確にもち，自らの言葉で適切に表すことができるなどの力が求められる。これは，基礎・基本の習得とともに，音楽に関わる思考力，判断力，表現力等をどのようにして育成していくのかといった視点が重要であり，研究の中核となる。

義務教育９年間の積み重ねを意識する中で，９年間で身に付けた音楽の学力が，その後の人生において生きて働くものとなり，生涯において生活の中で豊かな関わりを続けていくことが重要となる。これは，「学びに向かう力，人間性等」に関わることであり，生活の中に音楽を生かしたり，我が国や諸外国の音楽に親しんだりする態度を養うこととなる。授業においては，生活や社会における音や音楽の働き，そして音楽文化についての観点及び理解を深めることによって実現できるものと考える。

これまでの本県の研究実践の成果を基に，児童生徒が豊かで多様な音楽と出会い，音楽的な見方・考え方を働かせて学習することによって，「知識及び技能」の習得，「思考力，判断力，表現力等」の育成，「学びに向かう力，人間性等」の涵養が図られ，生活や社会の音や音楽と豊かに関わる資質・能力が育成され，生涯にわたって生きて働くものへとつながることを目指して，本研究を進めていきたいと考えた。以上のことから研究主題を設定した。

〖研究の視点〗

① 知識・技能を活用し，一人一人に主体的な学びを促す活動の工夫

② 一人一人が明確な思いや意図をもち，伝え合う中で学びが広がる活動の工夫

③ 仲間と協働する喜びを感じながら音楽を表現したり味わったりする活動の工夫

Ⅱ 研究の内容

1，研究の具体的内容

（1）学習会

①「音楽科の授業づくりと令和の日本型教育について」

講師：山梨県総合教育センター　指導主事　小林美佳　先生

②夏季学習会「ICT 端末の常時活動における活用の工夫」

秋山小学校　　和智宏樹　教諭　　※中止

（2）実践報告

①題材名　「オーケストラの響きを味わい，音楽とバレエとの関わりについて考えよう」

塩山中学校　　雨宮雄貴　教諭

②一人一実践発表

Ⅲ 成果と課題

今年度もコロナ禍により，授業を実際に参観することができなかったが，学習指導案検討やワークシートの作成などに全員の先生が関わり「よりよいものを」創り上げていくことができた。また，研究授業を年間１本にしたことにより，指導案やワークシートについても深く研究することができ成果につながった。指導主事の小林美佳先生による「音楽科の授業づくりと令和の日本型教育について」では，これからの評価「思考力・判断力・表現力」についてさらに学ぶことができた。また，状況の変化に対応するために，最新の音楽教育の在り方について学ぶ機会となった。今後も指導主事の先生からお話を聞く機会を設けていきたい。

雨宮先生の研究授業において鑑賞の授業の迫り方について，指導案やワークシートの作成から，先生方の意見がそこに活かされ素晴らしい授業展開となった。また，他校の様子や実践の様子を知り協議していくことで，指導力アップに結び付けることができ今後も継続をしていきたい。

課題としては，部員数の減少が挙げられる。特に小学校教員の数が激減しており今後も懸念される。小学校の先生方に少しでも役に立つような研究内容の工夫などを行い研究を更に深めていきたい。

（　部長　行田　玲子　）

図工・美術部会

一人ひとりの力を引き出す題材と授業をどうつくっていくか
～感動と発見のある授業づくり～

Ⅰ　研究の内容

1　研究の柱

（1）子どもの課題や実態にあった題材と授業づくり

ア　目の前の子どもの課題や実態をつかみ，ねらいを明確にして，より造形的な資質や能力が発揮できる題材の研究をすすめる。

イ　様々な場面で，子ども一人ひとりに表現する喜びを感じさせる。また，その表現を通して，子どもが自分や周りの人々，社会，自然や環境などを見つめ，子ども自身が主体となるような授業の組み立て方を工夫する。

（2）子どもの表現活動によりそう支援のあり方

ア　子どもの思いによりそう支援のあり方を考える。

イ　子どもが何に悩み，考え，試行錯誤した末，どのような表現につながったのか，活動の様子の観察，子どもとの対話，スケッチや記録など，いろいろな方法で作品や活動を読み取る研究をする。

（3）つながりと広がり，先を見通した実践の積み重ね

ア　子ども同士が関わり合い，話し合うなど，互いに学び合うことのできる場の設定を試みる。

イ　題材と題材の関連や小・中学校の連携を考えたり，他教科との関連を図ったすることで，子どもや学校の実態に応じた，系統的・発展的なカリキュラムの工夫をする。

ウ　子どもの生活を取り巻く地域や社会，それに関わる人々とのつながりをもった美術教育を通して，自分自身や社会を見つめていけるようにする。

エ　ICT 機器を有効的に活用できるような実践研究を行う。

2　研究の方法

（1）授業研究を実施し，授業の在り方を考える。

（2）学習会を実施し，評価や授業づくりに生かす。

（3）一人一実践による作品研究を行う。

（4）研究会場を持ち回り，各校の展示環境などを参考にする。

Ⅱ　成果と課題

1　成果

研究テーマを基に，各自が実践し，研究を積み上げることができた。今年度は，副題を付け，子どもたちの創作意欲を掻き立てるような「感動と発見のある授業」についても研究することができた。

今年度も，学習会や授業研究，一人一実践など様々な形態で研究を進めたことにより，実際の作品や展示方法を見たり，造形教育の情報交換を行ったりと，図工・美術の授業や評価，支援について学び合うことができた。特に，学習会を参集して実施できたことにより，図工・美術で育む資質・能力や学習構造，評価についてなど，多くのことを学ぶことができた。また，授業研では，撮影した動画を見ての研究ではあったが，「音楽を形や色に表す」活動を通し，子どもたちが試行錯誤しながら自分の表現方法

を追求していく姿から学び合うことができた。県教研の実践からは，タブレット型端末を活用した学びの振り返りから，図工・美術におけるICT活用について研究を深めることができた。

2　課題として

授業づくりについての研究は進んだが，「一人ひとりの力」の把握や評価方法，子どもたちへの還元の仕方，更なる表現の追求につなげていく方法などについての研究も進めていく必要がある。ICT 端末による制作過程の記録の活用を糸口に，今後の研究もレベルアップしていきたいと考える。併せて，図工・美術教育の特性やねらいなどの根本的な部分を再度学び直す機会を設けたり，ICT の更なる活用について探っていったりしながら，研究を深めていきたい。

また，今年度も，コロナ対策により，授業研を全員で参観することがかなわなかった。後の研究会で動画を見ながら討議することはできたが，図工・美術教育の特性から，子どもたちの表情や姿，活動を直接見ての検証の重要性を改めて感じた。

Ⅲ　統一授業研と県教研の実践報告

1　統一授業研　小６「音色を形に」　　授業者：市川安紀（塩山南小）

〈A 表現(1)イ(2)イ及び B 鑑賞(1)ア共通事項(1)アイ〉

「音楽を形や色で表す」という題材で，子どもたちは，音楽に触れて，感じたり想像したりしたことを基に，表したいことを見付け，表し方を考えながら表現していった。実体のない「音」をどう色や形で表していくか悩みながらも，「音」を集中して聴き，色の選び方や線の強弱，塗り方など，試行錯誤しながら製作に没頭していく姿が見られた。これまでに経験した水彩絵の具の使い方を駆使して表し方を工夫していった結果，作品には，それぞれの子どもたちの思いが込められた様々な表現が見られた。高学年における主題設定や表現方法の多様性について有効性のある実践であった。

2　県教研リポート　「主題にせまる表現の工夫・ICT 活用の可能性をさぐる」

リポーター：那須真奈美（山梨南中）

〈A 表現(1)ア(ア)(2)ア(ア)及び B 鑑賞(1)ア(ア)共通事項(1)アイ〉

自分の心の中を見つめて主題を生み出し，色や形，質感，構図などの効果を考え，材料や用具などの特性を生かし，表現の意図に応じて創意工夫して表現する題材であった。ワークシートを使用して深く自分と向き合わせたことにより，表したい主題が明確になり，表現活動もスムーズに行うことができた。また，毎時間終末に，タブレット型端末で制作途中の作品の写真を撮り，コメントを付けて保存していった。これらの資料から，子どもたちがどのように考え，工夫し，表現を追求していったかを読み取ることができた。ICT を活用した，学習の振り返りと自己評価・相互評価に効果的な実践であった。

（部長　　三枝清美）

技術科教育部会

「つながり」を深め，資質・能力を育む技術・家庭科教育

～「つながり」を活かした教材開発～

Ⅰ　研究内容

地域教材の発掘については，５年前からの継続研究である。これまでに小水力発電やバイオマスチップの製造などについて取り上げた。小水力発電と甲斐サーモンレッドについては学習プリントを作成し，授業での実践も行ってきた。身近な場所にあるというだけで，親近感を感じたり，自ら見たり確認したりすることができることは大きな利点である。これまでの実践から地域教材を活用することは，生徒が興味を抱き，学習効果を向上させる手ごたえを感じた。

新型コロナウイルス感染症拡大のため施設の見学などが思うようにできない中ではあったが，部会の先生方がそれぞれ個人的に施設を見学したり，担当者に問い合わせをしたりするなどして，新たな地域教材の発掘に取り組んできた。

また，小学校におけるプログラミング教育の成果を生かし，発展させるという視点から，従前からのプログラムによる計測・制御に加えて，ネットワークを利用した双方向性のあるコンテンツのプログラミングについても取り上げることとなっている。技術分野におけるプログラミングの拡充に伴い，ビジュアル型プログラミング言語の実践が広がる中，高等学校での情報科との接続も考える中で，テキスト型プログラミング言語にも触れることで，発達段階や将来への「つながり」を意識した教材になるのではないかと授業研究を行った。

Ⅱ　具体的研究内容

1　地域との「つながり」を活かした生物育成の技術の教材開発

①　太陽光パネルの下で育成する野菜

太陽光パネルの下で育成する野菜は，日照時間の特性やデータから様々な品種を選択することができるそうである。生物育成の技術とエネルギー変換の技術の両面に関り，持続可能な農業を目指している実践例であり，現在の生活が多くの技術が相互に関連付けられながら活用，発展していくことを扱える教材になり得ることではないかと協議した。

その中で，生徒に考えさせることで学習内容「B　生物育成の技術」の要素である「(3) 社会の発展と生物育成の技術」として，十分に以下の学習内容として扱えると考えた。また，第３学年で取り上げる内容の「技術による問題の解決」の項目において，統合的な問題として扱うことができるのではないかという意見も協議の中で出た。授業の中で地域にある実際の活用場面である写真を見せたところ，登下校

の際に興味深く見る生徒が増え，感想などを共有した。

② 6次産業化に関する研究

隣地研修として甲州市勝沼町にある「まるき葡萄酒（株)」へ部会全員で伺い，鈴木社長様から工場内の見学をさせていただきながら，甲州市の6次産業化の現状についてお話を伺った。6次産業化するということは，会社としての収入面だけではなく，長い歴史のある甲州市勝沼町のワインを守ろうとする，こういった今後の地域の農業に関わる課題，持続可能な地域の農業について生徒に考えさせられる題材となるのではないかと考えた。

実際の授業では，ワインの原料として使われている甲州ブドウを木工室南側の花壇で路地栽培し，授業の中で観察や収穫を行っている。また，2年生が農業体験で学区内のブドウ農家に行き，ジベレリン処理やカサ掛け，摘房等を行っている実践報告もあった。東山梨地区という特性と地域とのつながりを生かした実践を行っている。

2 「つながり」を生かしたプログラミングの教材開発

技術科において，テキスト型プログラミング言語を扱うことで，プログラミングについての知識を深め，身の回りのソフトウェアがどのようなプログラム言語でどのように作られているのかを知り，興味・関心や知識を深めることや，高校の情報科にもつなげることができると考え，授業実践を行った。

○ 授業実践：塩山中学校　第2学年　技術分野　　（内田 瑛一郎　教諭）

(1) 題材名

「テキストプログラミングを行い，ビジュアルプログラミングと対比して考えてみよう」D（3）ア，イ

(2) 本時の目標

・テキストプログラミングを体験してソフトウェアの中身に触れよう。

D（3）ア，イ

Ⅲ 成果と課題

地域との「つながり」を生かした生物育成の技術の教材開発については，果樹栽培の盛んな東山梨地区ならではの研究ができた。ブドウ畑の上の太陽光パネルを登下校の際に実際に見ている生徒が増え，今日抱えている環境問題や持続可能な農業について身近な問題として考える生徒が増えた。農業体験では技術科の授業で学んだことを生かし，作業の目的や意味を考える中で積極的に活動をしていた。実際にブドウ栽培に触れることで長い歴史の中で守られ，発展してきたブドウ栽培の苦労や工夫を肌で感じる機会となっている。

「つながり」を生かしたプログラミングの教材開発では，生徒にとって興味・関心の高いゲームのプログラミングを扱ったことで，「タブレットを家に持ち帰って，続きをやりたい。」といった声が生徒から出てきた。また，「目的とする動きが実現できて楽しい。」といった感想や，「テキスト型プログラミング言語は難しいが，こういったプログラミング言語を使ってゲームをつくっているプログラマーはすごいと思った。」といった感想もあった。タブレットを使った授業が各教科で使われているが，タイピングの力量の差が課題であると感じた。

（部長　酒井幸政）

家庭科教育部会

「つながり」を深め，資質・能力を育む技術・家庭科教育

～住生活における「住生活の課題と実践」を通して～

Ⅰ．研究の内容

1．はじめに

現行の学習指導要領では，育成を目指す資質・能力として（1）「知識及び技能」（2）「思考力・判断力・表現力等」（3）「学びに向かう力・人間性等」の三つの目標が示され，その中でも学習した知識・技能を実生活で活用するために，家庭や地域社会などと連携を図った「生活の課題と実践」の充実が求められている。

そこで，本研究会では，住生活の学習を基盤に自分や家族の生活について考え，よりよくするための工夫や実践しようとする態度を育成したいと考え，昨年度から取り組んでいる住生活における「生活の課題と実践」の研究に取り組んだ。

2．今年度の概要

（1）住生活における「生活の課題と実践」の研究のまとめ

（2）新学習指導要領全面実施における課題発見と課題解決策の検討

（3）小中の連携を図り，「つながり」を意識した学びの研究

（4）ICTの有効的な活用についての検討

3．具体的な研究の内容

（1）生徒の実態把握と変容について

住生活における「生活の課題と実践」の研究にあたって，昨年度，生徒の実態把握を行った。そして，授業実践後，生徒282名に事後アンケートを実施（令和4年4月）し，学習前後の生徒の変容を検証した。その結果，「災害や安全のために行っていること」の設問に，事前には「分からない」や「特に何もしていない」と回答した生徒が全体の約1／3いたが，事後には十数名と減少し，多くの生徒が家庭での工夫に気づき，解答することができた。

（2）新学習指導要領全面実施における課題について

研究を進める中で，カリキュラムマネジメントや他教科との連携を踏まえながら，家庭科としての教科としてのねらいをしっかりともった授業づくりをしていく必要性を再認識した。小中で情報交換を行ったり，各校の年間指導計画を見直したりし，「つながり」を意識した学びを今後深めていく。

（3）ICT活用について

これからの社会を生きる子どもたちに必要な力を身に付けさせるために，ICTの活用も含めた教材・教具の工夫を行えるよう，各校で行っているICTの活用方法の情報交換を行った。

Ⅱ.成果と課題

1.成果

(1)住生活領域は,衣や食領域に比べ自ら積極的に課題をみつけ,工夫して取り組む姿勢をもちにくい部分であるが,安心・安全な生活の維持を図る上で重要な領域であることが授業実践を通して理解できたのではないかと考える。自然災害等を身近に感じたり,家族の健康・安全をふまえ考え,工夫したりすることで,より快適な生活につながる内容として授業実践につなげたい。

(2)昨年度から研究してきた住生活における「生活の課題と実践」の授業実践を行い,実践前と後での生徒の住生活への関心の高まりや安心で快適な住生活のための工夫について積極的に考え実践しようとする姿勢を感じることができた。今後も効果的に授業計画に取り組みたい。

(3)小中の先生方が所属している部会のため,本研究テーマである「つながり」を意識し,授業の内容や状況など情報交換をしながら研究を深めることができた。

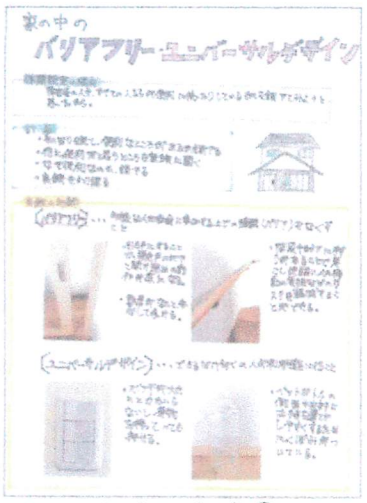
2.課題

(1)「生活の課題と実践」を授業で学習したことをふまえ行うにあたり,3年間の学習を見通して,どの期間にどのような内容で取り組むことが実生活に有効に反映させることができるか,他教科との連携や家庭・地域との連携も考えながら検討して年間計画に取り入れていく必要がある。

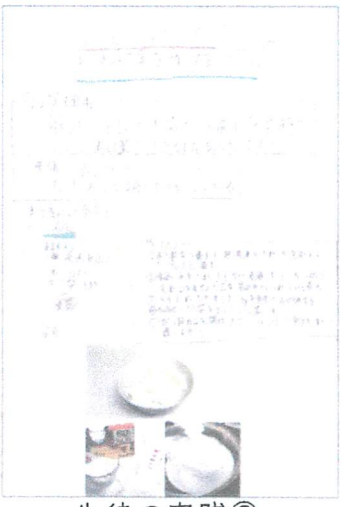
(2)「つながり」を意識した教育課程,小中連携,ICT 活用,ふり返りシートの活用や小グループでの交流が効果的であったことが確認できた。今後は,同じ領域での実践など持ち寄り検討するなど,小中の連携をさらに深めていきたい。

(3)子どもの生活に関わりの強い教科であることを再確認することができた。生活の中に多くの教材が隠れており,教員がアンテナを高くしていかなければならない。

Ⅲ.成果物



生徒の実践①


生徒の実践②

生徒の実践③

自分の住む家や住む町に取り入れられているユニバーサルデザインやバリアフリー,ハザードマップで取り上げられている地域で危険なところを写真に収めたもの,ポリ袋クッキングに挑戦した実践など

(部長 松明舞子)

教材の本質をふまえた体育指導のあり方
～体つくり運動（遊び）を通して～

【はじめに】

スポーツ庁が実施している「体力・運動能力調査」によると，子どもたちの体力については概ね低下傾向に歯止めがかかってきているものの，体力水準が高かった昭和 60 年頃と比較すると，基礎的運動能力は依然として低い状況にある。また，新型コロナウイルス感染症の影響が長引いている中，休み時間・放課後の遊びや体育活動の制限も続いた。さらに，コロナ禍において体育の授業以外に思い切り体を動かすことがない子どもも見られる。それにより，子どもたちの体力低下や運動経験の乏しさは加速しているとも捉えられる。だからこそ，運動の楽しさや心地よさ，喜びを味わうことができる授業を展開していくことが重要であると考えた。そこで，今回体育部会としては，「体つくり運動遊び」「体つくり運動」を研究領域とし，子どもたちの基礎体力の向上や進んで運動に親しむ姿勢を育てたいと考えた。感染予防対策を踏まえながら，安心して運動に取り組み，運動がもつ本質的な面白さを味わうことができる体育授業づくりについて,研究をしてきた。

Ⅰ　研究の内容

1　研究の具体的内容

（1）「体つくり運動（遊び）」について理論研究と実技研修を行い,授業づくりを行う。

（2）各校での健康・体力つくり一校一実践の取組を共有し,日常的な取組や各校の体育的活動の様子の情報交換をする。

2　具体的な取り組み

（1）「体つくり運動（遊び）」実技講習会・理論研修会

講師　共栄大学専任講師　篠原俊明先生

（2）４年生「作ってチャレンジ！体つくり運動」（体つくり運動）授業研究

真島　陸斗 教諭（塩山南小学校）

3　授業研究

（1）本時の目標

○基本的な動きを組み合わせた動きができるようにする。【知識及び運動】

○組み合わせた動きを考え,それを言葉や動きで表現することができるようにする。【思考力，判断力，表現力等】

（2）ICT 端末利用の工夫

○挑戦状動画の視聴

○運動の様子を撮影＆共有

○学習感想カードのデジタル化

（ア）授業実践から学んだこと

・児童の意欲を向上させる手だてとして，挑戦状動画（ICT）を取り入れて授業に活かしたことは大変良かった。また，部会員で挑戦状動画を作成したことは大きな成果となった。

・挑戦状動画については大変良いものであった。何より，運動の本性を捉えていた。また，動画により，子どもたちの意欲が非常に高まった。

（イ）授業実践から，今後さらに研究を深めたいこと

・挑戦内容によりグループ間で差が生まれていた。教師の支援がどこに必要か見極めたい。

・デジタル化された学習カードを活用するなら，自分の画面で友達と共有ができるとよい。

・児童に新たな動きを考えさせることは，種類によっては難しくなってしまう。

・挑戦状などICTを効果的に扱えた場面があった反面，振り返りカードはさらに有効に活用できる場面を考えていかなければならない。

Ⅱ　成果と課題

1　成果

・体育という教科の特性を活かすため，コロナ禍ではあったが講師を招いた実技研修会を行った。実技研修会を通して，教師自身が体を動かす楽しさやおもしろさを感じ、子どもたちの指導に活かせていた。実技を通して「体つくり運動」の楽しい教材を考えることができた。

・「体つくり運動（遊び）」領域の研究1年目として，実技講習会や理論研究において部会員全員で教材の本質にせまることができた。学習したことを活かして，それぞれの授業や研究授業に学習した内容を取り入れることができ，子どもたちが体を動かすことの楽しさや心地よさを味わっていた。

・健康・体力つくり一校一実践の情報交流も，他校の体育的な活動を知る良い機会となった。

2　課題

・ICTの活用方法（体育における学習カードのデジタル化，動画）

・動画の共有（どこの学校でも，どの先生でも使える）

・子どもたちが楽しみながら体力を高められる場づくりや準備運動への取り入れ方

・教師自身が知識として持っておく必要がある運動のコツ

・「低学年の体つくり運動遊び」　「高学年の体つくり運動」についての研究

Ⅲ　成果物

・挑戦状動画，挑戦状を行うにあたってのきまり

・デジタル化された振り返りカード

（部長　三森美礼）

中学保健体育科教育部会

生きる力を育てる保健体育学習を目指して
～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善～

I　研究の内容

1　研究のねらい

（1）新たな時代を力強く生き抜き，生涯にわたり運動に親しめる生徒を育成するための指導方法や評価の工夫を研究する。

（2）知識や考え方を活用し，技能を習得できる指導計画を研究，協議し，深い学びへと繋げられる単元計画のもと，授業実践及び考察を行う。

2　研究概要

（1）ICT の活用や学習カード，指導と評価の一体化に基づく評価計画など，各校における授業実践の共有や情報交換。

（2）県教委の資料をもとに，指導や評価に関わる勉強会。

（3）先進校の文献や資料を参考に，ICT の活用方法や学習カード，指導案の研究。

（4）授業研究を通して，研究のねらいに迫る。

1月２５日（水）「器械運動（２年生)」　勝沼中学校　　林　秀亮　教諭

3　理論研究に基づいた授業実践について

前年度器械運動を行っていない生徒達に対し，マット運動と跳び箱運動を系統立てて指導できるよう，単元計画を作成した。生徒たちの主体的な学習からより深い学びへとつなげるため，ICT を用いた指導計画や評価方法を工夫，研究し，授業実践を行った。端末を日常的に活用することで，負担感なく授業中にも導入することができ，運動量の確保にもつながった。様々な学習支援アプリを活用し，知識の習得や練習方法の確認，運動の比較や分析，仲間との話し合いやアドバイスの共有など，深い学びにつながるポイントを明確にしながら授業を行った。系統立てた単元計画から，より生徒が主体的に運動に親しむ様子も多く見られ，課題に迫る発言や質の高い話し合いも引き出すことができた。チャレンジ精神を植え付け，お互いの失敗と成功を認めながら，「できた喜び」「わかった楽しさ」を感じさせることができた授業実践であった。

研究会では，様々な視点から多くの議論が交わされ，授業実践から見えた今年度の成果と課題を共有することができた。

II　成果と課題

ICT を活用した授業づくりが各校で進む中，多くの実践や活用方法を共有できたことは大きな成果である。基礎的な技術や戦術等の運動分析，学習カードとしての活用，意見共有や話し合い活動での活用など，多岐に渡る活用方法の中で有効な手立てを研究することができた。単元計画についても議論が交わされ，１つの単元で２つの運動を継続的に行い，系統立てた指導と評価の工夫について研究をした。昨年度の反省にもあるが，系統立てて授業を展開していくからこそ，知識の習得と活用場面を設定し，思考しながら深い学びへとつなげる必要がある。知識の活用場面においても，ICT を用いた効果的な方法を部会で検討することができた。

ICT の活用や対話的場面を多く設定することで，実際に運動させる時間とのバランスが毎年のように課題に挙がる。端末を使用する生徒の技量にもよるが，単元を通して最低限の運動量を「どの時間に」「どのくらい」確保していくのか，計画的に見通していく必要がある。ICT の活用が当たり前になるからこそ，その使用場面や使用方法を検討し，アナログ的な活動とのバランスを協議していく必要がある。

Ⅲ　成果物（授業で使用したスライド一覧　※基礎知識・技能の確認と運動分析）

スライド一覧

授業で活用した Google スライド一覧。技ごとにスライドを作成し,生徒が選択して技に挑戦するような形で授業を展開した。スライドを技ごとにすることで段階的に活動することができた。
また，活用資料のリンクをスライドに貼り付けたり，教科書の資料を添付しておくことができるので，生徒が ICT 端末１台で持ち物がすみ，積極的に文具と同じように活用することができた。
ページを活用しやすいようになるべく，その都度の授業で使用する資料を１つのストリームにまとめ，リンクを貼り付けページが開きやすいように工夫した。

Google スライド詳細

技ごとにスライドを作成し，他の生徒の技を参考にできるようにした。共有にすることで教師側からのコメントを他の生徒も読むことができ，互いの評価や言葉かけにつなげることを意識した。また動画をチェックしたら👍マークを付けるなどして生徒の関心や知識の定着を図った。

自らの健康づくりに意欲的に取り組む子どもをどう育てるか

【甲州支会】　心身ともに健康な生活を送る子どもをどう育てるか
～健康な生活習慣への取り組み～

社会では健康についてメディアで取り上げられるなど，健康に対する関心は高い。しかしその一方で,子どもたちの就寝時刻の遅延や運動不足による体力の低下,食生活の多様化など課題がみられている。また，近年の新型コロナウイルス感染症の流行やメディア機器の普及など,子どもたちをとりまく社会的環境の変化は著しく,子どもたちの心身の健康に大きな影響を与えている。

そこで，心身ともに健康な子どもの育成と健康な生活習慣の確立を目指し，今年度も引き続き「生活習慣」と「心の健康」に焦点を当て研究を進めている。科学的根拠に基づいた内容で子どもたちが健康の大切さを実感できるような指導の工夫,また,よりよい健康生活を意識し自分事として考え,行動・習慣化できるような支援や指導,環境づくりをしていきたいと考え,取り組んでいる。

Ⅰ　研究内容と方法

1　生活習慣　：　ＩＣＴ端末の使用と目の健康について，実態把握と保健教育の実践

2　心の健康　：　心の健康を保持するための効果的な健康教育の在り方について,文献研究及び中学校での健康教育の実施

Ⅱ　成果と課題

生活習慣グループでは研究２年目となり，昨年度実施した各校の実態把握や実践の状況を基にし，さらに保健教育の実践を積み重ねることができた。また，各校実践後の児童や保護者からの反省･感想から変容を見取り,今後の課題を明確にすることができた。来年度以降，より児童の実態を把握するため児童の知識や理解の程度についてアンケート等を実施し，指導資料の作成や保健教育の実践につなげていきたい。また，保護者向けの資料（便りや動画など）を作成し，より効果的な指導方法を検討していきたい。

心の健康グループでは,昨年度より新たに小学校が加わり,発達段階に合わせ系統的に行っていけるよう研究を行った。今年度も「ストレス尺度」を Google Forms を使用し，容易に集計できるよう検討してきた。また，心の健康を保持するための保健教育を各校の実態に沿って行うことができた。まだ，発達段階に合わせた心の健康教育については模索中ではあるが，子どもたちの抱えている心の状態について実態調査の結果を基に，今後研究を深めていきたい。

Ⅲ　成果物

1　生活習慣　保健教育資料（保健集会，パワポ,プリント資料等），視力検査結果集計

2　心の健康　保健教育資料（パワポ，配付資料等），Google Forms での心の健康観察

【山梨支会】　児童生徒が意欲的にとりくめる健康教育をめざして

山梨支会では，2021年度まで「食物アレルギー」「生活のリズム」この２つの課題に着目し，２グループ構成で研究を進めてきたが，2022年度より山梨支会として，１つの課題に着目して研究を行うことを決定した。グループ構成の変更はあったが，これまでの研究基盤である「複雑化・多様化する社会の中で，子どもたち自ら健康課題を解決しながら心身ともに健康的な生活を送ることができる」子どもたちの育成を目指した研究に取り組んでいく。

児童生徒の主観的幸福感が向上することで，児童生徒が良好な心の健康状態で過ごすことができるのではないかという考察から,主観的幸福感に着目した研究を進めていく。様々な社会問題を抱える社会情勢を背景に，保健室から見える子どもたちの姿からは，心の健康状態が懸念される場面も多く，子どもたちに心の健康の保持増進のための自己管理能力を身に付けさせることは喫緊の課題だと考える。子どもたちの心の健康に着目し，困難の多いこれからの時代を生きていくために必要である，元気な心，へこたれない心，しなやかな心を持った子どもたちの育成を目指した健康教育の実践について研究を深めることとした。

Ⅰ　研究内容と方法

1　研究内容についての検討と決定
2　研究方法・研究計画について検討
3　ポジティブ心理学についての文献研究

Ⅱ　成果と課題

新しい組織構成の中で，新たに取り組んでいく研究内容の検討，また文献研究を行ったことで，私たち自身が知識や理解を深めることができ，来年度に向けた研究方法・計画についての検討を行うことができた。GoogleForms を用いた質問シートを作成することができたことも今年度の成果としてあげられる。来年度は実践的な研究を進めていくこととなる。課題をより明確化し，子どもたち自らが健康課題を解決しながら，心身ともに健康的な生活を送ることができる子どもたちの育成を目指し，さらに研究に取り組んでいきたい。

Ⅲ　成果物

1　幸福学，ポジティブ心理学について文献研究
2　幸せの４つの因子について GoogleFoams を用いた質問シート

（部長　加藤真菜）

生活科部会

「子どもが生き生きと学ぶ生活科」

～地域とのかかわりを生かした活動を通して～

生活科の学習は，子どもたちが喜一の身近な人々，社会及び自然に直接働きかけ，また働き返されるという双方向の活動をめぐって展開される。見る，聞く，触れる，作る，探す，育てる，遊ぶなど直接対象にかかわる活動や体験は，子どもたちの心を揺さぶり気付きを深め，他の人に伝えたいという気持ちを育む。

子どもたちの興味関心，思いを生かしながら，対象に直接働きかける具体的な活動や体験を仕組むことで，気付きを促し，さらに「見付ける」「比べる」「試す」「たとえる」「見通す」「工夫する」など多様な学習への活動を広げ，生き生きと学ぶことができるのではないかと考えこのテーマを設定した。

Ⅰ　研究の内容

1　研究の内容

・日々の授業についての情報交換を行う中で，授業力を高める。

（授業内容・方法・教材等の実践の発表など）

・授業研究を通して「子どもが生き生きと学ぶ生活科」について研究を深める。

やまなしスタンダードに示された視点と各教科の特性を考慮して，効果的に授業を構造化し，実践するとともに，学習形態を工夫し，授業を活性化することで，自ら考え，表現し，学び合う児童の育成を図る。

2　研究の内容・方法

(1) 全会員の実践紹介と意見交流による学び合い

1学年「きせつとあそぼうーあきー」 岩下亜希子（後屋敷小）・精進利恵（八幡小）・山下史江（井尻小）

「もうすぐ2年生」 大島めぐみ（神金小）

「こんなに大きくなったよー広がれわたしー」 矢崎さつき（奥野田小）

「きれいなはなをさかせたい」 大久保有羽（日下部小）

2学年「町たんけん1」 神戸美優（八幡小）・米倉佑季（日下部小）

「ぐんぐんそだてみんなの野さい」 古屋優香（日下部）・奥山美恵（奥野田小）

「虫はかせになろう　～生き物をさがそう～」 天野ねいろ（井尻小）

3学年「祝地区のブドウ作りを知ろう」 赤荻美弥（祝小）

指導助言　武井麻子教頭（井尻小）

(2) 学習会の設定

万力公園にて臨地研修を行った。講師に植原彰先生を迎え，万力公園にある動植物について説明を受けながら活動を行った。自然観察の行い方のポイントなどを聞くことができ，実際にいろいろな学校で校外学習などに使う公園なので参考になった。

(3)研究授業

「 あそび名人になろう 」　山梨小学校　第２学年　　指導者　梶原　裕子

本単元では，身近にあるものの特性を利用して遊びに使うものを工夫して作ったりすることで，その面白さや不思議さに気付き楽しみながら遊びを作り出そうとしたり，自分の生活に生かそうとしたりすることができるようになることをねらいとした。本時では，「1 年生を楽しませるためにおためしまつりをして，パワーアップできることをみつけあおう」というめあてで行った。おためしまつりをする中で気付いたことを，「工夫しているところ(ピンク)」「こうするといいね(水色)」「お店屋さんの気付き(黄色)」の3つ観点に分けて付箋に書きこんだ。どのお店も多くの付箋が貼られ，子どもたちが意欲的に活動しているようすがよくわかった。

Ⅱ　成果と課題

1　成果

○実践紹介を全員が行うことを通して，評価の方法，ＩＣＴの活用方法について意見の交流をはかることができ，一人一人のその後の実践につなげることができた。

○評価をみとるための方法として、ワークシートだけでなく，日頃の子どもたちの様子のとらえ方など教えてもらい，より深く子どもたちの成長を評価できるようになった。

○実践報告では，先生方の工夫されたワークシートを参考に自分の授業に生かすことができた。今後できるようなら，作成されたワークシートをデーターとして共有できるとよいかと思った。

○研究授業では，アナログとデジタルの使い分けについてもたくさん学ぶことができた。指導者の声かけの仕方なども，映像ではあったが見ることが出来て本当によかった。可能であれば、来年度も撮影だった場合は、協力して複数のカメラでグループ毎の発言を記録できたら更に深まると思った。

○各会の最後に武井教頭先生からの指導・助言をいただくことができ，毎回とても参考になった。

2　課題

●本年度は動画視聴であったが、実際の子どもの様子を見るとまた視点が広がり、話し合いや学びも深いものとなると思う。そのため状況を見ながらではあるが、来年度は授業を参観させていただけると大変ありがたい。

●12月に行った授業を録画しておいてもらい，2月の統一授業研で視聴し，研究会を行った。教協の日程的に授業者に指導案作成の負担がかかってしまった。研究授業をする上で，授業者任せにならないような取り組みができるとよいと感じた。

●評価の仕方について、悩んでいる先生方が多いことを知り，評価の方法についても研究できるとよい。

●生活科は単元数が少ないので毎年実践報告をするとなると，どうしても重なってしまったり，似たようなものになってしまったりすることがある。ワークシートの紹介や研究，単元ごとの進め方の簡単な指導案例を持ち寄るような研究会にしてもよいかと思う。

●実践紹介で積み上げてきた評価方法や取り組みのアプローチの方法を google のスプレッドシートを共有して「学年」「単元」「評価方法」「実践者」「実践校」などの項目を簡単に入れていくと,部会共通の財産として,次年度にも引き継いでいけるようにしていくとよいと感じた。

（部長　岩下　亜希子）

一人ひとりを大切にした学級づくり

Ⅰ　主題設定の理由

今の子どもたちが成人して社会で活躍するころには，我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少，グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により，社会構造や雇用環境は大きく，また急速に変化しており，予想困難な時代となっているであろう。また，子どもたちを取り巻く環境の変化に，より学校が抱える課題も複雑化・困難化しているであろう。

しかし，学校が抱える課題が複雑化・困難化しても，学校での「学び」の基本は，学級集団にあるといえる。一人ひとりの子どもが集団の一員として互いに認められ，楽しく生活し，学ぶための空間が確保できるような学級集団づくりが求められる。そして，さらに，自分たちの思いによって自治的な活動を創り出し，そこから学び合える学習集団にまで高めていく必要があると考える。

そこで，本部会では，一人ひとりが認められる学級づくりをめざして，「一人ひとりの子どもが居心地の良い集団づくり」，「人間関係の絆を強め，人とのつきあい方を学んでいく場面づくり」について研究を進めてきた。今年度は，「一人ひとりの児童生徒がその発達段階に応じ，人権の意義・内容や重要性について理解し，自分の大切さとともに他の人の大切さを認めることができるようになる」という人権教育の視点も大切にしながら，「子ども自らがよりよい学級集団を築こうとする自主的・実践的な態度を育てるための手だて」を明らかにするための研究を行っていくこととし，本主題を設定した。

Ⅱ　研究の内容

1　研究の方法

（１）「SOS の出し方教育」「グループワークトレーニング」「実践報告」などの学級づくりのための手だての学習・演習に取り組み，学んだことを日々の実践に生かしていく。

（２）講師を招き「学級づくりの手立て」についての学習会を行う。

（３）授業研究を通して「子どもを主体としたよりよい学級集団を築こうとする自主的・実践的な態度を育てるための手立て」についての学習を深める。

2　研究の具体的内容

（１）第１回研究会　今年度の研究の方向性の確認

（２）第２回研究会　年間計画についての検討・確認

（３）第３回研究会

学習会①　テーマ「子どもと学級を作る３３の手立て」

講師：雨宮 正倫先生（山梨県教育委員会　義務教育課　指導主事）

（４）第４回研究会　（新型コロナウィルス蔓延防止のため個人研修）

学習会②「SOS の出し方教育」「グループワークトレーニング」「実践報告」

・学習会①の学びの振り返りや学習会③に向けた個人研修

（５）第５回研究会

学習会③「実践報告」

・資料や実践報告を持ちより，学級力向上のための取り組みや各学級の実態に応じた情報交換を行い，学びを深めた。

（６）第６回研究会　秋季教育研究山梨集会の還流報告
統一授業研究会に向けた指導案検討

（７）第７回研究会
研究のまとめ（本年度の成果と課題について，来年度の研究の方向性について）

（８）第８回研究会　授業の振り返り・研究討議
研究授業（事前録画）動画視聴
第３学年学級活動
「学級をさらに高めていこう
～クラス会議を通して最適解を見つけよう～」
＜学級活動（１）ア＞
指導者　日下部小学校　橋本　耀太　教諭

研究のまとめ（本年度の成果と課題について，来年度の研究の方向性について）

Ⅲ　成果と課題

１　成果

・夏季学習会では，講師をお招きした。すぐに実践できる内容で，授業に生かすことができた。今後も継続し，多くのことを学んでいきたい。
・各自の実践報告では，様々な学級，知らなかった実践や情報を知ることができた。また，それを実践することで，自身の学びにつながった。
・指導案検討は，参集してみんなで検討することで，様々な視点を明確にでき学びが深まった。とても価値があるものであり，今後も継続していきたい。
・本部会のテーマである「一人ひとりを大切にした学級づくり」をすすめるには，日頃から安心して意見を言える場や良い人間関係を学級内で築いていくことが大切だと共通理解することができた。
・今年度は，部会で学習した「クラス会議」を授業実践につなげた。子どもたち自身が話し合いをすすめることで，主体的に活動することをねらいとしてクラス会議を行ったが，発言できなかった子どもが発言できるようになり，自分事として話し合いに参加する等，大きな成長が見られた。
・今後も，本部会では，一人ひとりを大切にし，クラスの成長，また子どもの個の成長や変容を実感できる研究をしていきたい。

２　課題

・昨年度は中学校の先生が所属していたが，今年度は小学校のみだった。小学校のみならず中学校の先生にも参加していただくことで相互方向の学びを共有し，小中連携を図っていきたい。
・授業実践では「クラス会議」を行い，対面のコミュニケーションの良さや大切さを学習した。その中で，個での活用が主となるICTの活用と協働的な学びとをどうリンクさせるのか，ICTの有効活用のしかたを，今後検討していく必要がある。
・２年目となった今年度も，学習会を中心に研究を進めてきた。しかし，コロナ禍で研究会や研究授業を開催できない状況になった。今後も，変更を余儀なくされる可能性がある。そのときの状況で柔軟に対応できるようにしていくことが望ましい。

（部長　飯沼 順子）

「自立をふまえて（どの子も共に生き，共に育つ）」
～一人ひとりの実態をふまえた支援と指導のあり方～

Ⅰ　主題設定の理由

東山梨地区の特別支援学級は昨年度より学級が増えている。一学級の在籍状況は学校規模に関わらず一人学級から多学年大人数と様々であり、障害種別も多様である。通級指導教室は山梨市・甲州市に２つずつの４教室である。通常学級においても支援や配慮を必要とする子供が多くおり、一人一人の子供の実態は様々である。このため、支援学級・通級指導教室・通常学級の担任・担当が抱える課題は多様化しており、子供達一人一人の障害の状況や発達段階、その特性に合わせた支援・指導は、共通した研究課題である。

また、今年度の春季教育研究集会において研究テーマは「どの子も共に生き、共に育つ」副テーマは「多様性を認め合い『共に生き、共に育つ』ことをめざして」に決定した。具体的な研究内容としては、

◎各地区で一人一実践など、全員が主体的に研究に参加し、組織研究にあたる。

◎レポート内に子どもたちの変容を記載し、成果と課題を明らかにする。

◎具体的な内容　〔インクルーシブ教育を意識した実践〕

などの内容を研究していくことが確認された。秋季教育研究集会では子供たちの変容から、成果と課題を明らかにすることとなった。

そこで本年度も、授業実践・学習会・情報交換などを通して、児童生徒の理解と支援方法などを模索し、児童生徒一人ひとりの実態に合わせ、自立をめざした支援内容、支援の方法に迫るべく本主題を設定した。

Ⅱ　研究の内容

1　講師を招いて学習会を行い、それぞれの学習内容について理解を深めた。

８月　１０日　「一人一人の実態に合わせた支援」

講師　山梨市立八幡小学校　校長　岡　輝彦先生

2　研究テーマに基づいて、研究授業を行った。

９月　１６日　指導案検討　　日川小学校　三枝　剛　教諭

１月　２５日　研究授業　　特別支援学級　国語科指導案　「たぬきの糸車」

授業者　　三枝　剛　　教諭　　（日川小）

指導・助言者　　岡　　輝彦　校長先生　（日下部小）

3　成果と課題について話し合い、次年度に向けて見通しをもった。

２月　１０日　今年度の成果と課題　来年度へ向けて

Ⅲ　成果と課題

1　成果

【授業について】

・特別支援教育について、授業を通して様々な視点から学ぶことができた。特に、学習に向かう環境をどのように作っていくかということが大切であり、教材やＩＣＴや人間関係作りから工夫していくことを学ぶことができた。

・ＶＴＲでの授業実践を行っていただき、活発な意見交換がなされ、有意義な授業研究ができた。児童の実態に沿った教材研究の大切さを改めて感じた。

・授業研に向けての討議、授業研ともにとても多くの学びを得ることができた。授業者の先生に感謝したい。

・教科指導を中心に、実践の大切さ、また自立活動と合わせよりよい指導・支援が必要なことを自分自身と置き換えながら考えることができたので、これからに生かしていきたい。

・ビデオ授業は、児童の様子がわかり、児童の負担も少なくてよかった。

・他校の実践を聞き、また授業研究を行う中で、特別支援教育の専門性を深めることができた。

・ＩＣＴの活用を見せてもらいよかった。授業研究の中で具体的に学ぶことができた。

【学習会について】

・個人で悩んでいることを他の先生方に聞くことができ、多くの情報を得ることができた。

・岡校長先生からとても参考になる指導助言をいただいた。夏の学習会も参考になった。一人一人の実態に合わせた支援について、改めて児童への関わり方や声かけの大切さを学んだ。

【その他】

・いろいろ難しい状況の中でも、部会を運営、授業実践をしていただきとても参考になった。

2　課題

・統一授業研に向けての話が主になっているが、テーマ（課題や悩み等）を設けて話し合ったり、情報交換したりする機会があるとよい。実践報告もできるとよい。

・教材の共有ができるように、教材のデータベース化ができるとよい。

・オンラインでの話し合いもできるとよい。

・学習会の講師に指導主事を招聘し、最新の情報を学習するとよい。

（部長　　相川　和彦）

福祉教育部会

学校教育における福祉教育のあり方を探る

Ⅰ　研究の内容

1　各校の福祉教育の実践や様々な実践例から学び合う。

2　福祉教育のあり方を探りながら,研究授業に向けて部会員全員で授業づくりを行う。

3　理論研究などを通して，福祉について理解を深める。

Ⅱ　実践・研究授業

1　研究授業

第１学年　学級活動　　加納岩小学校　　中村　咲

（１）題材名　「1くみ　ともだちたくさん　だいさくせん」

（２）ねらい

○自己紹介をし合うことで，友だちをより知り，さらに友だちと仲良くしようとする気持ちを持つことができる。

（３）本時の学習内容

① 学校生活アンケートの結果から，友だちの紹介文を書いたときのことを思い出し，気付いたことを話す。

② 「ともだちたくさんだいさくせん」に挑戦することを知り，めあて（じぶんのことをみんなにしょうかいしよう）を確認する。

③ 教師が「わたしはだれでしょうクイズ」をしたあと，絵本「ぼくのニセモノをつくるには」の読み聞かせを行う。

④ 絵本に出てきた「すき・にがてまんと」（ワークシート）を作る。

⑤「すき・にがてまんと」を見せて，自分のことをグループの友だちに紹介する。

⑥ 友だちに自分のことを紹介したときの感想を伝える。

⑦ これから友だちをもっと増やすためにできそうなことを考える。

（４）研究会より（話し合いの内容と助言）

・導入部分で時間がかかってしまったが，クイズ，マントの見本の提示，読み聞かせという流れで，児童が活動内容をよく理解して取り組んでいた。

・課題の提示の仕方や拡大されたワークシートの掲示物など，児童がスムーズに活動に取り組むための手立てがなされていた。

・児童から「友だちのことが分かった」という，今後につながる意見が出て，先生がその発言を拾いながら次の学習につなげていたところが良かった。

・児童にとって，友だちを知る良い機会となった。

・グループでの発表も，説明をよく聞いていたので，スムーズにできていた。

・児童から「他の人のことも知りたくなった」という声が出てきたが後半の時間が足りなくなった。今後のことにまでつなげられるとよかった。

2　各校の実践報告会

各校の福祉教育の実践から，互いに学び合い，自己の実践に生かした。

塩山南小　「児童会の実践から」（全校）
「教科の学習における他者理解の取り組み」（1学年）
「調べたことを正確に報告しよう」（5学年）

大藤小　「朝の会・帰りの会・係活動における実践」（3学年）
「人にやさしい町づくり」他（5・6学年）

菱山小　「駅舎清掃，アイマスク体験」他（3・4学年）
「みんなが過ごしやすい町へ」（5学年）

奥野田小　「道徳『わたしたちの「わ」』」他（3学年）

松里小　「道徳『はしのうえのおおかみ』」他（1学年）
「特別支援学級における取り組み」（特別支援学級）

神金小　「スポーツを通じたインクルーシブな社会の構築」他（全校）

Ⅲ　成果と課題

1　成果

・広い意味で「福祉」を考えるきっかけになり，様々な角度から福祉教育研究会を学ぶことができた。
・多様な実践報告により，新たな取り組みからたくさんの可能性が感じられた。
・福祉教育を，障害者理解ということだけでなく，「よりよい人間関係づくり」「互いに認め合える心の育成」という大きなテーマとして研究を進められた。
・研究授業や実践発表はとても有意義なので，積極的な活用や，学校全体への普及のためにも位置づけや時間の確保に取り組むことが大切だと思う。
・それぞれの学校で，実態に合わせた工夫を取り入れ，継続させるための取り組みを行っていることが分かった。

2　課題

・コロナ禍で，子ども同士の交流が限られてきてしまっているので，内容や形態を工夫していきたい。
・小学校の先生だけでなく，中学校の先生とも研究を深めていきたい。
・状況が改善されていけば，外部講師を招いて，実践などを聞いてみたい。
・甲州市に比べ山梨市の部員数が少ない。人数のバランスがよくなるとよい。

3　成果物

・統一授業研の授業案
・実践報告学習会で報告された実践

（部長　金井京子）

食教育部会

食生活を考える
～子どもたちのより良い食習慣づくり～

Ⅰ　主題設定の理由

本研究会では，学校教育の様々な場面で食に関する指導の実践を広げ，子どもたちがより良い食習慣を身につけ，健やかに成長していくことを目指している。そのために，学級担任と栄養教職員によるティームティーチングでの授業の進め方や教材教具の活用方法，給食時間における食に関する指導案や指導資料を用いた実践の工夫など，研究を進めている。

授業実践や給食の時間における食に関する指導を学校教育の一環として計画的に進めていくことは，子どもたちのより良い食習慣づくりにつながると考え，本主題を設定した。

Ⅱ　研究内容

1　授業実践

小学校第６学年学級活動

授業者：八幡小学校　森沙帆　教諭　　内藤未久　栄養士

題　材：輸入の多い日本の食事について考えよう

内　容：洋食と和食の２種類の料理ごとに記されているパーセンテージを見て，食糧自給率の低さが自分たちの生活に身近な問題であることを意識させる。この問題について，今のままでよいのか，自分の考えを班で発表し，輸入に頼りすぎるとどうなるのか・食糧自給率を上げるためにはどうすればよいのか等，班ごとに調べ学習に取り組んだ。班の意見を発表した後，JA 北海道中央会の食育教材の動画を見たり，給食では地産地消を進めていたりしていることなどを栄養士から話を聞き，幅広い視野で考えを深める中で，自分たちにできることを考えた。児童の実態に合わせた今日的な課題に目を向けて授業実践が行われた。

2　夏期学習会

（１）講演「SDGｓと有機農業，世界農業遺産。－食，農，環境と歴史・文化，人権をつなぐ－」　講師：恵泉女学園大学教授　澤登早苗先生

（２）生き物調査について

講師：山梨県農務部農業技術課主幹 國友義博 様

（３）有機栽培の畑の見学

①給食と関わる農家さんの畑

②有機栽培のぶどう畑

③地元の中学校と栽培する大豆畑

3　実践発表

内容：昨年度までに作成した「給食の時間における食に関する指導案，指導資料」を実際に活用した実践や今までの取り組みなどを交流し合った。

○実践発表Ⅰ

・神金小（保坂），塩山南小（長谷川），山梨南中（福嶋）

○実践発表Ⅱ

・神金小（小石澤），加納岩小（小林），塩山中（小林）

○実践発表Ⅲ

・日下部小（島田），東雲小（五味），笛川小（山宮）

Ⅲ　成果と課題

1　成果

（1）授業実践

・ICT端末を効果的に活用した実践で，食育の観点はもちろん，ICT端末の活用の観点からも参考になる授業実践だった。

・輸入・食料自給率，という大きなテーマが，栄養士からの話や資料でグッと身近な問題としてとらえることができた。授業の実施が給食週間中であったため，学んだことがさらに意識できる効果的なタイミングだった。

・児童が自分事として施行し，他と対話しながら食生活について考える授業が実施できた。

（2）実践発表

・これまでに作成してきた指導資料が共有できていることで，すぐに活用できよかった。

・各校の実践発表から，さまざまな食育に関わっての実践を知ることができ参考になった。

・給食時間における食に関する指導案と指導資料を実際に活用した一実践を交流し合うことができ，活用の方法や成果を確かめることができた。また，他の学校における活用や実践にもつながり，研究テーマに迫る実践となった。食教育の推進が一層図られた。

2　課題

・地域の産物や，峡東地域が世界農業遺産に登録されたことなどが，まだまだ子どもたちに知られていない。色々な機会に知らせ，なぜ自給率を上げていかなければならないのか，伝える必要がある。

・部会のテーマが広いので，先生方は受け持つクラスの，栄養教諭は受け持つ学校の課題に合ったテーマで授業実践が行えると良い。

・食料自給率を上げるための取り組みの一つとして「地産地消」があるが，もっとSDGsの観点など，様々な角度から考えていっても良かった。

・授業をじっくり検討できるよう、夏休みには方向性を出せるとよい。

・一昨年までに作ってきた食育の指導案・教材等，手軽に誰でも使えるようにしていく。

（部長　福嶋沙織）

研究テーマ「平和・人権教育と国際連帯の広がりをめざして」

Ⅰ　研究の内容

1　テーマに沿った各自の実践の積み重ね

2　実践の共有

3　授業づくり及び検証

Ⅱ　研究の方法

1　テーマに沿った各自の実践の積み重ね

日々の授業において，平和・人権を意識した実践を行う。行った実践を実践例として記録する。

2　実践の共有

各自が行った実践例を持ち寄り，実践報告会を行う。報告された実践について意見交換を行い，情報の共有を図る。

3　授業づくり及び検証

統一授業研究会に向けて，指導案検討を部員全員で行いながら，より良い授業に向けての手立てを考えるとともに，授業を参観する視点を共有する。授業後に研究会を行い，検証を行う。

Ⅲ　研究の経過

５月　７日	研究組織，研究テーマ，研究内容・方向性について
６月１５日	研究計画決定，授業者・一実践決定
８月１０日	夏季学習会（カードゲーム　2030 SDGs）
８月３１日	実践報告（紙面開催）
９月２１日	授業案検討・実践報告
１月１１日	授業案検討・実践報告・県教研還流報告
１月２５日	統一授業研
２月１５日	研究のまとめ・実践報告

Ⅳ　成果と課題

1　成　果

・他教科にわたって横断的に学びを構成することが，「広がり」につながることが確認された。身近な話題が子どもたちの学習につながるということを改めて学ぶことができた。また，小学校低学年から高学年，そして，中学生にまでつながる実践を知ることができた

・夏季学習会では，国際連帯の視点からSDGsに関するカードゲームを実践し，学校現場（授業）で活用できる内容について研究することができた。

・指導案検討では，子供たちに理解しやすく指導するためには，どのような方法が良いかということを先生方と協議することができた。

・一人一実践を行っていることが大きい。子どもたちが本部会の研究テーマである「平和・人権・国際連帯」に触れていく機会をつくれていることが価値ある研究だと考える。

2　課　題

・平和・人権・国際理解に関するテーマで研究を行っているため，一つ一つの内容の深まりが希薄になってしまう部分があったと感じる。

・その教材をどの教科で扱うか，また，時間的なやりくりにも課題を感じる。教育課程に位置付けてあると無理せず取り組むことができる。

・ウクライナ情勢等，どのように子どもたちに伝えていくとよいのか難しい。自分自身も学習を深めないといけないと感じる。

V　成果物

1　指導案

第４学年「持続可能な未来をめざして」～世界がもし 100 人の村だったら～

佐野　理恵（山梨小学校）

◇ねらい：世界の現状を知り，世界と自分はつながっていることに気づき，自分の生活を振り返ることを通して，今の自分にできることは何か，これからどのように行動したいかを考える。

◇資料：「ワークショップ版　世界がもし 100 人の村だったら（第６版）」開発教育協会

2　実践報告資料

第４学年【小】　平和新聞をつくろう	飯室　林　（日下部小学校）
第２学年【中】「自分の好きなこと，やりたいことをＳＤＧｓを通して見てみよう」	広瀬　竜太（勝沼中学校）
第６学年【小】「未来がよりよくあるために」	岩下　城　（山梨小学校）
第２学年【小】“いいところ”みつけ	中村　依里（日下部小学校）
第５学年【小】道徳における実践報告	中山　貴彰（山梨小学校）
第３学年【中】原爆、戦争から平和について考える	金森　淳　（塩山北中学校）
第５学年【小】道徳　ひきょうだよ	望月　泰祐（日川小学校）
第６学年【小】総合「スラム街に暮らす子ども達の現状」	築城　豪佑（菱山小学校）
第２学年【中】英語　Amazing Australia	三枝　洋介（塩山北中学校）

3　県教研リポート

「低学年から取り組む平和・人権教育」　保坂千恵子（八幡小学校）

4　関連資料

① ワークショップ版　世界がもし 100 人の村だったら（第６版）（開発教育協会）

② アイデアシート（ベネッセ）
https://www.benesse.co.jp/brand/about/about_sustainability/pdf/

③ 動画　Benesse 動画で伝わる，子どもが分かる！「SDG’Ｓってなんだろう」
https://www.benesse.co.jp/brand/about/about_sustainability/movie/

④ 動画　worlds language lesson 世界に広めよう 持続可能な開発目標／日本ユニセフ協会
https://www.unicef.or.jp/sdgs/movie.html

⑤ 動画　３分で学ぶ！世界遺産 vol.004　https://www.youtube.com/watch?v=4uX1338ScLA

②　③　④　⑤

（部長　関口　哲也）

「自然との共生」をめざした「環境教育」のあり方

～身近な環境や自然に対して主体的にかかわる子どもの育成～

Ⅰ　研究テーマにかかわって

自然環境は全ての生き物の生活基盤であるが，人間はこれまで自然を破壊し，あたかも人間だけが特別な存在であるかのように自然に対して大きな負荷を与え，再生不可能ではないかと思われるような開発を行ってきた。その結果，地球は，大気汚染，海洋汚染，オゾン層の破壊，地球温暖化，酸性雨，水質汚濁，食糧問題，人口問題，エネルギー問題，絶滅が危惧される動植物の数々…。実に様々な環境問題を抱えるようになった。

これら問題を解決するためには，私たちの生活と自然とのかかわりにどのような問題があるのかという実態を正しく把握し，その原因を追求することが大切である。また，環境問題を引き起こしている社会経済の仕組みも理解し，環境に配慮した仕組みに変革していく努力も大切である。私たち一人一人が，問題解決のために何をしなくてはならないかを考え，実行していくことが必要とされている。

本部会では，まず，私たちが科学的な知識に裏付けられた環境に対する現状認識を深めるとともに，環境問題を自分の課題としてとらえ，主体的に取り組んでいけるような子どもの育成をめざしていきたい。そのためにも，子どもたちが自然に親しみ，自然の素晴らしさや不思議さに気付くことができるような環境学習の機会を重視して，環境に対する豊かな感受性を育んでいきたい。

Ⅱ　研究内容

1　授業研究

第１学年特別活動　「しょくじのあいさつのいみをかんがえよう」

授業者　　坂本　由香　教諭（後屋敷小）

ねらい　・給食は，様々な人の支えがあって，成り立っていることに気付く。

・毎日の食事の中で，自分ができることについて考える。

・食事のあいさつで，動植物の命や食に関わる人々に対して感謝の気持ちを表現しようとする態度を養う。

2　一人一実践

・部会員一人一人が環境教育に関わる実践を報告し，意見交換をする。

3　学習会

（１）講師：中村雅彦校長先生（加納岩小学校）

「環境教育」に関わる実験・工作・講話。

（２）講師：岡嘉弘教授（山梨大学　水素・燃料電池ナノ材料研究センター）

「未来のエネルギーについて考えよう」に関わる実験・演習・講話。

Ⅲ　成果と課題

1　授業研究

９月の統一授業研は，感染症対策のために実際に授業参観ができず，事前に録画した授業の映像を Zoom で参観しながらの研究会となった。画面を通してではあったが，１年生の子どもたちが，食事の挨拶の意味を知り，食事に関わる人々への感謝の気持ちを芽生えさせ，1年生なりにできることを考えようとする学びの過程を見取ることができ，大変有意義な研究となった。また，子どもたちにねらいとする様々な気付きを持たせるために，授業者の坂本先生が労を惜しまず，熱心に作成した教材（ワークシート，動画，絵本，ペープサート等）は，本部会の財産となった。さらに，研究会において，１年生の成長の様子や変容を嬉しそうに報告してくださる坂本先生の表情から，授業がいかに子どもたちの心に残る素晴らしいものであったかを感じ取ることができた。

2　一人一実践

本年度は，生活科や総合的な学習，特別活動，自立活動の多種多様な実践が報告された。本年度もコロナ禍で制限の多い中であったが，工夫を凝らして身近な環境や自然に対してのアプローチを試みたことは意義が大きかった。環境教育にも様々な切り口があることを部員相互に理解し，視野を広げることができた。その中で，環境教育は長期的で継続的に行われる必要があることから，次年度につながる系統的な視点をもって指導を行っていくことが効果的であることがわかった。また，SDGsの考え方やICTの活用などを重視した実践がいくつも挙げられ，系統性を意識したSDGsの取り組みやICTを効果的に活用する方法，実体験の大切さについて，部員同士で共有することができた。

本研究部会が環境教育へのより深い理解や知識を学ぶ場となるよう，今後も研究を進めていきたい。

3　学習会

第１回は，昨年度に引き続き，本部会の指導・助言者の中村雅彦校長先生を講師として，校長先生ご自身がこれまで行ってこられた実験・工作の実践をいろいろご紹介いただいた。ペットボトルを使った浮沈子，目の錯覚を楽しむコマ，空を飛ぶ種子の仕組みを真似たおもちゃなど，子どもたちと共にできる楽しい実践をたくさん教えていただいた。また，中村校長先生には，毎回指導・助言として様々な経験と愛情や知識に裏付けられた温かなご指導をいただき，多くのことを学ぶことができた。

第２回は，山梨大学の水素・燃料電池ナノ材料研究センターの方々にお越しいただき，未来のエネルギーについての学習会を行った。実験・演習・講話と内容の濃い９０分間であった。特に，身近なものを使って，水素を取り出す実験では，「燃料電池」の仕組みを体感することができた。また，グローバルな視点で水素・燃料電池の様々な分野での今後の利活用を教えていただき，環境問題についても見つめ直す良い機会となった。

（部長　梶原　美奈子）

情報化社会と教育・文化活動部会

情報活用能力の育成

I 研究の内容

社会の情報化は急速に進展しており，今後も，社会の情報化はさらに進展し続けると考えられる。このような状況のもと，子供達が「情報活用能力」を身に付け，情報社会に対応できる力を得ていく必要性は，今後ますます高まってくると考えられる。

学習指導においては，情報コミュニケーション技術（ICT：Information and Comunication Technology)を効果的に活用することにより，子供達の学びに向かう力や思考力・判断力・表現力を高め，「わかる授業」を実現することが求められている。また，情報活用能力が「学習の基盤となる資質・能力」と位置づけられ，学校の ICT 環境整備と ICT を活用した学習活動の充実に配慮することとされている。

そこで本部会では，児童の情報活用能力を高めるための研究及び ICT 端末の活用に関する教師の指導力の向上を図るための研究，また，プログラミング教育やプログラミング的思考，情報モラル教育等についての研究も含め，これまでの研究の成果と課題をふまえながら研究を進め，深めていきたい。

効果的な ICT の活用例

- ICT 端末の録画機能を活用して，スピーチの様子などを撮影し，その様子を見直し改善をすることができる。
- 写真や動画機能を用いて記録することで効果的に情報収集を行うことができ，見えにくい情報を可視化できる。
- 表計算ソフトを活用するとすぐに表やグラフ（棒グラフや帯グラフなど）を作ることができる。
- 観察，実験を動画等で記録することで，現象を科学的に分析できる。
- ゲームの様子を撮影した動画を見返し，次のゲームに向けての作戦を考えることができる。
- 自分の考えを ICT 端末に入力し，共有して他者の考えを知りながら，それぞれの考えの根拠に基づき議論することで，多面的・多角的に考えることができる。
- 対象の拡大提示や記録した情報の伝えあいから興味関心や意欲を高めることができる。

2　研究の具体的内容

（１）授業研究（１月２５日）

小学校　第１学年　生活科「じぶんのせいちょうをみんなにつたえよう」

（２）ICT機器を活用した指導の工夫

- 自分の成長を振り返る場面では，１年間で撮影した様々な画像を見て多様な視点から自身の成長を見つけることができるようにした。

・生活科以外の教科指導にもICT端末を利用し，様々な場面で操作技能を習得できるようにした。

（3）検証方法

ア　児童の振り返り，感想

イ　教師の見取り（児童の活動や話し合いの様子，視点，発言）

ウ　成果物の検証・分析

○児童一人一人が発表用に作成したスライド

○児童が授業参観で発表している様子の録画動画の分析

Ⅱ成果と課題

1　成果

・ICT 端末の活用について，各校での実践や取組を紹介することにより，様々な情報を得たり活用方法を見出したりすることができた。自校での実態に応じて活用を考えることにつながった。

・コロナ禍ではあったが，リモートでの研究会，研究授業でのサテライト参観，各自の研究成果の交流など精力的に研究が行われ，学びあったことを各校の児童に還元できたと思うので，大きな成果があった。

・研修会では，講師を招聘し，GIGA スクール構想の今後の方向性や課題点についてお話していただき，求められている能力やその指導法について学ぶことができた。

・研究授業では，小学校１年生という ICT の活用することがまだ難しい学年に対し，を使用した授業を展開し，低学年という発達段階に合わせた指導法を検証することができた。

2　課題

・ICT 端末を活用する効果について様々な知見を得ることができた。しかし，ICT を利用することが授業や教育活動の目的になってはならない。ICT を活用することによって得られる学習の深まりに着目して研究を進めなければならない。

・授業の中で“教科学習としての目的を達成”しつつ，“情報活用能力を高める”ことは容易なことではない。「情報活用能力」とは何なのかをもう一度考え直し，その能力を高める教育活動を探っていかなければならない。

・各校に系統表はあるが，それに準じるだけではうまく利用できないこともあるため，ICT 端末の様々な操作技能の指導をどの学年でどこまで行うかということが非常に難しい。

・ICT 端末の操作技能の習得や操作練度に学年格差や学級格差が生まれないようにするための方法を考えていかなければならない。

Ⅲ研究の成果物

・第１学年　生活科　学習指導案「じぶんのせいちょうをみんなにつたえよう」

・ICT端末の教科における効果的な活用方法の実践例

（部長　五十嵐 祐太）

進路教育部会

一人ひとりにあった生きる力をつけるための進路指導・キャリア教育はどうあるべきか
～小・中における授業実践を通して～

I　研究の方法

・各教科の授業をキャリア教育の視点で実践し，資料を持ち寄り，情報交換および相互的に学習する。

・地域との連携，また職場体験について各校独自の実践を学び合う。

・キャリア教育について小中連携をしながら研究する。

II　研究の具体的内容

1　授業実践

松里中学校　第３学年　国語科　（岡　沙矢佳　教諭）

単元名「自己ＰＲを考えよう　～他者の表現を評価し、自己の表現に生かす力～」

目標　・自己分析と他己分析を通して、自己の強みや良さを理解する。

・自分の考えが相手にわかりやすく伝わるように表現の工夫をする。

2　実践・資料発表

奥野田小	小学校におけるキャリア教育の実践例についての紹介
後屋敷小	小学校におけるキャリア教育の実践例についての紹介
松里小	小学校におけるキャリア教育の実践例についての紹介
笛川中	進路指導の取組についての実践紹介
山梨南中	進路指導・教科におけるキャリア教育についての実践紹介
山梨北中	キャリア教育についての実践紹介
塩山北中	音楽科におけるキャリア教育の実践例について
松里中	国語科におけるキャリア教育の実践例について
塩山中	キャリア教育について，学びの集会を通した実践紹介
勝沼中	総合的な学習の時間におけるキャリア教育の実践例について

Ⅲ　成果と課題

成果

・小中の情報交換の場となり、連携の糸口になっていて大変勉強になった

・実践の交流だけでなく、ざっくばらんな意見等も交わすことができ、意義深い進路学習となった。

・授業をリモートでも参観できたのが大変意義深かった。

・各校の実践指導を聞くことで、有意義な情報交換の場となった。

・それぞれの実践を学べて、今後の進路学習に良い指針となった。

・小中の取組を互いに学べたこともよかった。

・小中学校の情報交換の場になってよかった。

・様々な角度・視点からキャリア教育について情報交換をすることができ良かった。

・キャリア養育、進路指導、小学校の実践を、項目を分ける中で先生方の実践を聞くことができてよかった。

・小学校と中学校の情報の交流ができたのはとても良かった。

課題

・小中それぞれに参加人数（部員数）が増えるとよいと思う。

・中学校は各校一名参加しているので、小学校の先生にもう少し参加していただけると、研究に深まりが出てくるのではないか。

理論研究に基づいた実践について

・参集での授業実践ではなかったが、リモートで実際に実践をしているところを見て学ぶことができた。

・小中学校が互いに実践を持ち寄ることで、共通理解できた内容も多くあったので、このまま継続したい。

・子どもたちの成長のためにはどのような力を付けさせることが大事なのか話し合うことができた。

・授業実践、学年集会、総合的な学習の時間、職場体験等、多くの実践から学ぶことができた。

・進路学習は様々な場面からアプローチできるということが分かって勉強になった。

Ⅳ　成果物

・中学校３年生国語科レポート

・各校実践レポート

（部長　水上　陽介）

保護者・地域住民との提携部会

地域とともにある学校づくりをめざして

Ⅰ　研究の内容

1　研究の方法

（１）研究の柱

・学校と保護者，地域との関わり方・提携の方策について

・学校・子どもたちが地域の人々や保護者とのつながりを生み出す実践

・研究成果の共有（情報発信も視野に入れる）

（２）部員は各校の実践を通して，子どもたちの変容，問題点，悩みなどを提案しそれについて討議し研究を深める。

常任講師の先生方に，常時ご指導・ご助言をいただく。

（３）保護者・地域との提携について，授業実践を通し研究を深める。

2　実践発表・授業研究・夏季学習会の紹介

〔実践発表…各校での保護者・地域住民と提携した教育活動や行事の実践〕

（１）岩手小学校

・「福祉のこころ醸成事業」（世代間ふれあい活動）の実践

（工作教室・グラウンドゴルフ・福祉講話・昔遊び・花いっぱい運動）

（２）大和小学校

・地域住民と連携した取組

（地域清掃活動・グラウンドゴルフ大会・学習成果発表会等）

（３）山梨小学校

・ろう学校との交流活動

（交流持久走大会・焼きいもまつり・ぶどう農作業体験・校外学習・租税教室等）

（４）塩山北小学校

・保護者との連携活動

・コメリ緑資金ボランティア活動

（５）祝小学校

・保護者・地域と連携した取組

（オリエンテーリング集会・ぶどう栽培支援・創立150周年行事）

（６）菱山小学校

・菱山小コミュニティ・スクールの概要と方向性

・県農業技術課と連携した４パーミル・イニシアチブの取組

（７）勝沼小学校

・地域の施設・商店・ぶどう農園等と連携した地域学習

（３年社会科の地区探検・２年生活科のまちたんけん）

〔授業研究〕

（１）小６道徳科（大和小：廣瀬尚子先生）※昨年度実践した授業を８月に視聴＆研究会

主題名：国や郷土を愛す【伝統と文化の尊重，国や郷土を愛する態度】

実践の概要：教材を通して，献身的に祖国のために尽力する人物について学んだ。合併する中学へ進学する児童たちに，どのような思いを持ち続けることが地域の存続・発展や伝統の継承につながるのか，GTや児童同士の交流によって多面的・多角的に考えさせていった。

（２）小４国語科（日下部小：武藤有希先生）

単元名：わたしたちが考える“日下部ぼうさいブック”を書こう

実践の概要：社会科で「防災」について学習したことを基に，自分たちで地域の“ぼうさいブック”を作ることを目標に掲げて取り組んだ。「地域の人たちのため」という目的意識を持たせ，自分事として取り組めるよう工夫したことで，児童はたいへん意欲的に取り組んだ。

〔夏季学習会〕

テーマ：「これからの教育について考える」

講　師：内田智之先生（SDG's ネットワークやまなし代表，元塩山中学校校長）

○講師の内田先生に，保護者・地域住民との連携，コミュニティ・スクール，SDG's 等，本部会のテーマに絡めた題材をたくさんご提供いただき，これからの時代に必要な教育について考える有意義な学習会となった。

Ⅱ　成果と課題

1　成果として

○各学校の実践発表を行い，情報交換ができた。各校の特色を生かした実践が，部会員各校の教育活動の参考となった。地域や保護者を巻き込んだ活動の良さをこれからも大切にしていきたい。

○授業研究を通して，いろいろな工夫やアイディアによって，保護者・地域と連携したすばらしい教育活動を展開できることが実証された。

2　課題として

○コロナ後の状況を見据え，学校と保護者・地域はどのように連携し，何ができるのか，多面的・多角的な視点を持って研究を進めていきたい。

○教員の働き方改革につながる，保護者・地域との連携の在り方を探っていきたい。

Ⅲ　成果物

○各校の実践レポート

○小６道徳科実践の教研レポート

○小４国語科学習指導案

（部長　志村克人）

教育条件整備部会

「豊かな教育を子どもたちに」

Ⅰ　研究内容

1　研究内容の具体的内容と方法

（1）甲州支会と山梨支会に分かれ，それぞれの課題について研究をすすめた。

ア　甲州支会…「豊かな教育を子どもたちに～私たちができる働き方改革とＳＤＧｓ～」

○予算分析・教育環境実態調査

○働き方改革へのとりくみ

○ＳＤＧｓへのとりくみ

イ　山梨支会…「豊かな教育を子どもたちに」

○子どもの居場所づくりの条件整備と就学保障…山梨市出前講座，教育環境実態調査

○業務改善と条件整備…働き方改革調査，結果や課題点の共有

○事務職員の職務・勤務条件…学校運営についての相互学習会

○ICT の活用・環境整備と授業改善…校務支援システム，一人一台端末の活用度調査

○保護者負担軽減と教育予算要求…予算分析，学校予算重点項目，教材費無償化

（2）『東山梨教育研究６１号』内の「教育行財政及び教育環境の実態」を担当し，調査を実施。調査前には留意事項を全体で確認し継続調査を実施した。教育環境の実態把握と改善点を探り，調査の活用を考える。

Ⅱ　成果と課題

1　成　果

（1）甲州支会

昨年度作成したグランドデザインを基に３年間の研究計画の２年目として研究を行った。特に働き方改革(業務改善)への取り組みのひとつとして，今年度は３校へ学校訪問をさせていただき，実際に見学させていただくことで他校の状況や各種取組についても学び，さらに見学後はグループ討議を利用したことで多くの学びを深めることができた。

（2）山梨支会

春季教研で決定した５つの研究の柱に沿って研究をおこなった。「働き方改革」について各校のとりくみを共有し合い，相互学習をおこなった。毎年おこなっている「予算分析」に加え，今年度から導入された「教材費無償化」についての調査・情報共有・検討を重ねた。また，山梨市の出前講座を通して，市長ふれあいトークをおこない，山梨市の学校予算や教育事業について学びを深めることができた。

（3）全体として

分散会形式で支会ごと研究をおこない，各市における課題を明確にし，それぞれ継続している研究を更に深めることができた。甲州市は，市文書管理要綱が施行されたことによる事務処理について・学校で働くすべての職員への働き方改革，みんなが活き活かされる社会を作るための SDGs などの研究を昨年度に引き続きすすめてきた。それぞれの学校での実践や課題を意見交換しながら研究をすすめることができた。山梨市は，働き方改革・ICT 活用・教材費無償化についての調査をとおして，市内小中学校の課題や改善点について情報共有をおこなった。あわせて，予算に関わる継続的な研究をとおし，

採用年数や年齢に関わらず，全部員の共通理解のもと，学校事務職員の専門性を高めあうことができた。

2　課　題

（1）甲州支会

２０１５年度より学び各自が実践をする「５Ｓ活動」のノウハウを活かした新たな「ＳＤＧｓ」の学習を行うことができず研究を深めることができなかった。また，継続して研究をすすめている「予算分析表・差引簿」を利用した研究も書面での検討となってしまったため，予算分析や共通予算差引簿の活用を通して，先を見越した財務管理の定着化を図ることができなかった。また，今年度は管理職が不在であったことにより具体的な指導をいただくことができなかったため，来年度は参加を希望する。

（2）山梨支会

前年度決算・当初予算推移の結果分析は継続してとりくみ，効果的な予算執行へ繋げていきたい。また，市当局にも教育条件整備の重要性をより認識していただく必要があるので，粘り強くとりくみをすすめたい。今年度の反省を踏まえて，実態に応じた課題解決に向けてもとりくみをすすめていきたい。

（3）全体として

継続して予算分析をする中で，両市とも厳しい財政が続いているのが明らかである。調査等を活用し，予算要求や私費負担軽減へ繋げていきたい。甲州市では経験の浅い事務職員が多い中で，他校の業務改善への取り組みを直接目でみて学んだことで自校での取り組みの向上を図ることができた。また様々な課題への取り組みは共同学校事務室との連携により推進できた。山梨市は，継続研究している前年度決算・当初予算の分析や，相互学習会を通して，事務職員や市内小中学校全体に関わる共通理解・課題の共有化に繋げることができた。

各市が抱える課題に対して研究を支会ごとに進めているが，学校事務職員として学校運営に関わっていかなければならないことに変わりはなく，両支会の研究発表や情報交換を通じて共通理解を持ち，教育条件の整備を目指していきたい。

Ⅲ　成果物

1　甲州支会

○予算差引簿・分析ファイル

○文書マニュアル（文書収受簿・文書発送簿）

○新予算要求書（学校配当予算分・市教委執行予算分）

2　山梨支会

○学校配当予算分析表，学校配当予算一覧表，学校配当予算・決算一覧表

○「働き方改革・ICT 活用」について

○「教材費無償化調査・執行額」について

（部長　　七海めぐみ）

豊かな学びを創造するゆとりある教育課程の編成と実践

I　研究の内容

1　研究の方向性

新学習指導要領が全面実施され，子どもたちの学力向上に対する期待が高まっている。私たちは，「何を学ぶか」ではなく，「どのように学ぶか」を改めて問い直し，自主創造的な教育実践を積み重ねることによって，これらの声に対する結果を出していかなければならない。子どもたちに「ゆたかな学び」を保障していくために，質の高いカリキュラムや実践を創造していくことは，私たち教職員の使命である。子どもの実態をふまえ，教材の活用や授業の展開を徹底的に検討することに加え，カリキュラムや授業プランを工夫して，その内容や方法を創り変えていく必要がある。すべての子どもたちに，学び合いの中で「学びの意欲」を喚起させる「わかる授業」「楽しい授業」を創造するために，日々，目の前にいる子どもたちの実状に合わせたカリキュラムを追究し続けていかなければならない。

本部会ではこれまでに，主にカリキュラム編成の工夫について総合的な学習の時間を中心に研究を進めてきた。部会員全員がそれぞれの実践を持ち寄って意見交換を行い，総合的な学習の時間における指導の工夫や可能性について討議を重ねてきた。新学習指導要領においては，「基礎的・基本的な知識・技能の習得」と「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成」によって学力向上を図ることが示されているが，時間数が削減された総合的な学習の時間においては，各教科で学んだ知識や能力を生かすことによってその成果を高めることが期待されている。そこで本部会においては，総合的な学習の時間だけにこだわらず，他の教科での実践も視野に入れ，自主編成によるカリキュラムの工夫について研究を進め，検証結果を日常実践に還元していくことを目指している。

授業実践においては，多角的な視点をもって教材や単元を分析しながら「どのように教えたらよいか。」「どういう授業を展開したら効果的か。」を模索していくことを基本とし，定められた指導計画によるものではなく，「教科書“で”教える。」という意識を大切にしながら，自主創造的学習プランを策定して実践を進めていく。

そのために，次の３つの視点を重視して，成果の検証にあたる。

（１）授業（単元）における，「子どもにつけさせたい力」は何かを明らかにする。

（２）授業（単元）において，授業者が「自主編成した部分はどこか。」「工夫したところや作り直した点はどこか。」を明らかにする。

（３）授業（単元）のふり返りや分析を丁寧に行い，成果と課題を明らかにする。

授業の分析においては，授業の様子を撮影した画像・映像の効果的な活用と，子どものノート・作品・感想記述などを，時間をかけて多角的に分析していくことによって，子どもの変容をみとり，成果と課題を明らかにしたい。本部会としては，すべての子どもたちの「学びたい」という意欲を引き出す工夫と，すべての子どもに「豊かな学び」を保障していくことによって，結果として子どもの学力の向上にもつながるように，内容や方法を捉え直す努力を積み重ねていきたい。

2　研究授業と各教科などにおける個人実践発表

○総合的な学習「ＳＤＧｓを総合的な学習の時間や授業で意識させるために」
山梨北中：飯島　聖華　教諭

○国語科「伝統工芸の良さを伝えよう」　祝小：小宮山公仁　教諭

○外国語科「パフォーマンス課題に向けて」　加納岩小：藤木真里佳　教諭

○理科「生物の世界」　山梨南中：窪田　勇治　教諭

○社会科公民的分野「ちがいのちがい」　山梨北中：永関　幸玄　教諭

○数学科「三平方の定理」　塩山中　：前田　大輔　教諭

○総合的な学習「よりよい自己実現に向けて」　山梨北中：前島　香織　教諭

研究授業

○総合的な学習「ＳＤＧｓ17の目標について調べたことを発表しよう」
山梨南中：大芝　笑美　教諭

※　指導助言　奥野田小：　古屋　宏記　校長
塩山南小：　山縣　重人　教頭

Ⅱ　成果と課題

1　成果

○すべての先生方が児童の実態・様子を見取り、どういう力をこどもにつけさせたいのか考え、自主編成を行うことができた。スモールステップ、単元の計画の工夫、教科発展型学習、ＩＣＴの活用等、授業者が工夫したところや作り直したところを明らかにして研究を進めたことは互いに大きな刺激となった。

○本部会の３つの視点を重視して実践を行っていくことにより，子どもたちの成長はもちろん，先生方の授業に対する考え方が鍛えられた。

○小中連携という観点から、「小学校においてどのような学習や指導を行っているか」、また「中学校ではどうなのか」という情報交換が行えるので、児童生徒を指導したり授業の教材研究をしたりする上で参考となった。教科の枠がないので，広く学ぶことができた。小中それぞれどのような学習をおこなっているのか知る機会となり，とても有意義であった。

○現在の喫緊の課題でもあるICT端末活用に焦点化され情報交換がしやすかった。

○校種の枠を超えた実践発表を聞くことが出来、学びが深まった。

2　課題

・振り返りや分析をより丁寧に行い、成果を他の授業でもどう活かしていくのか、課題点は次回どう改善してみるのかを更に意識できるようにして研究を進めていきたい。

・授業研がサテライト方式で行われたため、教室で生徒たちの学びの様子や教師の動き等を直接見られなかったことが残念だった。

・講師招聘などをしながら，総合的な学習の時間の授業づくりについて勉強できる機会があってもよかった。学校の教育活動の中に総合を位置づけるとき，学校行事との兼ね合いもありなかなか探求的な学習にならないという実情ではあるが，授業づくり自体を学ぶことには価値がある。

・部会員をもう少し増やして、情報交換をより活発にできるといい。

（部長　前島　香織）

教育評価研究部会

「生きる力」をはぐくむ評価のあり方

Ⅰ 主題設定の理由

本部会ではこれまで，子どもたちに『生きる力』をはぐくむため，子どもの学ぶ意欲や学びの過程，学びあう人間関係づくりを大切にし，社会に出て生きる力につながる『ゆたかな学び』を保障していくことに焦点を当て教育研究活動を進めてきた。子ども一人ひとりの『ゆたかな学び』を保障するためには，各学校における児童・生徒や地域の実態に応じた教育課程の編成・実施や，それに伴う指導法の工夫，指導の振り返り改善，適切な評価と支援など，様々な重要な要素が考えられるが，本年度も日常行っている評価を見直し，児童の学び・変容を丁寧に見取り，具体的・積極的な評価を行うことで次の学習活動への意欲を高め，確かな学力の定着をいっそう図りながら『ゆたかな学び』を保障していきたいという考えにたち研究を進めてきている。

Ⅱ 研究の内容

1 研究の方向性

令和４年度も，引き続きコロナ禍で直接的な対話に制限がある中において，書くことを通しての交流や学び，視覚化しての学びなど，学びのスタイルも工夫しなければならない現状であったが，評価については多教科に関わった OPP やノートの利活用など負担にならず継続して取り組める評価方法を検証し確認することができた。

2 研究授業

◇ 本年度も，部会員の先生方の授業実践の報告・検討を中心にして研修を深めた。

◇ 令和５年１月２５日（水）に飯島　恵先生（加納岩小）の算数科「かけ算の筆算を考えよう」の研究授業を行った。

Ⅲ 成果と課題

1 成果

・「生きる力」をはぐくむ評価のあり方を研究テーマにし，これまで１枚ポートフォリオ評価やワークシートによる学習とその評価，ノートを活用した学びとその評価に加え子ども同士による評価等もあり，児童の実態に応じた工夫された評価の実践が見られとてもよかった。

・学習者の評価である１枚ポートフォリオを活用することで授業者の評価も行うことができることを確認できた。
・昨年度の研究授業を使った映像を使った研究会により，児童の回答や反応に対する教師の言葉・態度（評価言）が，その後の児童の活動や意欲に大きく影響している様子から，本部会で研究してきた評価言の力を指導者が意識して授業することの大切さと効果が実証された。
・研究授業では，授業の様子をビデオで振り返ったり，サテライト方式で配信したりすることができ，学ぶところも多かった。コロナ対策にもなった。
・実践の交流で先生方の工夫や技術や理論を学ぶことができた。
・お互いの実践を持ち寄ることで，いろいろなポートフォリオについて学べたり，評価言について自分の実践を振り返ったりすることができた。
・新学指導要領の本格実施に伴う児童のよい点や進歩の状況を見取り，過程を重視した評価のあり方をポートフォリオ，評価言を中心に継続的な研究がなされ，確かな学力，豊かな人間性を向上させる実践がなされている。
・単元や年間を通した一人ひとりの児童の学習状況や変容（成長）を見る上で，ポートフォリオ評価が効果的であることが実証された。

２　課題
・教育評価の研究を継続していくにあたり，今年度実施した評価に加え１人１台端末を活用した評価（デジタルポートフォリオ等）も考えていくのもよいのではないか。
・「評価」という枠組みの中で引き続きいろいろな形態を研究・実践していけたらよい。
・働き方改革も含め，評価の３観点（「知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力の育成」「主体的に学習に取り組む力」）について，ポートフォリオ等を使っていかに効果的で効率的な評価をしていくか。
・ポートフォリオの記入をもとに，どう指導を改善するか。（評価と指導の一体化）全児童をＢ評価まで上げる手立てと指導の改善にどう評価を生かすのか。
・今までの研究を土台により簡単に児童の学習状況や身についている知識・技能、変容等を的確に把握し，評価や指導の改善に役立てられる評価方法の研究と，自分たちで効果を実証できた評価手法の外部への啓発を図っていく必要がある。

３　今年度も研究で確認できた評価の実績
・ポートフォリオ評価を活用した児童の実態把握に基づいて，授業づくりを組織的に行うことができた。

（部長　山下　陽子）

教育協議会研究

【ブロック交流研究会研究】

山梨南ブロック　・・・・・・　１１９

山梨北ブロック　・・・・・・　１２０

笛川ブロック　・・・・・・　１２１

塩山ブロック　・・・・・・　１２２

塩山北ブロック　・・・・・・　１２３

松里ブロック　・・・・・・　１２４

勝沼ブロック　・・・・・・　１２５

【特別部会研究】

児童会・生徒会活動の活性化にむけた研究会　・・・１２６

ICTの活用と小中連携

Ⅰ　主題設定の理由

同じ地域に学ぶ子どもの教育に携わるという立場で，共通課題を確認し，講演会・授業参観を通して系統的によりよい指導が行えるよう，本主題を設定した。特に，GIGAスクール構想によるICT端末の導入を受けて，ICTの活用に重点を置いた。

Ⅱ　研究の内容

1　第１回交流研究会（講演会　於：山梨南中学校）

（１）日時　令和４年５月１８日（水）１５：３０～

（２）目的　教員のICT端末操作技能と指導力向上のため

（３）内容　講演会

演題　「ICTの活用と小中連携～道具としてのスキルや学びとしてのスキル～」

講師　山梨県教育庁義務教育課　指導主事 古屋達朗先生

2　第２回交流研究会（オンラインによる情報交換会及び山梨小学校授業視聴）

（１）日時　令和４年１１月１１日（水）１４：００～

１５時までに各校において山梨小学校の授業動画を視聴

（２）目的　小学校の教職員が，中学校の授業を参観し，小中の連携の視点から意見を交換し合い，今後の教育活動に生かしていく。

（３）内容　ア　授業参観　山梨小学校第５学年

イ　情報交換会

Ⅱ　成果と課題

1　成果

・ICT端末を使用した学習会では，先進校の実践事例を多く知ることができた。授業において，いかに児童生徒同士をつないでいくことができるかを考えていく時代に入ったことを共通理解することができた。

・第２回目の交流研究会では，山梨小学校で事前にビデオ収録・編集した授業を各校で視聴した。ICT端末が活用された授業で，各校における活用状況と比べながら見る貴重な機会となった。さらに，情報交換会では活用事例を交流し，有意義な小中連携の場となった。

2　課題

・第２回ブロック研の情報交換会において，低・中・高学年グループに分けた。来年度は，児童会生徒会・家庭学習・学活・生活総合とグループ分けして一人一台端末の活用について情報交換することを検討したい。

（ブロック長　藤木　真里佳）

山梨北中ブロック交流研究

研究主題　　「小中の連携を深め，山梨北ブロックの児童・生徒の指導に生かす」

Ⅰ　主題設定の理由

山梨北中ブロックの児童･生徒を健全に育てるためには，普段交流の機会の少ない小･中の教職員が共有の活動や話し合いを持ち，教育上の課題を見つけ，より良い解決の方法を探り，連携を深めることが必要だと考える。

本ブロックでは，これまでも同じ地域で学ぶ子どもたちを共に教育するという立場から，共通の教育課題に対して講師を招き，学び合いを行ってきた。その取組を通して，目の前の児童・生徒の指導に生かせる有意義な内容であったと成果を確認し合うことができた。また，小･中の授業参観や研究会についても継続して行ってきたが，児童・生徒の実態の理解が深まると共に，発達段階による特性や各校の特色，学力向上の取組などを交流し合うことができ，その意義を実感できたところである。

今年度も，学習会と授業参観・研究会という交流研究により，本ブロックの児童・生徒理解と小・中連携を深め，各校の指導に活かしていきたいと考え，本主題を設定した。

Ⅱ　研究の具体的内容

1．第１回交流研究会

（講師が岩手小学校にて講演し，その様子を岩手小学校から各校に配信して実施）

(1)日時　令和４年５月18日（水）　午後３時30分から

(2)演題　「ICTの効果的な活用にむけて」

(3)講師　山梨県総合教育センター　情報教育部　指導主事　飯窪　優 先生

2．第２回交流研究会

(1)目的　情報交換を通して，小中の連携を強化し今後の教育活動に生かしていく。

(2)日時　令和４年11月16日（水）　午後２時から

(3)場所　山梨北中学校の授業の様子を各校に配信して実施

(4)内容　授業公開と情報交換会（山梨北中２年生「ビブリオバトル」を各校に配信）

Ⅲ　成果と課題

1．成果

・様々な参考になる実践や教育活動にいかせるサイトも紹介していただき，今後に生かせる内容だった。積極的に利用していきたいものであった。

・それぞれの学校の課題について，情報交換をすることができたのはよかった。中学校から小学校への要望もわかったので，これからの指導に生かしていきたい。また，進学に向けての方向性を共有でき，他の小学校の様子も聞くことができたのでよかった。

2．課題

・２回の交流研究会をオンラインで行った。接続の状況が悪かったり，教師と生徒，生徒同士の交流様子などが詳しくわからなかったり，オンラインで行う難しさも感じた。

・山北ブロックでの，１人１台端末の家庭への持ち帰り状況を知ることができた。小中連携の１つとして，課題の出し方や提出方法についてブロック内で検討していけるとよい。

（ブロック長　　岩下　亜希子）

笛川ブロック交流研究会

「小中連携を図るために，小中学校児童生徒の児童理解について」

Ⅰ　主題設定の理由

同じ笛川地区で学ぶ児童・生徒をともに教育していく立場から，小中学校の授業参観・交流会を計画，実践していく。こうした活動から，教師間の連携を深め，児童生徒への理解を図るとともに，系統的な教育活動を目指す。

Ⅱ　研究の内容

1　第１回ブロック交流研究会

（１）児童・生徒の実態把握について（学習面・生活面の様子）

ア.意図的，計画的な補充的学習の徹底
（習得・定着・活用，さわやかタイムの活用など）

イ.家庭学習の取り組み状況（家庭学習の習慣化）

ウ.生徒指導上の情報共有

（２）今年度行う取組

ア.授業規律の徹底（小中連携「学習のきまり」）

イ.家庭学習の取組（小中統一したマイノートへの取り組み）

ウ.他にできる取り組みについて
・英検，漢検の合同実施，小中合同引き渡し訓練の実施　等

2　第２回ブロック交流研究会（録画・オンラインによる小学校授業公開）

（１）児童の実態把握について（授業の様子，児童情報共有も含めて）

（２）給食指導について

Ⅲ　成果と課題

1　成果

○中学校での第１回ブロック交流研究会では，中学校の生徒の様子を詳しく聞くことができた。自学ノート（マイノート）の取り組み状況や，各学年の取り組んでいる内容を具体的に知ることができた。中学校へ繋げていくために，学習規律の徹底や伸ばしていきたい力などについてもしっかり共有することができた。

○生徒指導上の情報も，詳しく共有することができた。現段階での中学校へ向けての小学校での課題などについても話し合い，確認することができた。

○小学校での第２回ブロック交流研究会では，６年のみオンライン授業参観，その他の学年は録画での授業参観を実施した。特に，６年生での授業では，小中連携の学習規律に基づいた実践を，中学校の先生方に参観してもらうことができた。その上で，更に質を高めていくために必要な手立てなど，具体的な指導について共通理解することができた。

2　課題

○小中共有で始めた家庭学習の内容については，内容・質に個人差があり，今後指導を継続する必要がある。

○オンライン参観は,今後も実施されると考えられるので,音声の問題を解決したり，黒板と生徒の様子両方を見られたりするような，オンライン参観の方法を考える必要がある。

（ブロック長　笠井　裕弥）

塩山ブロック交流研究会

「新学習指導要領の完全実施を受け，小中の系統性をつかみ授業に生かす。」

Ⅰ　主題設定の理由

新学習指導要領が完全実施となり，義務教育９年間の教育活動を理解した上で，その指導の系統性の検証が必要である。また，小中連携は，「地域とともにある学校」づくり，塩山学校区の生徒指導上の諸問題に対応していく目的も担っている。塩山ブロックにおいても，小学校・中学校の教職員が共通理解を深め，同一の課題意識のもと，子どもたちの育成にあたることが必要となる。そのため，地域が抱える教育課題を共有し，教育課程の系統性も確認しつつ，今後の教育活動に生かしていけるよう，本主題を設定した。

Ⅱ　研究の具体的内容

１　第１回ブロック交流研究会「GIGA スクール構想　ICT 端末活用事例の学習会」

（１）日時　令和４年５月 18 日（水）１５：３０～１６：３０

（２）目的　ICT 端末を活用した実践を紹介し合い，「主体的・対話的で深い学び」の実現につながる『ICT 端末の効果的な活用』をめざした授業改善を目指す。

（３）内容　４つの分科会に分かれて学習会を行った。①学校行事，児童会・生徒会　②中学校・小学校高学年③小学校中学年③小学校低学年

２　第２回ブロック交流研究会「塩山中学校授業公開及び情報交換会」

（１）日時　令和４年１１月６日（水）１４：００～１６：３０

（２）目的　中学校の授業を参観し，分科会の中で交流を図る中で，塩山中学校区の課題を明らかにし，小中連携して子どもたちを育てていく。

（３）内容

ア　塩山中学校の授業及び「スタンバイの時間」の様子を参観する。

イ　分科会に分かれ，話合いの柱について情報交換・意見交流を行い，小学校・中学校が連携した教育実践が進められるようにする。

Ⅲ　成果と課題

１　成果

・各学校で昨年度 ICT 端末を活用した実践を紹介し合い，その活用方法について学習した。ICT 端末の効果的な活用の仕方などについて研究を深められた。共通する課題について意見交換することもでき，授業改善に生かすことができた。

・テーマ別に行った情報交換の場では，各校の取り組みや課題が話され，子どもたちにこれから必要な指導のポイントが確認できた。塩中学区の教員が同じベクトルで児童・生徒を育てていくことためには，とても有意義な時間になった。

２　課題

・ 情報交換の時間をより多く確保すると共に，他の分科会の情報交流をする場を設定する必要がある。そのために，各校の実践を甲州市の共有ドライブで共有・活用するなど働き方改革の視点としても改善していきたい。（ブロック長　池田　理恵子）

塩山北中ブロック交流研究会

「小中の連携をはかり，塩山北中学校区の子どもたちを育てていこう」

Ⅰ　主題設定の理由

塩山北中ブロックでは，これまで「地域で子どもを育てていこう」という考えの実現に向け，教職員同士の連携を図ってきた。多くの児童が同じ中学に入学し，同級生となっていく。このようなことから地域の様子や子どもの実態を知る上で小・中の連携は，不可欠である。児童から生徒への成長や，既習の学習内容・授業規律などを知り，児童・生徒同士，教師同士，児童・生徒と教師の交流を図ることで，一人一人により教育効果の高い教育活動を行うことができる。学校・地域・保護者の連携の必要性が求められている中で，中学校区全体で塩山北中ブロックの児童・生徒を育てていこうと考え，本主題を設定した。

Ⅱ　研究の具体的内容

1　第１回ブロック交流研究会

（１）日時　令和４年５月１８日（水）１５：３０～１６：００

（２）目的　児童生徒の実態把握と小中連携について理解を深める。

（３）場所　塩山北中学校

（４）内容

ア　授業参観（全学年）

イ　情報交換（中学校の様子・小中連携）

ウ　部活動見学

2　第２回ブロック交流研究会

（１）日時　令和４年１１月１６日（水）１４：００～１６：００

（２）目的　児童生徒の実態把握と小中連携について理解を深める。

（３）場所　玉宮小学校

（４）内容

ア　授業参観（全学年）

イ　情報交換（小学生の様子・ＩＣＴ端末活用について）

Ⅲ　成果と課題

1　成果

感染症対策を行いながら授業参観を実施し，各校の様子を知ることができた。情報交換会では，小学校で身に付けてほしいことや一人一台端末の活用について交流することにより，小小・小中連携を深めることができた。また，各校の児童生徒の様子を共有することで，小規模校の実態が明らかになり，指導に活かすことができた。

2　課題

新型コロナ感染症の状況を見ながらではあるが，授業参観は次年度以降も実施していきたい。ICT 端末を活用することで，各校の連携がとりやすくなるのではないか。また，授業隣地研修や地域学習会も取り入れ地域を知ることも必要である。

令和６年度末に塩山北中が閉校することから，ブロック交流についての方向性を考えていく必要がある。

Ⅳ　研究方法の工夫

感染症対策や議論の活発化のため，ブロックに分け少人数での情報交換を行った。

（ブロック長　　大島　めぐみ）

松里ブロック交流研究会

「同じ地域に学ぶ子どもたちの教育のために，

小・中・地域の交流と連携を深めよう」

Ⅰ　主題設定の理由

○同じ地域に学ぶ子どもたちを教育する立場で，地域が抱える教育課題を共有し，その解決に向けた指導に結び付ける。

○地域との連携を強化し，「地域の子供は，地域で教育する」という視点で地域の教育力向上を図る。

○小学校・中学校の連携を強化し，小・中の系統的な教育の在り方を研究する。

Ⅱ　研究の具体的な内容

1．　第１回ブロック交流研究会【松里中学校で参集での実施】

内容：５クラスでの授業実践，「ICT端末の活用の方向性と課題」についての協議

2．　第２回ブロック交流研究会【松里小学校でリモートでの実施】

内容：７クラスでの授業実践，「ICT端末の活用の成果と課題」についての協議

Ⅲ　成果と課題

1　成果

・児童生徒の実態について情報交換ができ，小中それぞれの指導に役立てることができた。また，小・中の職員が集まって情報交換を行い，全職員で地域の子を見守り，育てるという雰囲気ができた。

・共通のICT端末の効果的な活用方法を話題にしたためか，視点をもって授業実践や協議をすることができた。また，異校種や他校での活用状況を知ることで，見通しをもって，今後の指導に生かしていこうという決意の場にもなった。

・参集（第１回）とリモート（第２階）での授業参観を行ったため，双方の良さや課題点を実感した。研究会や情報共有の場の持ち方を今後も工夫していきたい。

2　課題

・小規模学区でありながら，小学校・中学校の教員が交流を持つ機会があまりはない。そのため，ブロック研で初めて話をする方もいて，深い話ができていないのも現状である。教員同士がつながりをもって小中連携の意識を高めていきたい。

・現在は発達段階によるICTスキルの違いを知ることができたり，指導方法を学ぶことができたりしている。しかし，児童・生徒の義務教育９年間の見通しをもって，どのように指導するかという視点で協議をしていく必要がある。

・ブロック交流は，小中が合同で１つのことに取り組める時間として，来年度以降，ブロックの課題への対応も視野に入れて，内容を検討していきたい。

（ブロック長　雨宮友久）

勝沼ブロック交流研究会

甲州市「確かな学力」育成プロジェクトとの連携を図りながら，同じ地域に生活する児童・生徒に対する系統的な教育の在り方を考える。

Ⅰ　主題設定の理由

「地域の子どもは，地域で教育する」という基本理念のもと，同地域の子どもの育成に携わる教職員が，甲州市の「確かな学力」育成プロジェクトとの連携のもと，小中の系統的な教育の在り方を研究するために本主題を設定した。

Ⅱ　研究の内容

1　第１回ブロック研究会（会場：東雲小学校　）

（1）日時　5月18日　15：30～16：40

（2）内容

ア　東雲小学校の授業の様子や学校行事などをＶＴＲで参観

イ　３つの分科会に分かれ，校内研究，学習・生活習慣，ＩＣＴの活用等について交流学習会

2　第２回ブロック研究会（会場：勝沼中学校　体育館）

（1）日時　11月16日　15：15～16：40

（2）内容

ア　講演会（学習会）【講師：山梨大学大学院　総合研究部　医学域基礎医学系(社会医学)教授　山縣然太朗先生　テーマ「健やかに生きる　～メディア依存からアウトメディアへ～　」】

Ⅲ　成果と課題

・ICT への取組について，同学年の情報を得ることができ大変参考になった。これからも情報交換を行うことで，どの児童生徒もどの教員も同じように活用していけるとよい。

・大和小児童が勝沼中学校への進学初年度だったこともあり，どの小学校も新１年生の話を聞くことができよかった。

・情報交換が当たり障りのない内容になる傾向がある。小学校から中学校へ（逆も）要望等の話ができるとよい。

・「ブロック交流」という場なので、もう少し各校の先生方と交流する場面を作ることができるとよい。さらにつながっていく取組が図れるとよい。

・授業観察が厳しい状況で短時間の研究会なので，参集せずリモートでの研究会も可能ではないか。（授業参観は行いたい。リモートと参集の在り方を考えていく。）

（ブロック長　　小林淳子）

児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究会の活動

Ⅰ　研究の内容

1　活動目標

ア　助け合い・ボランティア活動・環境問題・平和を守ることなどに対する活動を活発にします。

・社会奉仕活動を推進します。

・身体の不自由な人への関心を高め，積極的に協力します。

・平和と環境を守る活動に関心を高めていきます。

イ　教育祭「子ども・保護者・教職員の会」を成功させます。

ウ　私たちの声を，県や市町村に強く要望していきます。

以上の目標を立て，本年度取り組んでいきました。そして，代表者会，子ども・保護者・教職員の会の開催，古切手やベルマーク集めなど県の児生連活動にも参加協力していきました。

2　経過報告

６月１６日（木）	東山梨地区　児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究会 （東山梨地区　第１回顧問の会（山梨北中学校）） 第１回県代表委員会（県立図書館）
７月　１日（金）	
７月　５日（火）	東山梨地区　児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究会 （東山梨地区代表者会（山梨市民文化会館））
１１月　８日（火）	東山梨地区「子ども・保護者・教職員の会」（山梨北中学校）
１１月１７日（木）	アフリカ飢餓救援活動（お米・募金）しめ切り
１月２７日（金）	古切手・ベルマーク等の最終しめ切り
２月２２日（水）	第２回県代表委員会（県庁） 知事（教育長・県議会議長）と語る会　要望書提出（県庁）
２月２８日（火）	東山梨地区　児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究会 （東山梨地区　第２回顧問の会（教育会館））

Ⅱ　成果と課題

1　地区児童会・生徒会活動の活性化に向けた研究会［地区代表者会］（山梨市民文化会館）

コロナ禍ということもあるが，人数を制限しながら今年度も学習会を実施してきた。学習会では，「環境によい・自然にやさしい」と言われることは本当にそうなのかということをテーマに植原彰さんを講師にお迎えし，共に考え，意見を発表し合いました。その中で，地域との交流がとても大切だが，コロナ禍ということもあり，関係が希薄化しているところもあるので各学校で考え，実践していって欲しいという宿題をいただいた。とても難しい宿題で，１年でその答えを見つけることはできないと感じていたので，各学校で今後の課題として取り組んでいこうといている。

2　東山梨「子ども・保護者・教職員の会」（山梨北中学校）

分科会では児童会３分科会，生徒会２分科会の５分科会に分かれ，研究討議が行われた。参加した児童生徒自身が，各自に任された係分担をしっかりとこなしながら，学び合う場となった。それぞれの提案校からは，児童会・生徒会活動の実践報告が文書資料やパワーポイントを利用してなされた。各校とも素晴らしい実践発表であった。また，実践発表をもとに各校の取り組みの様子などの意見交換が活発に行われた。全体会は短時間で行い，今後の主な活動である古切手・ベルマーク回収など例年行っているボランティア活動に加え，県児生連から提案されたウクライナ支援金への参加についての提案がされた。感染症対策として，児童生徒の参加人数を絞り，保護者の参加もご遠慮いただいたが，参加した子どもたちにとっては学び多き会となった。

3　第２回県代表委員会　知事（教育長・県議会議長）と語る会（県庁）

本年度は，中学３年生の入試に関わって日程が調整され，２２日（水）に開催された。東山梨支部の代表として，山梨北中と菱山小の会長が参加した。

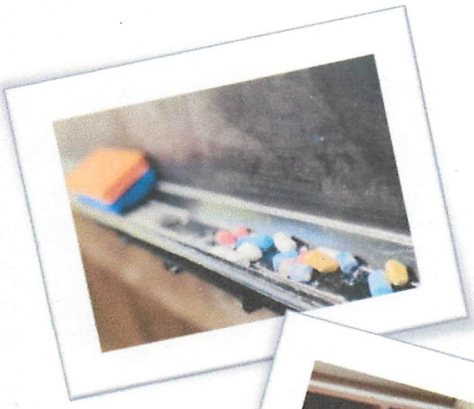
4　ボランティア活動について

本年度も様々なボランティア活動に各校協力していただき，以下のような成果であった。

・アフリカ救援米	**611,38 kg**	・輸送費募金	**244,990** 円
・古切手	**43,855kg**	・ベルマーク	**2,475 kg**
・ウクライナ支援金	**444,967** 円		

各校の取り組み及びご協力に感謝したい。

（ 児童生徒連絡協議会担当　椚　　加奈 ）



学 校 経 営 研 究

小学校経営研究会（健康・体力部会）　・・・・・・・・１２９

小学校経営研究会（情報・環境教育部会）　・・・・・・・・１３１

小学校経営研究会（連携・接続部会）　・・・・・・・・１３３

中学校経営研究会（生徒指導部会）　・・・・・・・・１３５

人の生命と尊厳を守り，健やかな心身を育む教育

生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質や能力を育てる教育活動の推進

Ⅰ　はじめに

スポーツは，体を動かしたいという人間の欲求であるとともに，爽快感，達成感，他者との連帯感等の精神的充足や体力の向上や精神的なストレスの発散，生活習慣病の予防など，心身両面にわたる健康の保持増進に重要な役割を果たすものである。特に，小さい頃に体を動かす楽しさやスポーツに親しみを覚えることは，生涯にわたってのスポーツ習慣の形成に非常に重要である。しかし，近年の急速な情報通信技術の発展による社会環境の激変やコロナ禍による生活環境の変化により，子ども達が運動やスポーツに接する機会や場が激減し，体力・運動能力・コミュニケーション能力の低下が大きな課題となっている。また，文部科学省のスポーツ基本計画では，自己の適性等に応じて「する」「みる」「支える」「つながる」等の時代により多様化する価値観に対応したスポーツへの関わり方を提唱しており，校長として今求められているスポーツの在り方を熟知する必要がある。

これらを踏まえ，心身の健康に重要な役割を果たすスポーツを生涯にわたって親しませるために，子供たちにどのようにしてその資質や能力を育てていけばよいのか，校長として学校経営の視点から学校教育全体を通じて考えていきたい。

Ⅱ　研究の概要

1　研究のねらい

現在求められているスポーツの在り方を踏まえ，子ども達が生涯にわたり豊かなスポーツライフを実現するために必要な資質や能力を育てるための効果的・具体的な教育活動を実践研究し，学校経営に生かす。

2　研究計画

一年次（令和２年度）

各校の体力向上の実践の共有と課題把握

二年次（令和３年度）

豊かなスポーツライフ実現に向けて有効な学校内外の教育活動の検討

三年次（令和４年度）

（１）スポーツ基本法から現在求められているスポーツについて把握

（２）各校の実践事例の共有と学校経営のあり方の検討

3　研究方法

３本の研究の柱（学校内の取組・学校外の教育資源の活用・スポーツのすばらしさを知る）に沿って各校で実践研究を行い，それを発表し意見交換を行う。

4　研究内容

【柱１】日常的な運動活動の在り方（校内）

・運動会や持久走など各種行事を，感染症対策を講じながらｗｉｔｈコロナの運動活動を模索している。単にコロナ前に戻すのではなく，実施する意義の確認や活動内容も検討しながら進めている。

・各校で「〇〇小タイム」として，日常的な運動に取り組む時間を設定し実施している。運動用具の充実や児童会活動とリンクさせるなどの工夫もある。

・県の事業「目指せやまなしチャンピオン」「いきいき教育地域人材活用事業」などを活用することで，教員の準備の負担なく取り組みがスタートできる。また，児童も他校の記録と競うことで，運動への興味や向上心が養われる。

・学校経営の視点として，体力の向上だけでなく児童が達成感や満足感を得られることを大切にしたり，過密な取組は職員や児童への負担につながるだけでなく，感染症対策のほころびにもつながるため校長として配慮したりしている。

【柱２】地域・外部機関と連携したスポーツのあり方（校外）

・老人クラブと連携しグランドゴルフを行い，スポーツとしての楽しさだけでなく，お年寄りとの交流を深めるメリットがある。

・スポーツ少年団との連携について，当該校を練習会場する各種競技の代表者と協議中。校内に各種スポ少のチラシを展示するなど，地域の情報を児童へ提供している。

・CS の取組として「学校応援団」「持久走大会ボランティア」等を募り，地域住民に運動活動の協力を求めている。

・遊びを通じて子どもたちに多様な運動経験をさせているアクティブ・チャイルド・プログラム（山梨市 ACP クラブ等）との連携を推進していく

【柱３】豊かなスポーツライフに向けた教育

・地域ゆかりのオリンピック選手等を学校に招き，スポーツの良さや郷土愛を養う。

・廊下や図書館などに，スポーツ選手の活躍した記事や各種スポーツの紹介などを掲示し，スポーツの知識とやる気の醸成を図る。

・道徳教育でオリンピックなどの競技映像を鑑賞し，スポーツの良さを知る。

・一緒に「遊べる」「遊ぼう」などと誘い合える人間関係づくりも重要である。

Ⅲ　まとめと課題

長年，向上し続けた体力テスト結果が，コロナ禍の３年間で低下した。今まで通りの体育授業や休み時間の運動だけではなく、県の事業や他校の実践例を活用し，教師や児童に負担のない取組をすぐに実施すべきである。その際，近年のスポーツは，体力向上に加え他者と関わる機会としての役割を強く期待されている。学校外の人材・組織・施設を活用し，スポーツを通して多くの人々とのつながりを校長としてプロデュースすることが求められている。また，オリンピック・パラリンピック選手・アスリートの生き様やスポーツの経験は，目標に向かい努力する大切さ・仲間との絆・あきらめない心など，子ども達の人生観に大きく好影響を与える。小学校での豊かなスポーツライフに向けた教育は，必須であり教育課程にしっかりと位置づけるべきである。　　（部長　深澤　勉）

社会の変化に主体的・創造的に対応する情報教育，環境教育の在り方
～未来社会を見据えながら，情報社会を主体的に生きる子供を育む情報教育の推進～

Ⅰ　はじめに

近年の情報化の進展や科学技術の発展はめざましく，単に生活の利便性が高まるばかりではなく，Society5.0 に向けて社会の在り方自体が大きく変わろうとしている。新学習指導要領において，小学校でのプログラミング教育の実施が必修化された背景にも，こうした未来社会に向けた流れがあることを考えると，子供たちが身に付けるべき資質としての情報活用能力は，より広義に捉えていく必要がある。そうした中，校長には，「21 世紀に求められる資質・能力」として，ICT を効果的に活用しながら，プログラミング的思考などの論理的思考力の育成につながる情報活用能力を子供に身に付けさせ，現在の情報社会から更にその先の社会への展開を見据えて，主体的・創造的に生きる子供を育む情報教育を推進していくことが求められている。

Ⅱ　研究の概要

本甲州市においては新型コロナウイルス感染症拡大による GIGA スクール構想の急速な進展もあり，令和 2 年 12 月には全小中学校に一人一台の ICT 端末が配備された。本研究では，甲州市（旧塩山市）内小学校の情報教育の現状を情報交換するとともに課題を明らかにし，「情報教育」の推進に向け，校長として果たすべき役割と指導の在り方について研究を進め，3 年目となる。

1　研究方法

（1）情報教育の推進についての学習会開催

・県内外（甲州市）の情報教育の動向・状況。　・ICT 端末の効果的な活用事例。

（2）各校の事例報告を基にした研究協議

・ICT 機器の整備状況・実践事例の情報交換。　・プログラミング教育の推進。

（3）情報活用能力育成に向けて

・教育課程への情報教育の位置づけ。

・コンピュータ・リテラシーと情報モラルの習得にむけた取組。

・教員の ICT 活用能力と指導力の向上に向けた研修。

2　研究の具体的内容

（1）情報教育の推進についての学習会開催

「今，学校に求められている情報教育」

講師：中村　英彦(峡東教育事務所 主幹・指導主事)

・GIGA スクール構想の位置づけ。「J カーブ効果」の視点を持ち，ICT 端末の使

用頻度を上げること。

・ICT 端末により，一斉で協働する同期・集合（単線）型の授業から，協働と個別が同時に存在する，非同期・分散（複線）型の授業への転換をめざす。

（2）各校の事例報告を基にした研究協議

・タイピング練習（学校・家庭）と日常的な AI ドリルの活用。

・全校で活用可能な MEXCBT の，積極的且つ効果的な活用について。学力調査の CBT 化を視野に入れての取組。

・市内全小中学校で年 2 回実施している hyper-ＱＵを，令和 4 年度から ICT 端末を使ったＷＥＢ-ＱＵに移行。実施直後に結果がわかるメリットを最大限に活かし，各校で分析し，学級づくりに活かす。

・甲州市教材共有ドライブ（端末教材 400 本）の効果的な活用により，教材研究の効率化，個々の職員のスキルアップを図る。

・県「深い学びの実現に向けた ICT 活用推進事業」推進校（塩山北小）の取組。

・各教科の授業・教育活動・特別支援教育での実践事例。

・夏季休業中の ICT 端末全児童持ち帰り。(AI ドリル，オンライン顔合わせ会等)

・GIGA StuDX メールマガジン（文科省・全職員加入）を，ICT 端末の利活用に活かす。

（3）情報活用能力育成に向けて

・児童の ICT 端末使用時に生じた問題への対応。システムの改善と同時に，情報モラルについて指導を行う。(職員：市 ICT 担当業者による情報モラル研修)

・県「GIGA ワークブック」を基に市指導主事が端末用に作成した資料の活用。

・校内研による ICT 活用能力（プロラミング教育）の研修と実践。

・市 ICT アドバイザーによる効果的なサポート。

・ブロック交流研究会において，小 1～中 3 までの ICT 端末の系統的な指導内容について共通理解を図った(小中連携)。

Ⅲ　まとめと課題

各校から提案された ICT 機器の整備状況や活用事例，プログラミング教育を含む情報教育推進に関わっての課題等について共有することができ，自校の状況を振り返る上で参考になった。また，中村指導主事を招聘しての学習会により，甲州市の小学校における情報教育のねらいや方向性，求められている授業の在り方，ICT 端末を家庭で活用する具体的な方法等について情報共有することができた。

課題としては，ICT 端末の更なる効果的な活用方法，毎日の持ち帰りによる端末使用の日常化，指導力の向上，働き方改革に繋がる利活用，保護者と連携した情報モラル教育（含スマホ）等，系統的・組織的な取組が求められる。特に，ICT 機器を活用しての授業改善は喫緊の課題である。来年度以降も，学校管理職として組織的に取組を推進していきたい。　（部長　中村直人）

「地域の特性を踏まえ，教育力を高め会う学校・家庭・地域等との連携の在り方」

～地域の特性を踏まえ，家庭・地域等と連携した“地域とともにある学校”づくりや異校種間の学びの連続性を重視した教育の推進～

Ⅰ　はじめに

甲州市では，平成２８年度より令和２年度にかけて全小中学校１８校(R5 年より 17 校)が段階的にコミュニティ・スクールに移行した。そこで本研究は，今後，各小学校がコミュニティ・スクールとなるための具体的な取組について協議し，教育力を高め合う学校・家庭・地域等の連携の核となる学校運営協議会の設置に向けた準備や設置初期の取組について整理し，その推進に向けた際の一助なることを目的として行った。

Ⅱ　研究の概要

１　研究のねらい

学校・家庭・地域等の連携の核となる学習支援型コミュニティ・スクールの準備期・設置期・設置初期の取組を整理して，成果と課題を洗い出し，持続可能な推進に向けた際の一助とする。

２　研究内容

①学校・家庭・地域等が持続可能な連携・協働を図る取組を教育課程へ位置づける。

小学校６年間を見通した「学びの地図」(例示（資料１－１）と（資料１－２))を作成し，「学びの地図」を基に，「単元構想」や「授業展開」(例示（資料２－１）や（資料２－２))を構想して実施する。

（資料１－１）学びの地図（各教科）

学年	ねらい	1学期		
		4月	5月	6月
低学年 1年	『地域の人とのふれあい』 ○生活科の学習を中心に，子どもたちの身近な自然環境や地域素材を生かした学習活動を取り入れ，地域の方と触れ合う経験をする中で地域の良さを体感できるようにする。	『きせつとともだち』 ・地区探検（生活科）		
低学年 2年		『大きくそだてみんなの野菜』 ・夏野菜の育て方（生活科）		

（資料１－２）学びの地図（特別活動等）

	ゲストティーチャー	
ねらい	○多くのゲストティーチャーとの交流を通して，児童が様々な人たちに見守られていることを実感するとともに，専門的な知識・技能に触れることにより，生きた本物の体験を通して，豊かな学びの創造と学習活動に対する興味・関心を高める。	○さまざまなふれあい・交流を通して，郷土を愛する心を育てる。（郷土）
4月	ふるさと学習会（全校）	甲州公民館
	講師を招いての和太鼓練習（年４回実施）	諏訪神社
	交通安全教室（全校）	
	校外学習（３年　森林学習・相撲甲・景徳院）	諏訪神社

（資料２－１）単元構想

第４学年　総合的な学習（単元構想）

単元名	自然災害について調べよう（全２０時間）
教材名	・地域で過去に起きた自然災害について調べよう ・自然災害から命を守る取り組みについて調べよう ・自分たちにできることについて考えよう
単元目標	○自然災害から地域の安全を守るための諸活動について，必要な情報を調べてまとめる技能を身に付ける。 ○自然災害から地域の安全を守るための諸活動の特色や関連機関や人々の協力を捉えて，考えたことや選択・判断したことを表現する力を養う。 ○自然災害から地域の安全を守るための諸活動について，地域社会に対する誇りと愛情，地域社会の一員としての自覚を養う。

（資料２－２）授業展開

(1) 日時　11月上旬
(2) 場所　4年教室
(3) 目標　郷土の良さを再発見し，郷土を愛する心をもつことができるようになる。
(4) 評価　・郷土のよさがわかる。（道徳的価値の理解）
・郷土のよさについて，様々な視点で考える。（多面的・多角的に考える）
・郷土のことをもっと知り，自分たちの手でよりよくしていこうという意識を高める。（自分の生き方に結びつけて考える）
(5) 展開

時間	学習活動・発問と児童の反応	◇教師の働きかけ　・支援　☆評価
導入	1　自分たちの「郷土への思い」について，共通課題を持つ。	・社会科や総合的な学習の時間に学習した方法を思い出し，郷土のよさを確認する。
5	○私たちの郷土のじまんは何ですか。	・自分たちが取り組んでいる郷土公民館について，どんな思いで取り組んでいるか，意見を出させる。

「地域の特色を踏まえ、

教育力を高める学校・家庭・地域・地域住民との連携の在り方」

～地域の特色を踏まえ、家庭・地域と連携した"地域とともにある学校"づくり～

隣接校間の学びの連続性を確保し、人数増の適正

1　はじめに

平成14年度、平成24年度より令和2年度に分けて全小中学校18校(85年度より11校)
学校評価にコミュニティ・スクールを行う。そこで本格発足、今後、各小学校ごと
コミュニティ・スクールを各々の具体的な取組について協議し、教育力を高める合う学校・
家庭・地域の連携の強化をする学校運営協議会の設置に向けた準備や施設配置計画の策定について
検討し、その推進に向けた第一歩とすることを目的として行った。

2　原案の概要

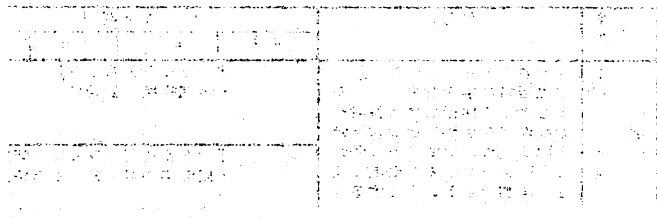
1　学校の規模

学校・家庭・地域等の連携の核となる学習支援型コミュニティ・スクールの運営
施設配置・配置計画の原案を提案して、地域と議論を深め、推進計画を策定に向け
た第一歩とする。

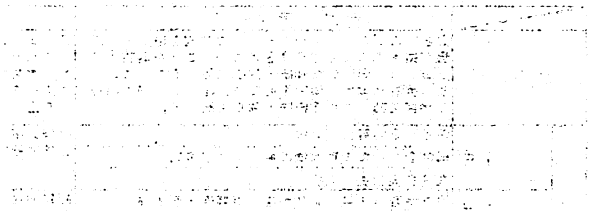
2　検討内容

①学校・家庭・地域を対象可能な環境・施設を図る取組を教育課程へ位置づける。
小学校6年間を見通した「学びの地図」（別冊（資料1－1））と（資料1－2）を
作成し、「学びの地図」を基に、「単元構想」や「接続関係」（別冊（資料2－1））や
（資料2－2））を編成して実施する。

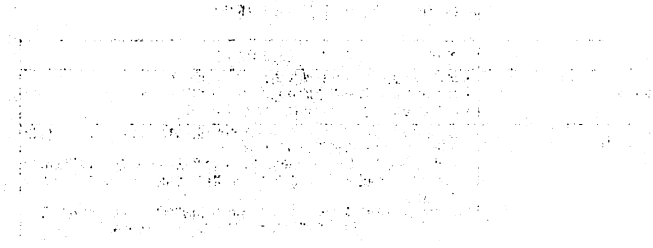
（資料1－1）学びの地図（全教科）



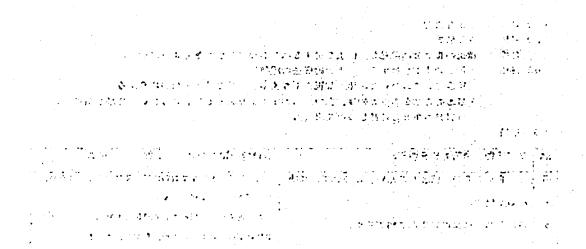
（資料1－2）学びの地図（学級活動等）



（資料2－1）単元構想



（資料2－2）授業展開



②ボランティアの整理と拡充を図る。　（資料３）

学校の教育活動のボランティアを，学習を中心に学校と連携・協働する「学習支援ボランティア」と，環境整備や登下校の見守り等の支援をする「学校支援ボランティア」に整理し，学習支援ボランティアを（資料３）として整理し，各学校ともボランティアの確保と効果的な活用を行う。

学習支援ボランテ

【１年】

No	ﾌｧｲﾙ	教科等	実施時間	支援内容	おな
1	1				る

ボランティアの募集については，学校運営協議会が依頼する場合や各学校が独自に募集をかける場合，市教育委員会の学校支援ボランティア事業本部へ学校が要請をする場合などがある。

③学校からの情報発信について

学校からの情報発信の方法は，学習成果発表会や講師等へのお礼の手紙の配付，地域へ感謝の花を贈呈するなどの方法や，学校だよりとして発出する方法がある。学校だよりの発出については，甲州市役所の支所へ依頼して，毎月，地域の広報へ差し込む形で，学校経営方針や教育活動，学校運営協議会の情報等の周知を学区の全家庭に行う。

Ⅲ　成果と課題

①持続可能な学習支援型コミュニティ・スクールを実現する校長の役割の明確化

ア　学習支援型コミュニティ・スクールの取組を学校経営方針へ位置づけ，小学校６年間を見通した教育課程の編成を行うこと。

イ　学校運営協議会委員に，育てたい子ども像や学校経営方針を提案し共通理解を求めたり，学校運営に協力を要請したりすること。

ウ　学習支援ボランティアの掘り起こしを行うこと。

エ　学習支援型コミュニティ・スクールの取組を学校評価の PDCA サイクルにより改善すること。

②今後の課題

ア　With コロナや ICT 端末の利活用，SDGs などの変化する社会状況の視点を加えた「学びの地図」の見直しを行うこと。

イ　学習支援型コミュニティ・スクールに対する学校運営協議会委員との共通理解を図ること。

ウ　学習支援ボランティアの掘り起こしと人材の効果的な活用を行うこと。

エ　学校と学習支援ボランティアとの打ち合わせの時間を確保すること。

オ　中学校と学びの連続性を重視した教育の推進を図ること。

本研究を通して，今後は，これらの課題を解決し，地域の特性を踏まえ，学校・家庭・地域等が教育力を高め合う持続可能な連携・協働を図る，学習支援型コミュニティ・スクールを推進していきたい。　（部長　加納光太郎）

中学校経営研究会

好ましい人間関係を築き，他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成する特別活動，部活動の在り方

Ⅰ　はじめに

東山梨地区の中学校は現在７校あり，山梨市３校，甲州市４校である。少子化に伴い生徒数は減少の一途をたどり，４校は中規模校（山梨２・甲州２），残り３校(山梨１・甲州２)は各学年単級の小規模校である。甲州市の中学校は令和４年度に５校から４校となり，令和７年度には３校へと統合が予定されている。地域のまとまりは強く教育力もあり，非行などの問題行動は少ないが，不登校などの生徒は年々増えてきている。そんな中，特別活動や部活動は，集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築き，人間としての生き方について自覚を深め，自己を生かす能力を養うための重要な役割をもつと考える。

Ⅱ　研究の内容

１　研究のねらい

東山梨中学校校長会研究部会の研究テーマを「自他を敬愛し他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成する生徒指導の充実」に設定し，東山梨地区における各校の実態を基に研究を進めてきた。本研究部会のテーマ「好ましい人間関係を築き，他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成する特別活動，部活動の在り方」について各校の実態を基に研究を進めてきた。

２　研究の概要

①　各校の実践例

ア　校長としての関わり

学校経営の明確なビジョン，リーダーシップ

イ　マネジメントや人材育成の観点

校内指導体制の構築，特別活動推進委員会や生徒会顧問団への指導

ウ　生徒や保護者，地域の変容把握及び改善

学校評価等を活用し成果と課題を明らかにし，次年度の学校経営方針策定の改善

②　塩山中における取組

ア　自己指導能力における課題

・自己肯定感を育むこと
・互いの良さを認め合い，自信を育むこと
・自分自身の言動に責任を持ち，協力・協働する姿勢を育むこと

イ　課題解決のための手立て

・自己肯定感の育成を目指すため，校長としての重点方針の明確な提示
・自他の敬愛，他者との協働による自己実現を図り活動展開，教育課程の見直し推進
・自分の役割と責任を認識し，自己有用感をもてる生徒主導の活動を仕組む

・職員の力を引き出し，職員が主体的に生徒に働きかける環境づくりの推進

ウ　成果と課題

〈成果として〉

・生徒会スローガンの制作

生徒総会にて全校生徒で掲げたスローガンは個々の力で心を燃やしながら視野を広げて相手の気持ちを考え，周りの仲間と協働していくという願いが込められた。

・平和，人権を学ぶ集会

平和や人権を考え，学び合い，高め合える活動を生徒主体で行いたいとの提案が生徒会主任からあり，世界で起きている戦争やコロナによる差別から平和や人権問題へと発展させ，いじめ問題を自分事として捉える集会を行った。生徒会役員を中心に資料を活用し生徒の考えを発表し合い，協働して校内の気運を高めた。また全校生徒の意見をタブレット端末に掲示してお互いの考えや価値観を認め合う場を設定した。

・共同絵画の制作

生徒一人一人がみんなのために協働して行う活動として特別活動主任から共同絵画の制作の提案があり，校長として職員も一緒に取り組むよう提案した。全校生徒が参加する行事を終えた後に，みんなのために頑張った姿を模造紙一枚の絵画に入れ込み，各学級や縦割り班ごとに完成させた。生徒の感想には，「集団が一つになれた，生徒と先生も一緒に制作し一体感が生まれた，頑張る姿を見て感動した」などがあった。

〈課題として〉

・生徒の自己指導能力において意見発信を教職員から生徒のリーダー，全校生徒の一人一人に段階的に発信させ，より一層主体的に考え行動するように活躍を広げたい。

・活動で生じる様々な課題を解決するために，人間関係づくりや集団づくりの力をいっそう育んでいく必要がある。今後も一人一人の個性や能力，発想力を生かして主体的に働きかけ合う取組を推進していきたい。

Ⅲ　成果と課題

1　成果

生徒の自己指導能力育成のために，自他を敬愛し，他者と協働しながら自己実現を図る活動を継続させる実践を各校で行ってきた。

・校長としての関わりで学校経営の明確なビジョンをもちリーダーシップを発揮した。

・マネジメントや人材育成の観点から校内指導体制の構築を行うとともに，特別活動推進委員会や生徒会顧問団への指導を行った。

・生徒や保護者，地域の変容を把握し改善するために，学校評価等を活用し，成果と課題を明らかにし，次年度の学校経営方針策定に生かし，改善した。

2　課題

今後も校長として，生徒の自己指導能力育成のために，自他を敬愛し，他者と協働しながら自己実現を図る活動を継続させ，実践を推進していきたい。

（研究部長　那須文彦）

学 校 運 営 研 究

山梨市学校運営研究会　・・・・・・・・１３７

甲州市学校運営研究会　・・・・・・・・１３９

学校運営協議会制度の導入・運営に向けて
－ＣＳ導入・運営・推進への教頭の関わり－

Ⅰ　はじめに

山梨市では，平成２８年度に笛川小に学校運営協議会が設置された。そして令和３年度には，笛川小に笛川中を加え，新たに小中合同の学校運営協議会が，また，市内全小学校に学校運営協議会が設置された。さらに今年度からは，山梨南中と山梨北中にも設置され，市内全ての小中学校に学校運営協議会が設置された。そこで，ＣＳの円滑な導入・運営・推進に向けて，一昨年度，課題別研究のテーマを「学校運営協議会制度の導入・運営に向けて」-ＣＳ導入・運営・推進への教頭の関わり-と設定し，３年間の研究をスタートした。研究の３年目である今年度は，市内全小中学校で導入されたＣＳの運営・推進について，研究を深めていくこととした。

Ⅱ　研究のねらい

学校運営協議会制度は，地域と学校が課題を共有し，目指す子ども像，地域像に向かって「連携・協働」していくためのものである。そのためには，それぞれの学校や地域が持つ特色や教育力を指導に生かしていく方策を熟議する必要がある。そこで，市内全小中学校に設置された今年度は，導入・運営・推進等に関わる成果や課題を共有しながら，今後のＣＳの運営・推進をより円滑にしていくことができるよう，教頭の役割を検討し，整理していくことをねらいとする。

Ⅲ　研究内容（三年計画の三年目）

１　第１回学校運営協議会の実施状況

・各学校において４～６月に，地域住民・保護者・学識経験者・学校職員等が参加し，開催された。全ての学校で，教頭が協議会の日程や場の設定，連絡調整，資料の作成，会の運営等を行った。

・協議会では，進行を教頭または教務主任が担当し，会を進めた。役員選出後は選出された役員が議長となり，学校経営方針や学校・地域の課題等についての話し合いが行われた。

・各校での熟議の主な内容として，『児童の様子（学力・家庭学習・不登校・あいさつ等）について』『コロナ対策とそれにかかわる教育活動』『一人一台端末・ICTの活用について』『教職員の働き方改革について』等があった。

２　ＣＳ運営・推進に関わる主な成果（○）と課題（●）

○昨年度，学校運営協議会がスタートし，本校における課題と活動の方向性が確認され，その方向性にもとづいて，今年度は具体的な活動を進めるところまで前進することができた。現在進めている主な活動は，次の２つである。

①世代間ふれあい活動

地域のお年寄りと本校児童とが交流する行事であり，学校運営協議会にも積極的に関わっていただいている。活動を教育課程に位置づけて運営している。

②学校・地域の安全への取組

従来からの，子ども１１０番の家や，セーフティパトロール隊による活動に加え，今年度より，児童の登下校の安全確保に向けて，地域の方の「ながら見守り」運動をスタートさせた。保護者家庭や地域にも文書を配布して協力を呼びかけている。

●地域の特性を考慮する必要がある。各地区の結び付きが強い所もあればそうでない所もある。また，多様な考えを持った方も多い。一つの活動に協力をお願いしていくにも，そうしたことを考慮しながら進めていくことが大切であり，迅速に活動に移していくことが難しい。同時に，ＣＳをどういった機関と認識すべきなのか再確認する必要があるとも感じた。学校が抱える課題に対して，その課題解決のために，自ら積極的に行動しようとしてくださる意識の方もいれば，積極的に行動するのはあくまで学校で，ＣＳは諮問機関であるという意識の方もいる。学校と共に二人三脚で歩いてくださるのがＣＳの姿だと考えていた学校側としては，正直，期待していた姿と異なっている面があると感じた。

●学校運営に積極的に参画していただいているが，委員の大半が高齢者である。地域の実情を詳細まで知り得ている方々で，非常にありがたいが，反面，多様な考え方を学校運営に反映させ，時代の流れに柔軟に対応させ，「新しい形の学校運営協議会」の活動を進めるという点では，後継者の育成が急務である。

●学校職員は数年で変わってしまうので，委員の中に学校と地域をつなげ，コーディネートしていただける方が必要であると感じる。

Ⅳ　研究のまとめと今後の課題

各学校での取り組みの現状を共有する中で，ＣＳの導入・運営・推進に関わる成果と課題が明らかとなってきた。課題として，ＣＳによる活動の教育課程への位置づけや人材の確保，教職員・保護者・地域への周知等が挙げられる。今後は，課題解決に向けて各校で取り組みを検討し，それを情報共有していく中で，効果的で持続可能なＣＳの運営・推進につなげていきたい。特に，ＣＳの導入に伴う学校（教頭）の業務の増加については大きな課題である。今後，無理のないＣＳの取り組みを行うために，焦らず，小さく立ち上げ大きく育てるイメージでやっていくことが大切ではないかと考える。まずは，地域や保護者に学校を知ってもらうところから始め，既存の取り組みを活かしながら運営をしていきたい。また，いずれは，運営を地域に返していくことも必要であろう。ＣＳ導入が，学校の負担している業務（本来なら家庭や地域で行うべき業務）を地域に任せるきっかけとしたい。各校の特色を活かし，保護者・地域との連携を密にするとともに，市内学校間で情報・資料等の共有を更に積極的に進められるよう，今後も研究を深めていきたい。

（課題別研究部長　岩下秀人）

教職員の年代に応じた専門性を高めるために
～OJTの実践と教頭の関わり方を通して～

Ⅰ はじめに

学習指導要領の目標を具現化するためには，チームとしての組織的な学校体制づくりが必要である。だが，学校現場においては，ベテラン教職員の大量退職期を迎え，年齢構成の偏りや経験の違いなどいくつかの課題も抱えている。

そのような背景の下，甲州市学校運営研究会では，組織的な学校体制づくりのため「OJT実践計画試案」，「OJT実践シート」等を作成しながらOJTの研究を行ってきた。その目的は，教職員の資質・能力をいかに伸ばしていくのか，一人一人の持ち味を生かし，組織全体に対してどのようにリーダーシップを発揮していくのか，教職員同士が，学び合い，支え合う主体的な組織をどうのように構築・維持していくかなどである。

本年はこれまでの3年間の研究の最終年として，今までの研究をまとめると共に，研究の成果であるOJTに関する知識や技能を，各校組織活性化のため，実践していくことを目的とする。

Ⅱ 研究のねらい

1　「やまなし教員育成指標一覧表」に基づいた「OJT実践計画試案」を基に，各校でOJTに取り組み，それを改善することにより，教職員の専門性と，学校の組織力を高める。

2　教頭としてそれぞれの職員にどのように関わりを持てば効果的なのか，その在り方を探る。

Ⅲ 研究内容

1　研修動画視聴「教職員が育つ学校づくり～校内OJTの考え方と進め方～」

教職員育成の基本事項について確認し，各都道府県のOJT，メンターチーム等の育成事例の解説から，具体的な実践に向けてのアイデアなどを知ることができた。

教職員が育つ学校づくりの視点　　NITS『教職員が育つ学校づくり』より抜粋

【教職員が育つ機会・経験】

・教え上手だけでは育たない　→　学ばせ上手の発想が必要　→　学ばせ上手とは場づくり上手

【教職員が育つ機会・経験】

1　仕事　やや難しい仕事・任され仕事・達成感

2　管理職・先輩　コーチング・存在そのもの（モデリング）　メンタリング（支援的助言）

3　職場　ワイガヤ職場・まじめな雑談

4　評価　人事評価　ほめる・認める／叱る・注意する　自己評価（振り返り）

（１）「OJT 実践計画試案」を基に，「OJT 実践シート」を作成し，教職員のステージに応じた具体的な方策の作成にあたった。各校で OJT の実践にあたる際，本シートを基に，意図的・計画的・継続的な見通しの３点を意識しながら取り組んだ。また研究会にて，各校の取組，教頭としての働きかけ等，校種や規模を配慮しながら実践事例を提示し，各学校の具体的な方策について共有した。

【OJT 実践シート内容項目について】

① 対象者のステージ　②現状（Ｒ３またはＲ４・４月からの様子）

③教頭としての関わり【教】　④コーディネート【Ｃ】　⑤Ｒ３の目指す姿

⑥Ｒ３の具体策・取組予定　⑦教頭としての配慮点　⑧達成度

２　アンケートの実施

（１）教頭としての OJT への取組について

教頭として OJT への取組に関して，アンケートを実施し，日頃から心掛けている点と具体策や OJT を行う上での課題等，教頭同士の情報共有を図った。

（２）「OJT 実践計画試案」の活用について

２０１９年度の研究で作成された「OJT 実践計画試案」を手引きとしながら，「OJT 実践シート」へ必要事項を教頭が記入し各校の実態に応じた取組を行った。その実践計画試案の活用について，校種，規模に応じた３～４校で交流を行い，全体で成果や課題等について意見交換した。

３　ICT を活用した研究方法の工夫

「GIGA スクール構想」によって甲州市，山梨市で導入した「Google Workspace」を教頭職である私たち自身が積極的に活用することが，学校の情報化そして働き方改革の一端につながると捉え，本研究に関わる連絡，課題提出，アンケートの実施・集計の際に活用した。

Ⅳ 研究のまとめ

２年間分の事例集約とアンケートの実施，情報共有は，教頭として OJT への取り組む際の基本的な考え方や具体的な方策につながり大変効果的であった。

OJT の考え方と進め方を学ぶために視聴した NITS の動画は，ネット上で気軽に学ぶことができるので，校内研究など様々な場面で活用していきたい。

昨年度作成した甲州市会「教頭会クラスルーム」「甲州市教頭共有ドライブ」は情報の共有化という観点から，業務改善につながるので今回の研究に限定せず，様々な業務において共有と連携から業務の効率化を推し進め，働き方改革を進めていきたい。

最後に，甲州支会の OJT の実践と教頭の関わり方に関する３年間の研究は，教職員の年代に応じた専門性を高めるために有効であった。研究は一旦区切りとなるが，各自，明確になった課題を視野に入れ，代々の教頭が残してくださった財産をつなげ発展させ，OJT の実践から教職員のウェルビーイングを実現していきたい。

（課題別研究部長　神宮司　剛）

報　告　書

全国教頭研究大会　・・・・・・・・・１４１

関東甲信越地区教頭研究大会　・・・・・・・・・１４２

内地留学研修報告　・・・・・・・・・１４３

第６４回　全国公立学校教頭会研究大会　岩手大会報告

令和４年度『第６４回　全国公立学校教頭会研究大会　岩手大会』が７月２８日（木）～２９日（金）の２日間アイーナいわて県民情報センターを主会場に『未来を生きる力を育む　魅力ある学校づくり』を大会主題としてハイブリッド（参集・オンライン併用）大会として開催された。

１日目は開会行事に引き続き，大友啓史氏による「アドリブ力を育てる」と題した記念講演が行われ，午後には，復興をテーマにシンポジウムが開催され，「『岩手の復興教育』が目指す，郷土を愛し，未来を切り拓く人材の育成」について提言をいただいた。

２日目に参加した第１課題　第１Ａ分科会では，「教育課程に関する課題」についての２つの提言を受け，社会に開かれた教育課程と地域と共に歩む学校づくりについて，教頭として教育課程の中で果たすべき役割や地域との関わりについて議論を深めた。

分科会での「教育課程に関する課題」の提言内容は，まず，静岡市教頭会から，静岡型小中一貫教育として，「つながる力」をキーワードに特色ある学校づくりを「学校教育目標の共有，９年間の系統性・連続性，共同・交流のある教育，地域と連携する教育」の４つの視点から考えるという提言がされた。次に，仙台市教頭会から，「仙台市教育構想2021」として地域と共に歩む学校づくりを目指し，学習活動の精選と工夫，三密を回避した活動，情報共有・連絡調整の工夫等を行い，社会の変化やコロナ禍に対応できる教育課程の編成と改善を行っていくため，仙台版コミュニティ・スクールの導入・推進をしていくという提言が行われた。

グループ討議では，二つの提言内容をもとにコロナ過における教育課程と地域連携，コミュニティ・スクール，防災教育という視点で協議した。コロナ過における教育課程についての視点では，地域との交流や活動が乖離していることを共通課題として，教育課程の工夫をした例，地域コーディネーターが学校と地域との橋渡しとして活躍している例，行事を小中連携で行った例等の意見交流を行った。地域連携の視点では，地域の特色を生かした様々な取り組みについて発表され，小・中・行政との連携の重要性や協力体制の構築について有効性が確認された。コミュニティ・スクールについての視点では，地域に地域支援本部や地域コーディネーターの活動が行われている場合，地域と学校との連携について有効性が確認された。コミュニティ・スクール設置後の活動状況においては，地域に愛着を持った活動が行われているという成果と学校と地域の持つ要望・要求の差，学校と地域との調整業務等に負担がある等の課題が出てきた。防災教育の視点では，各校で行われている防災訓練の実践から，カリキュラムづくりやタイムラインづくり等をもとに意見交流を行い，地域性や環境が異なることを配慮する必要性を再確認した。

違う県の先生方と「教育課程」という共通のテーマに基づき，様々な視点から意見交流し，討議できたことは，教頭として力量や指導力を高めるためにとても有益な研究会であった。このような機会をいただいたことを感謝したい。　　（笛川小　日原英二）

学校運営研究会

第６３回関東甲信越地区教頭研究大会神奈川大会
「教職員の専門性に関する課題」分科会参加報告

日時　令和４年１１月１１日（金）９：３０～１１：５０　１２：５０～１５：１５
場所　パシフィコ横浜ノース　Ｇ４０２　　参加者　約１２０名

提言１　**教職員の資質・能力を伸ばす教頭の関わり～共同的な校内研修による，効果的な教育活動の実現を目指して～**　　**提案者　茨城県　結城市立絹川小学校　石澤功教頭**

①職員が成果を実感できる研修，教師からボトムアップによる研修のあり方
②振り返りや実践したことを生かしていく研修のあり方（副校長や教頭のマネジメントについて）

絹川小学校は勤務時間内に授業改善や学力向上，生徒指導関係，校内研究の時間を十分に確保するために，午前中に５時間の授業を実施することにした。会場からは様々な反応があったが、規模や児童の実態等を踏まえ，時程を組むことが重要であると考えた。

① については，校内研究の講師を常に外部から招聘するのではなく，それぞれの分野において校内のその分野を得意とする先生に研修を任せ，職員のキャリアアップに繋げる。また「校内ICT化チーム」「宿題改革チーム」など先生方の興味・関心から進んで研究できるようなプロジェクトを作ったりするといった取り組みが，個々の専門性を高めることに効果的であるといった意見がでた。

② については,研修の振り返りはどの県でも行っているが，常にその都度であるので，なかなか持続的な振り返りが行われていない。改善のアイデアとしては県の育成指標を基準に，教師一人ひとりに何ができ，何が不足していて，何を学ぶべきかと個々の教師が客観的に判断できるWEBアンケートシステムが有効であると思う。

提言２　**地域の特性を生かした教職員の育成～地域の学校，行政との連携を生かして～**
提案者　神奈川県　湯河原町立湯河原小学校　川崎和美教頭

① 地域間をつないだ人材育成に向けた教頭の役割について

足柄下郡には３つの町があり，箱根町，湯河原町には１中３小学校，真鶴町は１中１小学校がある。それらの地区内３中学校７小学校の教頭が，町教育委員会指導主事と連携し地域が一丸となって教育政策を行っているという提案。

この提案に関しては，甲州市も山間部の小規模校が多く湯河原小学校と同様に市教育委員会と共に研修を進めているので，他県でも同様の取り組みがあることがわかった。

助言者から　**神奈川県教育委員会　松田寿雄指導主事**

幸福学という学問があるが，学校現場の職員に幸福感，つまりハピネスを実感できるようにマネジメントしていくと良い。個々の教職員が仕事を通してハピネスになるためには「成長の実感」「人間関係での喜び」「貢献の喜び」と３つの要素を考えながら適材・適所に配置しポジティブなチームをつくっていくと良い。

（課題別研究部長　神宮司　剛）

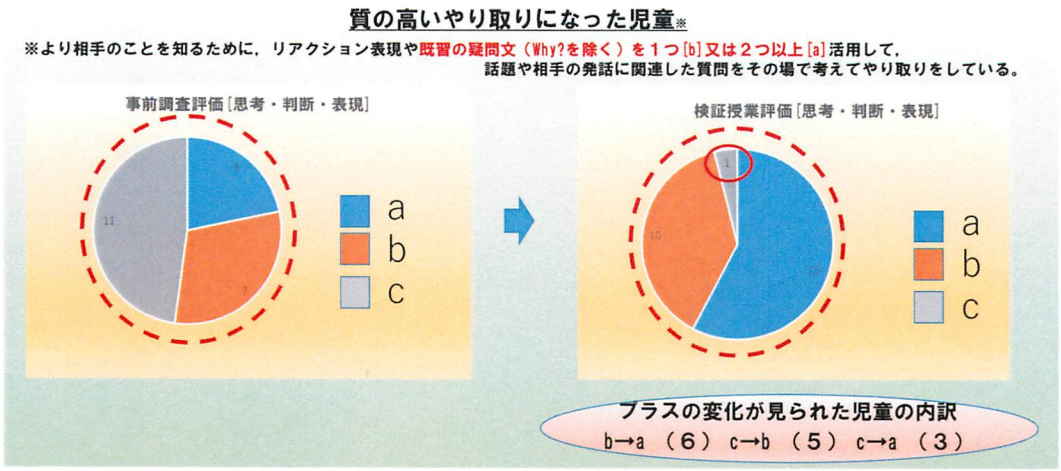
小学校外国語科における児童の話すこと[やり取り]の質を高める授業実践

～疑問文を活用する力を伸ばす継続的な活動（帯活動）を通して～

Ⅰ　研究の内容

本研究では，外国語活動で慣れ親しんだ疑問文を，様々な目的や場面，状況を設定した継続的な活動（帯活動）を通して指導することで，児童が疑問文を活用できる（場に応じた質問ができる）ようになることを目指す。また，児童自身が，様々な場面で自主的に既習の疑問文を活用して，話題や相手の発話に関連した質問をすることで，英語コミュニケーションによるやり取りが深まると考えられる。このように，継続的な活動（帯活動）を通じて，疑問文を活用する力（場に応じて質問する力）を付ける指導が，児童の話すこと[やり取り]の質を高めることを検証する。

Ⅱ　成果と課題



Ⅲ　成果物

既習の疑問文の理解を深めるための動画教材（持ち帰り教材として活用）

※既習の疑問文の文法指導にならないように，言語材料の「意味内容」「言語形式」について理解を促すことをねらいにしている。

Do you like　What ○do you like　Where do you want to go　What do you want　Can you

研究の詳細はコチラ→

（山梨県総合教育センター　一般留学生　金子裕亮）

山梨県総合教育センター　一般留学生　報告書

内地留学研究報告

Ⅰ　研修先の受け入れ状況

山梨大学教職大学院教科領域実践開発コース 初等教科教育分野（算数）

Ⅱ　研究経過の概要

（1）研究テーマ　意欲的に学習に取り組む児童を育てる算数科の授業改善

（2）目的　児童が意欲的に活動する問題解決的な授業を追究し授業改善を図る。

（3）研究方法

・先行研究，文献，講義から学習感想や問題解決的な授業について理論的に学ぶ。

・実習校で算数科の授業観察を行い，児童が意欲的になっている場面を見取る。また，意欲的になる可能性がある授業場面について代案を考える。

・児童の実態をふまえた問題解決的な授業を実践し，授業記録や学習感想の記述をもとに児童が意欲的に学習に取り組むことができたかを評価する。

・明らかになったことをまとめ，それをもとにして授業改善を図る。

Ⅲ　研究の結論

児童が意欲的に学習するためには，「児童の様子を敏感に感じ取り，臨機応変に授業を進めていくこと」,「児童が自由に相談し合える場面を作ること」,「児童に問題の分からなさや難しさを十分に味わわせること」が大切であることが明らかになった。実践授業では，表や□と○を使った式に表すことの必要感を児童にもたせることができなかったにもかかわらず，きまりを式表現した□と○を使った式については，その有用性を感じる児童がいた。そのように有用性を感じるようになったことの要因として，問題の難しさや分からなさを十分に味わうことの必要性が見えてきた。

Ⅳ　研究の反省

当初は，児童が書いた学習感想に対して教師がどのようなコメントを書いて返せば学習意欲が高まるかということに興味をもった。これについては，よい問題解決の授業がまず必要であることから，児童が問題を自らの問題としてとらえ粘り強く解決していく問題解決的な授業について考えるようになった。また，児童の発見や悩みに関する記述が学習感想にあるかという観点で授業を評価する研究に興味をもった。本研究では学習感想を授業に活かすことについて十分な成果を出すことはできなかった。このことについては，今後も考え取り組んでいきたい。

（山梨市立山梨小学校　原藤生府）

あとがき

2020年の教育改革から2年が経過する中で,「GIGAスクール構想」による一人一台端末導入,免許更新制の廃止による新たな研修システムの構築など,「令和の日本型学校教育」の具体化に向け,急激な変化が起きています。これまでの学校教育の良さを生かしつつ,これからの教育は,「誰一人取り残さず個々の可能性を最大限に引き出す教育」へと変革していくことになり,これまでの授業観の転換が求められています。

各校の研究テーマや設定理由を見ると,「主体的」「対話」「ICT活用」「プログラミング教育」など,「主体的・対話的で深い学び」の実現に関わる言葉だけでなく,「個別最適な学び」「協働的な学び」という言葉も多く取り入れられていることから,変革が着実に始まっていることがわかります。この大きな教育改革のうねりに対して,学校現場で果敢にチャレンジすることは,これまでの授業観をさらに広げ,豊かにすることになります。こうした授業改善・充実は,これまで実践され,現在でも実施されている東山教育の充実に向けた取組の継続の先にあり,ひいては教師の「ウェルビーイング」につながっていくものです。

「東山梨教育研究」は昭和38年の初刊以来,61号を数えます。これまでも各学校・研究部会では,多くの先輩方が築き上げてきた実践とその成果の上に立ち,社会背景や地域の現状を踏まえ,目の前の子供たちに必要な力を見据えた教育研究を進めてきました。教育の「不易と流行」について心に留めながら,日々の実践,持続可能な研究を積み重ね,教育活動の更なる充実を図るためにも,年度の研究成果が収録される「東山梨教育研究」の果たす役割は,ますます重要なものとなることでしょう。

末筆ながら,本誌の発刊にあたり,ご多用の折に玉稿を賜りました山梨市教育委員会教育長様並びに東山梨教育協議会会長様をはじめ,貴重な原稿を寄せられた皆様,発行にご協力いただきました皆様に,この場をお借りして心より御礼申し上げます。また,山梨・甲州両市教育委員会には財政の面で大きなご支援をいただきました。深く感謝申し上げます。なお,今号の表紙は日下部小学校中村琉雅さんの作品「ぼくの教室」です。ありがとうございました。

【編集実行委員会】

山梨市教育委員会教育長	嶋﨑　修
東山梨教育協議会会長	中村　雅彦
甲州市教育委員会教育長	小林　俊彦
峡東教育事務所所長	廣瀬　学
峡東教育事務所指導主事	小林みずほ
山梨市教育委員会指導主事	小串　吾郎
甲州市教育委員会指導主事	那須　栄樹
甲州市教育委員会指導主事	岩下　和子
東山梨教育協議会事務局次長	日野原和貴
東山梨教育協議会研究推進委員長	広瀬　竜太
山梨支会研究推進委員長	村田　裕紀
甲州支会研究推進委員長	中村　大介

発行日	令和5年4月1日
発行責任者	東山梨教育研究編集実行委員会
編集責任者	東山梨教育研究編集実行委員会事務局
印刷所	昭和堂印刷

東山梨教育環境研究

2022年度

東山梨教育協議会
東山梨教育環境研究特別委員会

もくじ

Ⅰ　児童・生徒数と教職員の定数

1　児童・生徒数及び教職員等の配置状況 …… 1

2　教職員年齢別・男女別分布状況（県費職員） …… 2

3　東山梨地区　市別・学校別在籍数及び学級予定数 …… 3

Ⅱ　教育行財政及び教育環境の実態

1　教育環境実態調査の調査項目について（解説・留意事項等） …… 4

2　教育環境の実態調査 …… 6

Ⅲ　子どもの生活実態に関する調査 …… 12

Ⅳ　教職員の健康と労働

1　多忙感に関する調査結果 …… 21

2　年休に関する調査結果 …… 24

3　授業時数に関する調査結果 …… 28

研究を終えて …… 29

Ⅰ　児童・生徒数と教職員の定数

1　児童・生徒数及び教職員等の配置状況【2022年5月1日現在】

項目／校名	児童生徒数	学級数				教職員等配置状況										備考
		通常	特支	分校	合計	校長	教頭	主幹教諭	教諭	養教	栄養	事務	市単教諭	司書	調理	用務	○→市単職員(数字は人数)①②③など ●→民間委託職員(数字は人数)❶❷❸など ※→兼務職員の配置校組み合わせ　ケ→県費で兼務　㋐→市単で兼務 栄教→栄養教諭　栄職→学校栄養職員　栄士→栄養士 ◆は令和2年度補正予算による加配(コロナ加配)
加納岩小	316	14	2	ー	16	1	1	0	19	1	1	1	0	①	0	①	※英語専科1(本務校：後屋敷小，日川小)　※初任研指導1(本務校：日下部小，八幡小) ※栄教1(本務校：日川小，日下部小，給食センター)　県非常勤4(アクティブ1，特別支援1，初任研後補充2) 特別支援員②　◆学指1　◆スサ2
日下部小	358	14	5	ー	19	1	1	0	28	1	㋐	1	0	①	0	①	※栄士（ケ）　英語専科(本務校：ケ→八幡小，岩手小，山梨小)1　通級加配4．5 県非常勤（きめ細，不適応，理科専科）2.5 特別支援員（市）④　◆学指5　◆スサ1
後屋敷小	214	9	3	ー	12	1	1	0	13	1	㋐	1	0	①	0	①	1年はアクティブ加配　英語専科・ALT・JTE（兼任）　初任研加配1名　初任研後補充1名 現在産休中が2名（代替者2名は講師　臨時免許取得）　来年3月に出産予定者1名（体育代替1名　産休代替は未定） 特別支援教育支援員3名　学力向上支援スタッフ1名
日川小	140	9	3	ー	12	1	1	0	11	1	0	1	0	①	0	①	※英語専科ケ（●加納岩小　後屋敷小）　※栄教ケ（●加納岩　日下部小） 特支支援員②　◆学指1　◆スサ1
山梨小	210	6	3	ー	9	1	1	0	10	1	ケ	1	0	①	0	①	アクティブ加配（0.5）4　きめ細かな指導加配（0.5）1　市特別支援員2　◆スサ3　※栄教（山梨南中・後屋敷小）※英語専科（日下部小・八幡小・岩手小）
八幡小	137	6	3	ー	9	1	1	0	10	1	ケ	1	0	①	0	①	※英語専科ケ（日下部小　山梨小　岩手小）　※初任研指導ケ（加納岩小　日下部小） ※栄養士㋐（給食センター　山梨北中　岩手小）　初任研後補充1　特支支援員①　◆学支2　◆スサ1
岩手小	33	4	2	ー	6	1	1	0	6	1	ケ	1	②	ケ	0	①	※英語専科ケ(日下部小)※栄士㋐(山梨北中)　※司書㋐(八幡小)特支支援員①
笛川小	144	6	4	ー	10	1	1	0	11	1	㋐	1	0	①	0	①	※英語専科小中連携(●笛川中)　※栄士㋐（笛川中）　特支支援員②　◆学支①　◆スサ1
山梨南中	360	11	4	ー	15	1	1	0	24	1	1	1	0	①	0	①	※栄教（山梨小　後屋敷小）　常勤加配（きめ細1　生徒指導1）　県非常勤（不登校0.5）　特別支援員③　◆スサ1
山梨北中	378	12	4	ー	16	1	1	1	30	1	0	2	0	①	0	①	※栄士：給食センター　特支支援員2　◆通級3.5　きめ細1　不登校1　特支引下1 はぐくみ1.5×2　初任研1　主幹0.5　事務共同設置1
笛川中	78	3	2	ー	5	1	1	0	9	1	㋐	1	0	①	0	①	※栄士㋐(笛川小)　特支支援員②
山梨市合計	2368	94	35	ー	129	11	11	1	171	11	2	12	2	10	0	11	
塩山南小	352	14	3	ー	17	1	1	0	24	1	1	2	①	①	0	❷	※栄教1（給食センター　塩山北小　玉宮小　井尻小）※英語専科①（奥野田小　玉宮小）　初任研後補充2　学習支援員④　◆スサ①　用務員2（シルバー人材交替で）
塩山北小	107	6	2	ー	8	1	1	0	10	1	ケ	1	①	①	0	①	栄養教諭：ケ（塩山南小・塩山南小・井尻小・玉宮小）　市単教諭①英語専科（神金小・大藤小）　司書①（玉宮小）　○学習支援員②
奥野田小	119	6	2	ー	8	1	1	0	9	1	ケ	1	0	①	0	②	学指②　※英語専科㋐（塩山南小　玉宮小）　※栄士ケ（塩山中　塩山北中）
大藤小	39	5	1	ー	6	1	1	0	6	1	㋐	1	0	㋐	0	②	※栄士㋐（給食センター）　※司書㋐（井尻小）　複式解消支援教員① 学習支援員①
神金小	38	4	1	ー	5	1	1	0	5	1	㋐	1	0	㋐	0	①	※複式学級解消支援教員②　※司書㋐（松里小）　※栄教ケ（松里小）
玉宮小	26	4	2	ー	6	1	1	0	6	1	㋐	1	0	㋐	0	②	※外国語専科ケ（塩山南小　松里小）　複式学級解消支援教員②　※司書㋐（塩山北小） ※栄教ケ（塩山南小）
松里小	92	6	2	ー	8	1	1	0	10	1	㋐	1	0	①	0	❷	市負担職員･･･学習支援員2名，司書1名（神金小兼務），栄養士1名，用務員2名 県任期付教職員･･･育休代替1名
井尻小	88	6	2	ー	8	1	1	0	9	1	ケ	1	0	①	0	❷	※英語専科ケ(●松里小　泉雲小　玉宮小）※栄教ケ（●塩山南小　塩山北小　玉宮小　センター） ※司書①（大藤小）　県費初任研後補充1　○学習支援員①　○用務員…シルバー人材2名（交替で） ※初任者指導教員ケ（塩山南小　松里小）
勝沼小	134	6	1	ー	7	1	1	0	9	1	ケ	1	0	①	②	①	県費非常勤講師1（母科指導加配） 栄養教諭の本務校は泉雲小。 市単教諭は，◆学支2　◆スサ1
祝小	88	6	1	ー	7	1	1	0	8	1	①	1	0	㋐	②	①	英語専科ケ（勝沼小・菱山小・大和小）　栄職①㋐（菱山小）　司書①㋐（勝沼小） ○学習支援員①　◆スサ1
泉雲小	131	6	2	ー	8	1	1	0	9	1	1	1	0	①	②	①	英語専科ケ（松里小　井尻小　塩山北小）　栄養教諭1　ケ（勝沼小）　司書①㋐（大和小）　学習支援員②　◆スサ1
菱山小	43	5	2	ー	7	1	1		7	1	㋐	1	0	㋐	②	①	※英語専科ケ（勝沼小）　※栄士㋐（祝小）　※司書㋐（奥野田小） ○複式解消学習支援講師①
大和小	33	4	2	ー	6	1	1	0	6	1	㋐	1	0	㋐	0	①	※英語専科ケ（勝沼小）　※栄士㋐（給食センター）　※司書㋐（泉雲小） ○複式解消学習支援講師②
塩山中	340	11	4	ー	15	1	1	1	27	1	1	1	0	①	0	②	県費非常勤講師1　栄養1（奥野田小　塩山北中 ） 学習支援員②
塩山北中	48	3	3	ー	6	1	1	0	9	1	ケ	1	0	㋐	0	❷	市単教諭・・・学習支援員，県費非常勤講師・・・英術，技術，家庭，栄養・・・本務校塩山中，司書・・・本務校松里中
松里中	104	3	3	ー	6	1	1	0	9	1	㋐	1	0	①	0	①	※栄教ケ（●塩山中・奥野田小・塩山北中）　※司書①（塩山北中） アクティブ加配0.5　学習支援員①　小規模中学ケ3　◆スサ①
勝沼中	232	8	2	ー	10	1	1	0	17	1	㋐	1	0	①	0	①	県費非常勤講師(はぐくみ0.5) 市単学指3(通常2+統合1) ◆スサ1
甲州市合計	2014	103	35	ー	138	17	17	1	180	17	3	18	2	10	8	25	

※甲州市立神金第二小学校、神金第二中学校については休校中（2022年5月1日現在）

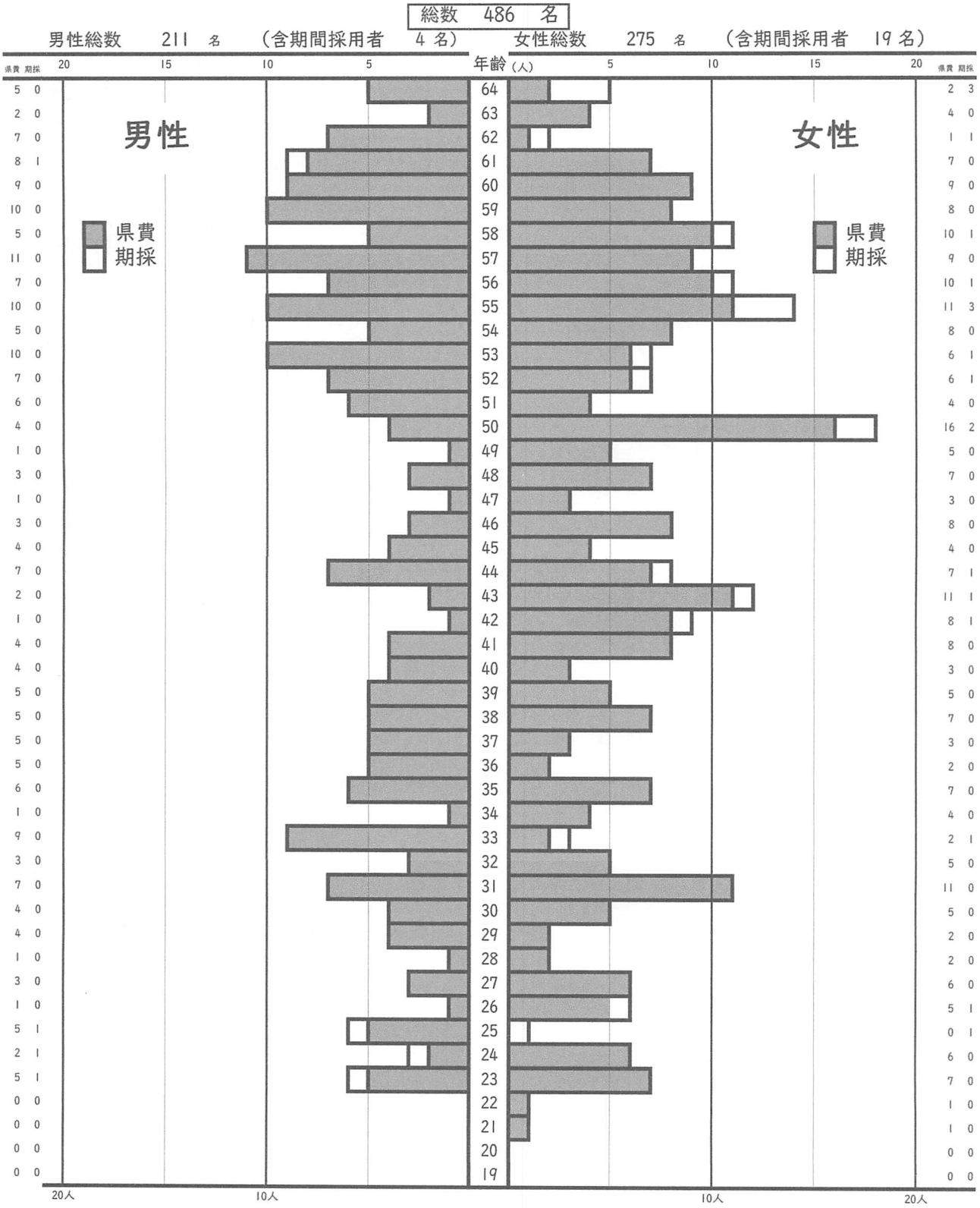
2　教職員年齢別・男女別分布状況　＜2022年度＞

（県費教職員　：　校長・教頭・主幹教諭・教諭・養護教諭・栄養教諭・学校栄養職員・事務職員）

・期間採用者数は外数，61歳以上は再任用者数　※64歳は64歳以上を含む

・充て，専従，傷病，在外等研修，育児休業者等を含む

・年齢は2023年3月31日時点【2022年12月調べ】



3　東山梨地区　市別・学校別在籍数及び学級予定数　【2022年5月1日現在】

※小学校は35人学級として、中学校は40人学級として算出、特別支援学級は除く

種別	年度	2023年度			2024年度			2025年度			2026年度		
	項目／校名	入学予定者数	在籍予定者数	学級数	入学予定者数	在籍予定者数	学級数	入学予定者数	在籍予定者数	学級数	入学予定者数	在籍予定者数	学級数
小学校	加納岩小	52	304	12	44	305	12	53	317	12	48	317	12
	日下部小	65	358	12	51	361	12	53	363	12	49	356	12
	後屋敷小	23	192	11	26	173	10	22	170	9	31	170	10
	日川小	22	140	9	28	145	8	28	146	8	19	143	8
	山梨小	32	204	6	29	195	6	24	186	6	29	176	6
	八幡小	8	119	6	18	113	6	18	107	6	17	107	6
	岩手小	6	33	4	1	28	4	7	30	4	2	26	4
	笛川小	26	147	6	15	135	6	18	133	6	16	115	6
	塩山南小	48	350	12	52	342	12	52	333	12	61	336	12
	塩山北小	17	97	8	16	98	8	16	96	8	12	90	8
	奥野田小	18	118	8	21	118	8	17	118	8	14	106	7
	大藤小	4	38	6	7	39	6	6	37	6	5	33	6
	神金小	2	34	4	3	31	4	5	31	5	6	30	4
	玉宮小	3	24	4	4	23	4	2	19	4	4	19	4
	松里小	16	104	6	22	107	6	12	105	6	12	100	6
	井尻小	9	81	6	8	73	6	9	70	6	7	64	6
	勝沼小	20	128	6	16	123	6	20	123	6	4	105	6
	祝小	11	88	6	12	83	6	8	71	6	8	70	6
	東雲小	17	125	8	15	108	8	5	93	8	9	86	8
	菱山小	10	48	8	5	45	8	7	46	8	2	42	7
	大和小	6	35	4	7	37	4	9	42	5	4	39	5
	小学校合計	415	2767	152	400	2682	150	391	2636	151	359	2530	149
中学校	山梨南中	118	342	9	101	322	9	94	313	9	104	299	9
	山梨北中	144	384	10	123	388	10	105	372	10	110	338	9
	笛川中	24	78	3	27	73	3	21	71	3	34	82	3
	塩山中	108	318	8	111	314	8	139	419	11	122	433	11
	塩山北中	16	41	5	17	44	5						
	松里中	21	86	3	35	90	3	26	82	3	30	91	3
	勝沼中	70	233	8	83	235	8	70	223	7	60	212	7
	中学校合計	286	804	46	497	1466	46	455	1480	43	460	1455	42
市別	山梨市小学校	286	804	22	251	783	22	220	756	22	248	719	21
	甲州市小学校	215	678	24	246	683	24	235	724	21	212	736	21
	合計	501	1482	46	497	1466	46	455	1480	43	460	1455	42
	山梨市中学校	286	804	22	251	783	22	220	756	22	248	719	21
	甲州市中学校	215	678	24	246	683	24	235	724	21	212	736	21
	合計	501	1482	46	497	1466	46	455	1480	43	460	1455	42

Ⅱ　教育行財政及び教育環境の実態

教育環境実態調査の調査項目について（解説・留意事項等）

○ ICT 環境

第３期教育振興基本計画(2018～2022 年度)において，以下の通り ICT 環境整備目標値が示されている。

＊校務用コンピュータ　教員１人１台
＊教育用コンピュータ１台あたりの児童生徒数　3.6 人
＊超高速インターネット接続率/無線ＬＡＮ整備率　100%
＊教材整備指針に基づく整備　電子黒板/実物投影機　１学級あたり１台

☆ICT 支援員とは…

授業や研修，校務において，教員と相談したり依頼を受けたりしながら業務を行う専門職員。教育の ICT 化に向けた環境整備５か年計画(2018～2022 年度)において，４校に１人配置が目標水準と示されている。

ICT 支援員の具体的な業務例

・機器・ソフトウェアの設定や操作，説明
・機器・ソフトウェアや教材等の紹介と活用の助言
・機器等の簡単なメンテナンス
・情報モラルに関する教材や事例等の紹介と活用の助言
・デジタル教材作成等の支援

・ 貸出用の Wi-Fi ルーターがある場合は「○」，ない場合は「×」。
・ 図書館システムが導入されている場合は「○」，導入されていない場合は「×」。
　※学校独立型は学校単独で市内と連携していないもの。市内連携型は市内学校や図書館と連携しているもの。
・ 指導者用デジタル教科書は教科ごと全学年分あれば「○」，全学年はないが一部ある場合は「△」，どの学年分もない場合は「×」。その他の場合は他の欄に「有」。
　※セット教材に含まれているものは対象外。
・ 電子機器の整備状況の前年比較欄について，前年度より増加は「○」，減少は「▼」，維持(増減なし)は「－」。
・ 本調査において，大型テレビとは 50 インチ以上の大きさのものとする。

【 施設設備面 】

○ 防災対応　ガラスの状況

ガラスの事故は，重大事故につながる可能性が高い。学校施設は，児童生徒が学校生活を送る場であると同時に，非常災害時には住民の避難場所としても使用されるため，ガラス破損事故への対策が必要である。

ガラスの防災対策には，下表のような方法がある。

ガラス品種	安全性能
飛散防止フィルム	・破片が飛散しにくい
強化ガラス	・破損しにくい　・破片が鋭利でなく，しかも小粒である
網入り板ガラス	・火災や火の粉の侵入を防ぐ

○ 空調設備

児童生徒の良好な学習環境を維持し，適切な教育活動を実施するため，普通教室及び特別教室

等に空調設備を整備し，健康管理に配慮する必要がある。

○ 屋外施設

プールからの緊急連絡手段

万が一の事故発生時に，円滑・迅速に児童生徒の救助・救命を行える体制を整えておくことが必要である。そのためにも，プールからの緊急連絡手段を整備することは重要である。

種別は，固定電話(電話番号有)・子機(学校電話と共有)・内線(インターフォン機能のみ)・学校携帯電話(公用)・職員携帯電話(私用)。

○ 新JIS規格児童生徒用机イス

教科書や教材の大型化（A判化など）に対応できるよう，机面寸法を拡大し，多様な大きさを確保できるよう，新JIS規格の机イスを整備することが望ましい。

【 危機管理対策 】

○ 校内緊急通報システム

不審者の侵入防止だけではなく，万が一侵入された場合に校内各教室等への連絡を迅速に行うための通報システムを導入することが望ましい。

○ 電子メールによる情報通報システム

緊急事態等が発生した際は，保護者等に迅速に伝達することが求められる。そのためには，緊急時の連絡先リストや情報伝達網を日頃から整備しておくことが大切である。

○ 敷地周辺フェンス等設置・侵入者用監視カメラ

学校施設の防犯性を確保するため，門・囲障の設置や防犯監視システムの導入等により，物理的かつ視覚的にも守るべき範囲を明確化し，不審者の侵入を防ぐ必要がある。

○ 災害時備蓄食料

地震等大規模な災害が発生した場合，保護者の引き取りが困難な児童生徒が生じることが想定される。こうした事態に備えるために食料品の備蓄が必要である。

災害時の備蓄に望ましい飲料水･食料品等

	飲料水	食料品
発災～3日後	1日3リットル（ペットボトルは賞味期限が2年近くあるので保存しやすい）	包装を開けてすぐ食べられるもの（ビスケット・カンパン・チョコ・あめなど）
～約1週間後（電気が回復）	給水を受けるための容器（ポリタンクなど清潔でふたのできるもの）	レトルト食品，缶詰等（使い切りで，ゴミの出ないもの）

【 図書 】

○文部科学省基準蔵書数（学校蔵書数・充足率は，12月1日現在の数を記入）

小学校

学級数	蔵書冊数
1	2,400
2	3,000
3～6	3,000＋520×（学級数－2）
7～12	5,080＋480×（学級数－6）
13～18	7,960＋400×（学級数－12）
19～30	10,360＋200×（学級数－18）
31～	12,760＋120×（学級数－30）

中学校

学級数	蔵書冊数
1～2	4,800
3～6	4,800＋640×（学級数－2）
7～12	7,360＋560×（学級数－6）
13～18	10,720＋480×（学級数－12）
19～30	13,600＋320×（学級数－18）
31～	17,440＋160×（学級数－30）

※特別支援学級含む学級数

【 理振 】

○理振基準金額

小学校	11,630,000円

小学校：1組10,000円以上のものが対象

中学校	21,525,000円

中学校：1組20,000円以上のものが対象

教育環境の実態調査

調査項目 / 学校名		ＩＣＴ環境												
		ICT支援員	貸出用Wi-Fiルーター	図書館システム	指導者用デジタル教科書									
					国語	算数・数学	理科	社会	英語	音楽	保健体育	図工・美術	技術・家庭	他
山梨市	加納岩小	○（市教委配置）	△（機器のみ貸出）	○（学校独立型）	○	○	○	○	○	×	×	×	×	
	日下部小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	
	後屋敷小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	日川小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	
	山梨小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	八幡小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	
	岩手小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	
	笛川小				○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	山梨南中				○	○	○	○	○	×	○	×	×	
	山梨北中				○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	笛川中				○	○	○	○	○	×	○	×	○	
甲州市	塩山南小	○（市教委配置）	○（市教委貸出）	○（学校独立型）	○	○	○	○	○	×	○	×	×	有
	塩山北小			×	○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	奥野田小			×	○	○	○	○	○	×	○	×	×	有
	大藤小			×	○	○	○	○	○	○	×	×	×	有
	神金小			×	○	○	○	○	○	×	○	×	×	有
	玉宮小			×	○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	松里小			×	○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	井尻小			×	○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	勝沼小			×	○	○	○	○	○	×	×	×	×	有
	祝小			×	○	○	○	○	○	○	×	×	×	
	東雲小			×	○	○	○	○	○	×	×	×	×	
	菱山小			×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	有
	大和小			×	○	○	○	○	○	○	×	×	×	
	塩山中			○（学校独立型）	○	○	○	○	○	○	×	○	○	有
	塩山北中			×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	有
	松里中			×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	有
	勝沼中			○（学校独立型）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	有

※GIGAスクールにより一人一台端末及び無線LAN全校完備。

調査項目 / 学校名		ＩＣＴ環境								
		電子機器の整備状況（台）								
		大型テレビ	前年比較	大型モニター	前年比較	実物投影機	前年比較	プロジェクター	前年比較	その他の機器（台）
山梨市	加納岩小	0	—	20	○	8	—	3	—	
	日下部小	0	—	15	—	6	—	4	—	
	後屋敷小	0	—	7	—	3	—	2	—	
	日川小	0	—	10	○	6	—	2	—	
	山梨小	0	—	12	○	3	—	2	—	
	八幡小	0	—	8	—	3	—	3	—	
	岩手小	0	—	6	—	3	—	5	—	
	笛川小	0	—	4	—	2	—	3	—	
	山梨南中	0	—	12	—	4	—	6	—	
	山梨北中	0	—	15	—	6	—	4	—	
	笛川中	0	—	3	—	1	○	3	—	
甲州市	塩山南小	18	○	5	○	8	—	1	—	Apple TV(1)/EZCast (7)
	塩山北小	5	○	6	○	1	—	1	○	
	奥野田小	8	—	0	—	1	—	2	—	
	大藤小	8	○	0	—	9	○	2	—	Apple TV(6)
	神金小	7	—	0	—	3	—	1	—	Apple TV(5)
	玉宮小	9	—	0	—	2	—	2	—	Apple TV(6)
	松里小	7	—	0	—	1	—	3	—	Apple TV(4)
	井尻小	7	—	0	—	7	—	1	—	Apple TV(6)
	勝沼小	6	—	7	○	9	○	2	—	
	祝小	4	▼	4	○	5	○	2	—	iPod (1)
	東雲小	7	—	0	—	1	—	2	—	
	菱山小	3	—	4	○	2	—	2	—	Chromecast(5)
	大和小	9	○	0	—	6	—	2	—	Chromecast(6)
	塩山中	9	—	6	○	2	—	8	—	iPod (1) Apple TV(1)
	塩山北中	5	—	1	○	1	—	2	—	Apple TV(1)
	松里中	9	○	0	—	1	▼	3	○	Apple TV(2)
	勝沼中	6	▼	4	○	1	—	3	—	Apple TV(4)

調査項目 / 学校名		施設設備面 防災対応 ガラスの状況			
		教室・廊下	体育館	プール	その他
山梨市	加納岩小	○（強化・フィルム）	○（強化・フィルム）	○（フィルム）	全校舎飛散防止対応済
	日下部小	○（強化・フィルム）	○（強化・フィルム）	○（フィルム・網入）	
	後屋敷小	○（強化・フィルム）	○（フィルム）	○（フィルム）	
	日川小	○（強化・フィルム）	部分（強化・網入）	○（フィルム）	
	山梨小	○（強化・フィルム）	○（強化）	○（フィルム）	
	八幡小	○（強化・フィルム）	○（強化・フィルム）	○（フィルム）	
	岩手小	○（強化・フィルム・網入）	○（強化・フィルム・網入）	部分（強化）	プレハブ倉庫以外飛散防止対応済
	笛川小	○（強化・フィルム）	○（強化・フィルム）	○（フィルム・網入）	全校舎飛散防止対応済
	山梨南中	○（強化・フィルム）	○（強化・フィルム）	×	プール以外飛散防止対応済
	山梨北中	○（強化・フィルム・網入）	○（強化）	×	プール・プラットホーム以外飛散防止対応済
	笛川中	○（フィルム）	○（強化・フィルム・網入）	施設なし	全校舎飛散防止対応済
甲州市	塩山南小	部分（強化・網入）	○（強化）	×	給食配膳室・トイレ（網入・一部）渡廊下（網入）
	塩山北小	×	○（強化）	×	校舎玄関（網入）給食配膳室（強化）
	奥野田小	×	×	×	児童用玄関・エレベーター脇窓(強化)
	大藤小	×	部分（強化・網入）	×	保健室一部（強化）児童玄関横（網入）
	神金小	×	○（強化）	×	
	玉宮小	×	○（強化）	×	校舎内一部（網入）
	松里小	×	○（強化）	×	本館玄関（網入）・新館
	井尻小	×	○（強化）	×	
	勝沼小	○（強化）	×	×	玄関・トイレ（網入）
	祝小	×	部分（フィルム）	×	職員室フィルム
	東雲小	○（強化）	×	×	
	菱山小	×	×	×	正面玄関網入・廊下一部網入・体育館一部網入
	大和小	部分（強化）	○（強化）	×	正面玄関網入・廊下一部網入・体育館一部網入
	塩山中	部分（強化・フィルム・網入）	○（強化）	部分（網入）	玄関・昇降口・東階段・教室ベランダ出入口・図書室・南館出入口・パソコン室南側・保健室
	塩山北中	部分（強化・網入）	○（強化）	×	校舎玄関（網入）
	松里中	部分（強化・網入）	×	×	校舎玄関（網入）
	勝沼中	○（強化）	部分（強化）	施設なし	校舎玄関（強化）

調査項目 / 学校名		施設設備面											
		空調設備											
		職員室	校長室	保健室	図書室	会議室	音楽室	理科室	図工室	家庭科室	普通教室	特別支援学級教室	その他
山梨市	加納岩小		○		○	○	○	○	○	○		○	配膳室・他校舎内全教室
	日下部小		○		○	○	○	○	○	○		○	配膳室・他校舎内全教室
	後屋敷小		○		○	○	○	○	○	○		○	配膳室・他校舎内全教室
	日川小		○		○	○	○	○	○	○		○	配膳室・他校舎内全教室
	山梨小		○		○	○	○	○	○	○		○	配膳室・他校舎内全教室
	八幡小		○		○	○	○	○	○	○		○	配膳室・他校舎内全教室
	岩手小		○		○	／	○	×	×	×		○	多目的室
	笛川小		○		○	○	○	○	○	○		○	配膳室・他校舎内全教室
	山梨南中		○		○	○	○	○	○	○		○	体育館管理室・配膳室・他校舎内全教室
	山梨北中		○		○	○	○	○	○	○		○	体育館管理室・配膳室・他校舎内全教室
	笛川中		○		○	○	○	○	○	○		○	体育館管理室・配膳室・他校舎内全教室
甲州市	塩山南小		○		○	×	×	×	×	×		○	オープン教室
	塩山北小		×		×	○	×	×	×	×		○	多目的室
	奥野田小	○	×	○	×	／	×	×	×	×	○	○	
	大藤小		○		×	○	×	×	×	×		○	
	神金小		○		×	／	×	×	×	×		○	
	玉宮小		×		×	×	×	×	×	×		○	
	松里小		×		×	×	×	×	×	×		○	多目的室
	井尻小		×		×	○	×	×	×	×		○	小会議室
	勝沼小		○		○	／	×	×	×	×		○	給食室・調理員控室
	祝小		×		×	○	×	×	×	×		○	
	東雲小		×		○	×	×	×	×	×		○	
	菱山小		×		×	／	×	×	／	×		○	給食室・調理員控室
	大和小		×		×	／	×	×	×	×		○	ランチルーム・相談室
	塩山中		○		×	×	○	○	×	×		○	多目的室・相談室（1・2）
	塩山北中		○		×	×	×	×	×	×		○	相談室(A·B)・多目的室
	松里中		○		×	×	×	×	×	×		○	相談室
	勝沼中		○		×	×	×	×	×	×		○	多目的室

調査項目 / 学校名		施設設備面				危機管理対策				
		屋外設備		新JIS規格児童生徒用机イス（設置学年を記入）		校内緊急通報システム	電子メールによる情報通報システム		敷地周囲フェンス等設置	侵入者用監視カメラ
		校庭散水施設	プールから緊急連絡手段	新JIS規格	天板のみ交換・テンパネ		市教委システム	その他システム（学校単位）		
山梨市	加納岩小	○	内線	○5・6年	1～4年	○	×	学校安心・安全メール	○	×
	日下部小	○	固定電話		1・2年	○			○	×
	後屋敷小	○	子機		1・2年	×			○	×
	日川小	○	子機		1～3年	×			○	×
	山梨小	○	職員携帯電話		1・2年	×			部分	○
	八幡小	○	職員携帯電話		1・2年	×			○	×
	岩手小	○	職員携帯電話		1～4年	×			○	×
	笛川小	○	子機		全学年	○			○	×
	山梨南中	○	職員携帯電話	○3年	全学年	×			○	×
	山梨北中	○	職員携帯電話		1・2年	×			○	×
	笛川中	○	職員携帯電話		全学年	×			○	×
甲州市	塩山南小	○	学校携帯電話	全校新JIS規格設置		×	甲州市安心安全ネット		部分	×
	塩山北小	○	固定電話			×			部分	×
	奥野田小	○	学校携帯電話			×			部分	×
	大藤小	○	子機			×			部分	×
	神金小	○	学校携帯電話			×			部分	×
	玉宮小	○	学校携帯電話			×			部分	×
	松里小	○	学校携帯電話			×			部分	×
	井尻小	○	子機			×			部分	×
	勝沼小	○	内線			×			部分	×
	祝小	○	子機			×			部分	×
	東雲小	○	内線			×			部分	×
	菱山小	○	学校携帯電話			×			部分	×
	大和小	×	学校携帯電話			×			部分	×
	塩山中	○	学校携帯電話			×			部分	×
	塩山北中	○	学校携帯電話			×			部分	×
	松里中	○	学校携帯電話			×			部分	×
	勝沼中	○	職員携帯電話			×			部分	×

調査項目 / 学校名		危機管理対策 災害時備蓄食料 公費 学校配当予算	公費 他	保護者負担	主な物品名	図書 図書費当初予算額（公費のみ）（千円）	文部科学省基準蔵書数（冊）	学校蔵書数（12月1日現在）（冊）	学校蔵書充足率（12月1日現在）	理振 基準金額（千円）	前年度末の現有額（千円）	前年度末の現有率（%）
山梨市	加納岩小	×	市教委より帰宅困難児用飲料水・カンパン（缶）配布 給食センターより災害用アルファ化米・飲料水配布	×		1,044	9,160	11,111	121%	11,630	4,091	35%
	日下部小	×		×		1,126	9,160	12,479	136%	11,630	5,059	43%
	後屋敷小	×		×		798	7,960	9,732	122%	11,630	4,420	38%
	日川小	×		×		583	6,520	8,611	132%	11,630	3,161	27%
	山梨小	○		×	ﾗｲｽｸｯｷｰ	738	6,520	8,913	137%	11,630	5,270	45%
	八幡小	×		×		591	6,520	8,865	136%	11,630	2,513	22%
	岩手小	×		×		398	5,080	7,024	138%	11,630	4,178	36%
	笛川小	×		×		590	7,000	8,429	120%	11,630	2,592	22%
	山梨南中	×		×		1,186	12,640	15,280	121%	21,525	4,432	21%
	山梨北中	×		×		1,142	12,640	16,090	127%	21,525	13,791	64%
	笛川中	×		×		516	6,720	10,233	152%	21,525	12,314	57%
甲州市	塩山南小	×	×	×		783	9,960	16,504	166%	11,630	3,059	30%
	塩山北小	×	×	×		403	6,040	8,506	141%	11,630	4,150	36%
	奥野田小	×	×	○	飲料水	360	6,040	10,296	170%	11,630	3,969	34%
	大藤小	×	×	○	飲料水・カンパン	318	5,080	7,831	154%	11,630	4,822	41%
	神金小	×	×	○	飲料水	287	4,560	6,802	149%	11,630	2,799	24%
	玉宮小	×	×	×		321	6,040	6,782	112%	11,630	2,511	27%
	松里小	×	×	×		336	6,040	9,132	151%	11,630	3,351	28%
	井尻小	×	×	○	飲料水・焼菓子	318	6,040	9,501	157%	11,630	3,186	27%
	勝沼小	×	×	×		471	5,560	9,673	174%	11,630	3,194	27%
	祝小	×	○	×	飲料水・焼菓子	415	5,560	7,709	139%	11,630	3,189	26%
	東雲小	×	×	×		554	6,040	8,999	149%	11,630	3,228	28%
	菱山小	×	×	×		225	5,560	7,026	126%	11,630	2,363	20%
	大和小	×	×	○	飲料水・カンパン	238	5,080	7,745	152%	11,630	3,504	30%
	塩山中	×	×	×		850	12,160	14,599	120%	21,525	14,852	69%
	塩山北中	×	×	×		347	7,360	7,906	107%	21,525	7,499	35%
	松里中	×	×	×		389	7,360	8,860	120%	21,525	12,114	56%
	勝沼中	×	×	×		628	9,040	10,211	113%	21,525	10,737	50%

Ⅲ　子どもの生活実態に関する調査

1　調査のねらい

社会の変化が激しい時代における様々な教育問題を背景として，ここ数年，教育の根幹をなす家庭教育のあり方に視点をおいて調査を行ってきた。今年度は，子どもを対象に，

(1) 家庭での基本的な生活習慣の様子
(3)子どもの心配や相談等
(3) パソコンの有無や活用の様子
(4) 自分の携帯電話やスマートフォン所持の様子
(5) 休日の過ごし方

などについて調査した。

昨年度とほぼ同様の調査を行うことで，子どもの意識や行動・生活環境の実態や変化を知り，それらを地域・家庭・学校の連携や子どもの成長に役立てることができればと思う。

2　調査期間

2022年12月5日（月）　から　12月16日（金）まで

3　調査対象

東山梨地区内抽出校（小学校５校、中学校４校）
・児童（小学３年生・小学６年生）
・生徒（中学２年生）

4　調査方法

質問紙調査

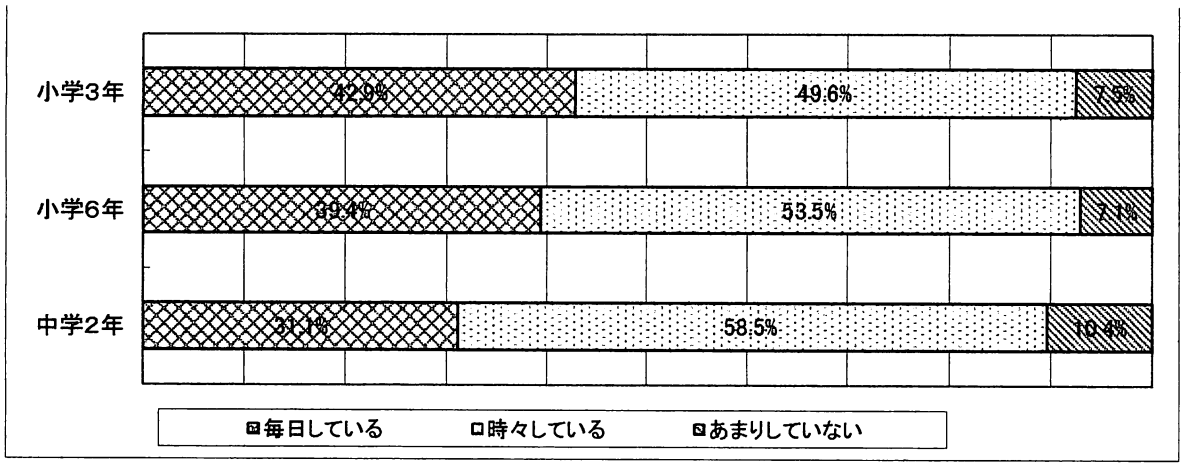
5　回答数

小学校３年の児童　119名
小学校６年の児童　　99名
中学校２年の生徒　106名

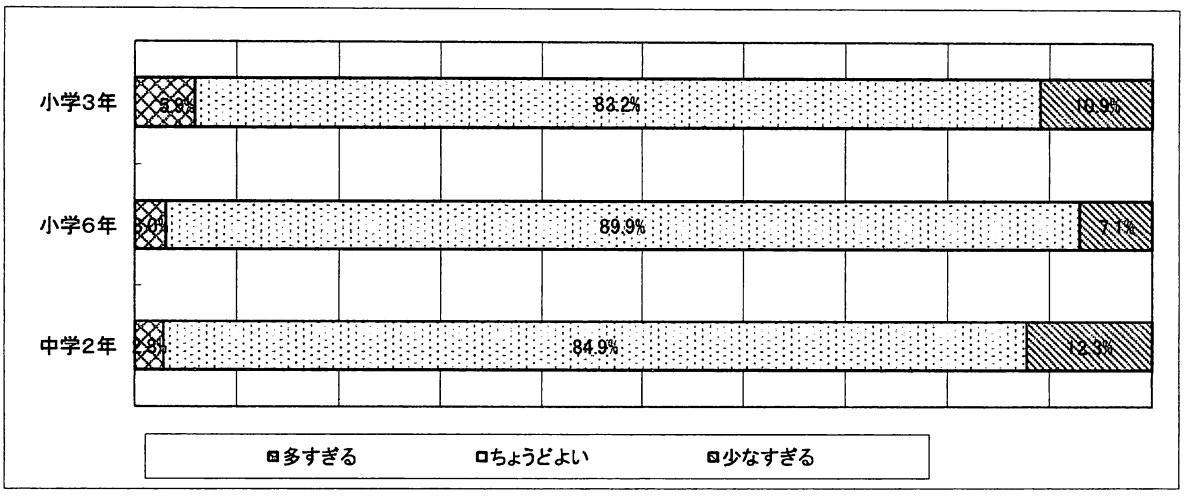
6　その他

・グラフ上の数値は割合を表す。
・理由等の記述内容をまとめて示す。

1 あなたは，家族の一員として，家のお手伝いをしていますか。



2 あなたは，今しているお手伝いについて，どう思いますか。



3 お手伝いについて，あなたの考えを書いてください。

小学3年

肯定的意見

・手伝いをすると家族が喜ぶから嬉しい　・いい気持ちになる・やるべきこと・楽しい・丁度よくて、毎日続けられる　・おうちの人が助かる、私の将来にも役立つ　・いつも感謝していることをお手伝いで返すことができて好き

中間的意見

・困った時にお手伝いする　・楽しいお手伝いはすぐやりたいと思うけど、大変なお手伝いも楽しいお手伝いみたいにすぐに取り組みたい　・たまにやらない時があるから毎日頑張りたい

否定的意見

・たまにしたくない時がある　・大変です　・少なくしてほしい

小学6年

肯定的意見

・自分がやることで家族が助かる　・よいことで大切だと思う　・やらなければいけないと思う　・自分の成長や将来に役立つ　・もっとしたい　・できる　・ちょうどいい

中間的意見

・できることや頼まれたことをする

否定的意見

・しなくていい・めんどくさい

中学2年

肯定的意見

・大切なこと　・必要なこと　・親や家族の負担が減る　・家庭の時間を増やす上で大切なこと　・達成感がある　・家族との繋がりなどが増える・家族が喜んでくれるのが嬉しい　・自分から率先してやる　・自立するために必要なこと・いろいろ学べる

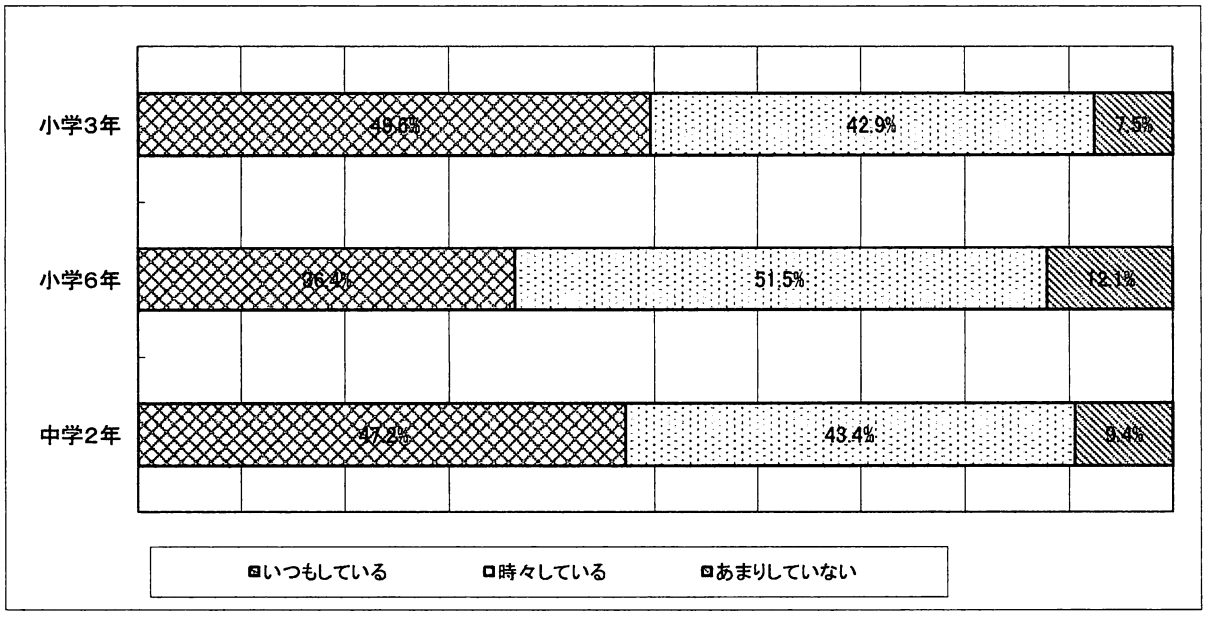
中間的意見

手伝いをすると、褒めてくれるし、お小遣いもたまにくれるからとても良いものだと思う・少しめんどくさいけど、楽しいときもある・無理のない範囲でするもの

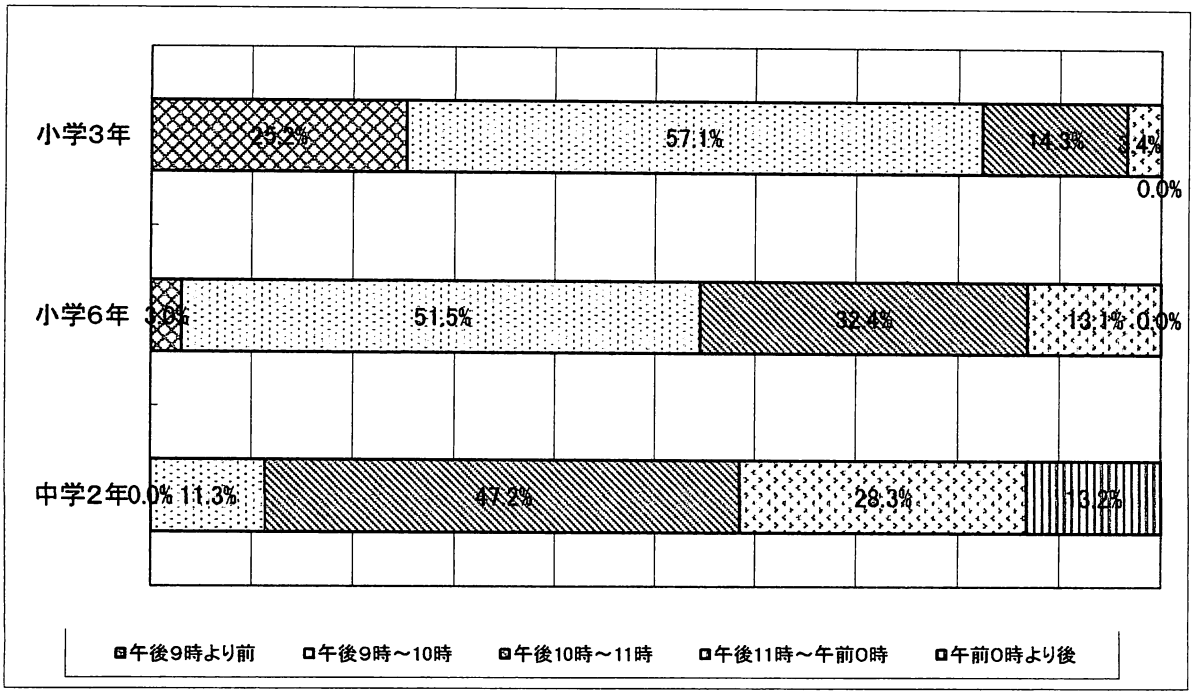
否定的意見

・したほうが良いとは思うけれど、やる気が起きない　・部活や習い事があるからできないので、仕方がない時間がない　・少しでも楽になってほしいからもっと頼って欲しい。

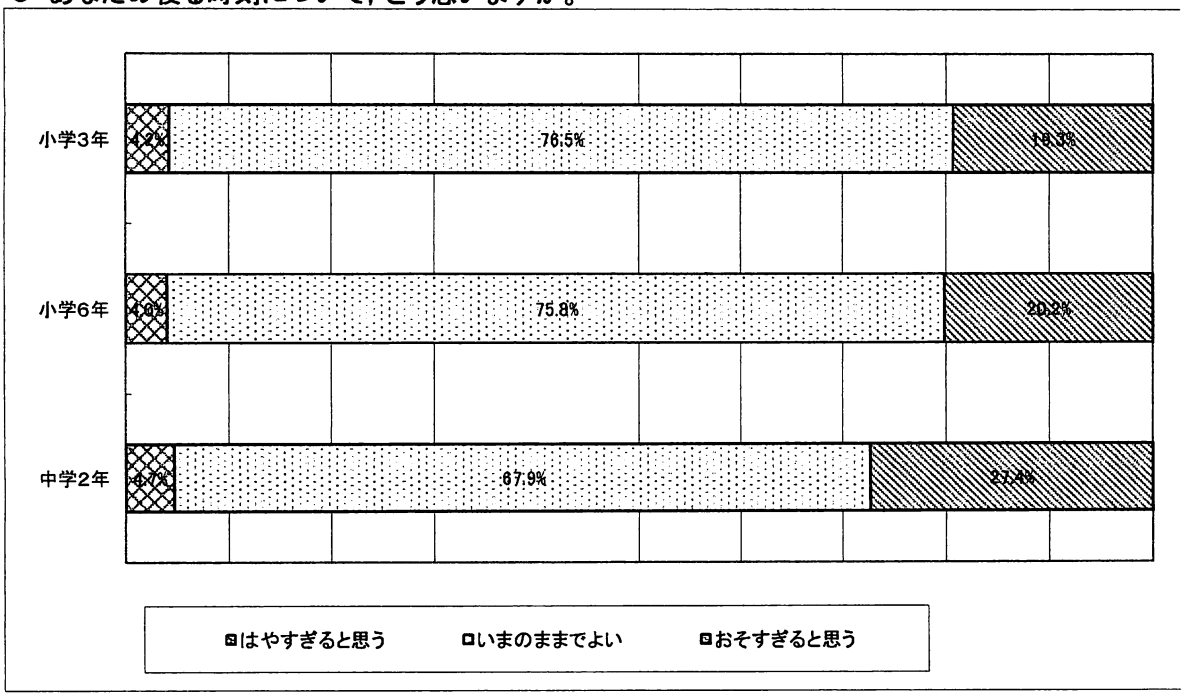
4　身の周りのこと（お手伝いではなく）で，自分でできそうなことは自分でしていますか。



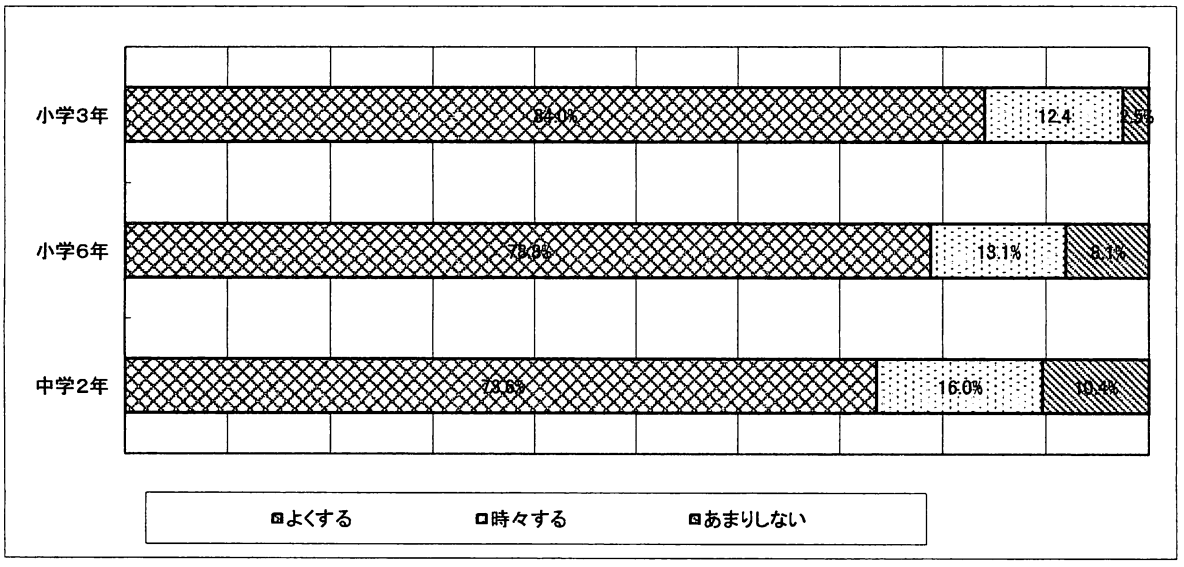
5 ふつうの日は，何時ごろ寝ますか。



6 あなたの寝る時刻について，どう思いますか。



7　あなたは，学校の様子や友だちのこと，家族のことなどについて，家の人とよく話をしますか。



小学3年

・仕事で帰ってくるのが遅く、家の仕事をしているからじゃまをしないように
・習い事であまり時間がない　・おうちの人から聞かれないと言わない　・あまり話すことがない　・忘れていたり、何を話せばいいか分からなかったりするから

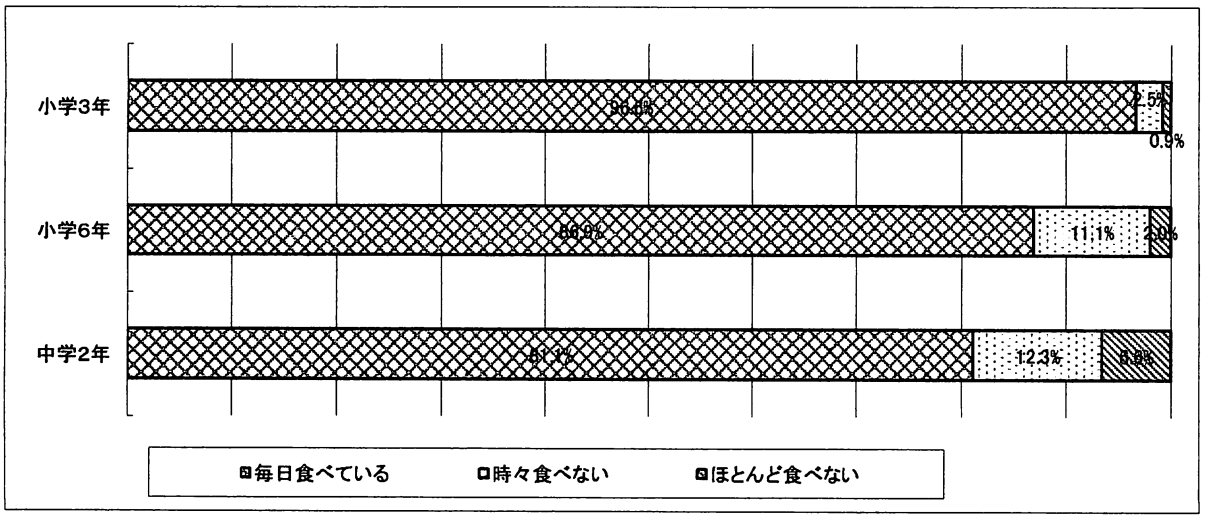
小学6年

・話すことがとくにない　・必要ない　・親に聞かれない　・話さないから　・重要なことしか話さない　・親と話したくない　・色々言われたくない　・家で他にやりたいことがある

中学2年

・忙しい　・話をするのが面倒　・話さなくても良いとおもうから　・親に質問されない　・あまり聞いてくれない　・家族と話すことがあまり好きではない
・恥ずかしい　・話してもいいことがない　・家の人がいない　・いろいろ聞かれる　・とくに話すことがない

8 あなたは，ふだん朝食を食べますか。



小学3年

・朝は食欲がない　・寝坊して食べている時間がない

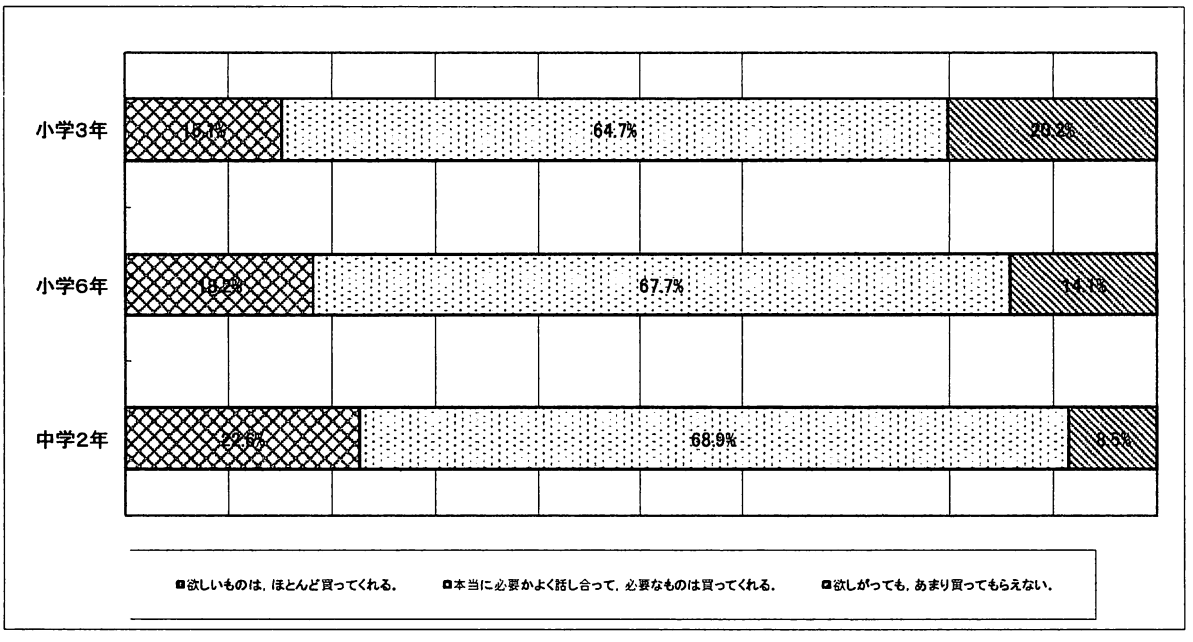
小学6年

・お腹が空いていない　・食欲がないから　・起きれない　・時間がない

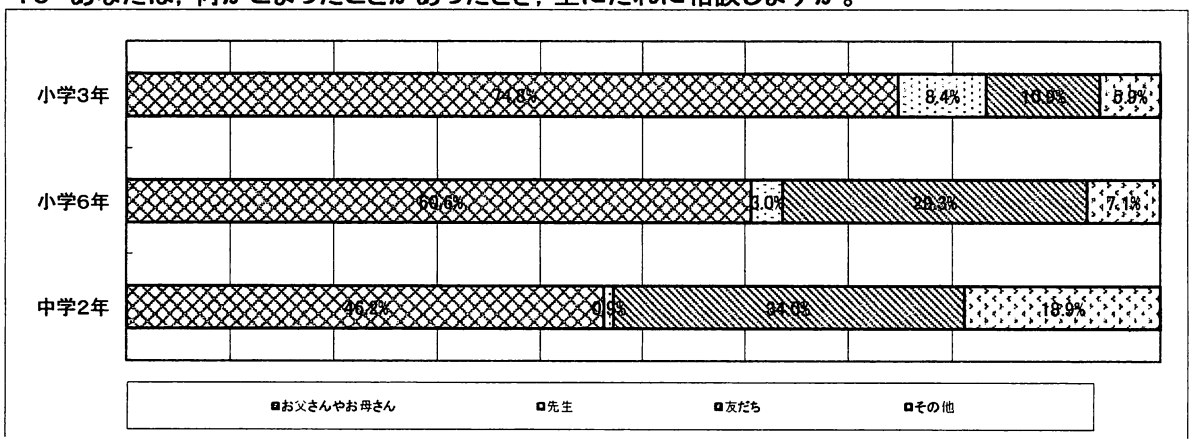
中学2年

・作ってくれない　・遅くまで寝ていたい　・起きる時間が遅い　・お腹が空いていない　・朝食を食べる余裕がない　・食べるものがない

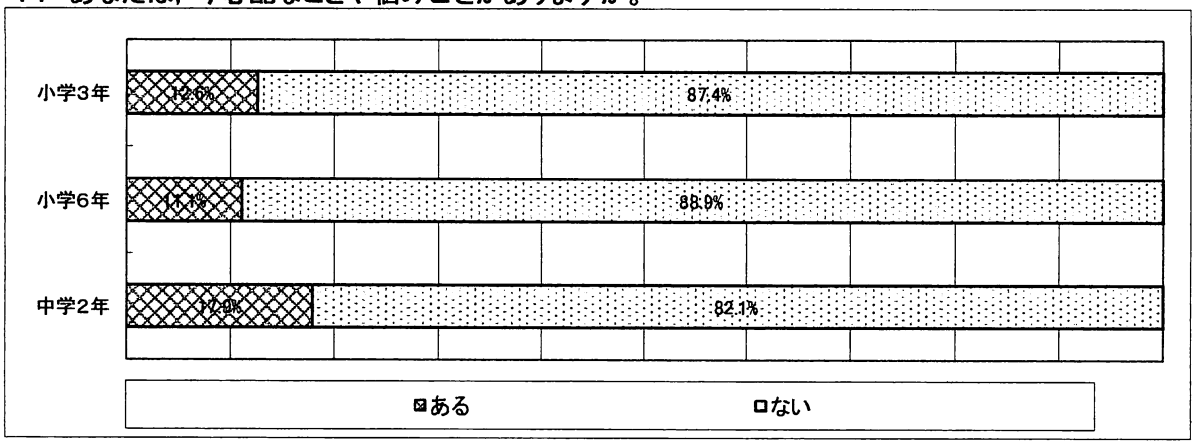
9 あなたは欲しいものがあるとき，家の人はどのようにしてくれますか。



10　あなたは，何かこまったことがあったとき，主にだれに相談しますか。



11　あなたは，今心配なことや悩みごとがありますか。



◎「ある」と答えた人は、どんなことか書いてください。

小学3年

・リコーダーがちゃんと吹けるか　・友達が急にぶつかってくる、嫌なことを言われる　・親子げんか　・転校してきた子がクラスになじめない　・お姉ちゃんのことばかりかまっている

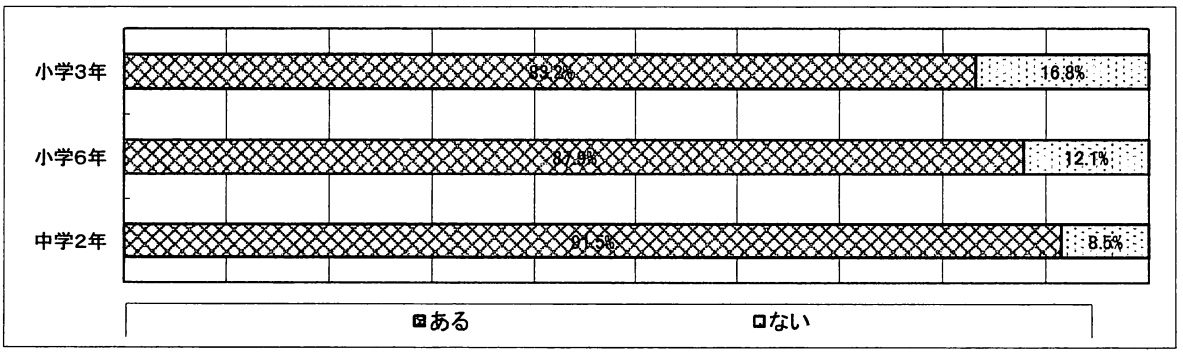
小学6年

・中学のこと・進学のこと　・家族関係　・友達関係

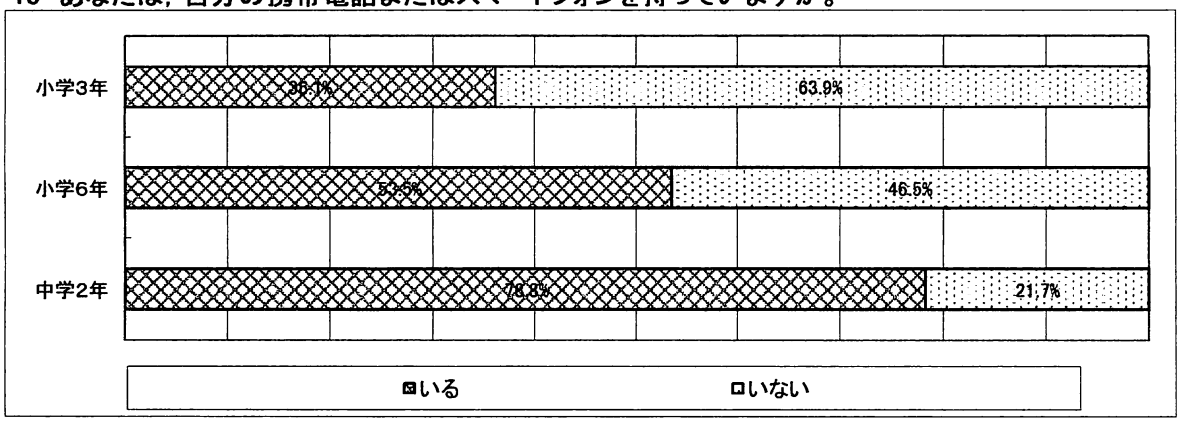
中学2年

・進路　・勉強　・受験　・部活　・人間関係　・クラスのこと　・親子関係　・将来のこと　・担任教師　・授業がつまらない　・容姿や性格・相談する人がいないこと

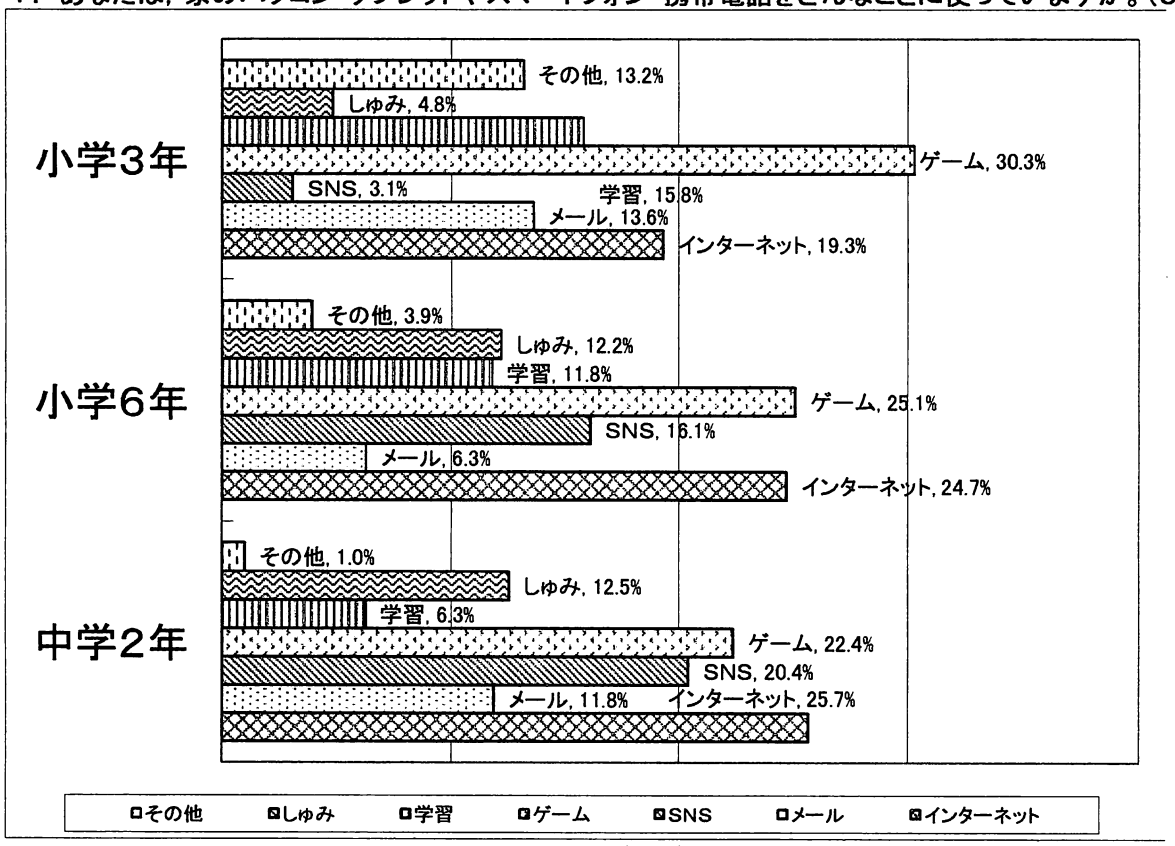
12　あなたの家には，パソコンやタブレットがありますか。



13 あなたは，自分の携帯電話またはスマートフォンを持っていますか。



14 あなたは，家のパソコン・タブレットやスマートフォン・携帯電話をどんなことに使っていますか。（3つま



※家のパソコンを使っている人の中のパーセント

◎「その他」と答えた人は、どんなことか書いてください。

小学3年

・ユーチューブ、音楽、動画　・電話・調べる

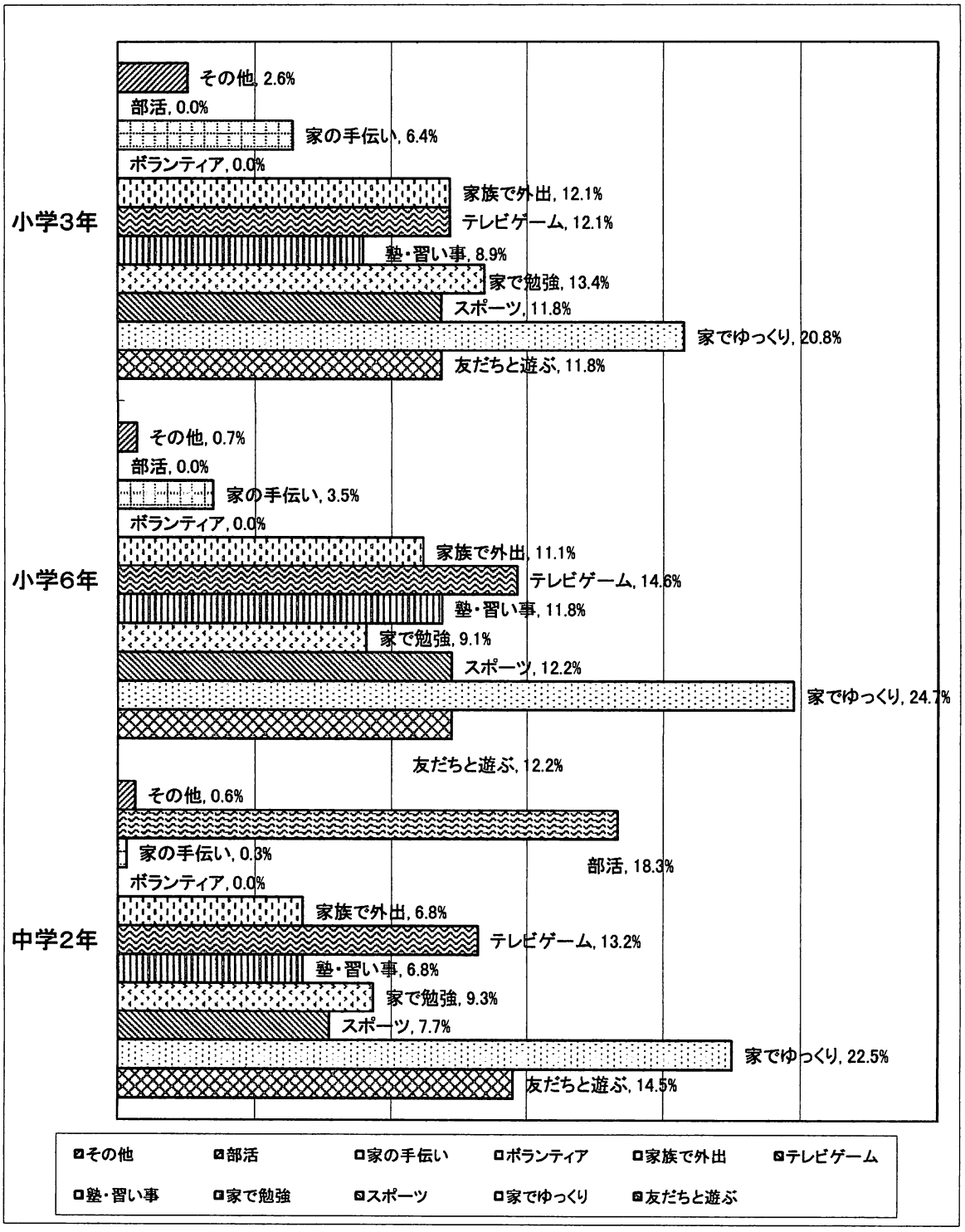
小学6年

・ユーチューブ　・動画　・親が使う　・写真

中学2年

・電話　・音楽を聴く　・計算機　・アニマルビデオ　・ユーチューブ　・動画

15 あなたは，土曜日・日曜日・祝日には、何をしていますか。



◎「その他」と答えた人は、どんなことか書いてください。

小学3年

・弟、妹と遊んだり、世話したりする　・インターネットのゲームで友達と遊ぶ
・家のそうじをする

小学6年

・ゲーム　・ユーチューブ

中学2年

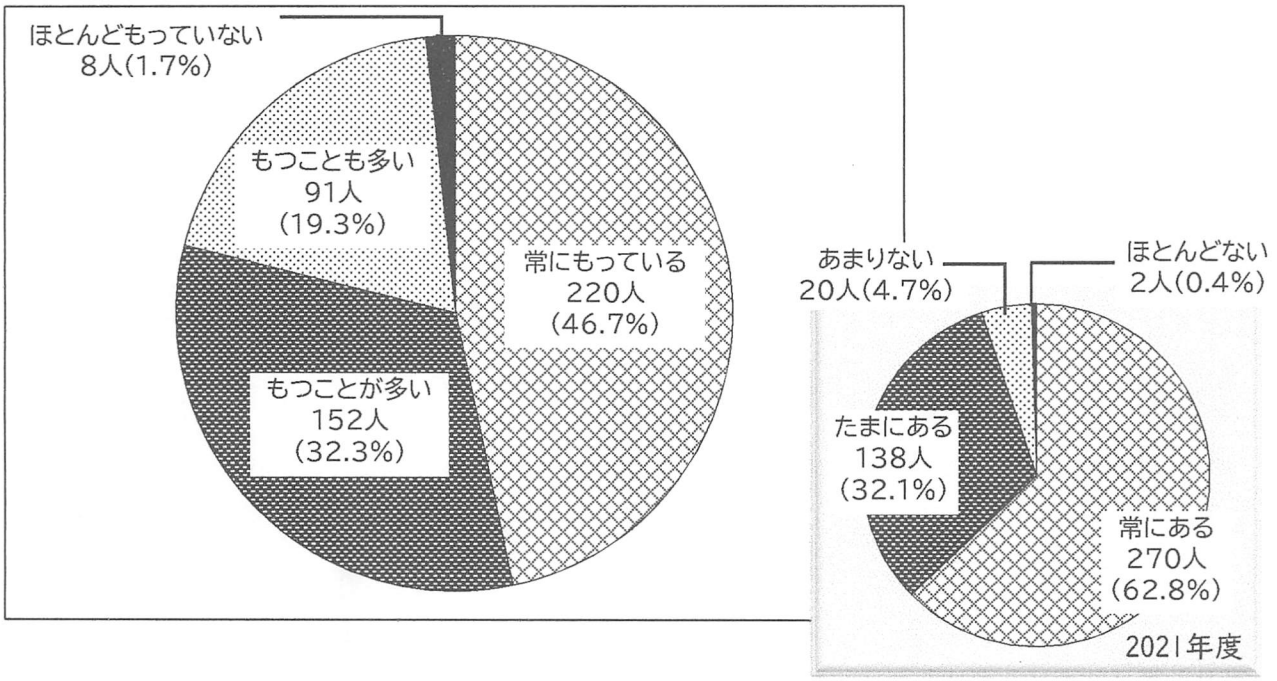
・漫画　・一人でトランプなどのゲーム　・日光浴

Ⅳ　教職員の健康と労働

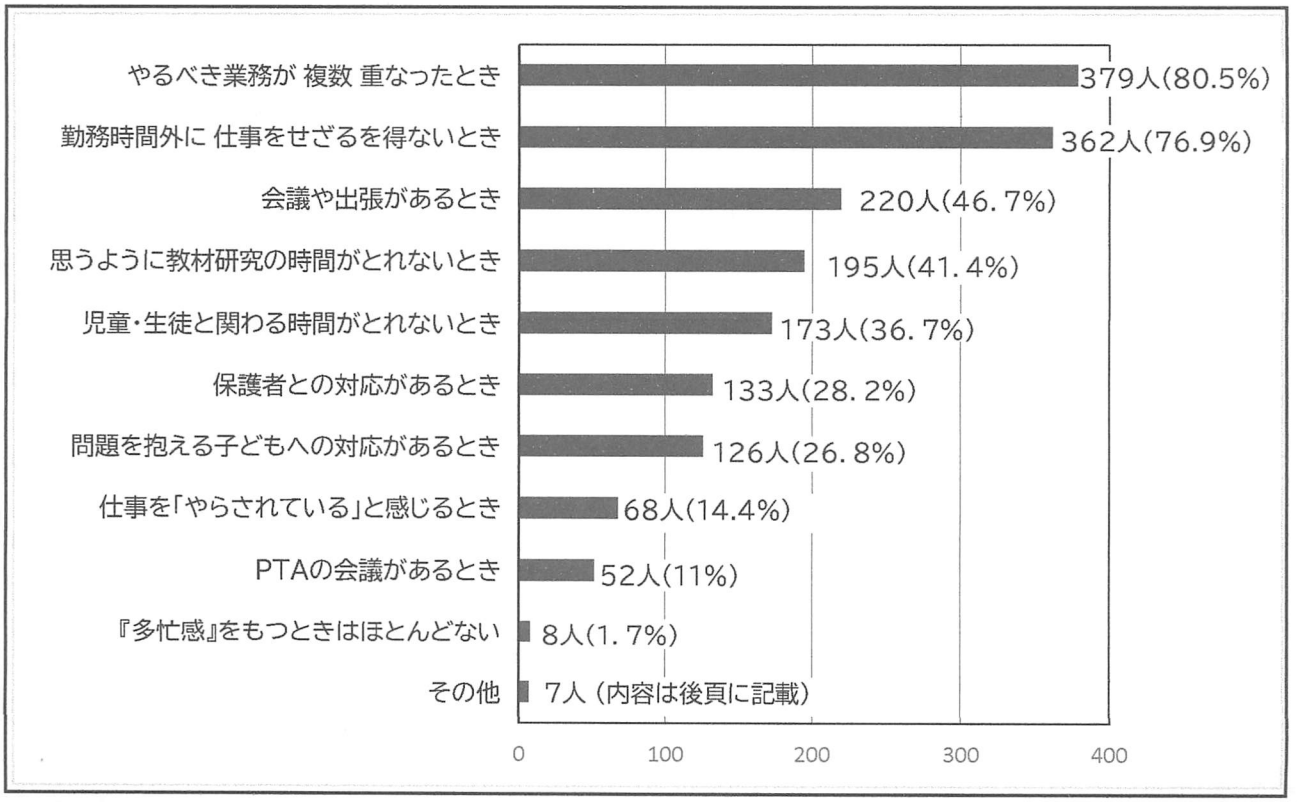
「多忙感」に関する調査結果

調査年月　2022年12月
調査対象　東山梨全教職員
回答数　471人

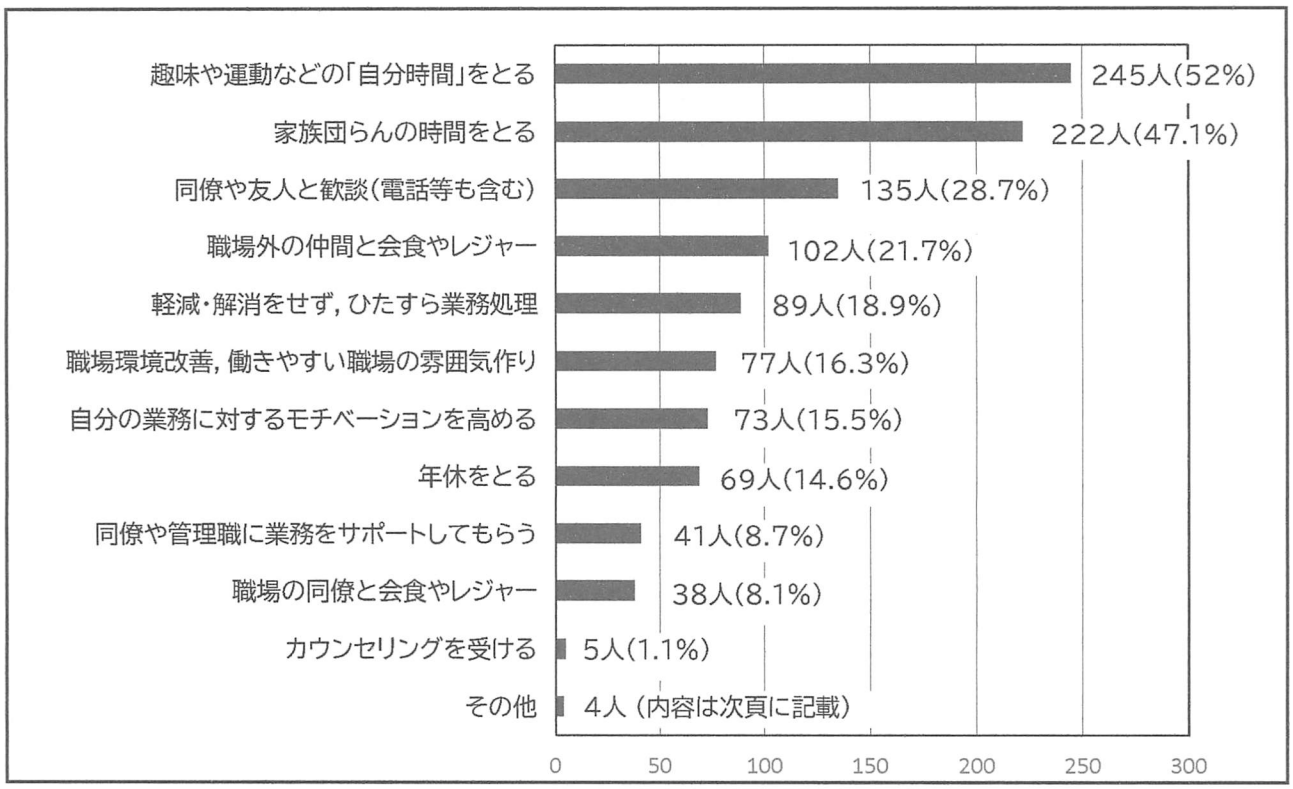
1　あなたは，勤務の中に「多忙感」をもつことがありますか。（1つのみで回答）



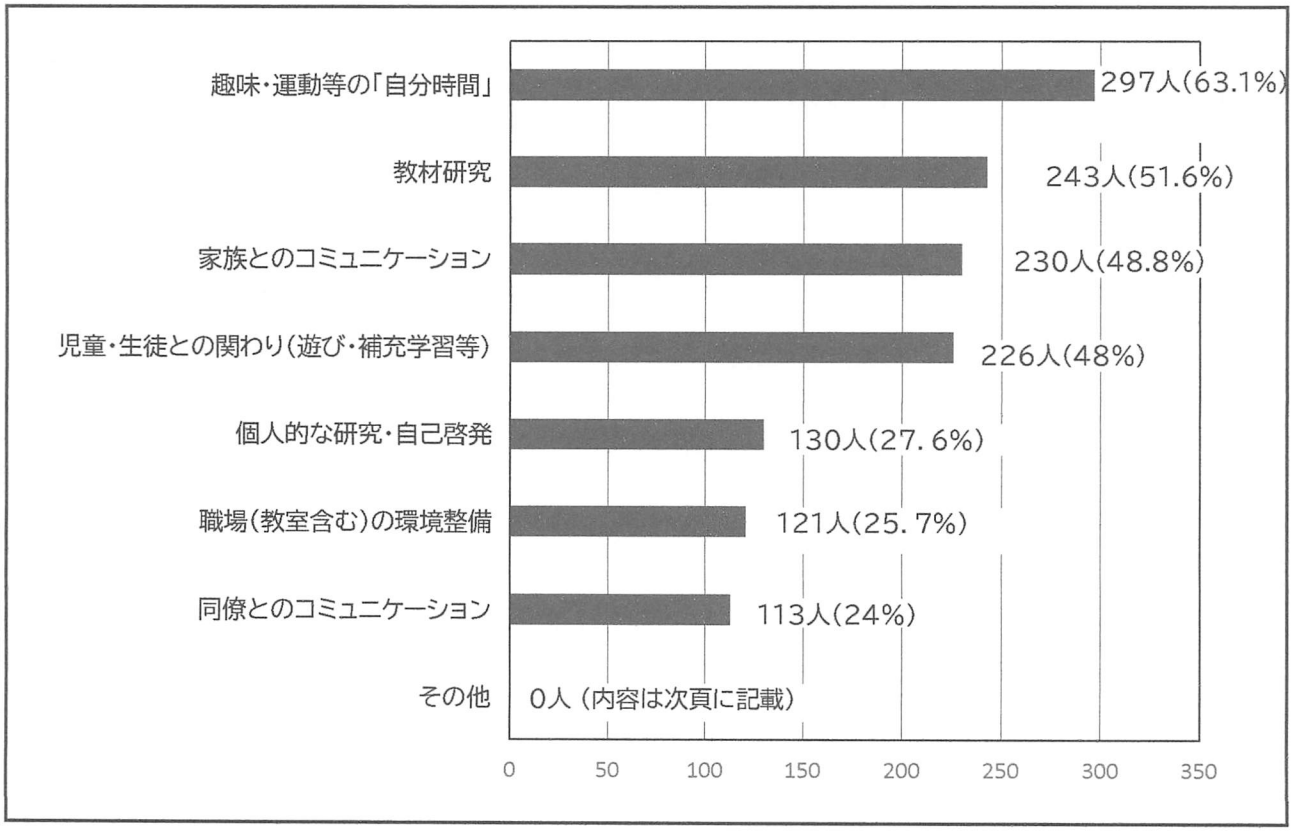
2　勤務において「多忙感」をもつときは，主にどんなときですか。（回答数自由）



3　あなたは，どのようにして「多忙感」を軽減あるいは解消していますか。（回答数自由）



4　「多忙感」が解消されたら，その分 充実させたいことは何ですか。（回答数自由）



※「その他」の項目に記載された回答

2　勤務において「多忙感」をもつときは，主にどんなときですか。（回答数自由）

- ただ発表を聞くだけの会議
- 同じような内容の会議や調査がいっぱいある，一つにまとめてほしい
- タブレット端末の研修
- やりたい仕事が後回しになってしまうことがある
- 他の先生の仕事をし続けなくてはならない時
- 参加者への各種案内配布や資料作成
- 同僚の業務が重なった時に自分も余裕がなくてサポートできない時
- 急な予定変更が重なった時
- 外部との連絡調整が入り，先延ばしになってしまい，本来やるべき業務に支障をきたす
- 昼休み
- 答えなくてはいけないアンケート調査が多い時
- 調査やアンケートの回答
- このようなアンケート

3　あなたは，どのようにして「多忙感」を軽減あるいは解消していますか。（回答数自由）

- 業務の見直し
- 業務内容の整理改善，効率化及び時間の有効活用
- 夏休み中に２学期の教材研究を一気に行う
- 我慢あるのみ
- 軽減、解消はできない
- ほとんど解消できていない
- していない

4　「多忙感」が解消されたら，その分 充実させたいことは何ですか。（回答数自由）

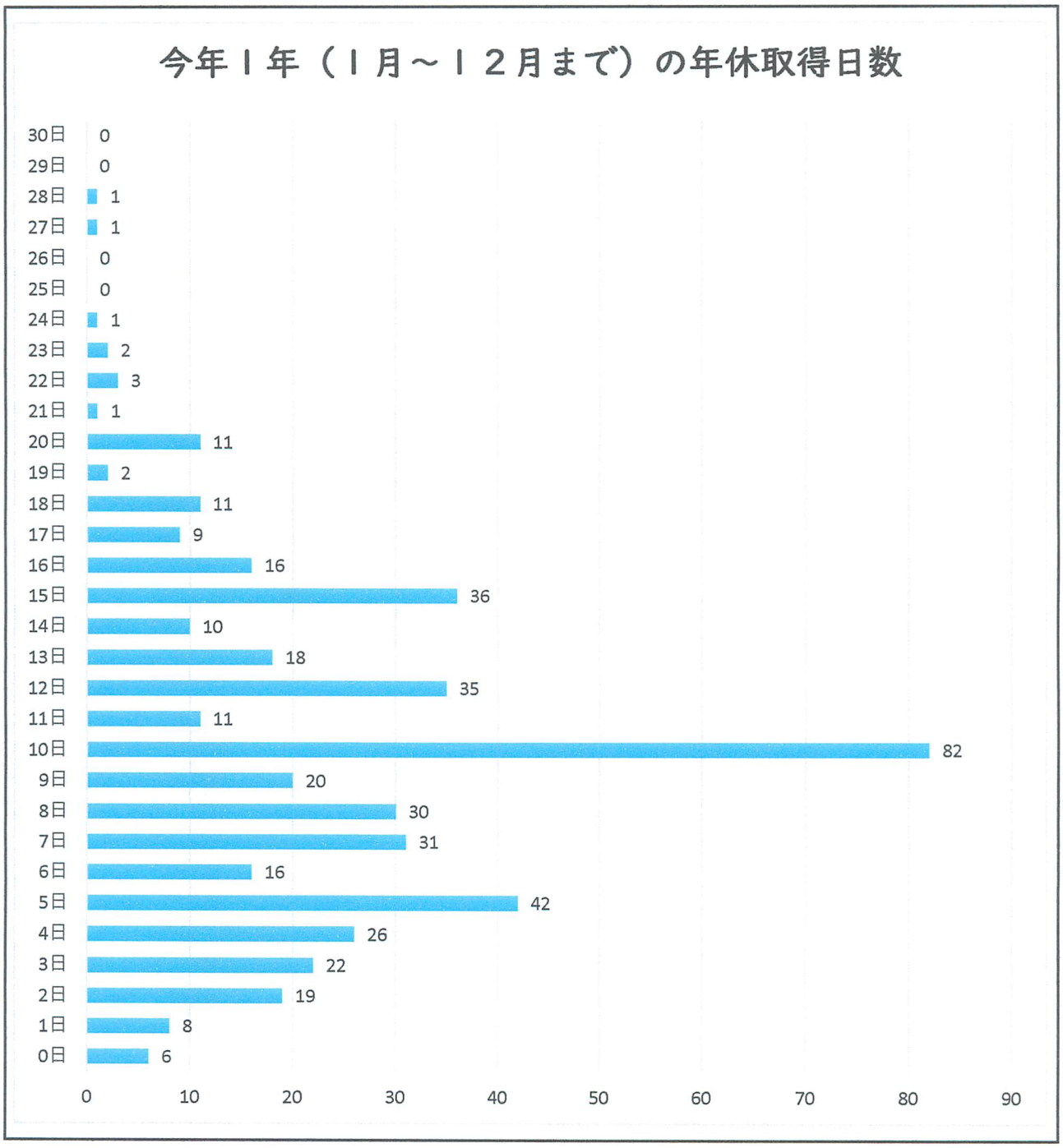
- 特に記載なし

Ⅳ　教職員の健康と労働

「年休」に関する調査結果

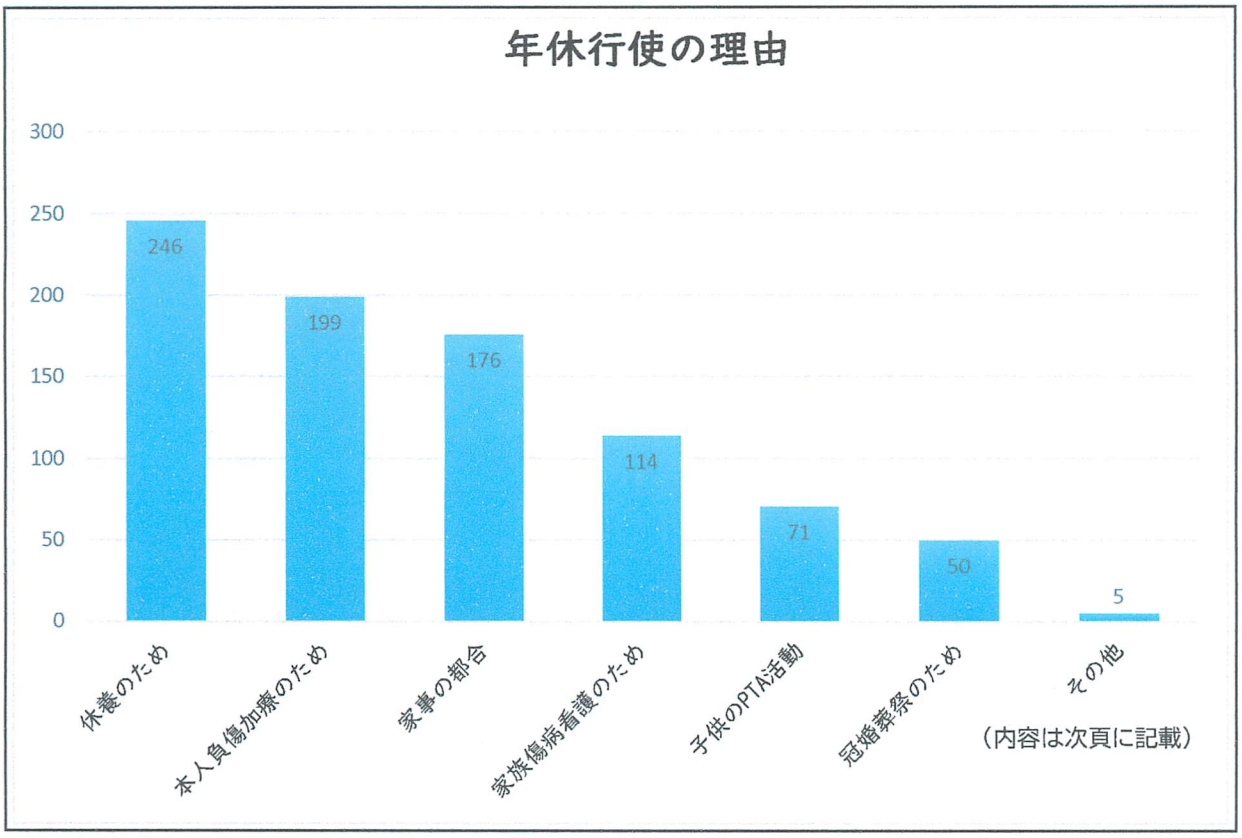
調査年月　2022年12月
調査対象　東山梨全教職員
回答数　471人

１　年休行使の状況（１月～１２月まで）

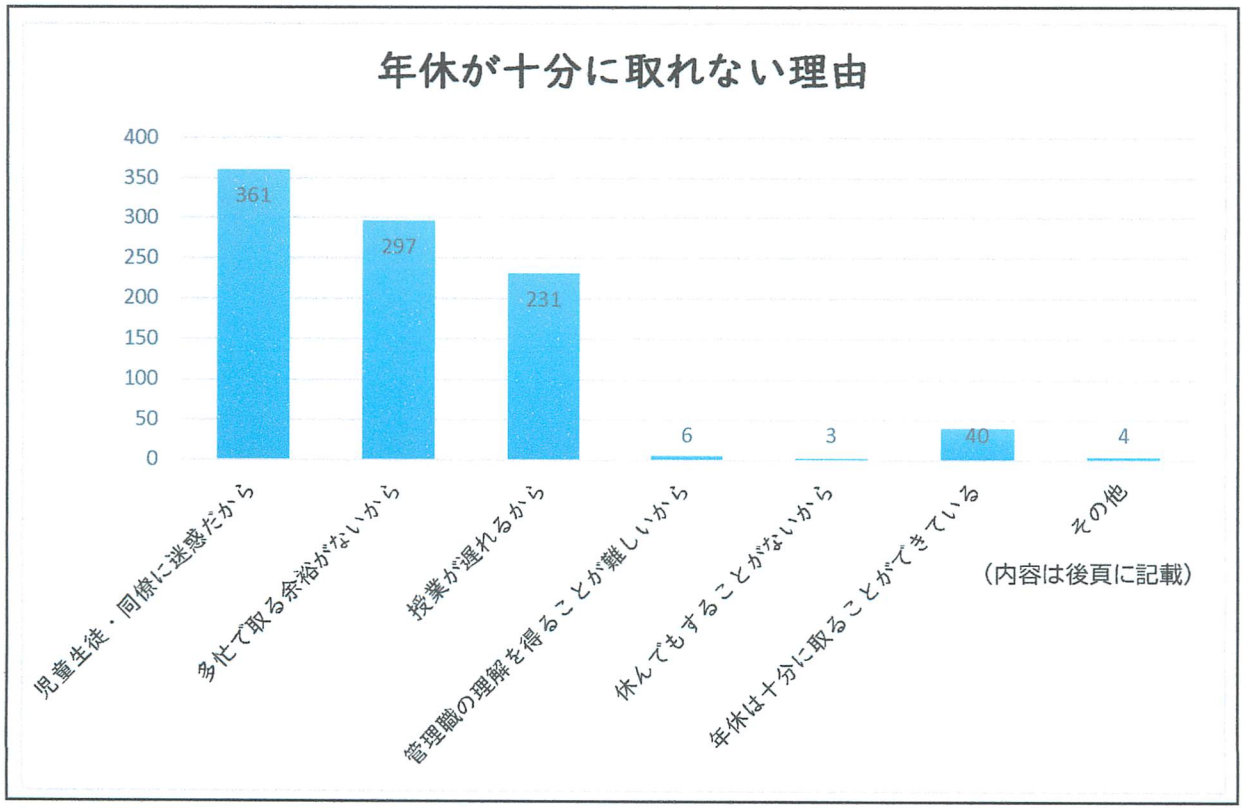


※2022年度　平均　9.6日

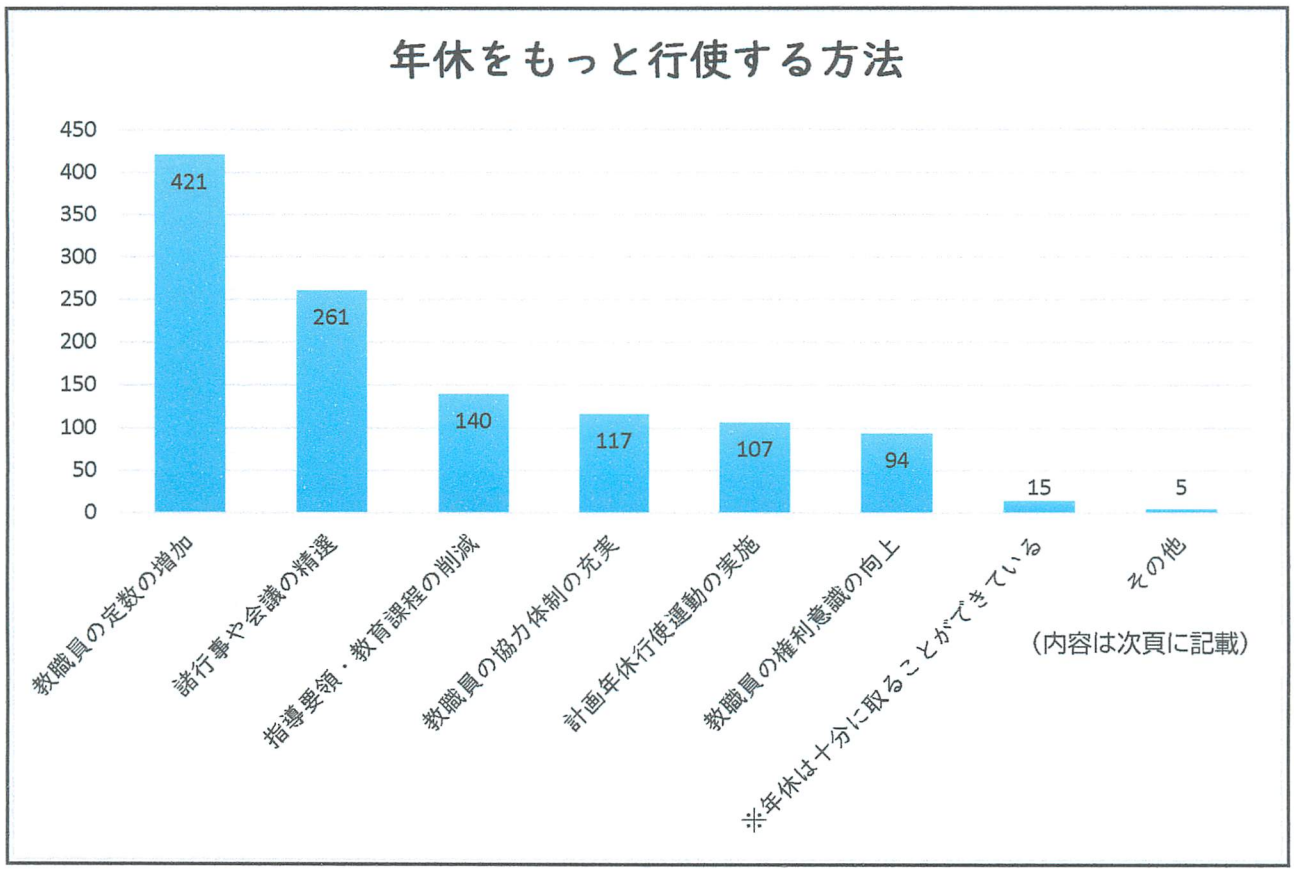
2　年休行使の理由



3　年休が十分に取れない理由



4　年休をもっと行使する方法



※「その他」の項目に記載された回答

2　年休行使の理由

- とっていない
- 公務以外の仕事
- 組合活動
- 審判活動参加のため
- 学校休日

※「その他」の項目に記載された回答

3　年休が十分に取れない理由

- 一人職であるため，休みづらい
- 一人職であるため，業務が滞る
- 専門職（養護教諭）で他に対応できる職員がいないため
- 週４日勤務のため

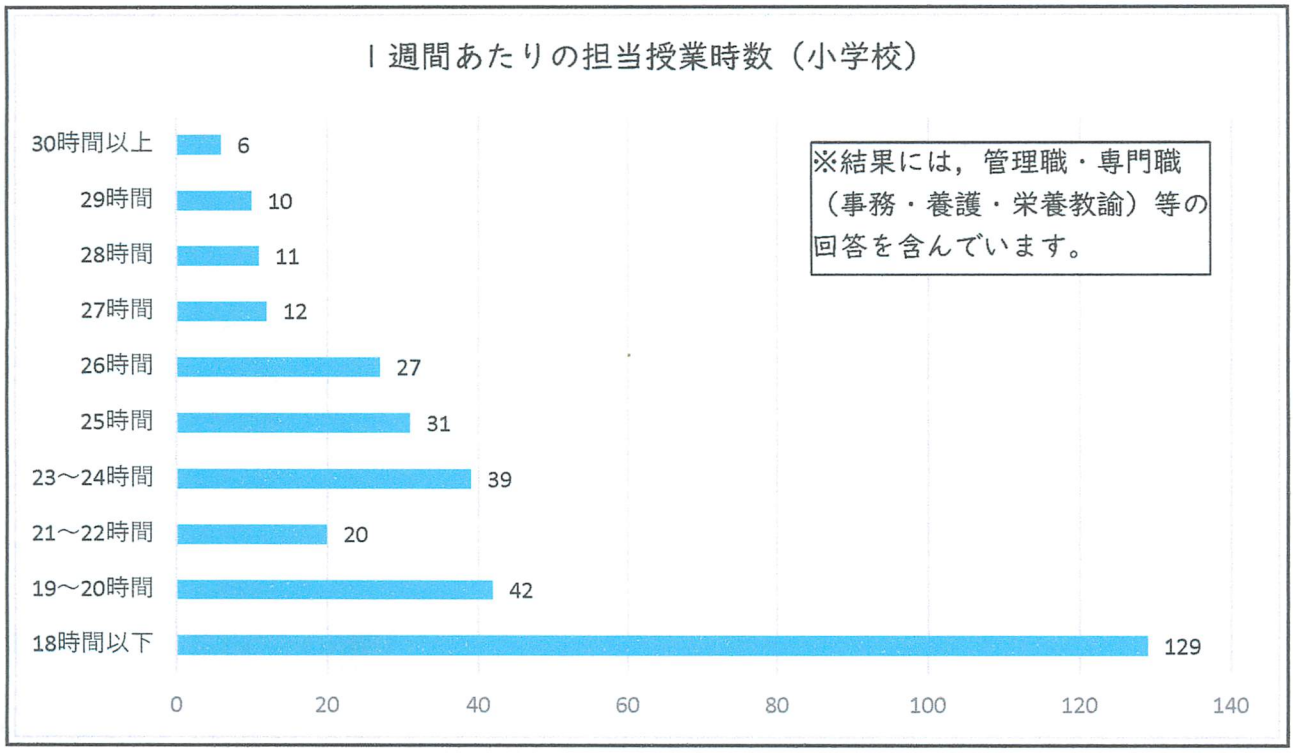
4　年休をもっと行使する方法

- なんでもとりあえず学校へという考え方を変えないと
- 週4日勤務から週５日勤務へ
- 事務仕事の削減
- 多忙化解消の取り組み
- 年間700時間という制限

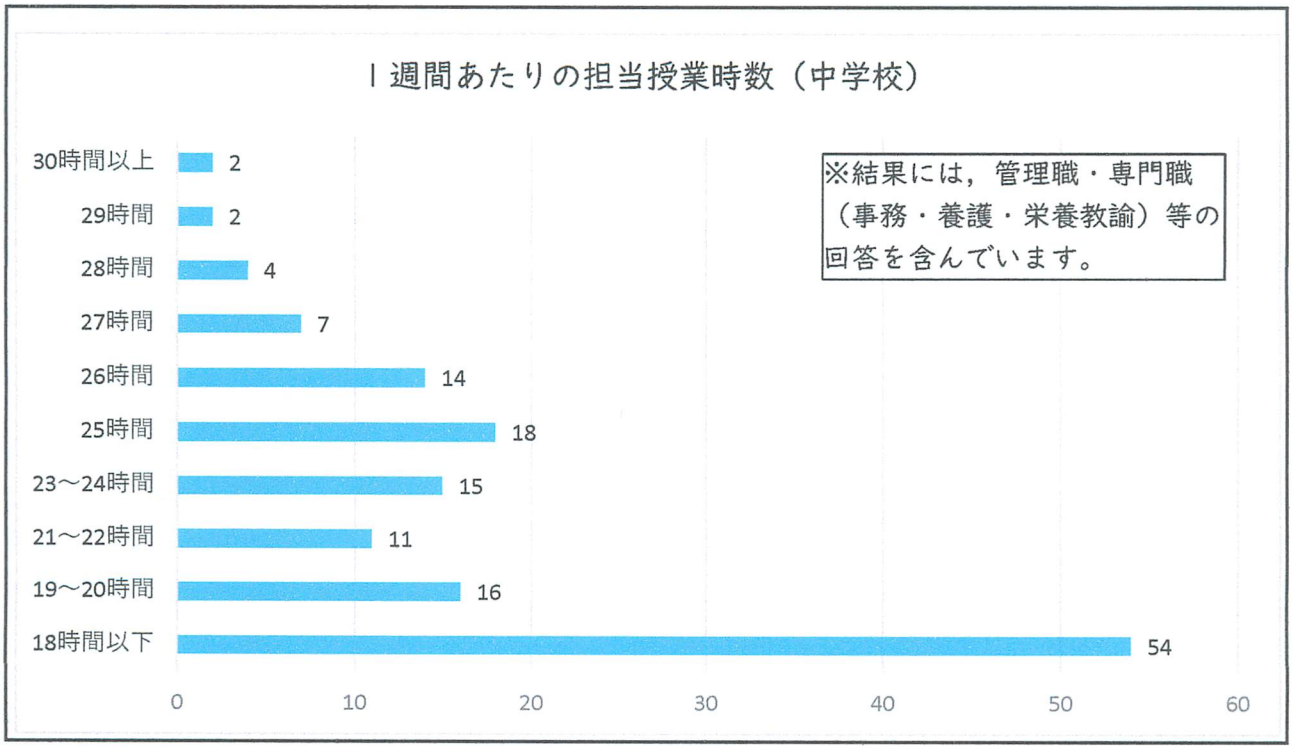
Ⅵ　教職員の健康と労働

「授業時数」に関する調査結果

1　1週間あたりの担当授業時数は何時間ですか。（小学校）



2　1週間あたりの担当授業時数は何時間ですか。（中学校）



教育環境研究特別委員会

研　究　を　終　え　て

新型コロナウイルス感染症の収束が見通せない中，東山梨の各小中学校では，様々な工夫をしながら児童生徒の教育活動の継続を図ってまいりました。そのような中，今年度も東山梨の小中学校における教育環境の研究に当たり，各市教育委員会事務局の皆様をはじめ，多くの教職員の皆様にご協力をいただき，資料収集のための調査を実施することができました。

調査内容につきましては，今までの調査研究を継続するとともに，教育活動の状況をより明確に読み取ることができるよう，例年とほぼ同様の構成に加え，若干の変更も加えてあります。

本調査の結果からは，児童生徒を取り巻く教育環境や生活環境，教職員の勤務等の状況を読み取ることができます。また，長年に渡り教育環境の改善や課題解決に取り組まれてきた成果や，今日的な教育課題に対して教育に携わる方々の努力や工夫も感じることができます。

しかしながら，児童生徒及び教職員をとりまく教育環境には，まだまだ取り組まなければならない課題が残されていることから，本調査研究が今後の東山梨教育充実のための一助となることを期待しております。

結びに，この調査研究をまとめるに当たり，ご協力をいただきました多くの関係者の皆様に，衷心より感謝申し上げます。

2022年度　教育環境研究特別委員会　委員長　岡　輝彦

2022年度　教育環境研究特別委員会　委員名簿

○	校　長　会	岡　　輝　彦	（八幡小）
		皆　川　賢　司	（山梨小）
		那　須　丈　彦	（塩山中）
		石　原　孝　子	（松里小）
○	教　頭　会	伊　藤　淳　司	（東雲小）
		小　林　誠　二	（笛川中）
		堀　井　勝　彦	（後屋敷小）
		藤　波　　貴	（大和小）
○	事務職員	七　海　めぐみ	（塩山北小）
		高　橋　知　也	（奥野田小）
		内　藤　ひとみ	（山梨小）
		雨　宮　美　沙	（八幡小）
○	職場の民主化	大　澤　祐　子	（勝沼中）
		三　澤　　瞬	（日下部小）
○	事　務　局	前　田　大　輔	（塩山中）
		保　坂　洋　仁	（勝沼小）